

立石遺跡

平成5年度県営圃場整備事業堀地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1994. 3

茅野市教育委員会

平成 年 月 日

各 位 殿

茅野市教育委員会

『埋蔵文化財発掘調査報告書』の贈呈について

謹啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

このたび、当教育委員会におきまして上記資料を刊行しましたので贈呈いたします。資料としてご高覧に供せれば幸いです。

つきましては、お手数ですが受領書をご返送いただきますようお願い致します。

なお、貴機関刊行の報告書等がございましたら、御寄贈くださいますようよろしくお願ひします。

〒391

長野県茅野市塚原2-6-1

茅野市教育委員会文化財調査室

平成 年 月 日

『立石遺跡』—平成5年度県営開墾事業地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査概要報告書—

『稗田頭B遺跡』—平成5年度県営開墾事業地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査概要報告書—

『稗田頭C遺跡』—平成5年度県営開墾事業地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査概要報告書—

『矢倉田遺跡』—平成5年度県営開墾事業地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査概要報告書—

各1冊受領いたしました。

茅野市教育委員会 殿

受領者住所

氏名

印

立石遺跡

— 平成 5 年度県営圃場整備事業堀地区に伴う
埋藏文化財緊急発掘調査報告書 —

1994. 3

茅野市教育委員会



立石遺跡と八ヶ岳山麓



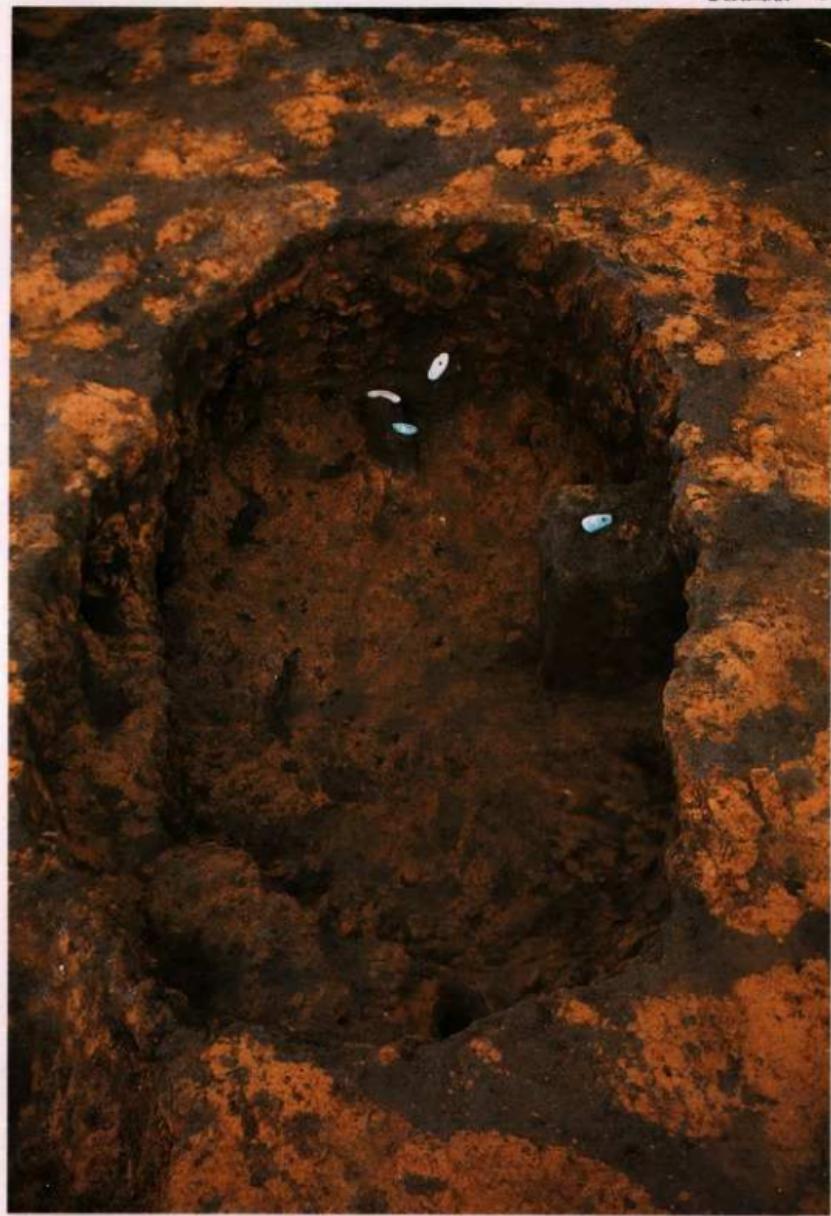
立石遺跡全景



第12号住居址



第5・12・33号住居址



硬玉製垂飾出土状況（穴688・836）



立石遺跡より出土した硬玉製垂飾（左上、穴836・右上、穴782・下、穴688）

はじめに

茅野市が位置する八ヶ岳西山麓には、縄文時代の遺跡が数多く知られています。それらの遺跡の多くは標高1000m前後に位置しており、国特別史跡である尖石遺跡は縄文時代を代表する遺跡として全国的に有名です。

今回発掘調査の行われた立石遺跡は、尖石遺跡から続く台地上に位置する遺跡であります。古くから土器や石器の採集されるところとして地元の人々に知られていました。昭和13年の宮坂英式氏の探査等により、遺跡として認識されました。しかし今日までに本格的な発掘調査が行なわれていなかったため、遺跡の詳細は不明がありました。

遺跡の立地する台地にも開発の波が押し寄せ、県営圃場整備事業が実施されることになり、事前に発掘調査を行なうこととなりました。調査では、30軒を超える縄文時代の住居址と平安時代の住居址が1軒、また縄文時代と考えられる穴状の遺構が1200余り等と、多くの遺構が確認されました。その中でも、縄文時代後期の遺構が多く確認されたことは、中期の遺跡が多いこの地域における、縄文時代の新たな一面を示すことになりました。

既に遺跡は消滅してしまいましたが、その内容は本報告書にまとめられています。本書からは、当時の人々の精神面も含めた生活の様子が伝わってきます。本書が多くの人々に広く活用され、さらに縄文時代文化の研究に役立つことを願っております。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただいた地権者をはじめ地元南大塩区の皆さん、調査に参加された方々に心から感謝いたします。

平成6年3月

茅野市教育委員会

教育長 両角 昭二

例　　言

1. 本書は、県営圃場整備事業堀地区に伴う、立石遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国庫及び県費の補助を受け、茅野市教育委員会が実施した。調査の組織等の名簿は、第Ⅰ章第1節(5)調査の体制として記載してある。
3. 発掘調査は、平成5年5月12日から11月26日まで行った。
4. 出土品の整理及び報告書の作成は、茅野市文化財調査室において行った。本報告書に係る出土品・諸記録は、茅野市文化財調査室に保管されている。
5. 本報告書において、航空写真測量を株式会社東京航業研究所に、自然科学分析をパリノ・サーウェイ株式会社に委託した。
6. 本報告書の執筆は、第Ⅲ章第2節 平安時代の遺構と遺物 を柳川英司、その他を小池岳史が担当した。
7. 繩文時代住居址の記載は、竪穴住居址、掘り込みの確認できなかった住居址、時期の不明な住居址の順番で記述している。
8. 発掘調査から報告書作成に至る過程で、以下の方々から貴重な御助言を得た。御芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である。(順不同・敬称略)

金田 進 木島 勉 小林公明 田中 総 戸沢充則 福島 永 三上徹也 宮坂 清
宮坂光昭 武藤雄六 山岸洋一

目 次

はじめに

茅野市教育委員会教育長 両角昭二

例 言

目 次

I	発掘調査の概要	1
1	発掘調査の経過	3
(1)	発掘調査に至る動機	3
(2)	発掘調査の方法と経過	4
(3)	発掘調査日誌（抄）	5
(4)	遺物整理と報告書の作成	6
(5)	調査の体制	7
2	遺構・遺物の概要	8
(1)	縄文時代の時期区分	8
(2)	遺構の概要	9
(3)	遺物の概要	11
II	遺跡の環境	13
1	遺跡の位置と環境	15
2	遺跡の基本層序	16
III	発掘された遺構と遺物	19
1	縄文時代の遺構と遺物	23
(1)	住居址	23
(2)	方形柱穴列	63
(3)	穴	83
(4)	配石遺構	98
(5)	独立土器	103
(6)	焼土址	104
(7)	屋外埋甕炉	108
(8)	黒曜石集石遺構	109
(9)	ロームマウンド	109

2 平安時代の遺構と遺物	113
(1) 住居址	113
IV ま と め	115
1 立石遺跡における穴の性格	117
2 立石遺跡の集落変遷	131
付録 立石遺跡における自然科学分析	バリノ・サーヴェイ株式会社 181



発掘調査の概要

1 発掘調査の経過

(1) 発掘調査に至る動機

平成3年度から開始された県営圃場整備事業堀地区は、豊平地区と湖東地区が接する地域から事業の対象とされ、進行していた。平成3年6月に茅野市教育委員会が実施した平成4年度以降の公共事業地内に係る埋蔵文化財実態調査により、平成4年度の県営圃場整備事業堀地区の施工対象区域内に、立石遺跡の立地する台地が含まれていることが明らかとなった。遺跡の範囲は、昭和13年宮坂英氏の探査と、昭和54年度八ヶ岳西南麓遺跡分布調査報告書において、ほぼ把握されていた。しかし遺構の分布・密度は不明であるため、平成3年12月に試掘調査を実施した。その結果、周知されている遺跡範囲内の東側では遺構の存在が確認されたが、西側からの遺構の検出は皆無であり、試掘調査により把握された約7300m²が発掘調査の対象となった。確認された遺構は、縄文時代の住居址10軒、穴状遺構多数、独立土器、焼土址、平安時代の住居址1軒である。しかし、トレンチ間に遺構の存在する可能性が十分あり、遺構数は増加するものとみられた。

平成3年12月25日に原因者である諏訪地方事務所土地改良課、茅野市農業基盤整備課と、保護部局である長野県教育委員会、茅野市教育委員会の4者で協議が開催された。ここで茅野市教育委員会は、平成4年度に実施計画されている他地区現場とのスケジュール調整が困難であることから、発掘調査を延ばしたいという意向を示した。また今後の保護措置については、他地区との計画をみた上で再協議を行うことで協議を終えた。そして平成4年3月26日の協議において、立石遺跡の発掘調査を平成5年度に実施することが確定した。6月26日には当市担当者の立会いのもとで、西側水田部分の引き渡しを行った。10月5日の協議では、平成5年度に発掘調査を実施することが再度確認され、茅野市教育委員会では平成5年度文化財関係補助事業計画を上げ事業に備えた。平成5年2月8日には最終的な現地協議がもたれ、それに基づき平成5年3月11日付4教文第7-90-35号、平成5年度県営圃場整備事業堀地区にかかる埋蔵文化財の保護について(通知)が長野県教育委員会より提出された。それによると、立石遺跡の保護については、

- ① 工事に先立って発掘調査を実施し記録保存を図る。
- ② 調査の実施は茅野市教育委員会に委託する。
- ③ 発掘調査に伴う経費は諏訪地方事務所の負担とするが、農家負担分については文化財保護側で負担する。

というものであった。発掘調査計画書では7325m²以上を発掘対象とし、その経費総額は16,700,000円であった。平成5年4月20日付5課地土第22-2号をもって、諏訪地方事務所長と茅野市教育委員会教育長との間で、埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を締結した。

現場における発掘調査は5月12日より開始した。

(2) 発掘調査の方法と経過

表土剥ぎ作業 平成3年度の試掘調査において、遺構までの表土の厚さはほぼ把握されていた。その成果をもとに作業時間の短縮を図る意味から、重機を使用して表土剥ぎを行うこととした。作業は5月12日から開始した。表土剥ぎ作業を進めるなかで1つ問題となることがあった。それは、表土剥ぎによって生じた土の置き場所である。既に、遺跡の周囲は圃場整備が終了しているため、遺跡の外に土を動かすことは不可能であった。そこで、試掘調査において遺構の検出されなかった箇所と、遺構の検出される可能性が薄いと考えられた台地北側縁辺に土を置く方針とした。しかし、予想に反して台地の北側縁辺より住居址が3軒検出された。そのため遺構のない箇所を探して土の置き場所を確保し、ここへ天積みする作業を行わざるを得ず、表土剥ぎでは頭を悩ました。表土剥ぎ作業と並行して5月17日より作業員を動員し、遺構検出作業も進めた。検出された遺構には印目として白線を入れたり、シートをかけて乾燥を防ぐように心がけた。表土剥ぎ作業は6月11日に終了し、遺構検出作業も同日にはほぼ終了した。

グリッド設定 発掘調査により検出された遺構と、出土遺物の遺跡内における地点をおさえるために、グリッドを設定することにした。発掘区の長軸線が台地平坦面の頂部ラインにはば沿っていることから、長軸線を基準としてグリッドを設定した。すなわち、公共座標のライン上に設定せずに、地形に沿って任意に設定したことになる。グリッドの最小単位は一辺2mとし、グリッド杭は基本的に4m間隔で設けた。しかし、遺構にかかる場合は極力外すようにした。グリッドの呼称は南西隅を基準に、0-AのようにX軸を数字でY軸をアルファベットとし、Y軸についてはZの次をあ・い…のように呼称した。なお、0-Aから西へ発掘区を部分的に拡張している。発掘区の南北軸（Y軸）は、N-35°-Eとなっている。発掘調査の面積は、最終的に7527m²であった。

遺構の調査 調査は5月12日から始まっていたが、遺構の掘り下げに入ったのは6月14日からである。調査は、発掘区内において遺構の密集している東側より開始した。東側は竪穴住居址が少ない反面、穴状の遺構が数百基確認されていた。そこで、穴状の遺構をある程度調査し終えてから、竪穴住居址の調査に入る方法をとった。穴状遺構の調査では、住居址の柱穴と類似する規模の小さな穴、方形柱穴列を構成する規模の大きな穴、墓坑とみられる穴、貯蔵穴と考えられる穴などの検出が相次いだ。調査を進めるなかで、注目される遺構と遺物の検出があった。遺構では、規模の小さな穴が円形や長円形を呈するように配列する遺構の検出が注目される。検出総数は12基を数えている。その中の5基は、遺構の中央部に焼土、または埋甕炉を有していることから12基すべてを住居址としている。また、住居址の柱穴よりも規模が大きく、掘方の良好な穴が方形や長方形を呈するように配列する、いわゆる方形柱穴列が17基検出されている。八ヶ岳山麓の縄文時代遺跡から検出される数としては多く、遺構や遺跡の性格を考える上で貴重な発見となった。遺物では3基の墓坑より、硬玉製垂飾が計5点出土している。この中で、穴688とした墓坑からは、3点の硬玉製垂飾が一括出土しており注目される。また穴632からは琥珀玉の出土があった。これらの遺物は、他地域とのつながりを明らかにするだけでなく、遺物を保有する遺跡の性格を

考る上でも、良好な資料となった。

航空測量の実施 地上では単独であるように見受けられる遺構も、上面より観察することで方形柱穴列などの遺構を把握できることがある。また遺跡全体を広い視野から観察することで、集落構成を捉えることも可能となる。そのため、航空写真測量を実施することにした。上空には障害となる高压線などもなく、撮影には適した場所であった。事業は株式会社東京航業研究所へ委託することとし、10月15日に実施した。航空写真測量で作成された図化素図が10月末に上がってきたため、現場で遺構図面の校正作業を行うことができた。この作業は15日間に及んだ。

遺跡見学会の実施 10月16日に、茅野市教育委員会と南大塩区の共催による遺跡見学会が開催された。昨日に航空写真測量を実施したこともあり、現場の状態は良好であった。各遺構を回りながらの、担当者による1時間ほどの説明で見学会を終えた。参加者は、地元を中心に約70名であった。

(3) 発掘調査日誌（抄）

- 5月12日 発掘区の北側縁辺より表土剥ぎ作業を開始する。農業基盤整備課小平係長来跡。
- 5月13日 発掘区の北側より方形柱穴列を1基確認する。
- 5月17日 本日から作業員が入り遺構検出作業を開始する。
- 5月18日 台地平坦面の頂部付近より住居址の検出が相次ぐ。
- 5月21日 5軒の住居址を検出する。諏訪地方事務所土地改良課太田技師来跡。
- 5月27日 長野県教育委員会文化課埋蔵文化財係丸山係長、小平指導主事、春日指導主事、諏訪地方事務所土地改良課新谷課長、平林係長、太田技師、三井主事、茅野市教育委員会文化財調査室永田室長、鶴飼係長来跡。
- 5月28日 繩文時代後期に帰属するとみられる配石遺構を検出する。
- 6月4日 茅野市教育委員会両角教育長、原教育次長、宮坂和茂氏、長野日報記者来跡。
- 6月11日 表土剥ぎ作業は本日で終了となる。
- 6月14日 遺構の掘り下げに入る。作業員17名。
- 6月17日 BM1. 982m、BM2. 984mを設置する。辰野町教育委員会山崎貴弘氏来跡。
- 6月24日 発掘区の東側より土器の底部を伏せた墓坑が検出される。
- 6月25日 長野県教育委員会文化課長野県立歴史資料館準備室田川幸生考古資料調査員来跡。
- 7月6日 小平尖石考古館長来跡。
- 7月19日 硬玉製垂飾が穴688より3点、穴836より1点、琥珀玉が穴632より1点出土する。
- 7月22日 硬玉製垂飾が穴782より1点出土する。
- 7月26日 本日より竪穴住居址の掘り下げを開始する。覆土が浅いため作業はかどる。
- 8月9日 第12号住居址の調査に入る。多量の焼土が確認され焼失住居址と考えられる。
- 8月11日 原村教育委員会平出一治氏、平林とし美氏来跡。

- 8月13日 第13号住居址の調査において、3本柱の主柱穴であることを確認する。
- 8月30日 発掘区の北西において、試掘調査で確認できなかった住居址を検出する。
- 9月2日 ゲークダックスの佐々木行氏ご夫妻、同志社大学学生5名、小平尖石考古館館長、茅野市公民館柳沢主任来跡。
- 9月22日 整理室において、武藤雄六氏より硬玉製垂飾についてのご教示をいただく。
- 10月7日 中平源訪地方事務所長来跡。
- 10月12日 航空写真測量に備えて遺構の清掃を開始する。
- 10月14日 本日、航空写真測量を実施する予定であったが、関東地方の天候が不順のため明日に延期となる。富士見町教育委員会小林公明氏来跡。
- 10月15日 航空写真測量が無事終了する。なお撮影の1時間前に竪穴住居址を確認し慌てる。
- 10月16日 遺跡見学会を開催する。地元を中心に約70名の参加がある。宮坂光昭氏、下源訪町教育委員会宮坂清氏来跡。
- 10月18日 本日より石囲炉、埋甕の半截作業を行う。
- 10月20日 米沢小学校6年1組42名、八ヶ岳総合博物館永富・芳沢学芸員と来跡。
- 10月21日 米沢小学校6年2組41名、八ヶ岳総合博物館永富・芳沢学芸員と来跡。
- 10月28日 航空写真測量の図面が上がり、現場での校正作業に入る。
- 11月26日 図面校正終了する。本日で5月から始まった発掘調査を終了する。

(4) 遺物整理と報告書の作成

遺物の整理 発掘作業と並行して遺物の整理も進めていたため、遺物の洗浄は平成5年11月末で終了した。注記は、住居址からの出土遺物を優先して行ったが、整理作業員が他現場の遺物整理を兼ねていることもあり、遺構確認面からの出土遺物など注記することができなかつたものもある。注記の略号は、茅野市遺跡台帳に登録されているNo80とした。さらに層位別やNoをつけて取り上げている遺物については、その番号を注記した。土器の復元は埋甕を中心に行い、最終的には器形復元の可能なものまで行った。

報告書の作成 報告書の作成を本格的に始めたのは、平成5年の12月半ばからである。検出された遺構は、縄文・平安時代の住居址、方形柱穴列、穴状遺構、配石遺構、独立土器、焼土址、屋外埋甕炉、黒曜石集石遺構など様々である。報告書を作成するあたり、文章による記述よりも視覚的な説明のほうが遺構や遺跡の全体像を理解しやすいと考え、できる限り遺構の図面を載せることにした。そのために図面の修正やエレベーション図の作成には相当の時間を費やした。遺物については、遺構の時期決定資料となる遺物の抽出を行い、それらを中心に図示している。石器は1点も図示することができなかつたが、I・2・(3)と付表に器種と出土点数を記載しているので、合わせて参照されたい。

(5) 調査の体制

本調査は茅野市教育委員会文化財調査室が実施した。組織は以下の通りである。

調査主体者 両角昭二（茅野市教育委員会教育長）

事務局 原 充（茅野市教育委員会教育次長）

永田光弘（茅野市教育委員会文化財調査室長）

鶴飼幸雄（茅野市教育委員会文化財調査室係長）

両角一夫（茅野市教育委員会文化財調査室主任）

大月三千代（茅野市教育委員会文化財調査室主事補）

調査担当 守矢昌文（茅野市教育委員会文化財調査室主任）

小林深志（茅野市教育委員会文化財調査室指導主事）

小池岳史（茅野市教育委員会文化財調査室主事）（現場・報告書担当）

功刀 司（茅野市教育委員会文化財調査室主事）

百瀬一郎（茅野市教育委員会文化財調査室主事）

小林健治（茅野市教育委員会文化財調査室主事）

柳川英司（茅野市教育委員会文化財調査室主事）

調査補助員 赤堀彰子 牛山市弥 牛山徳博 占部美恵

小松とよみ 武居八千代 堀内 潤

発掘調査・整理作業協力者

伊藤京子 今井ちよ 鶴飼澄雄 牛山和男 牛山矩子 牛山みつ江

遠藤佳子 金子清春 木村桂子 栗原 昇 小平千恵子 小平長茂

小平ツギ 小平フサ子 小平三行 小平ヤエ子 小平義市 佐藤郁絵

篠原リカ子 白旗スエ子 杉本裕子 関 秀樹 武田けさ子 立岩貴江子

坪坂啓光 東城生喜 富田 長 花岡照友 林 靖之 平沢高明

松村千代子 宮坂ちよ江 目黒恵子 柳平年子 山崎直希

発掘期間中、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市農業基盤整備課におかれては、埋蔵文化財に対して深いご理解とご協力を賜った。調査の実施に当たっては、地元南大塩区の方々にご助力いただき、作業を円滑に進めることができた。記してお礼を申し上げたい。

2 遺構・遺物の概要

(1) 縄文時代の時期区分

今回の調査で検出、出土した縄文時代の遺構・遺物は、中期後半から後期前半までの間にまとまる。本報告では、以下の便宜的な時期区分を用いて、遺構・遺物の時期を記述する。

I期 曽利II式期並行	IV期 曽利IV～V式期並行	VII期 称名寺～塙之内I式期並行
II期 曽利III式期並行	V期 曽利V式期並行	VIII期 塙之内I式期並行
III期 曽利IV式期並行	VI期 称名寺式期並行	IX期 塙之内II式期並行

遺構の時期決定にあたり、竪穴住居址では埋甕・炉体土器など住居址に伴うことが明らかな遺物により時期を決定した。上記の施設を有しない住居址では、床上の一括土器や覆土内の一括土器を時期の決定資料に用いた。また、掘り込みの確認できなかった第2号住居址を除く住居址では、炉と柱穴から出土した土器で時期を決定し、方形柱穴列では柱穴から出土した土器を用いて決定した。しかし、柱穴から出土した土器は少なく、遺構によっては破片が数点出土する程度のものもある。このような場合は、柱穴内でも下部より出土し、時期判読の可能な土器の時期をもって遺構の時期決定をした。

時期区分は上記のとおりであるが、IV期とV期は二時期に亘る時期区分となっている。これは出土した土器の時期が二時期に亘り、なおかつ数量的に優劣をつけ難いことから、一時期とするよりも幅をもたせた時期を与えたほうが良いと考えられたことによる。

次に、IV期とV期の区分について述べてみたい。IV期は曾利IV～V式期並行としている時期で、当然のことながら曾利V式期の段階も含んでいる。V期は曾利V式期に並行する時期で、表記の上ではIV期と時期が重なることになる。従来、曾利V式期とされる土器は、弦線による△形の区画とその区画内に施文される「ハ」の字状弦線をメルクマールとしている。本遺跡より出土した土器の文様に着目すると、△形の区画内に刻みの深い「ハ」の字状弦線が整然と施文されるものと、△形の区画が乱れ、浅くて雑な「ハ」の字状弦線が施文される2種類が見受けられる。そこで、文様の退化という視点に立ち、前者を曾利V式期の古い段階と考えてIV期、後者を新しい段階と考えてV期と分類した。

しかし、以上の分類は土器の文様を断片的に見た結果であり、文様構成とその変遷を捉えたことにはならない。本来ならば、土器の文様構成と器形を理解した上で、ほかの土器と比較することにより、文様の変遷を体系的に捉えるべきである。さらに遺構の重複関係、遺跡内における遺構の占地と集落構成などを加味して、土器の分類を行うべきであろう。

なお、本文の中では中期最終末という名称を随所で使用しているが、V期にあたる時期を意味するものである。

(2) 遺構の概要

遺構番号は発掘された順番で番号を付した。検出された遺構には、住居址、方形柱穴列、穴、配石遺構、独立土器、焼土址、屋外埋甕炉、黒曜石集石遺構、ロームマウンド、炭焼穴、埴渠がある。遺構の概略は次のとおりである。

住居址 繩文時代の住居址が35軒、平安時代の住居址が1軒、時期不明の住居址が1軒検出されている。繩文時代の住居址は、地表面に掘り込みをもつ、いわゆる竪穴住居址と掘り込みの確認できなかった住居址に分けられる。住居址の時期は中期後半から後期前半である。前者が23軒で、I期が3軒、II期が8軒、III期が6軒、IV期が6軒である。後者は12軒で、V期が3軒、V~VI期が1軒、VII期が3軒、VIII期が1軒、不明が4軒である。

掘り込みの確認できなかった12軒の住居址は、13~20本程の柱穴により構成され、円形または長円形を呈するように配列している。これらの住居址については調査方法上の問題もあるが、構築時より掘方をもたない平地式の住居址であるのかを把握することはできなかった。

住居址の炉に関しては、すべての竪穴住居址で炉を検出している。しかし、掘り込みの確認できなかった住居址では、炉の検出できた住居址とできなかった住居址がある。炉の検出できなかった遺構を住居址と認定したことについては、12軒の中で5軒から炉が検出されたこと、当初炉を有していたとしても後世の搅乱により壊されている可能性が十分にあること、当時の生活面は遺構確認面よりも高い面であること等を考慮している点からである。

住居址の発掘区における占地をみると、竪穴住居址は発掘区のはば全域より検出されたが、掘り込みの確認できなかった住居址は、遺跡の東側から南側にかけてある程度のまとまりをもつよう検出されている。

当地域の山麓台地に立地する繩文時代の遺跡で、時期の知られている遺跡の多くは中期に営まれた遺跡である。立石遺跡からは、中期から後期に亘って継続する住居址が多く検出されている。このことは、同じ台地に営まれた中期から後期の集落変遷をみる上で注目される点である。

方形柱穴列 基本的に方形あるいは長方形を呈するように、柱穴が規則的に配列する遺構を方形柱穴列とした。調査と整理作業において17基確認された。この中で帰属時期の把握できたものは、9軒で、繩文時代中期終末から後期前半にかけての遺構である。III期が1基、IV期が2基、V期が1基、VI期が3基、VII期が3基、VIII期が1基、不明が6基である。

平面規模は柱穴の規模と相關する傾向が窺える。6本柱で構成される方形柱穴列をみると、規模の小さな柱穴で構成されるものよりも、規模の大きな柱穴により構成されるもののほうが平面規模が大きくなる。柱穴規模は、上面長径が25~60cm程で深さが10~70cm程の、住居址の柱穴に類似する規模のものと、上面長径が60~100cm程で深さが35~130cm程の2つのタイプに分けることができる。遺構の平面形態は長方形が14基、方形が2基、両短辺の中央部外側に柱穴の張り出

す六角形が1基ある。遺構を構成する柱穴の本数は、6本・8本・10本があり6本が主体である。

柱穴の半蔵調査では、規模の大きな柱穴の多くで、黒褐色土の柱痕と考えられる垂下層が観察された。さらに垂下層と壁との間には、ロームブロックを多量に含む暗褐色土が観察された。これは、柱を固定するために人為的に埋めた根固め土と理解される。また、遺構の確認面で柱痕と根固め土とを観察できるものも多かった。発掘区での遺構分布は、東側に多い傾向が窺える。

穴 柱穴、墓坑、貯藏穴、ゴミ穴、性格不明の穴など、いわゆる「小豎穴」・「土坑」と呼ばれる穴状の遺構に「穴」という名称を便宜的に与えた。「穴」の名称については、別項で触ることにする。穴として番号を付した遺構の総数は1524基に及ぶ。

柱穴では、豎穴住居址の主柱穴のように、遺構に伴うことが明らかなものについては基本的に番号を付していない。しかし、掘り込みの確認できなかった住居址に伴うと考えられる柱穴、方形柱穴列を構成する柱穴と考えられるものには番号を付している。これは、現場での遺構の把握は困難であるが、整理作業によって遺構を抽出できるものが多いと考えられ、遺構の時期を把握するためには、柱穴内より出土した遺物の所在を明確にする必要があることによる。

墓坑とみられる穴は112基検出された。いずれもローム層に掘り込まれていることから、強い酸性土壌のために人骨の出土はなかったが、副葬品とみられる硬玉製垂飾が穴688から3点、穴782から1点、穴688に重複する穴836から1点の計5点が出土し、穴632からは琥珀玉が1点出土した。また、上面に配石や焼土を伴うもの、内部に砾や一括土器を伴う墓坑も幾つか検出された。これらの遺物を出土した墓坑の特徴として、平面形態は楕円形、隅丸長方形、円形、不整円形で、上面長径は75~150cm、深さは5~45cmが主体をなし、堆積している土はロームブロックやローム粒子が多く含み人為的に埋め戻されたと考えられ、さらに良く締まっている等の事柄が挙げられる。遺跡内の墓坑の分布は、概ねA~D群の4群に分けることができる。そして、硬玉製垂飾と琥珀玉の出土した墓坑は、群の中でもB群という限られた場所に位置することが指摘できる。

貯藏穴と考えられる穴も検出された。現場で貯藏穴と考えられた穴は、墓坑よりも規模が大きく掘方の良好な穴である。貯藏穴と考えられる穴については別項で触ることにする。

そのほか、方形柱穴列や掘り込みの確認できなかった住居址の柱穴と類似する規模の穴で、ほかの同規模の穴と組み合わさらない穴も多く検出された。これらは発掘区の東側に集中している。

配石遺構 人為的に砾が配されたと考えられる配石遺構は3基検出された。いずれも発掘区の東側からの検出である。縄文時代中期最終末から後期初頭に帰属する遺構と考えられる。

独立土器 現場において、住居址等の遺構に伴わず、単独の出土と考えられた一括土器を独立土器とした。4個体出土しており、いずれも縄文時代中期終末から最終末期の土器である。

焼土址 発掘区の東側を中心に14基の焼土址が検出された。基本的に住居址や穴などの遺構に伴わないものに番号を付した。しかし第7・8・9・10号焼土址としたものは、第1・4号配石遺構に伴う可能性もある。また、第13号焼土址は第35号住居址に伴う可能性もある。

屋外埋甕炉 現場において、遺構に伴わないとみられる埋甕炉を1基検出した。しかし、整理作業の段階で第9号方形柱穴列内に位置することが判り、これに伴う可能性もでてきた。埋設されている土器より、縄文時代中期終末期の遺構である。

黒曜石集石遺構 黒曜石の集石遺構は1ヶ所検出された。現場では黒曜石集石遺構として取り扱ったが、整理作業において穴575に伴う遺構と判断した。本来ならば、穴575の出土遺物として報告すべきであるが、ここでは黒曜石集石遺構として報告する。共伴した土器より、縄文時代後期初頭に帰属する。

ロームマウンド ロームマウンドは5ヶ所検出された。発掘区の東と西に分布が分かれている。東側から検出された第1号ロームマウンドは、穴との重複関係より縄文時代に帰属する可能性が高い。

炭焼穴 長方形を呈する炭焼穴が1ヶ所検出された。地元の方の話より近・現代の遺構である。

暗渠 発掘区の北から南側にかけて検出された。溝の中に礫を詰め込んだものである。炭焼穴と同様に近・現代の遺構である。また発掘区の東隅からは、礫のない溝が検出された。この溝も近・現代の遺構である。

(3) 遺物の概要

出土した遺物には、土器、石器、土製品、石製品がある。遺物は住居址の軒数に比べて少ないようと思われる。これは現地表面から遺構面までの厚さが薄いために、後世の搅乱によって遺物が現地表面に上がったこと、縄文時代でも数時期に亘る遺構の重複で遺物が移動していること等によるものと考えられる。

土器 出土した遺物の中で点数の最も多いものは縄文土器である。土器は中期後半から後期前半までの土器が出土している。その中で注目されるのは、中期最終末から後期初頭の土器が多く出土している点である。このことは、該期に帰属する遺構の検出数が多いことと一致している。当地域においては、近年の大規模な発掘調査により膨大な量の遺物が得られているが、中期最終末から後期初頭に位置づけられる土器の出土量はそれ程多くない。そのため、本遺跡から出土し

た該期の土器出土量は、市内の遺跡としては多いと言える。これらの土器は、縄文時代の中期から後期への移り変わる土器様相の一端を示すものとして良好な資料となろう。

復元された土器は平安時代の土器も合わせて、ほぼ完形のもの43点、半完形のもの22点である。復元までに至らなかった土器は、表面採集も含めてコンテナ20箱である。

石器 石器はコンテナで2箱出土している。その内容は、石鏃、打製石斧、横刃型石器、石匙、凹石、敲石、磨石、石皿、砥石、磨製石斧、礫器、石錐、石棒、黒曜石製スクレイパー・剝片・渦巻石器である。また、石器の素材となり得る黒曜石原石・石核・剝片・碎片も出土している。この中で最も多いものは、黒曜石の剝・碎片である。住居址から出土した量は、総計5488gを測る。この量は、当地域の同時期遺跡における出土量としては多く注目される点である。

土製品 土製品では土製円盤、土偶が出土している。土偶は右脚部だけであるが大形のもので、第29号住居址の覆土から出土している。

石製品 石製品では軽石を加工した、軽石製品が最も多く出土している。これは、遺跡の周辺で軽石が豊富に採集できることが影響しているものと思われる。

装飾品としての石製品には硬玉製垂飾、琥珀玉がある。いずれも遠方に原産地のあることから、当時の流通の様子を窺うことのできる資料である。



遺跡の環境

1 遺跡の位置と環境

八ヶ岳西南麓は、八ヶ岳の火碎流や泥流により形成された地域である。裾野には、火山麓に特有の台地が形成され、この間を大小の河川が諏訪湖へ向かって流れている。台地上には数多くの縄文時代の遺跡が知られているが、とりわけ標高900~1000m前後の地域に集中している。立石遺跡もその中のひとつの遺跡である。

茅野市豊平南大塙に、立石遺跡は所在する。南大塙の集落は、JR中央本線から北東へ約5kmに位置し、遺跡は集落から東に外れた田畠として利用されている場所に展開している。遺跡の標高は980~985m程で、東に八ヶ岳の嶺々が望める景色の良いところである。遺跡一帯は、いつの頃からかはっきりしないが「立石寺」と呼ばれる寺があったと言い伝えられ、地元の人々は「どうじくば」と呼んでいる。

立石遺跡は、国特別史跡である尖石遺跡から続く帯状台地の北側を占有している。尖石遺跡からは直線距離にして、西へ約2kmである。台地の南側は、緩やかな谷状地形であるのに対し、北側は10m程の崖である。崖は西へ向かって流れる沢の浸食により、長い年月をかけて形成されたもので、当時の台地は現在よりも北側へ幅広い台地であったと考えられる。発掘調査では、浸食により削平された縄文時代の住居址を3軒確認している。

立石遺跡の周囲には、中ッ原A・B、珍部坂A・B、城、水尻遺跡があり、いずれも圃場整備事業に伴う緊急発掘調査が行われている。



第1図 立石遺跡と周辺の遺跡 (1/50,000)

2 遺跡の基本層序

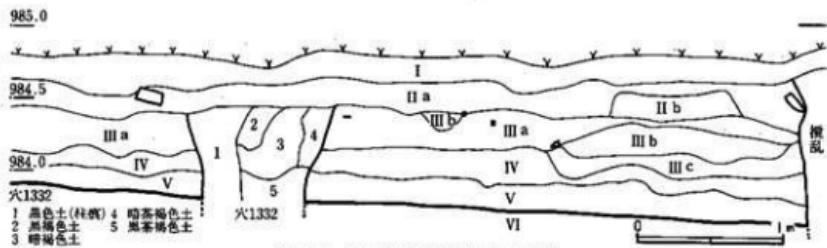
- I 層 黒(灰)色土…耕作土。粒子は細かく、締まりがあり、粘性もある。2~5mmの礫と、2mm程度の炭化物を少量含む。
- II a 層 漆黒色土……粒子は細かく、締まりはあるが、粘性は弱い。1mm以下のローム粒子を稀に含む。また2mm~20cmの礫と、2mm程度の炭化物を含む。
- II b 層 漆黒色土……II a 層と基本的には同じであるが、茶色みを帯びた漆黒色土である。粒子は細かく、とても良く締まっているが、粘性は弱い。2mm~1cm程度の礫を少量含む。
- III a 層 黒褐色土……1mm以下のローム粒子を少量含む。また2mm~5cmの礫を少量と、2mm程度の炭化物を稀に含む。
- III b 層 黑褐色土……III a 層と基本的には同じであるが、部分的に焼土の混入が見られる。粒子は細かく、締まりがあり、粘性もある。1mm以下のローム粒子と、2~7mmのロームブロックを稀に含む。また2mm程度の炭化物、1mm以下の焼土粒子と2~5mmの焼土ブロックを少量含む。
- III c 層 黒茶褐色土……III b 層に類似するが、焼土を含まない。
- IV 層 暗褐色土……粒子は細かく、締まりがあり、粘性もある。1mm以下のローム粒子を多く含み、2~5mmのロームブロックを少量含む。また2mm程度の礫と2mm程度の炭化物を少量含む。部分的に黄褐色土が斑状に混入する。
- V 層 黄褐色土……粒子は細かく、締まりがあり、粘性も強い。1mm以下のローム粒子を多く含み、2~5mmのロームブロックを少量含む。また2mm程度の礫を少量含む。部分的に暗褐色土が斑状に混入する。ローム漸移層である。
- VI 層 ソフトローム

以上をまとめると、基本的には黒色土(I層)、漆黒色土(II層群)、黒褐色土(III層群)、暗褐色土(IV層)、黄褐色土(V層)の堆積として捉えることができる。

基本層序の観察は、発掘区の南東隅で行った。基本層序と各時期の生活面との関係を述べる際には、耕作などを含めた後世の攪乱による、各時期の生活面の破壊を十分に考慮しなくてはならない。ここではあえて、基本層序断面から得られた遺物と各遺構調査の所見より、基本層序と各時期の生活面との関係を述べてみることにする。

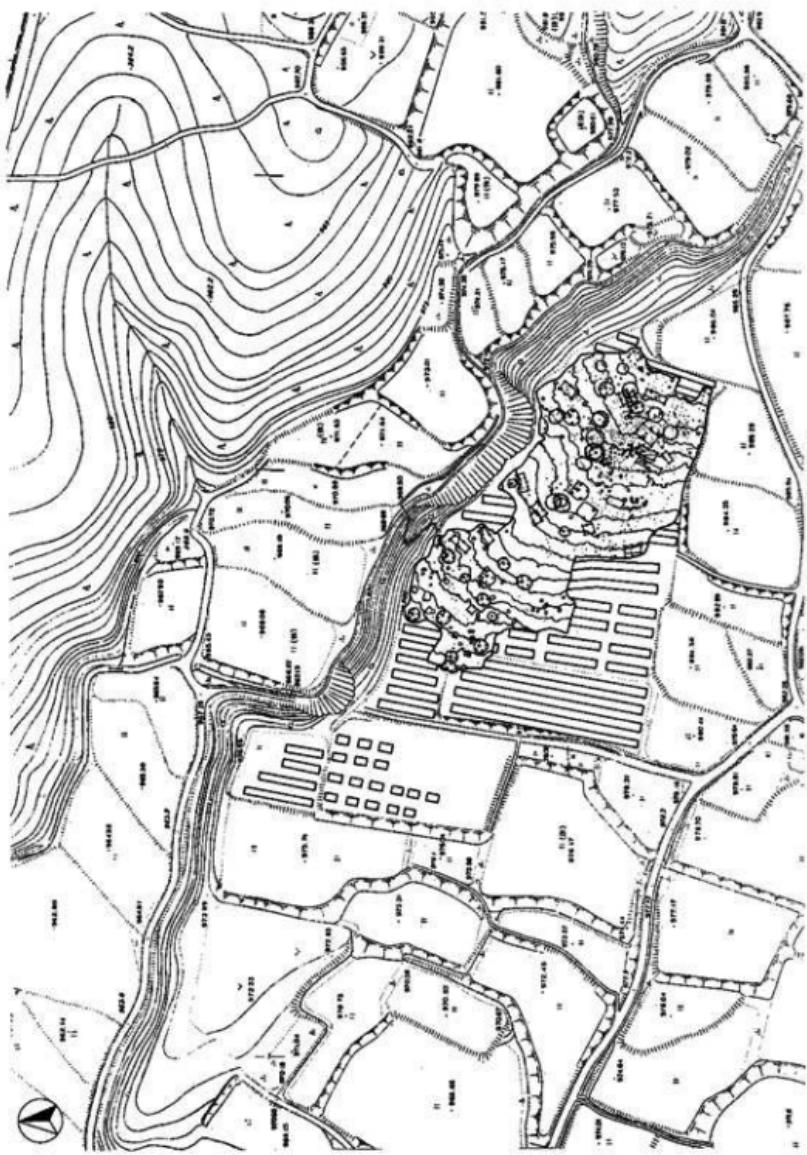
採集された遺物をみると、II a・b層では後期前半(VII期)に比定される土器が主体をなし、III a・b層では中期最終末から後期初頭(V・VI期)に比定される土器が主体であった。遺構確認面では、第1号配石遺構を基本層序のII層群とIII層群との境付近で確認している。また基本層

序で観察することができた穴1332は、出土した土器より後期前半（VII期）に帰属する遺構として捉えられた。以上から縄文時代の生活面は、VII期ではII a層下面より掘り込まれていることは確実であり、III層群より上面に生活面があったと言える。V・VI期では、該期に帰属すると考えられる第1号配石遺構をII層群とIII層群との境付近で確認していることから、II層群の下面からIII層群の上面との間に生活面があったと考えて良さそうである。平安時代の生活面については、住居址内に堆積していた覆土がII層群に類似することから、II層群内もしくはそれよりも上面にあったと考えられる。



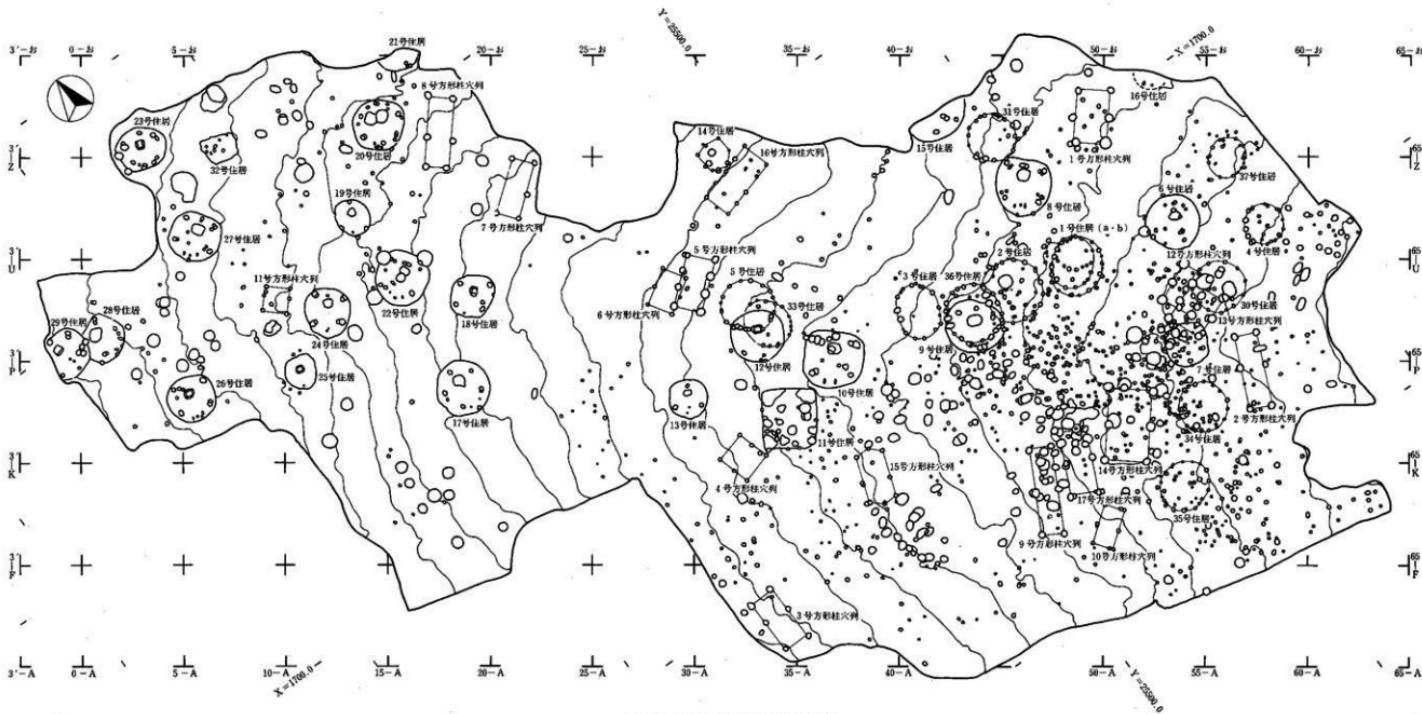
第2図 立石遺跡の基本層序 (1/40)

第3図 立石道路の地形と発掘区域 (1/2000)





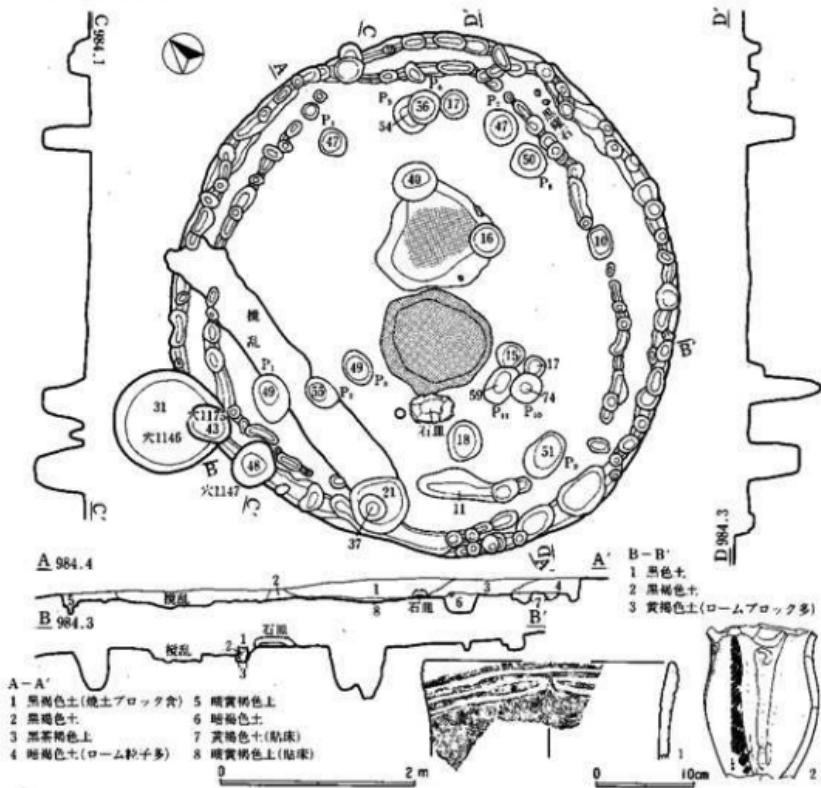
II 発掘された遺構と遺物



第4図 立石遺跡遺構全体図 (1/400)

1 繩文時代の遺構と遺物

(1) 住居址



址に設けられる炉の多くは掘方のしっかりした炉を伴うことから、古い炉とは考え難い。主柱穴はP₁～P₁₁の11本が確認された。P₁・P₄・P₆・P₈・P₉が最終的な住居址の主柱穴とみられる。炉は前述した焼土面の北東脇に位置する。掘方は浅く炉底は著しく焼けている。

出土した遺物で特記される事柄は、奥壁の周溝より出土した黒曜石石核2個と、焼土面に接するよう石皿が置かれ、その西脇に加曾利E式系の小形の土器（第5図2）が埋設されていたことである。焼土、石皿、小形の土器はセット関係になる可能性があり祭祀的な様相が窺える。1は曾利式系の土器で炉内からの出土である。また石棒と思われる礫も出土している。

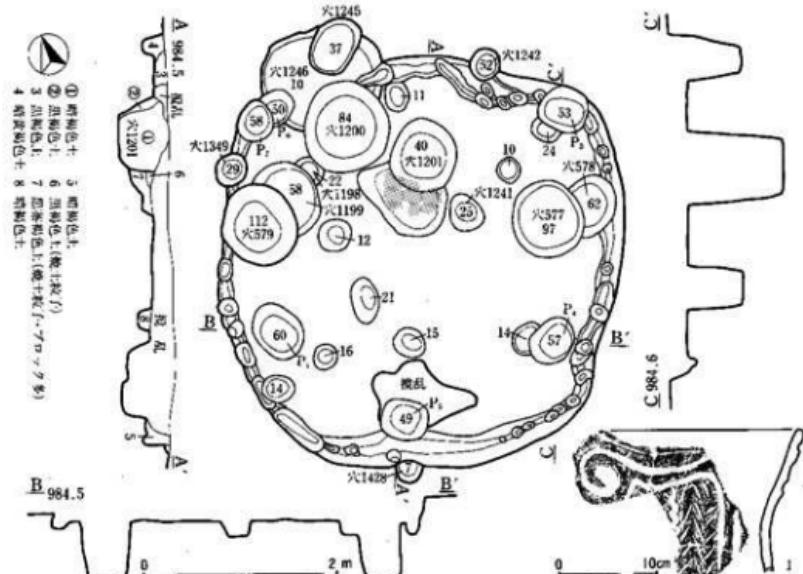
本址は埋設されていた土器と、炉内から出土した土器よりIV期の住居址である。

第7号住居址（第6図） 本址は発掘区の東側で、54-Qグリッドを中心に検出された。第13号方形柱穴列と僅かに重複している。また、時期差のある幾つかの穴と重複している。

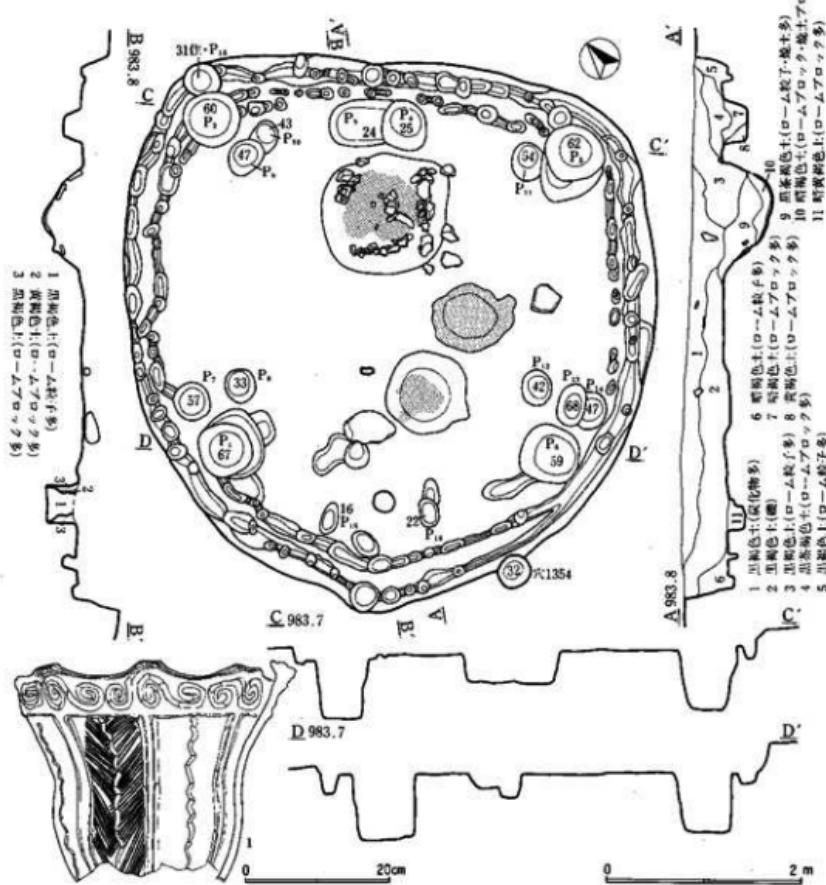
平面形は隅丸方形を呈し、規模は4.2×4.1mを測る。主軸方向はN-19°-Eである。壁高は確認面まで平均15cmを測る。壁下には周溝が巡るが、出入口部では幅が広く不明瞭となる。床は軟弱なロームの床で、堅硬な部分は確認されなかった。最終的な主柱穴はP₁～P₅で、P₆はP₂の建設であろう。炉は住居址の中央より奥壁寄りで、それ程深くない掘方の底に焼土が残る。おそらく石門炉であったのだろうが、炉石はすべて抜かれている。炉は穴1201に切られている。

本址からの出土遺物は少ない。第6図1は曾利式系の土器で、覆土内から出土している。

本址の床上から出土した遺物はないが、覆土内より出土した土器からみてIV期の住居址である。



第6図 第7号住居址(1/60)・出土土器(1/6)



第7図 第8号住居址 (1/60)・出土土器 (1/8)

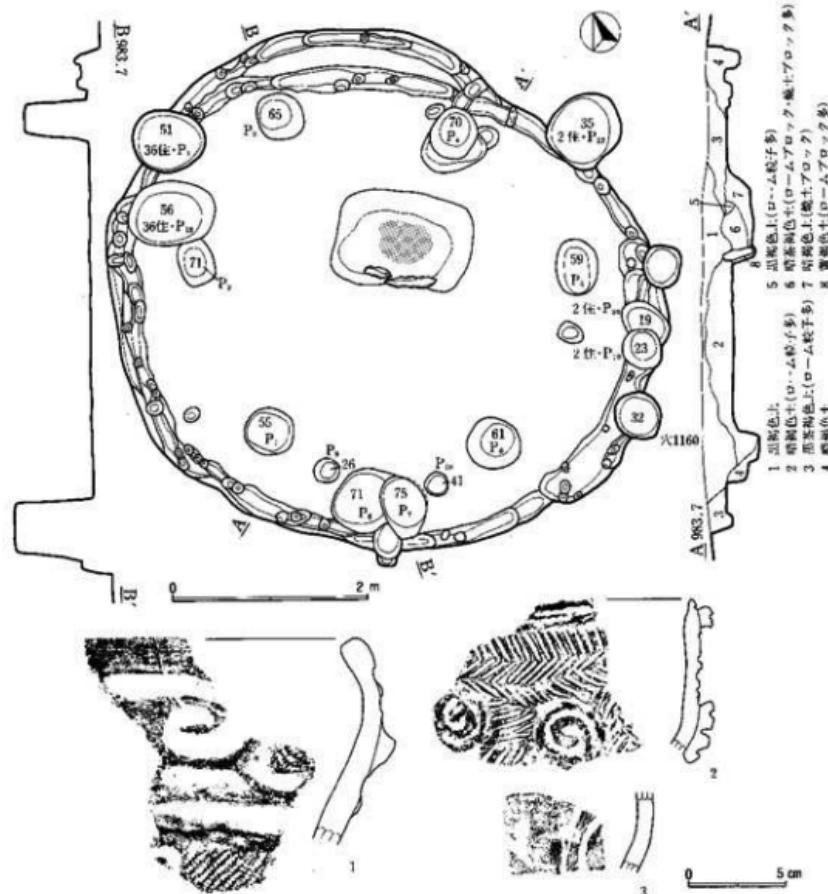
第8号住居址（第7図） 本址は発掘区の北東に位置し、46-X・Yグリッドを中心に検出された。第31号住居址のP₁₅が、本址の北コーナーに重複している。

平面形は出入口部が張り出す隅丸五角形で、規模は5.5×5.4mを測る。主軸方向はN-42°-Eである。遺構確認面がほかの住居址に比べて高いこともあり、壁高は出入口部で35cmを測る。壁下とその内側に周溝が巡るが、内側のものは所々不明瞭となる。床は出入口部付近から炉までの範囲が、光沢のある堅緻な面である。本址においても第6号住居址にみられたような、床が僅かに窪み焼けた面が2ヶ所検出された。どちらも、僅かな窪みに暗黄褐色土を貼った状態で検出された。焼土面の南西脇には人頭大の扁平な礫が遺存している。その脇にこそ土器の埋設はないが、

第6号住居址の石皿と良く似た砾の在り方である。主柱穴はP₁・P₂とP₃～P₁₄が確認された。本址は2回以上の建替え、もしくは拡張がなされたと考えられ、P₁・P₂・P₃・P₄が最終的な住居址の主柱穴とみられる。また、出入口部の施設と考えられる対ビットP₁₅・P₁₆がある。その間より逆位に埋設された埋甕が検出された。炉は奥壁に寄った位置にある。が石は抜き取られ、詰石と焼土が残っているだけである。出土遺物は多く、第7図1の曾利式系の土器と曾利III～IV式期に比定される土器が出土している。また黒曜石の碎・剥片類が1218g出土している。

本址は埋甕と床上・覆土内の土器より、II期でも新しい段階の住居址とみられる。

第9号住居址（第8図） 本址は台地平坦面の頂部付近に位置し、43-Rグリッドを中心とする。



第8図 第9号住居址 (1/60)・出土土器 (1/3)

第2・36号住居址と重複し、西側には第3号住居址が近接している。また本址の南側には、墓坑を含む多くの穴が掘り込まれている。

平面形は主軸線を基準にみると不整円形であり、規模は 5.8×5.3 mを測る。主軸方向はN-17°-Eと考えられる。竪は出入口部付近が最も高く、約20cmを測る。竪下の周溝は全周し、所々で幅広となる。奥壁部では周溝が2本となり、奥竪を30cm余り拡張しているようである。床は出入口部が堅緻なほかは、軟弱な床であった。主柱穴はP₁～P₈の8本である。この中でP₇とP₈は柱の建替えによる、同一地点での重複とみられる。P₉とP₁₀は出入口部に設けられた対状ピットで、掘方の断面が円柱状を呈する。炉は奥壁に寄った位置に設けられている。炉の機能時は石囲炉であったのだろうが、南辺の炉石が残るだけで他の炉石は人為的に抜き取られている。炉石の残る南辺は炊口部と考えられるが、礫の形状からはふさわしいものとは言えない。炉内には焼けた痕跡が認められる。しかし焼土は焼き出されているのか、ほとんど残ってはいなかった。なお、炉の北辺直上からは、第36号住居址の炉が検出されている。

出土遺物は極めて少ない。これは2軒の住居址、特に第36号住居址と本址が全面に近い重複状態にあることが影響していると思われる。第8図1は加曾利E式系の深鉢の口縁部、2は唐草文系の口縁部、3は曾利式系の壺型を呈する土器の破片とみられる。石器は石鎌、凹石、敲石、黒曜石製石錐・剝片・両極石器が出土し、石製品では輕石製品が2点出土している。

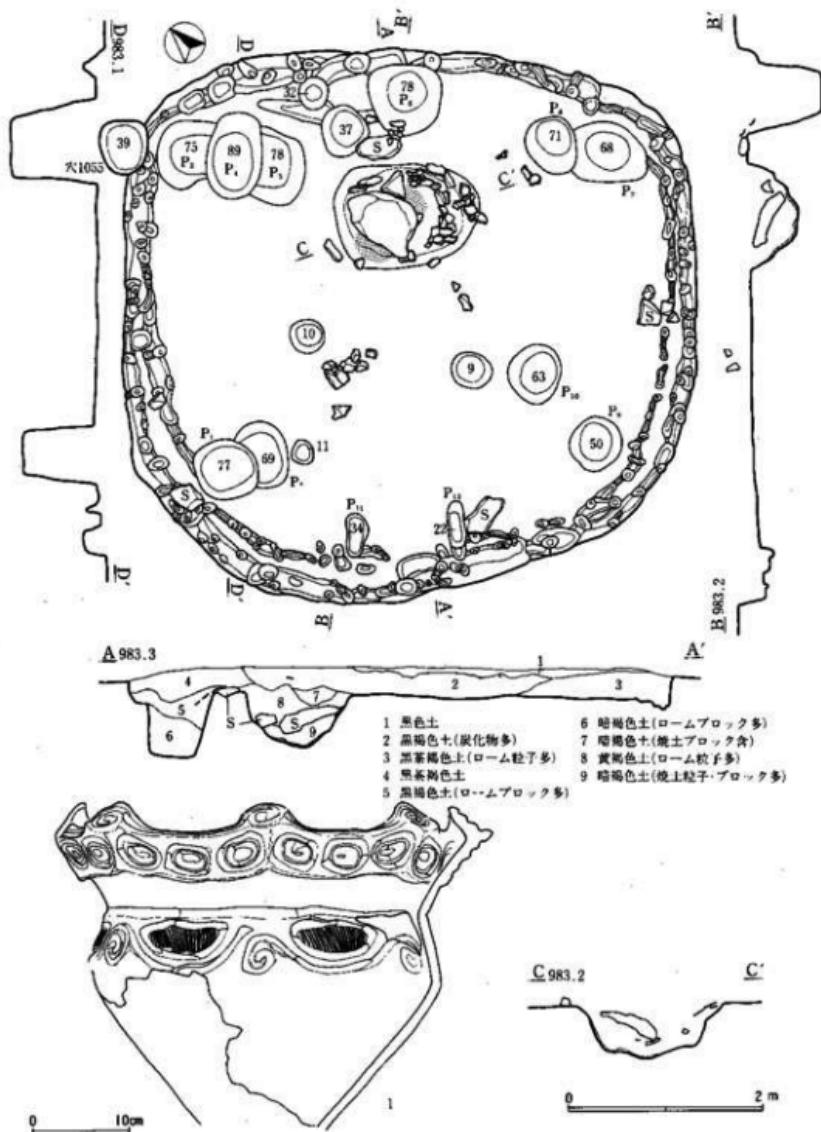
本址は出土した土器より、II期に帰属する住居址である。

第10号住居址（第9図） 発掘区の中央より東側で、36・37-Pグリッドを中心に検出された。

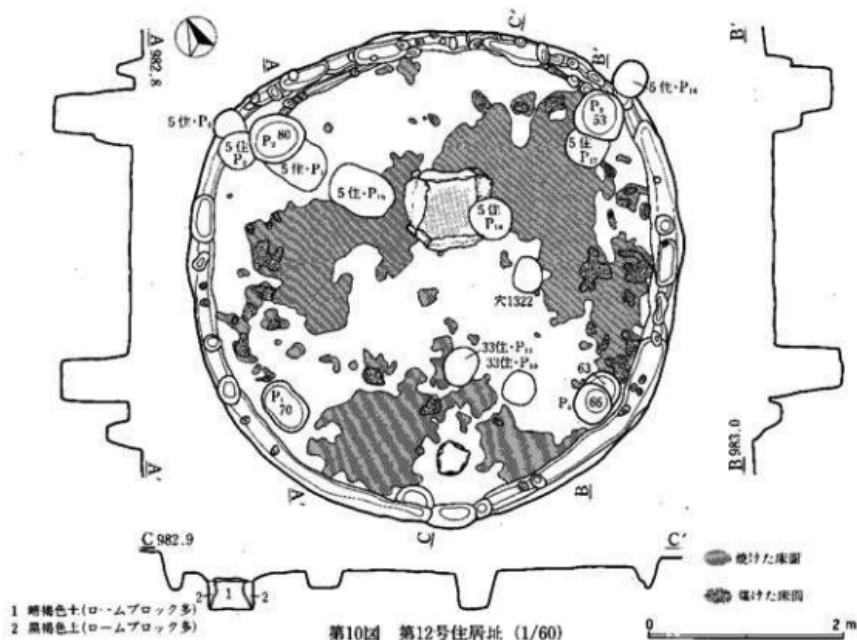
平面形は出入口部の西側が若干張り出す隅丸五角形を呈し、規模は 5.9×5.7 mを測る。主軸方向はN-43°-Eである。遺構確認が住居址の床に近い位置であったことから、壁は全体的に低い。壁高は出入口部付近で20cmを測る。周溝は壁下とその内側より2本検出された。どちらも小穴を伴う周溝で、外側は全周するが内側は奥壁部分で外側の周溝と同一になる。なお、内側の周溝は暗黄褐色土で貼床されていた。床は西側の一部が軟かく、そのほかは叩き締めたような堅緻な床である。主柱穴はP₁～P₁₀の10本を確認している。P₂・P₄・P₅・P₈・P₁₀は貼床されていたことから、同心円状に拡張がなされる以前の主柱穴である。P₁₁とP₁₂は出入口部より検出された。その位置より、出入口部の施設に関わる対状のピットとみられる。炉は住居址の中央部より、奥壁に寄った位置に設けられている。掘方は平面形が 140×110 cmで、深さが50cmを測る大きな規模を呈している。炉内には、一人で持ち上げることのできない炉石であろう礫、拳大から人頭大の礫、そして一括土器（第9図1）が遺存していた。炉底には著しい焼痕が見られるが、焼土の堆積はなかった。炉とP₆との間には、上面が平坦で梢円形を呈する扁平礫を意識的に据えている。位置的にみて、石塙と言える施設である。

出土遺物はそれ程多くはない。1の曾利式系の土器が、本址から出土した土器で唯一復元に至ったものである。石器は凹石、黒曜石製剝片・両極石器が出土している。

本址は、炉内から出土した一括土器よりII期の住居址である。



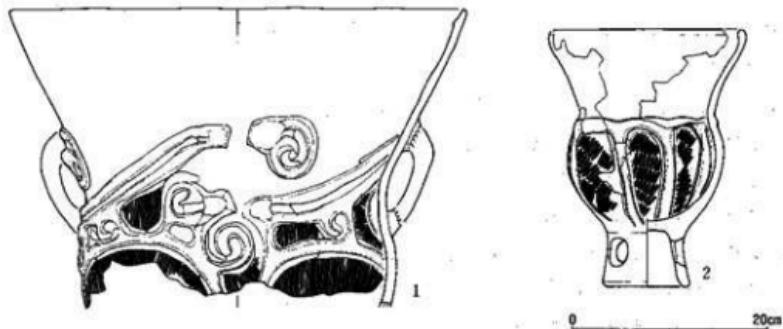
第9図 第10号住居址 (1/60)・出土土器 (1/6)



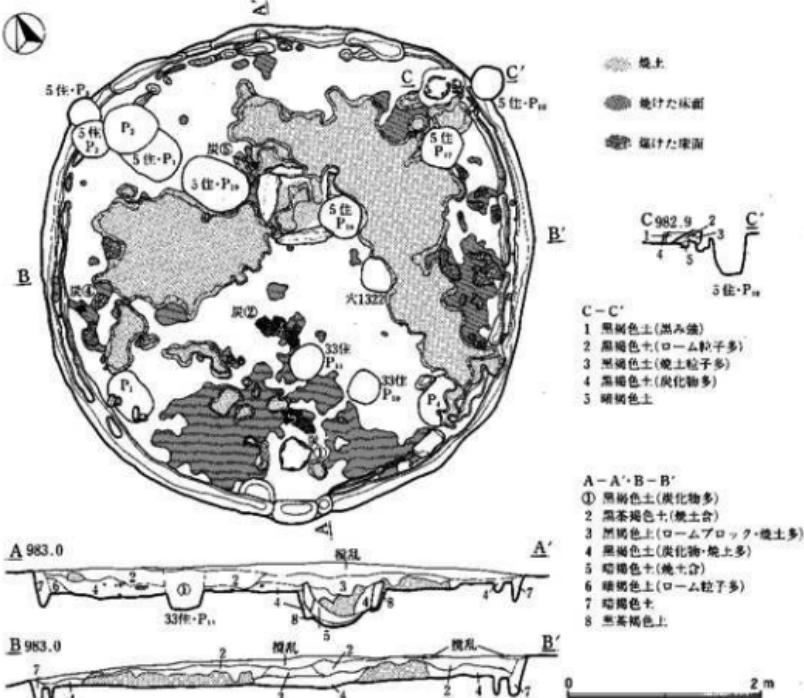
第10図 第12号住居址 (1/60)

第12号住居址（第10・11・12図） 本址は発掘区のほぼ中央部で、台地平坦面の頂部より検出された。グリッドでは34・35-Pに位置している。第5・33号住居址が本址に重複している。

平面形は出入口部が僅かに張り出す隅丸五角形を呈し、規模は $5.2 \times 5.1\text{m}$ を測る。主軸方向はN-21°-Eを示す。遺構確認面から覆土を数cm掘り下げるに、住居址の北側を中心として焼土が



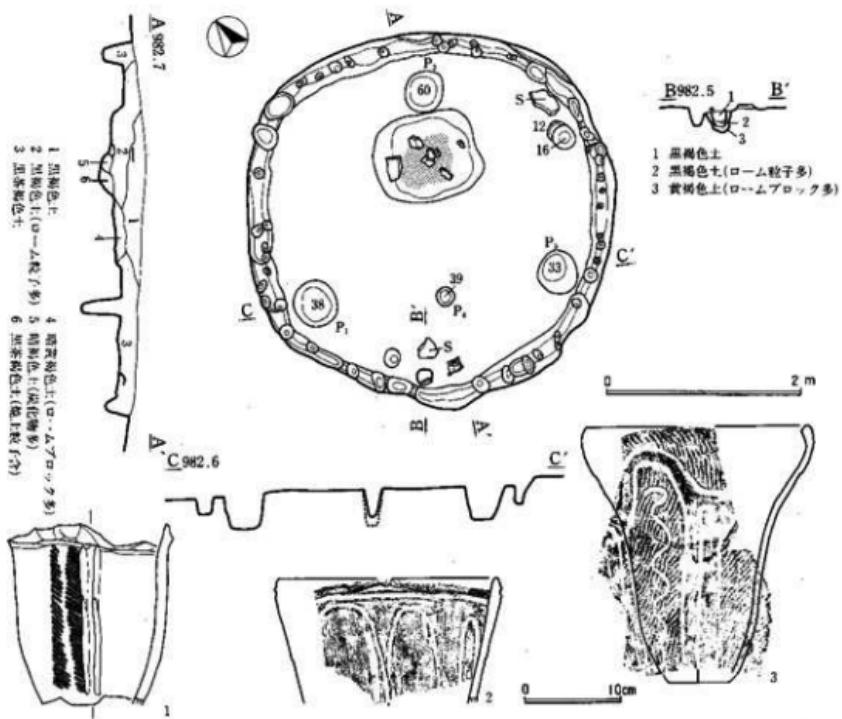
第11図 第12号住居址出土土器 (1/6)



第12図 第12号住居址 (1/60)

分厚く堆積していた(第12図)。焼土は最も厚い部分で、約20cmを測る。焼土を取り除くと、著しく焼けた床が検出された。しかし、床の中央と奥壁に近い面は焼けてはいない。焼けた面には所々、煤けたような漆黒色を呈する部分があった。しかし最も高い所で25cmを測る壁には、焼けた痕跡や焼けた箇所はみられなかった。周溝は、出入口部と奥壁部の一部を除いて2本検出された。周溝間は、ロームブロック混じりの暗褐色土で人為的に埋められている。この土を取り除くと幅が25cm、深さが20cm程の良好な1本の周溝となった。なお、人為的に埋められた土の上面(床)には、焼けた痕跡が所々に認められた。床は炉の両側が堅密で、特に埋甕周辺が堅かった。主柱穴はP₁～P₄である。P₁とP₄は底面がグルマ形を呈しており、同一地点で柱の建替えがなされたものと考えられる。がは石圓炉で、東辺の炉石の一部が第5号住居址のP₁₈により抜き取られている。埋甕は主軸線上に位置する。胴下半部を欠損する甕を逆位に埋設し、その上に扁平甕をのせ石蓋をしている(第11図1)。本址で特記されることとして、5住・P₁₆とP₃北脇の焼土内に2個体の土器が並んで埋設されていたことである。図示した第11図2は、その1つである。

本址は埋設されていた土器より、III期の住居址である。



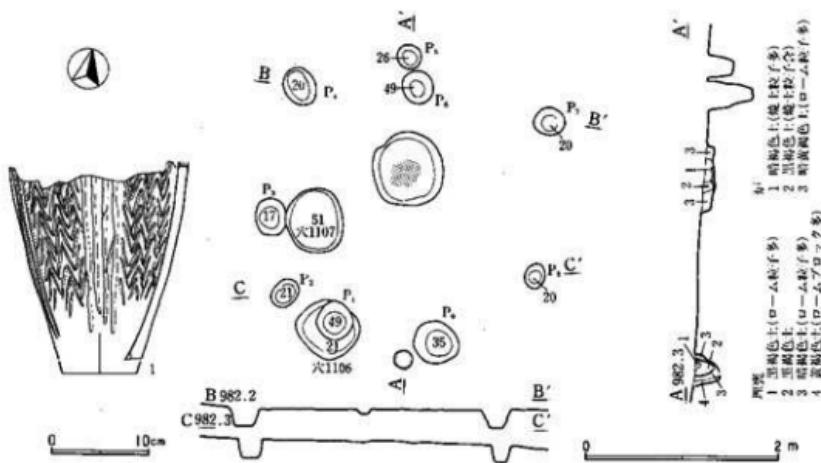
第13図 第13号住居址 (1/60)・出土土器 (1/6)

第13号住居址 (第13図) 本址は発掘区のほぼ中央部、29-Nグリッドを中心に検出された。

平面形は出入口部の張り出す隅丸五角形で、 $3.9 \times 3.8\text{m}$ の規模である。主軸方向は N-36°-E を示す。壁は最も高い東壁で12cmを測る。壁下には幅25cm、深さ20cm程の良好な周溝が全周する。床は中央に向かって皿状に窪み、埋甕周辺が堅緻である。主柱穴は P_1 ～ P_3 の3本で、 P_4 も本址に伴う柱穴と考えられる。炉は住居址の奥壁に寄った位置に設けられている。本来は石閉炉であったと考えられるが、南辺の炉石以外は動いており当時の姿を留めていない。焼土は搔き出されているのか残っていないが、炉底には焼痕が観察された。埋甕は主軸線上で、口縁と底部を欠損する深鉢が正位に埋設されている。その上には凹石が遺存し、北側からは三角形の扁平碟が出土した。扁平碟は埋甕の石蓋であった可能性があり、これがずれ動いたのかもしれない。

出土遺物は第13図の3個体の土器のほか、凹石、磨石、石錐、黒曜石製剝片・両面石器が出土している。1は埋甕として用いられていた土器である。2と3は覆土からの出土である。

本址は埋設されていた埋甕と覆土から出土した土器より、III期に帰属する住居址である。

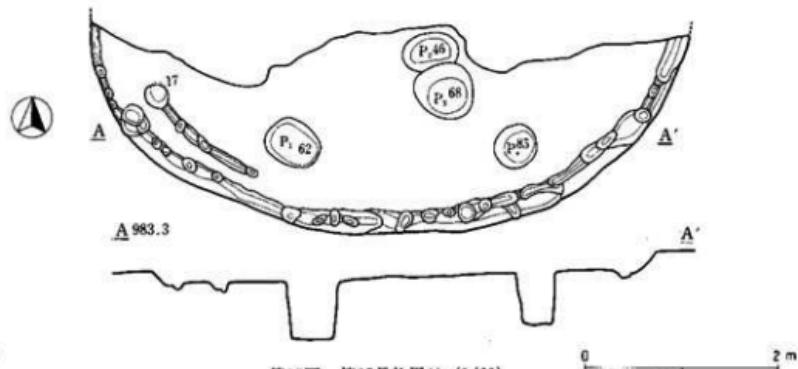


第14図 第14号住居址 (1/60)・出土土器 (1/6)

第14号住居址 (第14図) 本址は発掘区の中央部北側、30・31-Zグリッドを中心として検出された。第16号方形柱穴と本址の出入口部が僅かに重複している。

本址付近は、後世の搅乱が著しかったために遺構の把握が難しく、表土を剥ぐ際に壁を削ってしまった。そのために平面形は不明であるが、主柱穴の在り方より4.0×3.5m程の規模と推測される。主軸方向はN-10°-Wである。本址に伴う柱穴はP₁～P₆とみられる。また穴1107は位置的にみて本址に伴う可能性がある。炉の掘方は浅く、炉底が僅かに焼けている。P₁・P₂間には、口縁と底部を欠損する曾利式系の深鉢があり、埋甕として正位に埋設されている (第14図1)。

本址は埋設されていた埋甕より、IV期の住居址である。

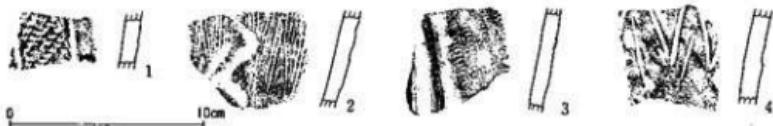


第15図 第15号住居址 (1/60)

第15号住居址 (第15・16図) 本址は北側の崖にかかっている。42-いグリッドを中心とする。

住居址の半分以上が崩れているため、平面形、規模、主軸方向は不明である。壁は最も高い所で19cmを測る。壁下には浅い周溝が巡り、その内側には部分的に深い溝が掘り込まれている。床は全体的に軟弱である。本址からは、 $P_1 \sim P_4$ が検出されている。位置的にみて P_1 と P_4 は主柱穴と考えられる。出土した遺物には、第16図1～4がある。1は加曾利E式系、2～4は曾利式系の土器である。いずれも曾利IV～V式期に比定される土器である。石器は石鎌、黒曜石剝片・両極石器が出土している。

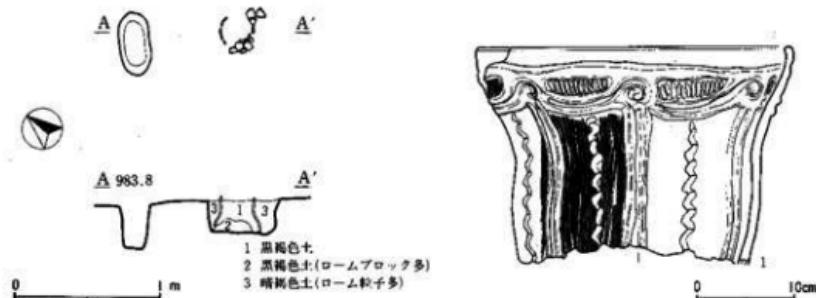
本址は出土した遺物より、IV期に帰属する住居址とみられる。



第16図 第15号住居址出土土器 (1/3)

第16号住居址（第17図） 本址の埋甕は発掘区の東隅、52-Z グリッドから検出された。

崖により住居址の大部分が失われていることから、平面形、規模、主軸方向は不明である。そして、壁、床と思われる部分を検出することはできず、埋甕と対状ピットの片側とみられる穴を確認したにすぎない。埋甕は胴下半部を欠損する深鉢で逆位に埋設されている。曾利III式期に比定される土器である（第17図1）。本址は埋甕として用いられた土器より、II期の住居址である。



第17図 第16号住居址 (1/20)・出土土器 (1/6)

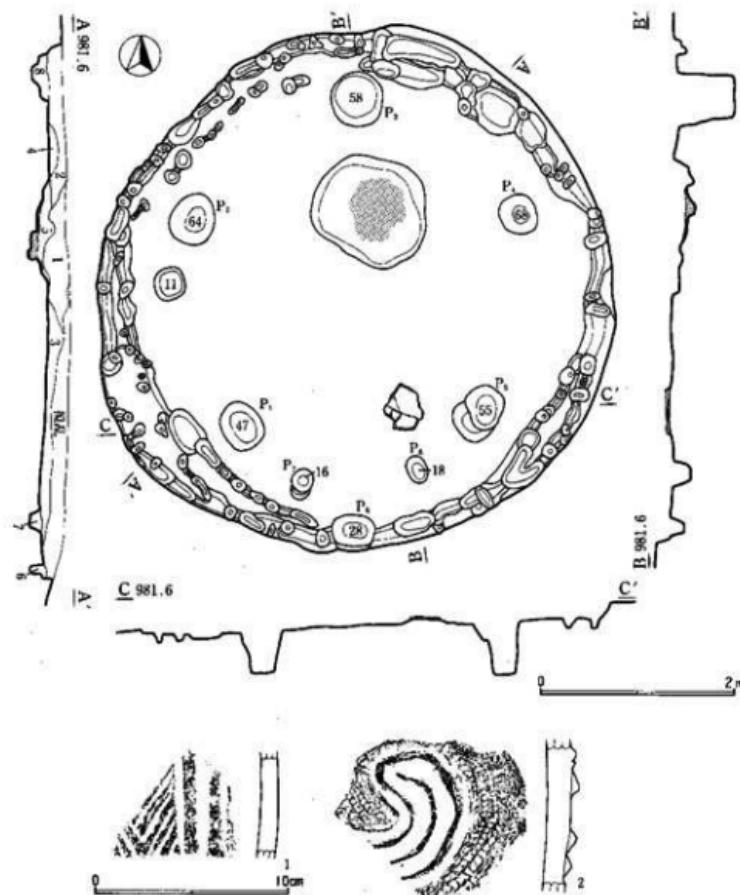
第17号住居址（第18図） 本址は発掘区の中央部より西側で、西方向に緩やかな傾斜をする地形に構築される。グリッドでは18-Nを中心とした位置である。

平面形は円形を呈し、規模は5.4×5.3mを測る。主軸方向はN-4°-Wである。壁は最も高い東壁部で17cmを測る。周溝は部分的に幅広く、また2本となって壁下を周全する。なお、 P_3 から P_4 間の周溝はロームブロックで人為的に埋められていた。床はロームへの掘り込みが浅く、さらに後世の擾乱も入ることから全体的に荒れている。主柱穴は $P_1 \sim P_5$ で、 P_6 は浅いが主柱穴とし

て良いのかもしれない。 P_7 ・ P_8 は出入口の施設に伴う対状のピットである。 P_5 の北には厚さ2cm程の平板石が置かれている。この下を調査したが埋甕は埋設されていなかった。炉は住居址の中央より、奥壁に寄った位置に設けられる。掘方の浅い石圓炉であったと考えられるが、炉石はすべて抜き取られている。焼土は搔き出されているよう、堆積していなかった。

本址からの出土遺物は少なく、数点の土器片と石錐、凹石が得られたにすぎない。第18図1は唐草文系の深鉢の胴部、2は曾利式系の甕の胴部である。ともに床上からの出土である。

本址は出土した土器より、Ⅰ期に帰属する住居址とみられる。



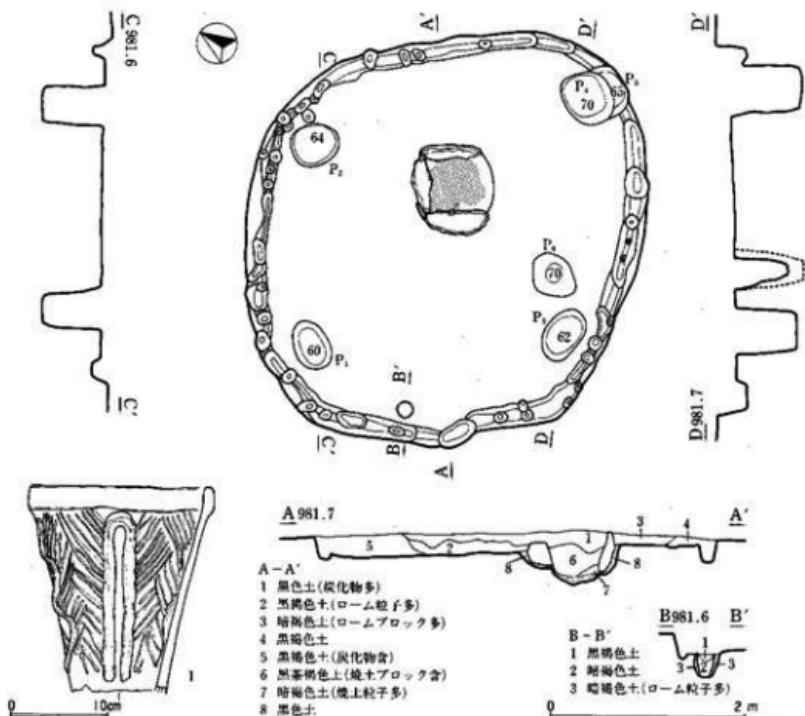
第18図 第17号住居址 (1/60)・出土土器 (1/3)

第18号住居址（第19図） 本址は台地平坦面の頂部付近、19-S グリッドを中心に検出された。

平面形は出入口部が張出し気味の歪んだ方形を呈し、規模は4.2×4.1mを測る。主軸方向はN-58°-Eである。壁は最も高い東壁で24cmを測る。周溝は出入口付近で浅く、また西側がやや不明瞭となる。そのほかは深く良好な周溝である。床は出入口部周辺が皿状に窪むのに対し、主柱穴の外側ではやや高い。ともに光沢のある堅緻な床である。主柱穴はP₁～P₆で、P₄とP₆は貼床された古い主柱穴である。炉は右開炉で主軸線上に位置する。東辺の炉石は抜き取られているが、ほかの三辺は当時のまま炉石が残る。炊口部の炉石は礫が選択され、上面が平坦になるように意識して据えているようである。炉底は激しく焼けており、焼土も数cm残っている。埋甕は主軸線から若干西へずれた位置より検出された。底部を打ち欠いた深鉢を正位に埋設している。

出土遺物は第19図1の埋甕と、炉内から同時期の土器が一括出土している。埋甕は曾利IV～V式期に比定される。石器は石鏃、凹石、輕石製石碗、形態不明の輕石製品が出土している。

本址は埋設されていた埋甕と床上から出土した遺物より、IV期に帰属する住居址である。



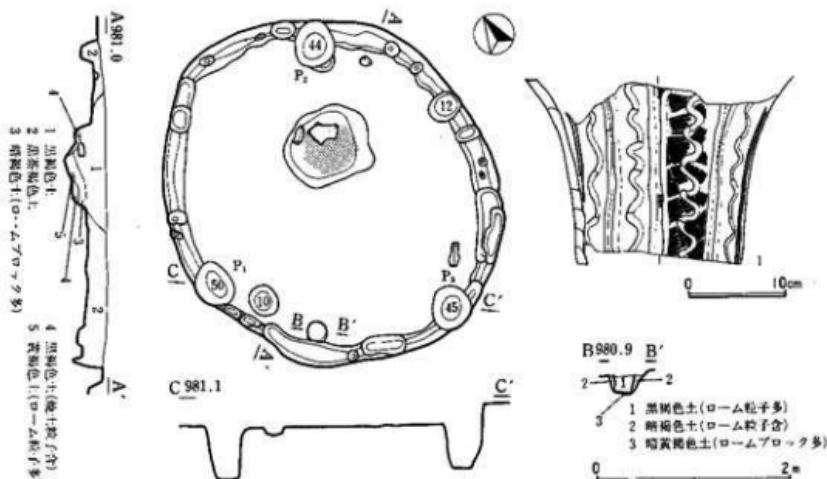
第19図 第18号住居址 (1/60)・出土土器 (1/6)

第19号住居址（第20図）本址は発掘区の北西側、13-Wグリッドを中心に検出された。

平面形は出入口部が張出し気味の不整円形を呈し、規模は $3.5 \times 3.4m$ を測る。主軸方向はN-31°-Eを示す。壁は出入口部で、床から確認面まで20cmを測る。周溝は壁下を全周する。平均幅20cm、深さ15cmの良好な溝である。床は全体的に軟弱で、凹凸が激しい。主柱穴はP₁～P₃の3本である。いずれも壁と接するように掘り込まれている。炉は主軸線上で中央よりやや奥壁に寄った位置にある。底の焼けた浅い掘方内には、抜き取られた灰石であろうか、礫が2個入り込んでいた。埋甕は主軸線上に位置する。口縁と胴下半を欠損する深鉢が、正位に埋設されている。

出土遺物には、埋甕に用いられた第20図1の加曾利E式系深鉢と、曾利IV式期に比定される土器片がある。また石器では凹石、黒曜石製剝片・両極石器、石鎌ブランクが出土している。

本址は、埋設されていた土器と床上から出土した土器より、III期に帰属する住居址である。



第20図 第19号住居址 (1/60)・出土土器 (1/6)

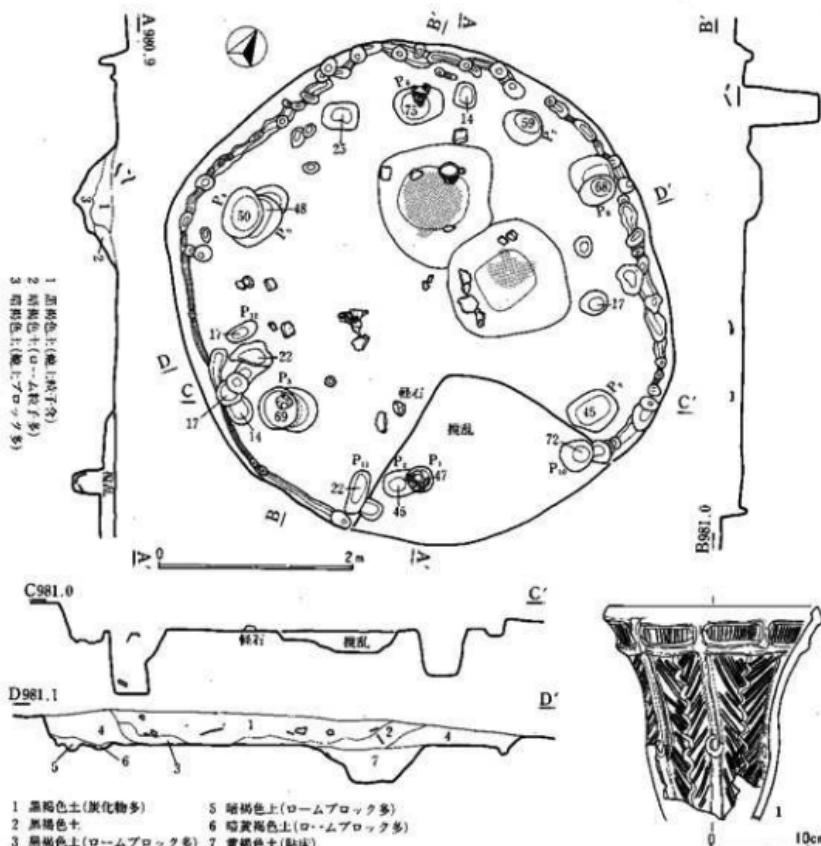
第20号住居址（第21図） 本址は発掘区の北隅で、崖に近い位置より検出された。グリッドでは14-aを中心とした位置である。住居址の南東一部を後世の搅乱が壊している。

平面形は、南東に入る搅乱のため正確にはつかめないが、六角形を呈していた可能性がある。規模は $5.1 \times 5.0m$ を測る。同一住居址内で主軸方向を変えた住居址で、旧主軸方向はN-39°-E、新主軸方向はN-30°-Wとみられる。すなわち西へ69°主軸方向をずらしている。壁は南西部で30cmを測る良好なローム壁である。壁下には周溝が巡り、南側では細く、西側では小穴の連続する周溝となる。床はロームへの掘り込みが深いため良好で、炉より南半分は光沢のある堅緻な床である。主柱穴はP₁～P₁₀で、P₁・P₃・P₄・P₆・P₈・P₁₀が最終的な住居址の主柱穴とみられる。P₂・P₅・P₇・P₉は古い住居址の主柱穴とみられ、P₂・P₇・P₉では明確な貼床が確認

できている。なお、 P_{11} は対状ピットの片側と考えられる。 P_{12} も P_{11} と同じく対状ピットの片側であろう。もう片方は P_3 によって壊されていると考えられる。炉は新旧2ヶ所を検出している。新しい炉は古い炉の一部を掘り込んで造られている。古い炉はロームブロックを多量に含む暗褐色土で貼床されていた。どちらも掘方が深く、形態は石閉炉であったと考えられるが炉石はすべて抜き取られている。また焼土もきれいに掻き出されている。

出土遺物はほかの住居址に比べて多く、復元可能な土器が5個体出土している。第21図1はその1つである。遺物の出土状態は、いわゆる吹上パターンを呈している。石器は打製石斧、凹石、磨製石斧、礫器、黒曜石製剣片・両極石器、スクレイパーが出土している。

本址は出土した一括土器より、II期に帰属する住居址である。

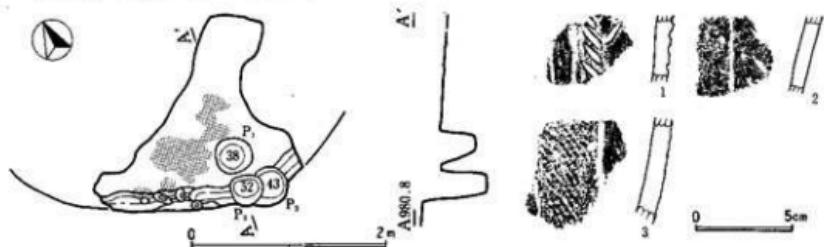


第21図 第20号住居址 (1/60)・出土土器 (1/6)

第21号住居址（第22図） 本址は発掘区の北隅で、北側の崖にかかっている。15-えグリッドに位置している。

崖によって住居址の大部分が崩れていますから、平面形、規模、主軸方向は不明である。残存する壁は18cmを測り、その下には浅い周溝が巡っている。床は光沢のある堅緻な床で、部分的に焼痕が見られる。本址は火災に遭った住居址なのかもしれない。柱穴はP₁～P₃が検出された。しかし、P₂とP₃は貼床されていたことから、本址に伴う柱穴ではない可能性がある。

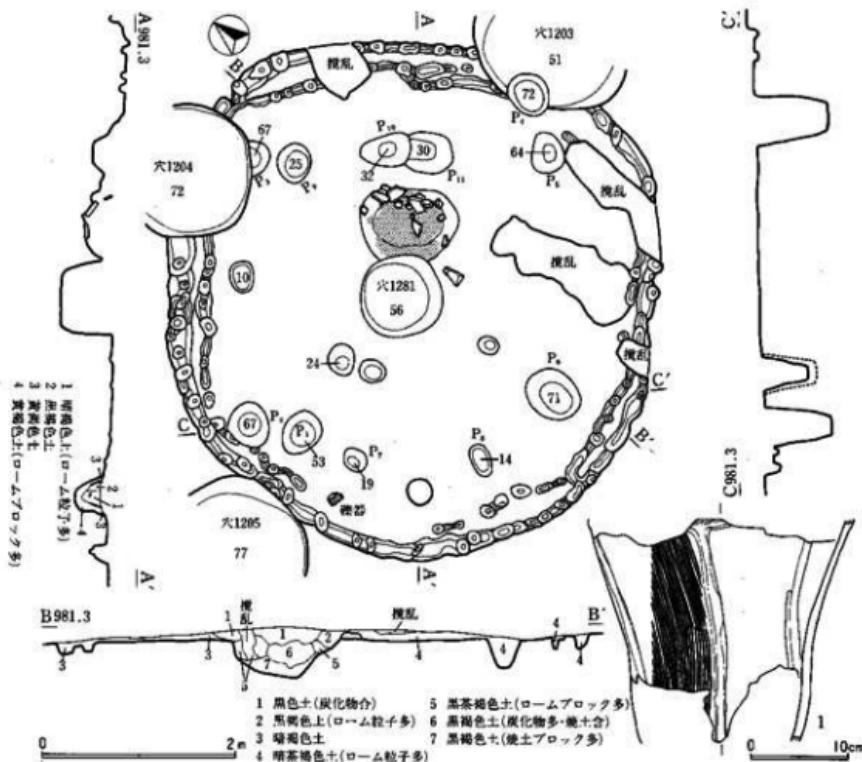
出土した遺物は、第22図1～3である。1・2は曾利式系、3は加曾利E式系の土器である。本址は出土遺物に乏しく時期決定は厳しいが、IV期の住居址とみておきたい。



第22図 第21号住居址 (1/60)・出土土器 (1/3)

第22号住居址（第23図） 本址は発掘区の西側、台地平坦面の頂部に構築されている。15-Tグリッドを中心とする位置にある。本址には、穴1203・1204・1205・1281が重複する。

本址の付近は後世の搅乱が著しく、遺構の明確となる面まで掘り下げたことから、床に近い面での遺構検出となった。平面形は出入口部が張り出す隅丸五角形を呈し、規模は5.4×5.0mを測る。主軸方向はN-52°-Eを示す。壁は確認面まで平均8cmを測る。壁下には小穴を伴う周溝があり、内側にも途切れながら周溝が巡る。床はロームへの掘り込みが浅いこと、後世の搅乱を受けていることから凹凸の著しい荒れた床である。主柱穴はP₁～P₆で、検出された周溝と主柱穴の在り方より拡張がなされたとみられる。P₂・P₃・P₄・P₅が最終的な主柱穴で、P₁・P₆と、新旧を兼ねるP₇・P₈が古い主柱穴となろう。P₉は、その位置より古い主柱穴とも考えられるが、他のものに比べて25cmと浅い。P₁₀とP₁₁は本址に伴う柱穴である。P₇とP₈は出入口の施設に関する対応のピットである。その間には、口縁と胴下半部を打ち欠かれた土器が、埋焼として埋設されていた。土器を半截すると内部より打製石斧が出土した。炉は主軸線上で、住居址の中央から奥壁寄りに位置する。深い掘方内には、詰石として用いられていたであろう礫が、10数個崩れ落ちていた。炉の南西には穴1281が重複し、ロームによる貼床が確認されている。穴1203・1204・1205との重複関係は、明確な貼床を確認できなかったが、出土した遺物よりみて穴が本址に先行するものとみられる。本址の出土遺物は、曾利式系の埋甕（第23図1）のほか同時期の土器片が少量出土している。石器は、埋甕内より得られた打製石斧のほか、凹石、磨製石斧、礫器、黒曜石製剣片・両極石器・スクレイバーがある。以上より、本址はIII期の住居址である。



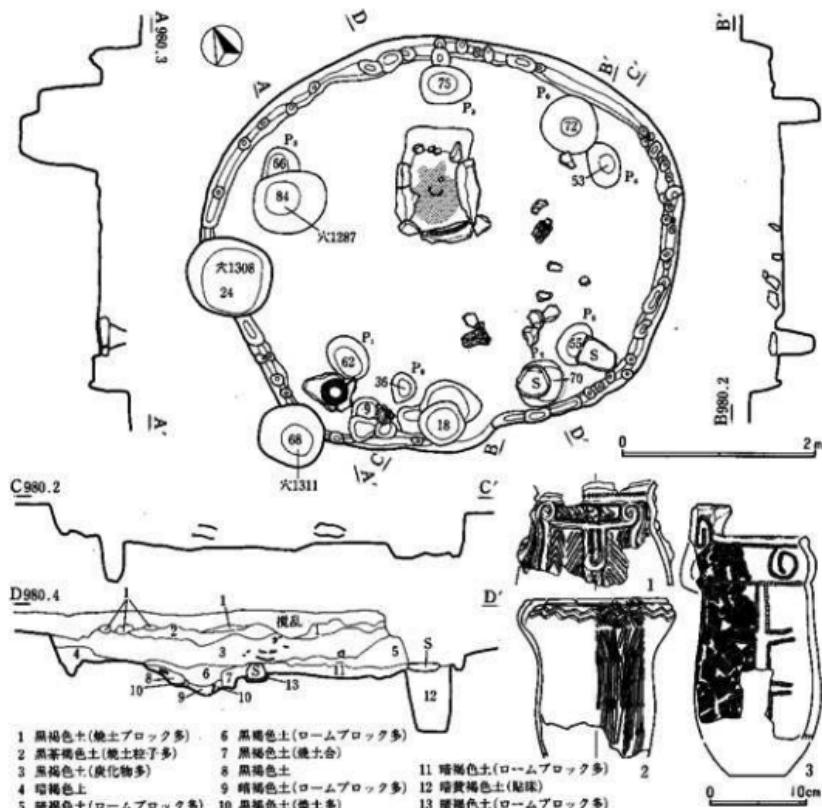
第23图 第22号住居址 (1/60) · 出土土器 (1/6)

第23号住居址(第24図) 本址は発掘区の北西隅に位置し、崖の際より検出された。台地平坦面の頂部付近への占地で、グリッドは3-2を中心とする。穴1287・穴1308・1311が重複する。

調査当初の段階では、本址の存在はつかめていなかった。そのため、ここを土置場として確保しておいた。しかし、調査の進むうちに遺構の存在する可能性が出てきたため、精査を行なったところ、住居址であることが判明した。平面形は東西に長い楕円形を呈し、規模は $5.0 \times 4.3m$ を測る。主軸方向はN-25°-Eを示す。遺構の大部分が現地表面からの手掘りのため、最も高い所で38cmの壁を検出することができた。ローム面への掘り込みが浅く、壁の大部分は黒色土である。小穴を伴う浅い周溝が壁下を全周するが、出入口付近で不明瞭となる。床は木の根等の擾乱が及んでいるのか、特に東側の床が荒れている。主柱穴の外側は若干高く、所々堅硬な面もみられる。主柱穴はP₁-P₇で、P₁-P₅が最終的な住居址の主柱穴である。P₆とP₇には明確な貼床が認められた。この事象より建替えがなされたと理解できる。P₈はその位置より棟持柱とも考えられ

る。炉は住居址の中央より奥壁に寄った主軸線上に位置する。形態は石函炉で奥壁側の炉石が抜き取られている。なお、炊口部の炉石にはタールの付着がみられた。掘方が浅く焼けの著しい炉底には、口縁と胴下半部を欠損する深鉢が正位に埋設されている(第24図1)。本址からの出土遺物は多く、床上、覆土より完形に近い土器4個体と多くの土器片、拳大から人頭大の礫が出土している。2は東海系、3は伊那谷方面の土器である。本址で注目されるのは、出入口部の西脇に花崗岩と安山岩の扁平な礫を据え、その上に胴下半部を打ち欠いた曾利系の土器が、逆位に伏せられていた施設である。そのほか、炉の西側の床上30cm程に、厚さ約10cmの焼土の堆積が確認された。焼土内からは多くの土器片が出土している。土器は著しく熱を受けていることから、住居址の窓みで火を焚く中へ土器を廃棄したものと考えられる。

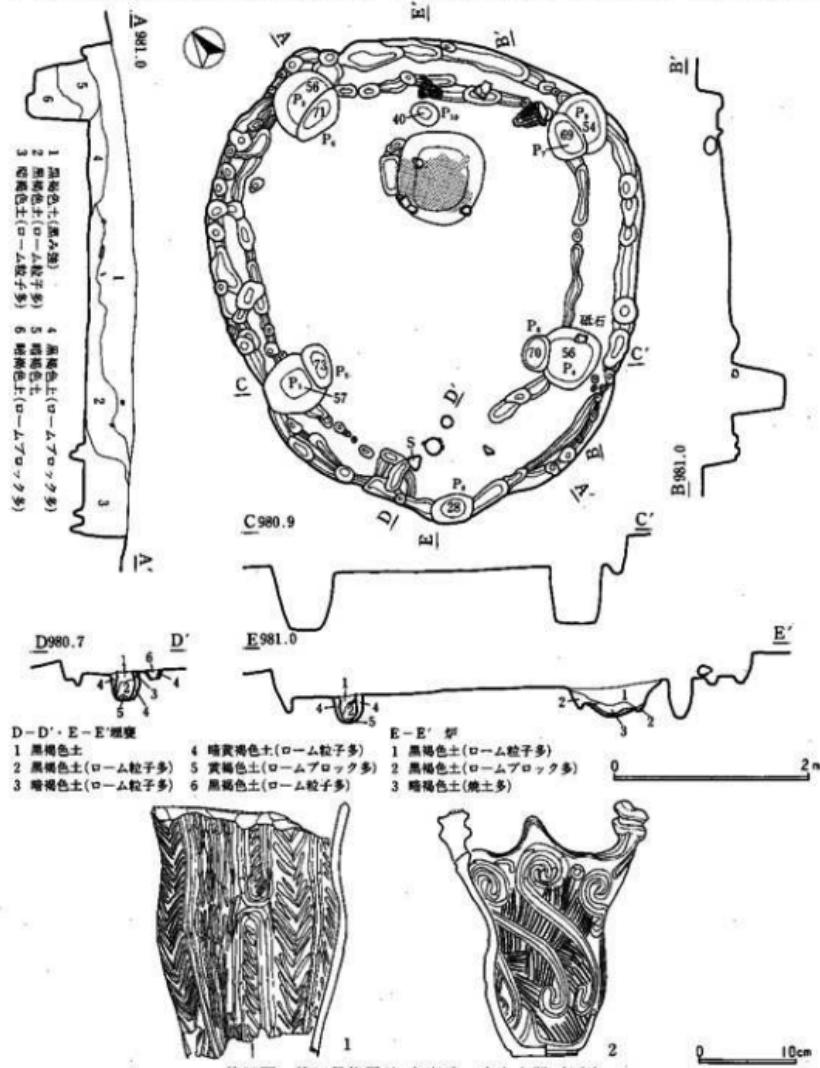
本址は炉内に埋設されていた土器と、床上、覆土から出土した土器よりⅠ期の住居址である。



第24図 第23号住居址 (1/60)・出土土器 (1/6)

第24号住居址（第25図） 本址は発掘区の西侧、11・12-R グリッドを中心として検出された。

平面形は出入口部が張り出す南北に長い隅丸五角形で、規模は $5.0 \times 4.5\text{m}$ を測る。主軸方向は N - 36° - E である。ロームへの掘り込みが深いこともあり、南壁で35cmを測る。壁下には小穴を伴う周溝が巡るが、西半分は不明瞭である。その内側からは、所々途切れる浅い周溝が検出され



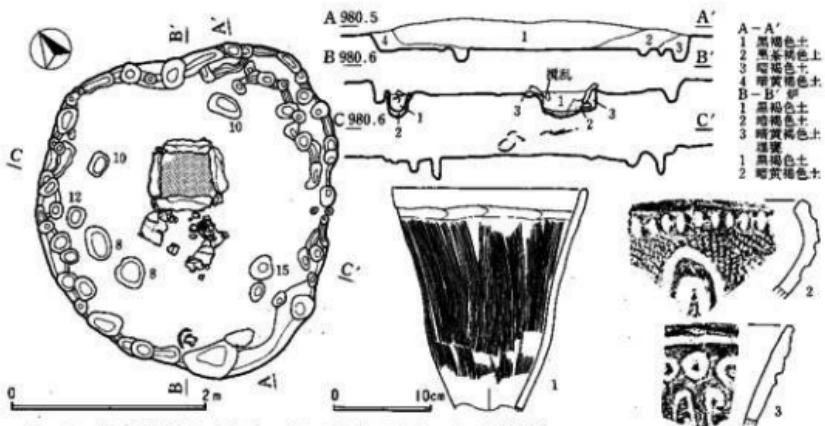
第25図 第24号住居址 (1/60)・出土土器 (1/6)

た。なお、内側の周溝は暗黄褐色土により貼られていた。床は、主柱穴の内側が僅かに窪んだ堅緻な床であるのに対し、外側は軟弱な床である。主柱穴はP₁～P₈で、P₉～P₁₀が旧主柱穴、P₁₁～P₁₄が新主柱穴である。いずれも同一地点での重複である。P₉・P₁₀は主柱穴よりも浅い柱穴で、その位置から棟持柱と考えられる。炉は主軸線上でかなり奥壁に寄った位置に設けられている。掘方の南・西辺には炉石を据えた痕跡が残る。炉石はすべて抜き取られ、詰め石が5個残っている。炉底は良く焼けているが、焼土は搔き出されているようで残ってはいない。埋甕は主軸線上に位置し、2個体の土器が検出された。外側の埋甕（第25図1）は口縁と底部を欠損し、内側の埋甕は肩上部と底部を欠損する。出土遺物は他の住居址に比べて多く、炉と奥壁の間より2個体の完形土器（第25図2）が出土したほか、ある程度住居址が埋没した段階で廃棄された多くの土器片と礫が出土している。石器の中で特記されるものとして、P₁からの砥石の出土が挙げられる。

本址は埋設されていた埋甕と、床上から出土した土器よりIII期の住居址である。

第25号住居址（第26図）発掘区の西側で、10-0グリッドを中心とする位置より検出された。

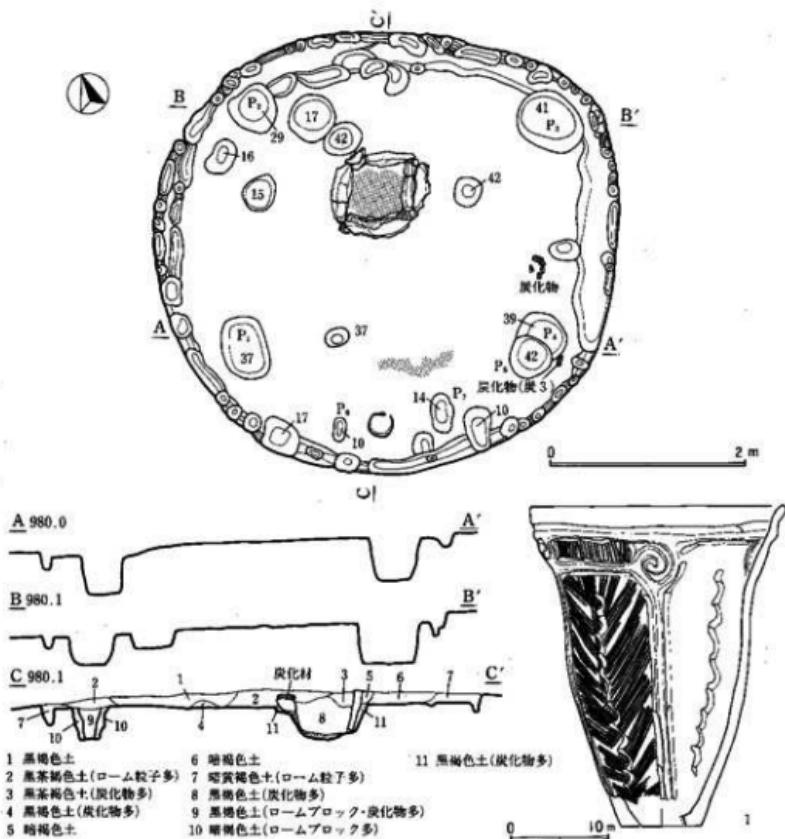
平面形は出入り口部の張り出す隅丸五角形で、規模は3.3×3.1mを測る。主軸方向はN-18°-Eを示す。造構確認が床に近く、またロームへの掘り込みも浅いことからプランの把握には難渋した。壁は出入り口付近で最も高く12cmを測る。壁下に明瞭な周溝はなく、小穴が連続している。床は軟弱で造構外の面と大差がない。主柱穴は再三の精査にもかかわらず検出することができなかった。炉は炉石の完存する石圓炉で、主軸線上に位置する。住居址の規模からみれば立派なものである。出入り口部の主軸線上からは埋甕の検出があった。底部を欠損する曾利式系の深鉢で、正面に埋設されている（第26図1）。石圓炉の南脇床上とその上部からは、曾利IV式期に比定される土器が一括出土している。2・3は覆土からの出土である。石器は凹石、黒曜石製剝片・両極石器・石鐵ブランクが出土している。本址は埋甕と一括土器よりIII期の住居址である。



第26図 第25号住居址（1/60）・出土土器（1は1/6、2・3は1/3）

第26号住居址（第27図） 発掘区の西隅より検出された。占地は、西に緩やかな傾斜を示す地形部である。グリッドは5-Nを中心とする。本址は遺構検出作業において、炉を中心とする円形の範囲に炭化物を含む黒褐色土が観察されたことからプランを把握することができた。

平面形は、出入口部に若干の張出しがみられることから隅丸五角形としたい。規模は4.8×4.6mを測る。主軸方向はN-18°-Eを示す。壁は最も高い東壁で12cmを測る。壁下には小穴の連なる周溝が巡るが、北側と東側では幅広で浅く不明瞭な周溝となる。また北側と西側では、壁下の周溝の内側からも周溝が検出されている。床はロームへの掘り込みが浅く、後世の搅乱も及んでいることから荒れた床である。そのような状態ではあるが、出入口付近では焼痕のある堅緻な床が残っていた。主柱穴はP₁～P₆である。本址は主柱穴の本数と周溝の在り方よりみて、拡張のな



第27図 第26号住居址 (1/60)・出土土器 (1/6)

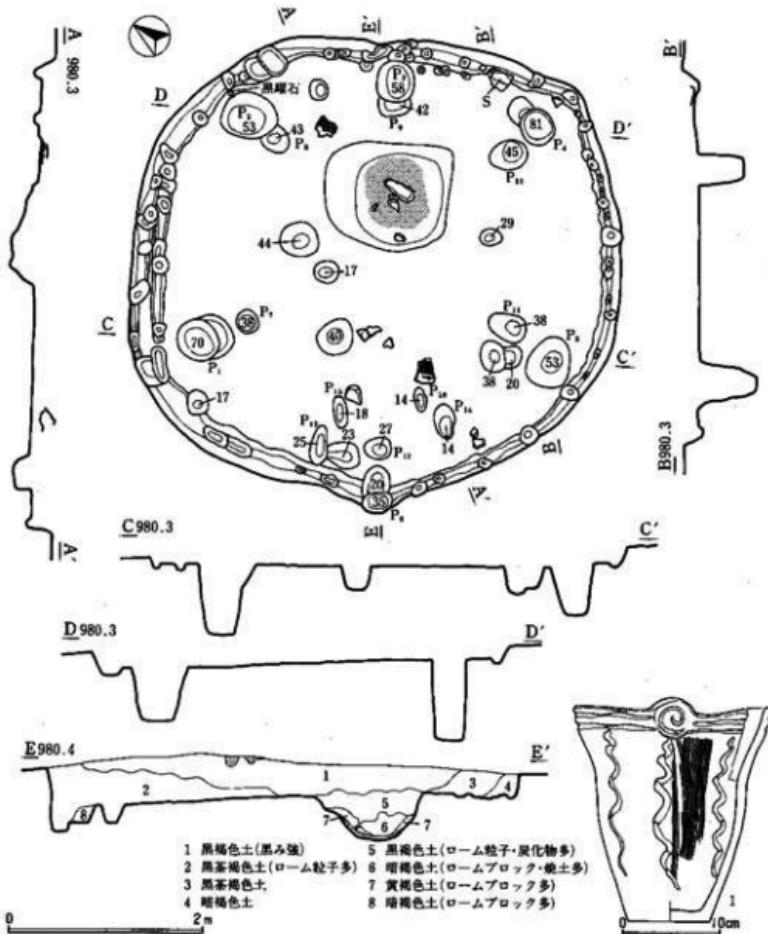
された住居址と考えられる。拡張前の主柱穴はP₁～P₄で、P₁～P₃は拡張後の主柱穴と同一である。P₄の北側とP₅には、明確な貼床がなされていた。拡張後の主柱穴はP₁～P₃とP₅である。P₆は10cmと浅いがP₇と対になるピットで出入口の施設に関わるものであろう。炉は主軸線上で、住居址の中央よりやや奥壁寄りに設けられている。形態は、深い掘方の四隅にしっかりと礫を据えた石開炉である。東辺の炉石は2枚の礫が据えられている。また、炊口部の炉石には、タール状の付着が認められる。炉石の上部は被熱しているのか、表面が赤みを帯びている。埋甕は主軸線上で対ピットの間より検出された。底部を欠損する深鉢で、正位の埋設である。P₄・P₅の北と南側床上（付編・炭3）には炭化物が遺存していた。炉石の上面が被熱していること、床の一部が焼けていること、覆土に炭化物が多いことを加味すると、本址は火を受けた住居址と考えられる。出土した遺物は、覆土が浅いためか少ない。埋甕として用いられていた曾利式系の深鉢（第27図1）のほか、曾利III式期に比定される土器片が少量と、凹石、黒曜石製剝片石器が出土している。本址は埋設されている埋甕より、II期に帰属する住居址である。

第27号住居址（第28図） 本址は発掘区の西隅で、台地平坦面の頂部への占地である。5-Vグリッドを中心としている。北側には第23・32号住居址、南側には第11号方形柱穴列が近接する。

平面形は出入口部が張出す溝丸五角形を呈し、規模は5.0×4.9mを測る。主軸方向はN-55°-Eを示す。出入口部付近の壁高は、確認面まで34cmを測る。西側の壁は、西に傾斜する地形のために暗褐色土の壁である。壁下には浅く小穴を伴う周溝が掘り込まれ、西側ではその内側にも浅い周溝が掘られている。床は西側に若干傾斜している。全体的に堅いが、特に炉から出入口部にかけての床が堅硬である。主柱穴はP₁～P₁₂で、主柱穴の本数とその位置よりみて、拡張がなされたものと解釈される。新しい主柱穴はP₁～P₆で、古い主柱穴はP₇～P₁₂である。P₃・P₆とP₉・P₁₂はその位置関係より棟持柱とみられる。また、P₁₁・P₁₄とP₁₃・P₁₅は出入口に関係する施設とみられる対状のピットである。この間の調査を行なったが、埋甕は埋設されていなかった。炉は住居址の中央より奥壁寄りで、主軸線上に設けられている。切炬燧状の掘方には炉石を据えた痕跡が残り、石開炉であったことを物語っている。良く焼けた炉底には焼土は残らず、きれいに搔き出されている。炉内からは炉石の結石であろう拳大の礫と、柱状の礫が出土している。

出土遺物は少なく、復元に至った2個体の土器と少量の土器片、石鏃、凹石、磨石、黒曜石製剝片・両極石器、不定形軽石製品が出土している。またP₂の北脇床上より、粒状の黒曜石石核が1点出土している。第28図1は曾利式系の深鉢で、曾利III式期でも新しい段階に比定される。出土遺物の中で特記されるものとして、黒曜石石核、剝・碎片が616g出土したことが挙げられる。この出土量は、本遺跡から検出された竪穴住居址の中において、第8・6号住居址に次いで3番目に多い出土量である。

本址は出土した土器より、II期に帰属する住居址とみられる。



第28図 第27号住居址 (1/60)・出土土器 (1/6)

第28号住居址（第29図） 発掘区の西隅より検出された。1-Pグリッドを中心とした位置である。本址の西側の床は、第29号住居址の覆土内に設けられている。

本址の北側は、後世の搅乱によって壞されている。しかし現存する住居址プランより、平面形は出入口部のやや張出す隅丸五角形を呈し、規模は4.6×4.4m程と推測される。主軸方向はN-38°-Wを示す。壁は東壁で、遺構確認面まで16cmを測る。ロームへの掘り込みが浅いため暗褐色土の壁である。壁下には深い小穴を伴う周溝が巡る。内側にも周溝がみられるが、出入口付近で

不明瞭となる。床は、出入口付近で堅緻な面がみられたほかは軟かい床であった。なお第29号住居址の東側には、本址の貼床が確認された。主柱穴はP₁～P₇である。P₁・P₂、P₃・P₄は同一地点での重複で、平面形がダルマ形を呈する。P₇も平面形がダルマ形に近く、柱の建替えがなされた結果とも考えられる。P₅・P₆は、擾乱内に掘方の痕跡が僅かに認められる程度である。なおP₅・P₆の深さは、床から計測している。P₈・P₉は対ビットで出入口に関わるものであろう。その間にあるP₁₀・P₁₁・P₁₂も本址に伴うもので、出入口の施設に関わる可能性がある。本址は主柱穴と周溝の本数によりみて、いわゆる同心円状の拡張がなされた住居址と言える。炉は住居址の中央より奥壁へ寄った主軸線上に位置する。炉の形態は石囲炉であったと考えられるが、炉石はすべて抜き取られている。炉内からは卵大から拳大の礫が多く出土している。調査では、炉がある程度埋まった段階で礫を廃棄しているものと考えられた。炉底は良く焼けているものの、焼土は掻き出されているのか、残ってはいない。

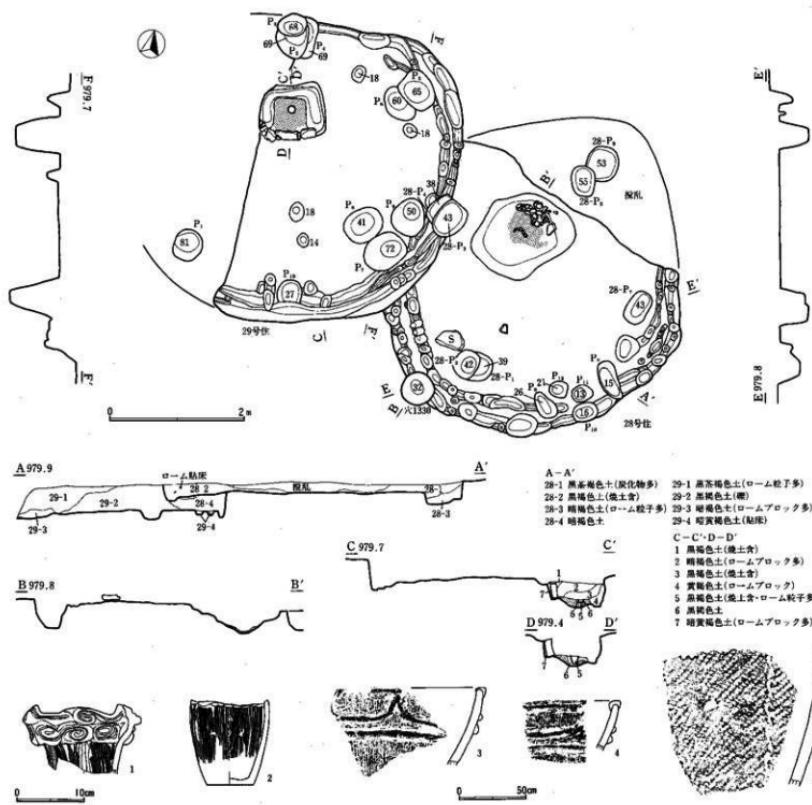
出土した遺物は少なく、第29図1の曾利式系深鉢の口縁部が炉底より出土したほかは、少量の土器と、打製石斧、横刃型石器、磨石、小形局部磨製石斧が出土したにすぎない。

本址は、炉内から出土した土器よりII期に帰属する住居址とみられる。

第29号住居址（第29図） 本址は発掘区の西隅より検出された。1-Pグリッドを中心とした位置である。本址の東側覆土中からは、第28号住居址の貼床が検出されている。また、西側は後世の擾乱が深い所まで及んでおり、遺構の把握が困難であった。

平面形は、出入口部が張り出だし気味であるが方形としたい。規模は5.0×4.5m程と推定される。主軸方向はN-14°-Wを示す。出入口付近の壁高は、確認面まで28cmを測る。壁下には周溝が巡り、場所によっては内側に1本ないし2本の周溝が掘り込まれている。なお内側の周溝は暗褐色土で貼床されていた。床は全面が堅緻であり、中央から出入口部へ傾斜している。主柱穴はP₁～P₉を確認したが、炉の西側にP₅・P₆に対する柱の存在が考えられることから、5本柱の住居址とみられる。また、本址は確認された主柱穴の本数と周溝の在り方よりみて、2回の建替え、もしくは部分的な拡張がなされたと解釈される。最終的な住居址の主柱穴はP₁と、P₂・P₃のどちらかと、P₅・P₆とみられる。P₁・P₂・P₃では明確な貼床が確認できているので、前者の柱穴より古いことは間違いない。P₁₀は位置的にみると、P₂・P₃・P₄のいずれかと対になる棟持柱とも考えられるが、貼床されていた事象よりP₂・P₃・P₄との同時存在は不可能であろう。そのことから、出入口部に設けられた独立した施設なのかもしれない。炉は主軸線上で、住居址の奥壁にかなり近い位置にある。形態は石囲炉であったのだろうが、炊口部の炉石以外は人為的に抜き取られている。深い掘方の底部には、胴より上部を欠損する土器が正位に埋設されている。炉底は良く焼けていて、その上に焼土が数cm堆積している。本址からの出土遺物は少なく、炉に埋設されている第29図2と3・4・5が出土している。3・4は同一個体の土器片である。石器は凹石、磨製石斧、黒曜石製剣片・両極石器が出土している。また覆土上部より土偶の右脚部が出土している。

本址は、炉体土器と覆土から出土した土器よりI期の住居址である。



第29図 第28・29号住居址 (1/60)・出土土器 (1・2は1/6, 3~5は1/3)

第1号住居址（a・b）（第30図）発掘区の東側で、48-T・Uグリッドを中心に検出された。

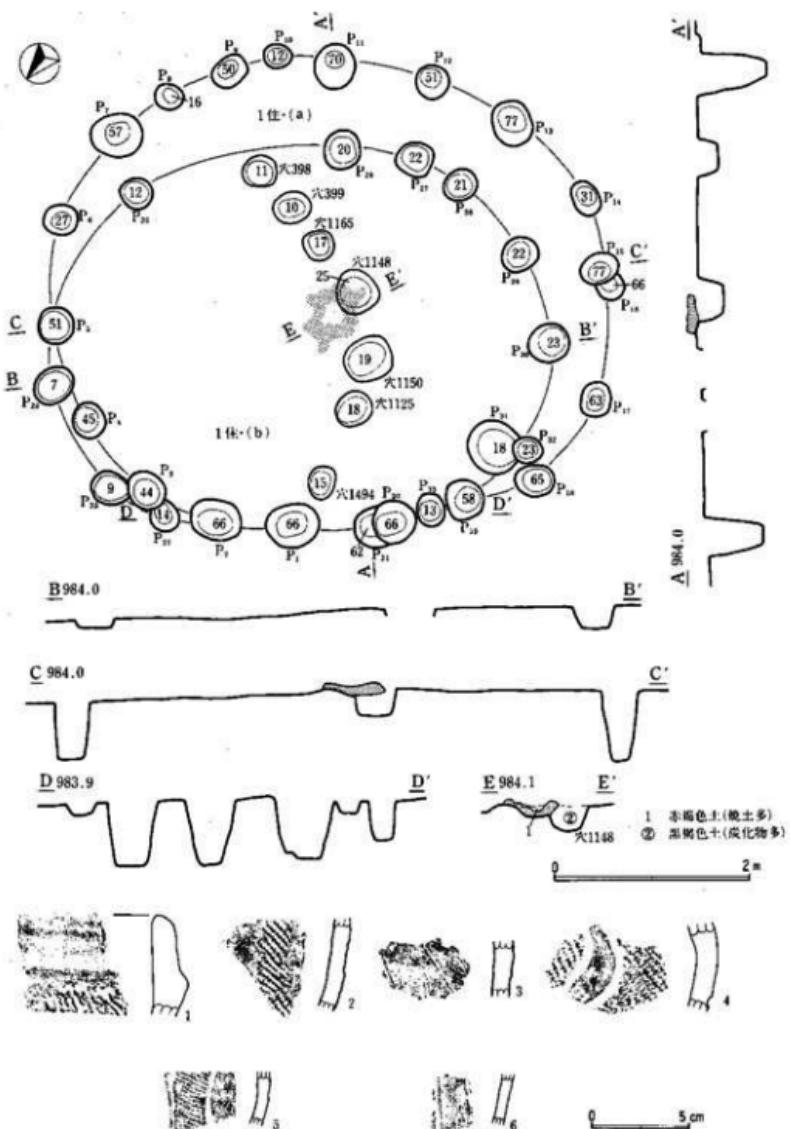
本址は柱穴が2重に巡る。外側と内側の柱穴を結んだ平面形が類似すること、出土した遺物からみると、本址は内側から外側へ拡張された住居址と考えられる。そのため外側をa号、内側をb号とした。なお、本址の東には攪乱があり、一部の柱穴を失っている。

a号に伴う柱穴の幾つかに、黒みの強い黒褐色土が入るという類似性が認められた。この事象に柱穴の配置を加味して、a号を構成する柱穴を検討した。その結果、P₁～P₂₁にその可能性が認められた。柱穴の配列は長円形を呈する。平面規模は、遺構を構成する柱穴の中心で計測しており、5.8×4.9mを測る。本址は、長軸に直行する短軸が主軸となっている。主軸は、住居址のはば中央より検出された炉と、柱穴配置とその規模からP₁とP₂₁の間が出入口部と考えられたことによる。主軸方向はS-39°-Eを示す。床は黒色土中にあったのか、確認することはできなかった。確認面からの柱穴の深さは、平均で53cmを測る。なお、北側から検出された柱穴は総じて浅い。これは本址の位置する地形が、台地平坦面の頂部から北方向へ傾斜していることも影響しよう。炉はa号のはば中央より検出された。住居址を確認した面での最も高い地点と、炉の上面レベルの差をみると、炉が約5cm高い位置にある。炉に重複する穴1148は調査の結果、炉よりも古い遺構であることが明らかとなっている。この穴の東西には、弧を描くように7基の穴が検出されている。一見すると、本址と同形態の遺構の一部であるかのようにも見受けられるが、北側にその繋がりを見つけだすことができなかった。そのために、1つの遺構として認定することは不可能である。しかし、それぞれの穴が10~25cmを測るような浅い規模であり、北側に傾斜する地形であることを考慮すれば、これに統く柱穴の存在した可能性も捨て切れない。

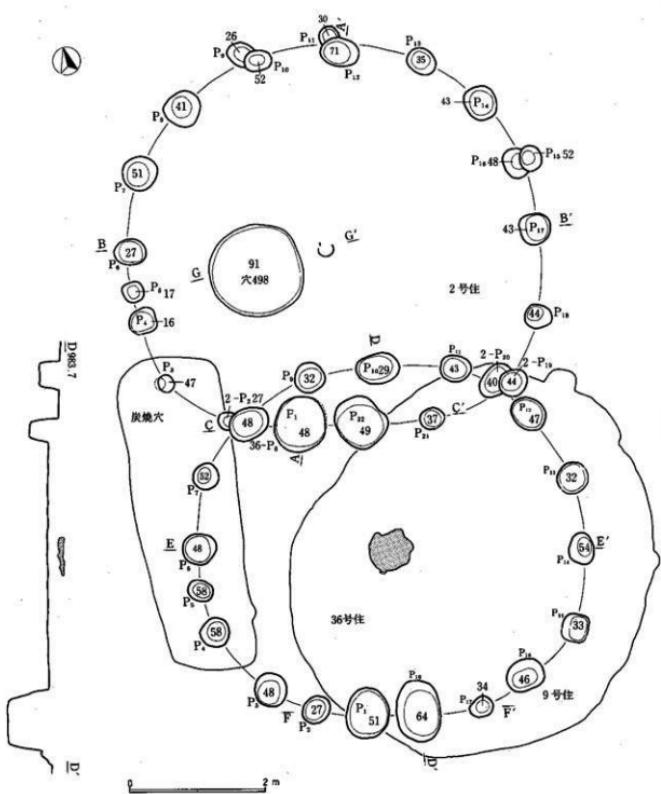
b号の柱穴配列も長円形で、規模は5.1×4.0mを測る。主軸はa号とはば同方向と考えられる。b号を構成する柱穴は、P₂₂～P₃₃とみられる。柱穴配置はa号と基本的には同じだが、柱穴の深さを比較した場合、a号よりも極端に浅い点が気にかかる。a号と同様に南側の柱穴よりも北側が浅い。確認面からの深さは、平均17cmである。出入口部は平面形と炉の位置より、a号と同じ所と考えられる。b号の炉はa号と同様の解釈で記述してきたが、b号に伴う柱穴の平均の深さが17cmという点から、a号の炉よりも高い位置に存在した可能性もでてくる。そうであるとすれば、b号の炉はa号に壊されていることが十分に考えられ、両者の新旧関係をより明確にすることはできよう。

出土した遺物には、第30図に図示したものがある。この中で2・3はP₁₉、5はP₃₃より出土している。P₁₉はa号、P₃₃はb号の柱穴と考えられることから、土器が両者の時間的な関係と矛盾してしまう。これについては、P₁₉とP₃₃はa号とb号が重複する箇所に位置し、後からの流れ込みや柱の兼用の可能性より理解したい。また炉から出土した1の加曾利E式系の土器も同様に解釈したい。

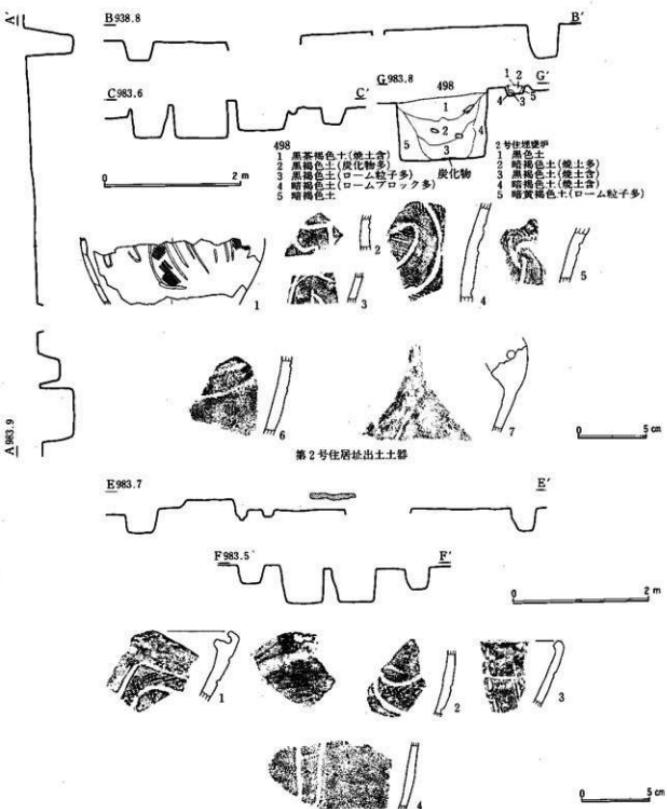
a・b号からの出土遺物が少ないとから、遺構の時期決定は難しいが、出土した遺物を尊重してV期からVI期にかけての住居址と考えたい。



第30図 第1号住居址（a・b）（1/60）・出土土器（1/3）



第31図 第2・36号住居址 (1/60)・出土土器 (第2号住居址・1は1/6, そのほかは1/3)



第2号住居址（第31図）発掘区の東側で、45-S・Tグリッドを中心とする位置より検出された。西側は第9・36号住居址、北側は炭焼穴と重複し、東側には第1号住居址が隣接する。

遺構検出作業の際に、土器を埋設した炉を確認した。この段階では住居址であることを把握するまでには至らなかったが、周辺より多くの穴が確認されていることから、住居址になる可能性を感じていた。後の周辺調査で炉を中心に穴の回ることを確認し、住居址と認定した。しかし、掘り込みの有無や床の存在は明らかにできなかった。

柱穴の配列は、出入口付近が直線的な円形を呈し、平面規模は 6.0×5.7 mを測る。本址も第1号住居址と同様に、長軸に直行する短軸が主軸となっている。主軸方向はS-73°-Eを示す。柱穴はP₁～P₂₁が確認され、建替えとみられる柱穴を除くと17本による構成となる。住居址が構築されている地点は、南東から北西方向へ地形が傾斜しており、遺構内での標高差は約30cmを測る。そのため、柱穴の深さも地点により異なりがみられるが、深さの平均を求めるとき40cmである。出入口部はP₁とP₂₂の間と考えられる。確認された柱穴の中でP₁とP₂₂の規模が大きく、柱穴の配列からもその蓋然性が高いことからである。炉は住居址のはば中央で、主軸線上に位置する。口縁と底部を欠損した土器が、正位に埋設されている。土器は全周せず、約1/3を欠いている。住居址を確認した面での最も高い地点と、炉上面の高さを比較すると、確認面が炉より約6cm高い状況にある。

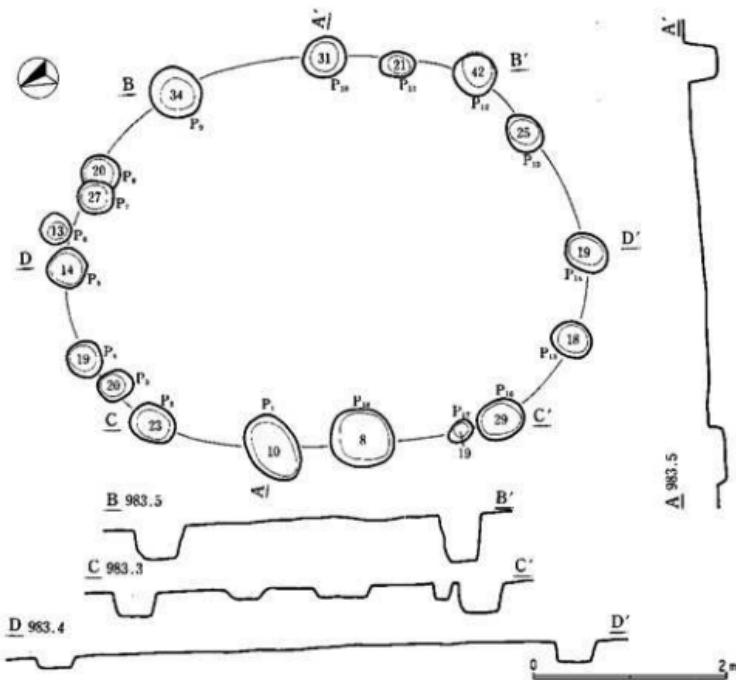
出土した遺物は、第31図に図示している。1は炉体土器で称名寺式期でも新しい段階とみられる。6は炉体土器と同じ土器の可能性がある。2・3・5も該期の新しい段階の土器であろう。

本址は、埋設されていた炉体土器と柱穴内から出土した土器、さらに第1・36号住居址との位置関係を考慮すると、VI期でも新しい段階の住居址と考えられる。

第36号住居址（第31図）台地平坦面の頂部に占地し、43-Sグリッドを中心に検出された。東側は第2・9号住居址、近・現代の炭焼穴と重複し、西側には第3号住居址が隣接する。

柱穴の配列は長円形を呈し、その規模は 5.8×5.2 mを測る。本址も、長軸に直行する短軸が主軸となる。主軸方向はS-75°-Eを示す。柱穴はP₁～P₁₈が確認され、遺構確認面からの深さは、平均で44cmを測る。出入口部は柱穴規模と柱穴配列より、P₁とP₁₈の間と考えられる。その様相は、第2号住居址と非常に良く似ている。炉は、第9号住居址の調査において確認されている。第9号住居址の炉の上部に位置し、 55×50 cmを測る長方形の範囲が、約8cmの厚さで焼けていた。住居址内の炉の位置は、ほぼ中央で主軸線上にあたる。住居址を確認した面で最も高い地点と炉上面の高さを比較すると、確認面と炉はほぼ同じ高さである。

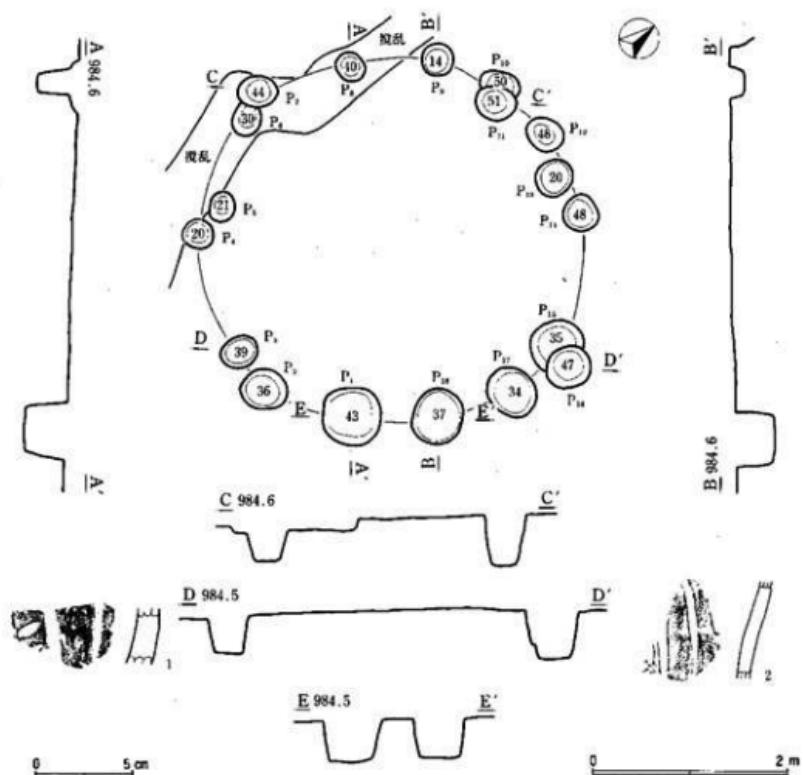
出土遺物は第31図に図示している。1はP₉からの出土である。波状の口縁部で、内側に円形の刺突を施している。2・3・4は炉付近からの出土である。いずれも称名寺式期に位置づけられる土器である。本址は、出土した遺物に乏しく時期の決定はかなり厳しいが、出土遺物と第2号住居址との重複関係より、VI期でも第2号住居址に先行する住居址と考えたい。



第32図 第3号住居址 (1/60)

第3号住居址(第32図)発掘区の中央より東側で、41-R・Sグリッドを中心に検出された。本址の東側には第9・36号住居址が隣接し、西側には第10号住居址が位置している。

柱穴配列は長円形を呈し、第1号住居址と類似する。その規模は柱穴の中心間で、 $5.4 \times 4.1\text{m}$ を測る。本址も、長軸に直行する短軸が主軸となる。主軸方向は S-65°-E を示す。柱穴は P₁ ~ P₁₈ が本址に伴うものと考えられるが、主軸線に対して柱穴が規則的に配列しているとすれば、P₁・P₂・P₄・P₅・P₈~P₁₀・P₁₂~P₁₆・P₁₈ の 13 本を抽出することができる。柱穴の深さは浅い傾向にあり、最も深いもので P₁₂ の 42cm である。なお、遺構確認面からの柱穴の深さは、平均で 22cm を測る。出入口部は柱穴の配列より、P₁ と P₁₈ の間とみられる。前述した第2・36号住居址の出入口部に位置する柱穴の規模と比較すれば、平面規模に大差はないが、深さは P₁ が 10cm、P₁₈ が 8cm と極めて浅いことが指摘される。しかし、遺構の上部を削っている可能性が高く、遺構内の最も高い地点と低い地点のレベル差が約 30cm あることを考えれば、一概に第2・36号住居址の出入口部の柱穴と大差があるとは言えない。なお、本址から炉は検出されなかった。柱穴内から出土した遺物がないために、本址の時期は不明である。



第33図 第4号住居址 (1/60)・出土土器 (1/3)

第4号住居址(第33図)発掘区の東隅で、58-Wグリッドを中心に検出された。本址の東には近・現代の溝があり、一部の柱穴を壊している。

柱穴の配列は円形を呈し、規模は柱穴の中心間で4.0×3.8mを測る。主軸は平面形と柱穴の配列より求めた。それによると、本址も長軸に直行する短軸が主軸とみられる。主軸方向はS-55°-Eを示す。本址の柱穴は、P₁～P₁₈とみられる。遺構確認面からの柱穴の深さは、平均で37cmを測る。柱穴の中には、同一地点でダルマ形に重複しているものが見受けられる。そのため、一部の柱穴では柱の建替えがなされたと考えられる。なお炉は検出されなかった。

出土遺物は、第33図に図示してある。1はP₃、2はP₁₈からの出土である。どちらも曾利式系の土器で垂下する沈線と「ハ」の字状の沈線が施される。2は施文が雜である。

本址は出土遺物に乏しいが、1・2の出土を尊重してV期の住居址としたい。

第5号住居址（第34図）発掘区の中央部で、台地平坦面の頂部に位置する。グリッドは32-Sを中心とする。本址は、第12・33号住居址と重複関係にある。

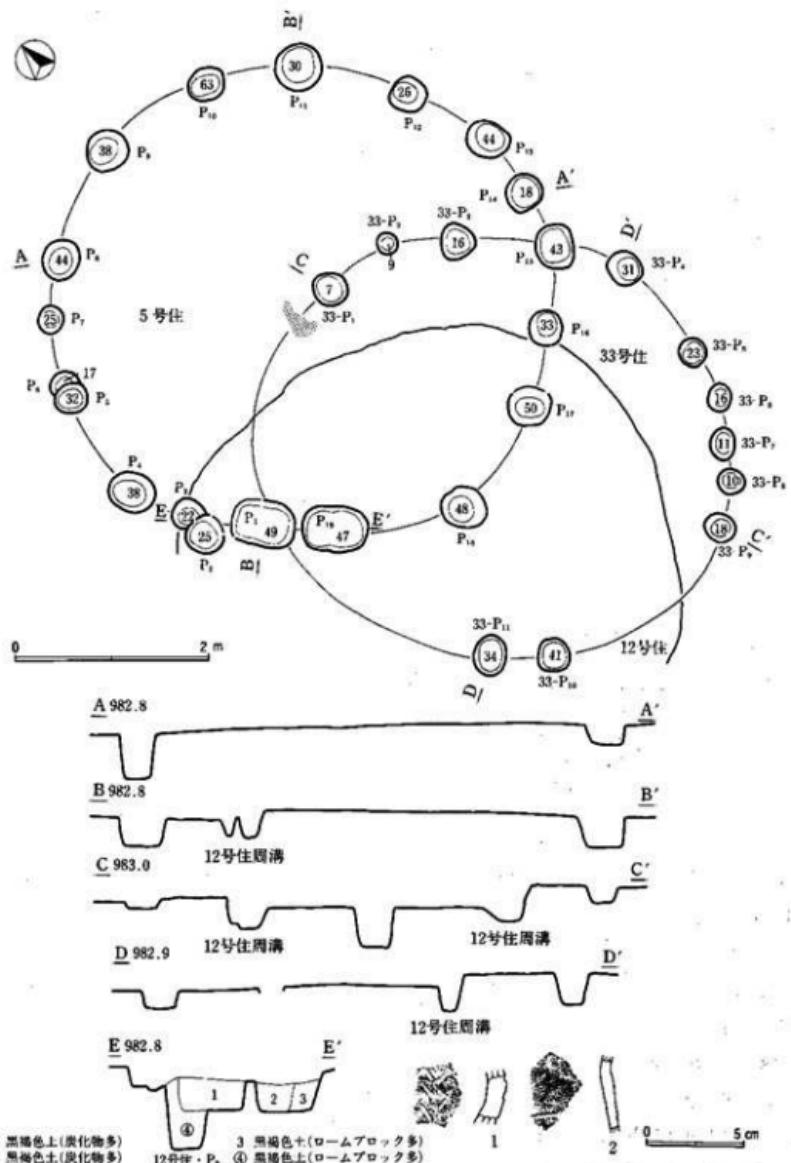
柱穴の配列は、出入口部分が直線的な円形を呈し、第2・36号住居址に類似する。その規模は柱穴の中心間で $5.1 \times 4.8\text{m}$ を測る。主軸は住居址のはば中央より検出された炉と、柱穴配置と柱穴規模より、P₁とP₁₉の間が出入口部と考えられたことで、軸方向を求めた。本址も長軸に直行する短軸が主軸である。主軸方向はN-43°-Eを示す。柱穴はP₁～P₁₉が本址に伴うものと考えられる。P₁～P₃とP₁₇～P₁₉の6本は、第12号住居址内に掘り込んでいる。出入口部はP₁とP₁₉で、この2基だけが隅丸長方形の平面形で、底面がダルマ形を呈している。底面のレベル差はないが、柱の建替えがなされたものと解釈される。出入口部の空間としてはP₁とP₁₉の間は狭く、一見すると人間の出入りが不可能と思えるが、柱のどちらかを片側に寄せることで出入りが可能となろう。出入口部の東脇に位置するP₁₈は、第12号住居址の石閉炉を壊して掘り込まれている。そのことからも、本址と第12号住居址との新旧関係は明らかである。P₁₅は、第33号住居址の柱穴を結べば接点となる位置にある。のために、本址に伴うものか第33号住居址に伴うものなのか、その判断に苦しんだ。第33号住居址の柱穴は、本址の柱穴に比べて総じて浅く、P₁₅の深さが43cmを測ること、第33号住居址の柱穴の平面規模が本址の柱穴に比べて小さいことから本址に伴う柱穴と考えた。遺構確認面からの柱穴の深さは、平均で36cmを測る。炉は主軸線上で、住居址の中央より若干出入口部に寄った位置にある。僅かに焼けた痕跡を留めるだけで、大半は削ってしまったものと考えられる。

出土遺物は、第34図に図示している2片のほか、無文の土器が数点得られたにすぎない。1はP₁₂から出土した曾利式系の土器で中期末に位置づけられる。2はP₁₁からの出土で、後期の土器とみられる。以上のように、出土遺物が少なく本址の時期を決定するまでには至らないが、後期とみられる土器が出土していることから、該期の住居址である可能性は高い。なお、第33号住居址との新旧関係は、両者ともに出土遺物に乏しく不明である。

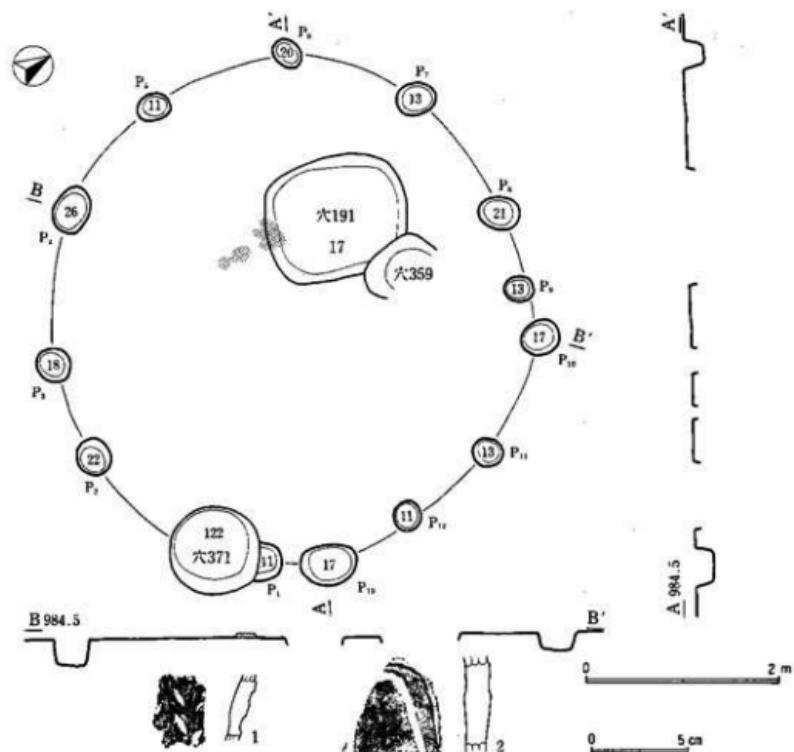
第33号住居址（第34図）33-Rグリッドを中心に検出された。第5・12号住居址と重複する。

本址の柱穴は全周しないため正確な平面形はつかめないが、確認された柱穴よりプランの大略を窺うことができる。それによると、柱穴配列は南北に長軸をもつ長円形を呈し、第1号住居址に類似する形態と考えられる。規模は $5.0 \times 4.5\text{m}$ 程度で、長軸方向はN-16°-Wを示すものと推測される。掘り込みの確認できなかった住居址で、主軸方向の明らかとなった住居址の多くは、長軸に直行する短軸が主軸である。のために、本址も長軸に直行する短軸が主軸となる可能性が高く、P₁₁の西側付近が出入口部になる可能性がある。柱穴はP₁～P₁₁が確認されている。P₁₀とP₁₁は第12号住居址に掘り込んでいる。それに続く柱穴があったのだろうが、掘り込みが浅いためか確認できなかった。遺構確認面からの柱穴の深さは、平均で20cmを測る。

出土した遺物がないため、本址の帰属時期は不明である。第12号住居址との新旧関係は、本址の柱穴が第12号住居址に掘り込んでいた事象より、本址が新しい住居址である。



第34図 第5・33号住址 (1/60)・出土土器 (1/3)

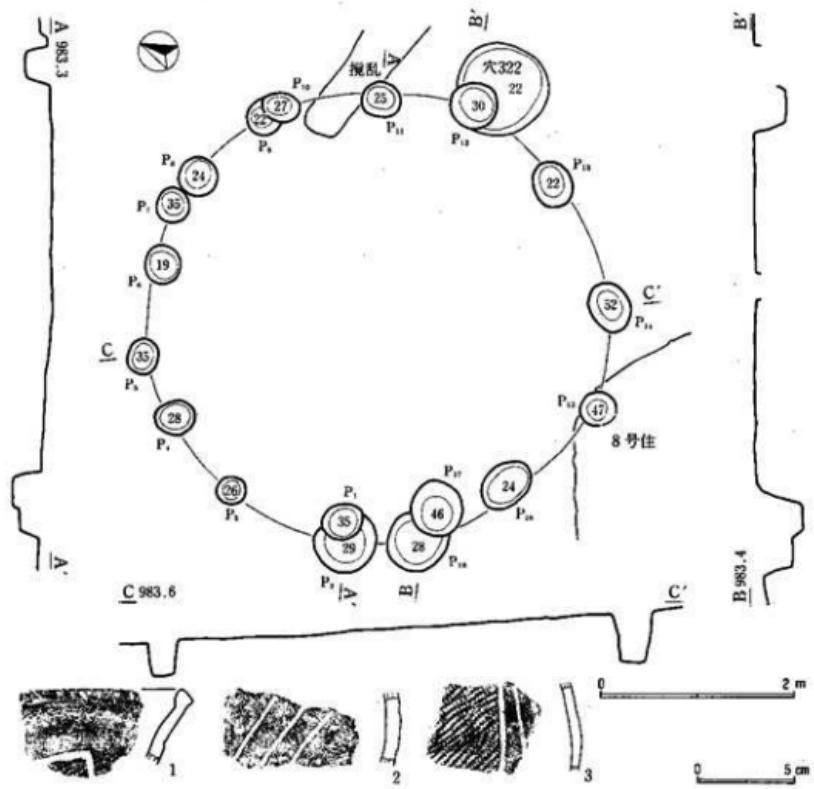


第35図 第30号住居址 (1/60)・出土土器 (1/3)

第30号住居址(第35図)発掘区の東隅で、台地平坦面の頂部付近に位置する。グリッドは55-56-Tを中心とする。第12・13号方形柱穴列と重複し、出土した遺物より本址が古い遺構である。

柱穴配列は円形を呈し、規模は柱穴の中心間で $5.2 \times 5.0\text{m}$ を測る。主軸は、検出された柱穴の配置と炉の位置より求めた。主軸が短軸と同一となる住居址の多いなかで、本址の主軸は長軸と同じである。主軸方向は、S-66°-Eを示す。柱穴はP₁~P₂₆で、出入口部を除く柱穴どうしの間隔が、ほかの同タイプの住居址に比べて広い。柱穴の深さは総じて浅く、確認面からの深さの平均は16cmを測る。出入口部は柱穴の平面規模と位置関係より、P₁とP₁₃の間とみられる。炉は住居址の中央より奥で、主軸線上より僅かに北へ寄った位置にある。炉が穴191と重複する。穴191の上部より、炉が検出されたことから本址が新しい。

出土遺物は、第35図に図示している。1はP₁、2は炉からの出土で中期最終末期の土器とみられる。本址は出土した遺物と他遺構との重複関係より、V期の住居址と考えられる。



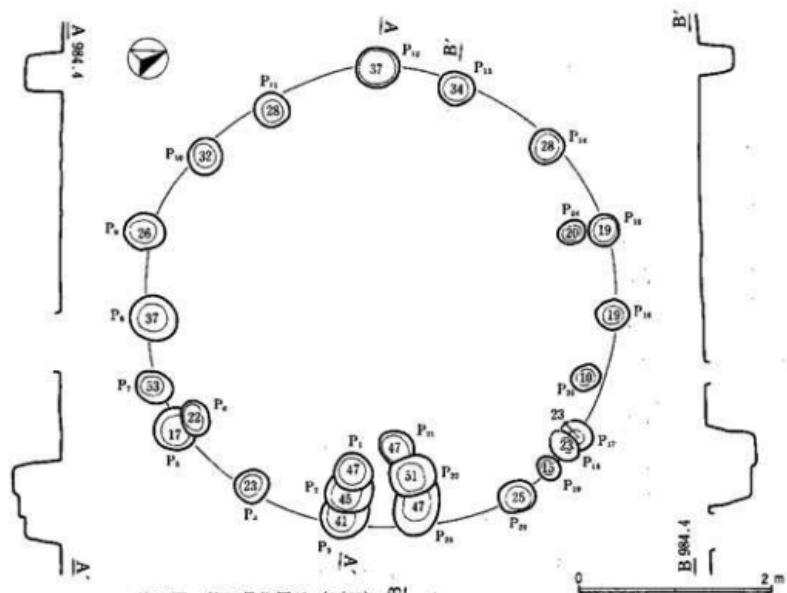
第36図 第31号住居址 (1/60)・出土土器 (1/3)

第31号住居址（第36図）発掘区の北東隅で、44—あぐリッドを中心とした位置に構築されている。本址のP₁₈は、第8号住居址の北西コーナーに掘り込まれている。

柱穴の配列は円形を呈し、その規模は柱穴の中心間で4.8×4.7mを測る。本址の主軸も長軸に直行する短軸である。主軸方向はN-65°-Eを示す。柱穴はP₁～P₁₈が検出された。出入口部に位置するP₁・P₂とP₁₇・P₁₈とは、柱穴の重なり方が良く似ている。遺構確認面からの柱穴の深さは、平均で30cmを測る。本址は炉を有していたであろうが、確認することはできなかった。そのことからも、床が確認面より高い位置に設けられていたことが窺える。

出土遺物は、第36図に図示している。1はP₁₈からの出土で、称名寺式期に比定される土器の口縁部である。2はP₂、3はP₁₈の出土で、堀之内I式期に位置づけられる土器片であろう。

本址の出土遺物には時期差がみられる。そのために幅をもたせたⅦ期の時期を与えておきたい。



第37図 第34号住居址 (1/60)

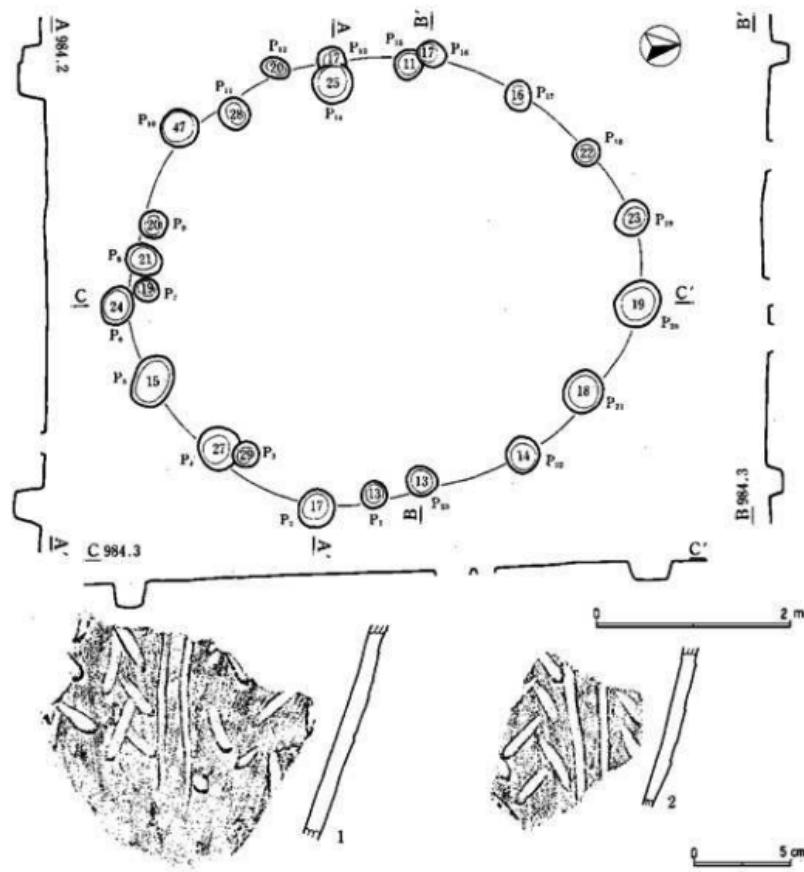
第34号住居址 (第37・38図) 台地平坦面の頂部に占地する。グリッドは55-Nを中心とする。

柱穴の配列は出入口部が直線的な円形を呈し、規模は柱穴の中心間で4.8×4.6mを測る。本址の主軸も長軸と直行する短軸である。主軸方向はS-70°-Eである。柱穴はP₁～P₂₃が本址に伴うものと考えられるが、P₂₄・P₂₅もその位置より本址に伴う可能性がある。出入口部はP₁・P₂・P₃とP₂₁・P₂₂・P₂₃との間とみられる。6本の平均的深さは46cmを測る。6本を除く柱穴の、遺構確認面からの深さは平均で26cmを測る。なお、本址の炉は検出されなかった。

出土遺物は、第38図に図示している。1・5はP₂、2はP₂₃、3・4は同一個体の破片でP₁からの出土である。1はかすかな沈線と列点文が施されている。1・3・4・5は称名寺式期でも新しい様相が窺える。本址は、出土した遺物よりVI期の住居址と考えられる。



第38図 第34号住居址出土土器 (1/3)



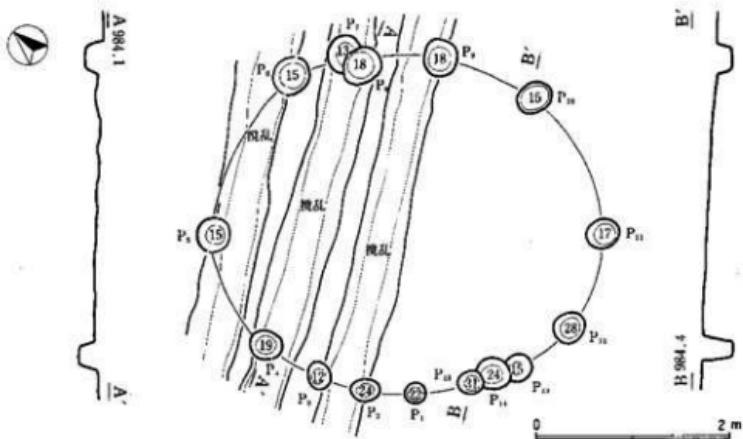
第39図 第35号住居址 (1/60)・出土土器 (1/3)

第35号住居址(第39図)発掘区の南東隅で、54-Jグリッドを中心とする位置に構築されている。

柱穴の配列は長円形を呈し、規模は柱穴の中心間で5.3×4.6mを測る。本址の主軸は判然とせず、長軸方向はN-84°-Eを示す。柱穴は、P₁～P₂₇が本址に伴うものと考えられる。P₁₆以外は総じて浅く、平均の深さは20cmを測る。炉は確認されておらず、柱穴の深いことも考え合わせれば、本址の床は遺構確認面よりもかなり高い位置に存在していたことが考えられる。

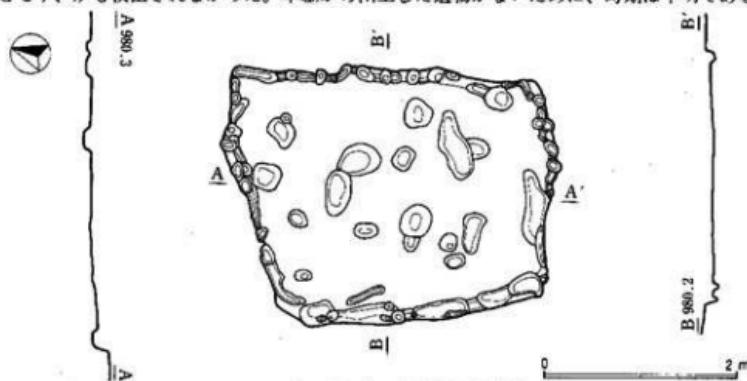
第39図に出土した遺物を図示している。1・2は同一個体の土器片で、P₄から出土している。沈線による区画内に「ハ」の字状の沈線が雑に施文される。中期最終末期に位置づけられよう。

本址は、出土した遺物よりV期に帰属する住居址とみられる。



第40図 第37号住居址 (1/60)

第37号住居址（第40図）56-Z グリッドを中心とする。西側には近・現代の溝があり、幾つかの柱穴が壊されている。柱穴の配列は長円形を呈し、規模は柱穴の中心間で4.1×3.5mを測る。長軸方向はN-57°-Eである。柱穴はP₁～P₁₅が本址に伴うものと考えられる。柱穴は総じて浅く、平均で19cmを測る。なお、P₁₁とP₁₂間からは、第16号焼土址が検出された。出入口部は判然とせず、炉も検出されなかった。本址から出土した遺物がないために、時期は不明である。



第41図 第32号住居址 (1/60)

第32号住居址（第41図）発掘区の北西隅で、6-Z グリッドを中心としている。平面形は北西コーナーが張り出す長方形を呈し、規模は3.2×2.6mを測る。長軸方向はN-73°-Wを示す。壁の立上りは不明瞭で、壁下には小穴を伴う浅い溝がある。床は凹凸が激しいが、全体的に堅硬である。床には幾つかの凹みがある。しかし柱穴と言えるものはない。また炉も検出されなかった。

出土した遺物がなく時期の特定はできないが、形態より縄文時代の住居址となる可能性がある。

(2) 方形柱穴列

第1号方形柱穴列（第42図）発掘区の北東隅で、49-い・うグリッドを中心とする位置に構築されている。北側には近・現代の溝があり、P₁とP₂は溝の中より検出された。

本址の平面形は長方形を呈する。規模は柱穴の中心間で、長辺となる東辺が5.15m、西辺が5.1m、南辺が2.9m、北辺が3.1mを測る。面積は16.4m²を測る。北東から南西方向に長軸をもち、長軸方向はN-40°-Eを示す。柱穴はP₁～P₆の6本で構成される。東辺の柱穴は、配列が直線であるのに対して、西辺ではP₆が外側へ突き出る乱れた配列を示す。柱穴の形態には、楕円形と円形に近い2タイプがある。P₁は、平面形と底面形が楕円形を呈している。P₄は平面形が不整な円形を呈するが、底面形は楕円形を呈している。そのために、楕円形を意識して掘られたものと考えられる。P₂・P₃・P₅・P₆は円形に近い平面・底面形を呈する柱穴である。確認面からの柱穴の深さは、最も深いP₄で88cm、最も浅いP₁で59cmを測る。6本の平均の深さは70cmを測る。P₃～P₅では、平面と断面で柱痕を確認することができた。P₂は、焼土ブロックを含む暗褐色土で、一気に埋められた状態であった。

出土した遺物は、第42図に図示している。1はP₂、2・3はP₄、4はP₅からの出土である。1は平行する沈線が曲線的に施文される。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。4は称名寺式期から壇之内I式期に位置づけられる土器とみられる。

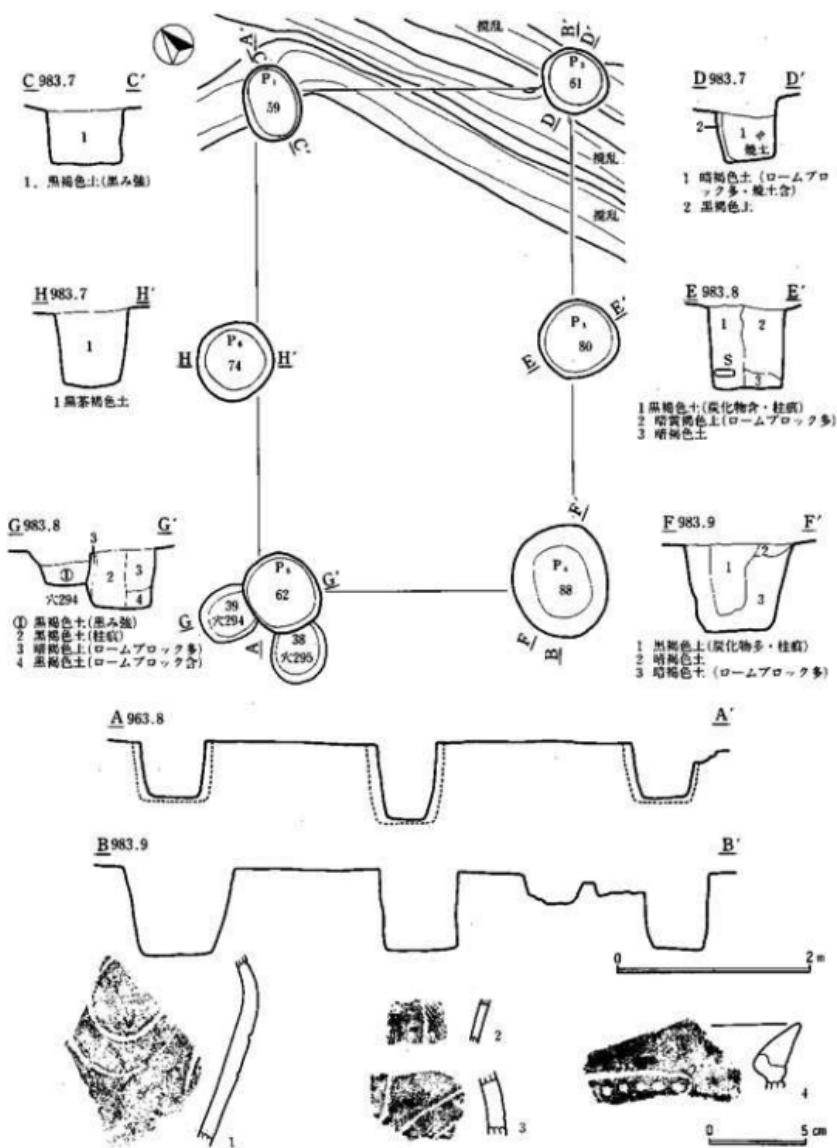
本址は出土した遺物より、VII期に帰属する遺構と考えられる。

第2号方形柱穴列（第43図）発掘区の東側で、台地平坦面の頂部に占地する。グリッドでは57-O・Pを中心とする。本址の北から西にかけて、第7・30・34号住居址、第12・13号方形柱穴列が隣接している。

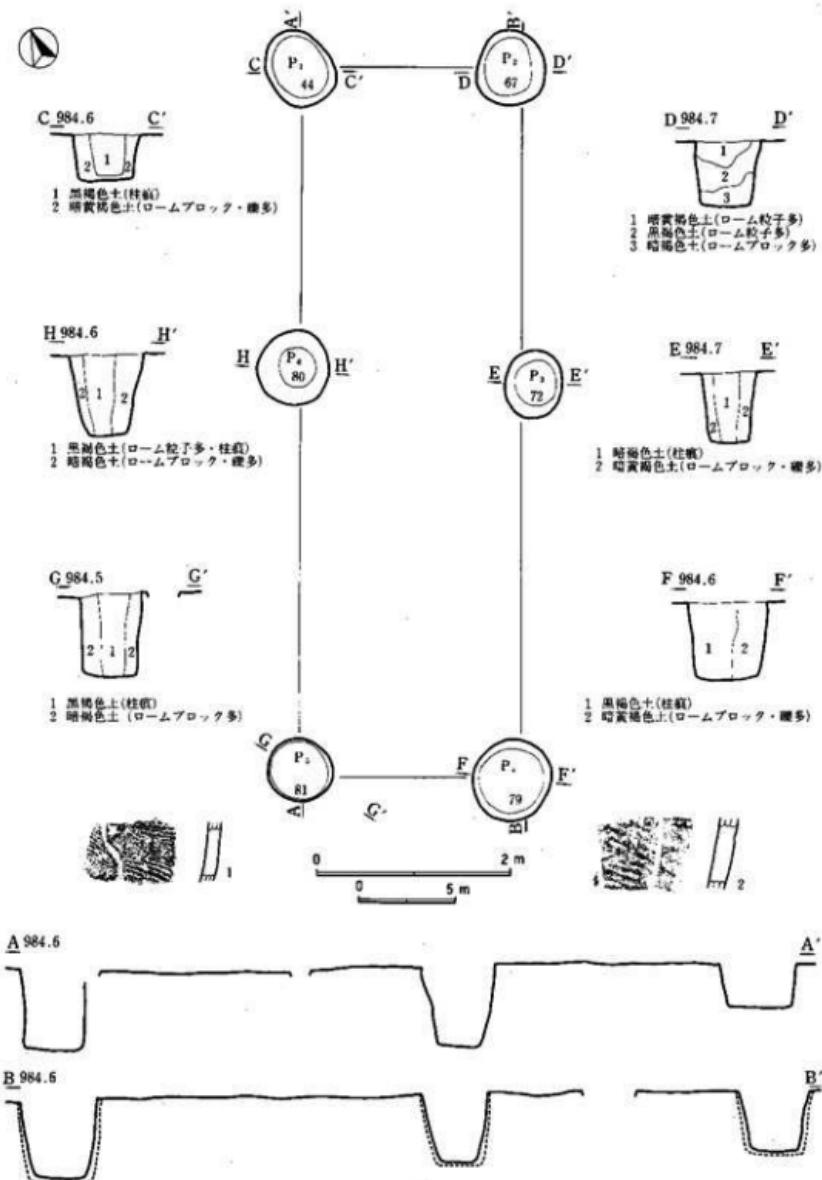
平面形は、長辺と短辺との差が大きな長方形を呈する。規模は柱穴の中心間で、東辺が7.35m、西辺が7.25m、南辺が2.2m、北辺が2.15mを測る。長辺は短辺の約3倍となる。本遺跡から検出された方形柱穴列の中で、このような形態を呈するものとして第8・9号方形柱穴列を挙げることができる。面積は17.0m²を測る。南北方向に長軸をもち、長軸方向はN-23°-Eを示す。本址を構成する柱穴は、P₁～P₆の6本である。柱穴の間隔は、P₁・P₂とP₂・P₃の間隔がP₁・P₂とP₃・P₄との間隔に比べて狭いことが指摘される。掘方は良好で、断面は円筒形を呈している。その中でもP₅は直に近い壁を有する。深さはP₁が44cmとほかの柱穴に比べて極端に浅く、最も深いP₅との差は37cmを測る。柱穴の平均の深さは70cmである。P₁とP₃～P₆の調査では、断面で柱痕を確認することができた。P₂は3層に分層でき、いずれの層もローム粒子・ブロックを多く含む土で人为的に埋められている状態であった。

出土した遺物は少なく、時期の判る土器は第43図1・2の2片である。1はP₁、2はP₅からの出土である。1は曾利式系の土器で、櫛状工具による条線が施文された後に、垂下する蛇行沈線が施文される。2は加曾利E式系の土器で、浅い沈線間に縄文が施される。

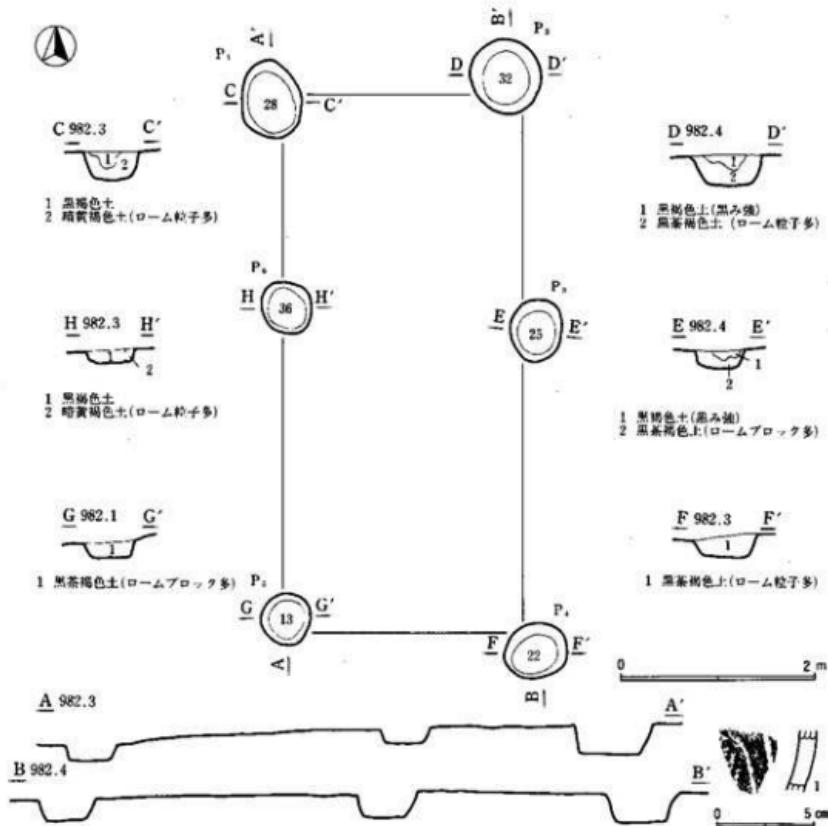
本址は出土した遺物より、IV期の遺構とみておきたい。



第42図 第1号方形柱穴列 (1/60)・出土土器 (1/3)



第43図 第2号方形柱穴列 (1/60)・出土土器 (1/3)



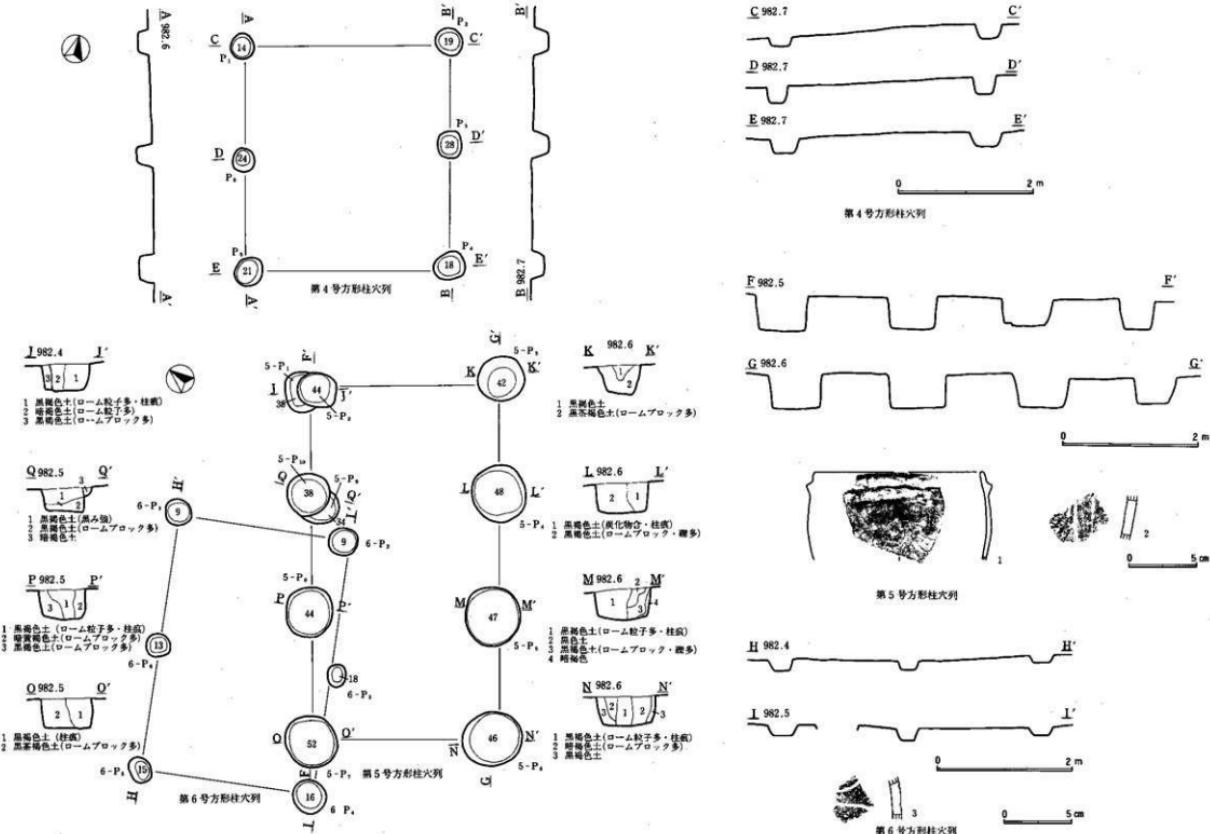
第44図 第3号方形柱穴列(1/60)・出土土器(1/3)

第3号方形柱穴列(第44図)発掘区の南側で、西に傾斜する地形に構築されている。

平面形は歪んだ長方形を呈する。規模は柱穴の中心間で、東辺が5.9m、西辺が5.35m、南辺が2.55m、北辺が2.45mを測り、東辺が西辺に比べて55cm長い。面積は14.0m²を測る。南北方向に長軸をもち、長軸方向はN-2°-Wを示す。柱穴はP₁～P₆である。柱穴の間隔は第2号方形柱穴列と同様に、P₁・P₆とP₂・P₃の間隔がP₄・P₅とP₃・P₄との間隔に比べて短い。P₁・P₆とP₄・P₅とは110cmの差がみられる。柱穴の深さは総じて浅く、平均で26cmを測る。

出土した遺物の中で土器で判るものは、P₅から出土した土器1点である(第44図1)。加曾利E式系の土器で、浅い曲線的な沈線と網文が施文されている。

出土遺物に恵まれず時期の決定は非常に厳しいが、IV期に帰属する遺構とみておきたい。



第45図 第4・5・6号方形柱穴列 (1/60)・出土土器 (1は1/6, 2・3は1/3)

第4号方形柱穴列（第45図）32-Lグリッドを中心とする位置に構築されている。

平面形は、長辺と短辺との差がほとんどない方形を呈する。規模は柱穴の中心間で、東辺3.3m、西辺3.35m、南辺3.0m、北辺3.05mを測る。本址のような方形を呈する同様の遺構として、第11号方形柱穴列が挙げられる。面積は10.5m²を測る。長軸方向はN-16°-Wを示す。柱穴はP₁～P₆である。柱穴の規模は小さく、深さも統じて浅い。遺構確認面からの深さは、平均で20cmを測る。本址からの出土遺物は皆無である。そのために帰属時期は不明である。

第5号方形柱穴列（第45図）発掘区のほぼ中央部で、台地平坦面の頂部に構築される。第6号方形柱穴列と重複し、東には第5・12・33号住居址が隣接する。30-Tグリッドを中心とする。

平面形は長方形を呈し、規模は柱穴の中心間で、長辺となる南辺が5.25m、北辺が5.2m、東辺が2.8m、西辺が2.7mを測る。面積は13.5m²を測る。北東から南西方向に長軸をもち、その方向はN-48°-Eを示す。本址の柱穴は、P₁～P₁₀が確認された。しかし、P₁・P₂とP₉・P₁₀は同一地点での重複を示すことから、8本柱の構成である。8本の柱穴で構成される方形柱穴列には第15号方形柱穴列があるが、棟持柱を有する点で本址とは異なっている。掘方の断面形は円筒形を呈し、壁が直に近い立上りを示す。柱穴配列は乱れることなく整然としている。P₁・P₂とP₉・P₁₀では平面形と深さより、柱の建替えがなされたと考えられる。それ以外の柱穴では、建替えの有無を確認するまでには至らなかった。柱穴の半裁調査では、P₁とP₂、P₄～P₈で柱痕を確認している。遺構確認面からの柱穴の深さは、平均で43cmを測る。

出土した遺物は第45図の1・2である。1はP₁₀、2はP₇から出土している。1は口縁が内曲し、胴部が張り出す器形を呈する。口縁下に断面が三角形の隆帯が一条巡る。これは中期最終末期に位置づけられよう。2は加曾利E式系の土器で、緩やかな曲線状の沈線と繩文が施される。

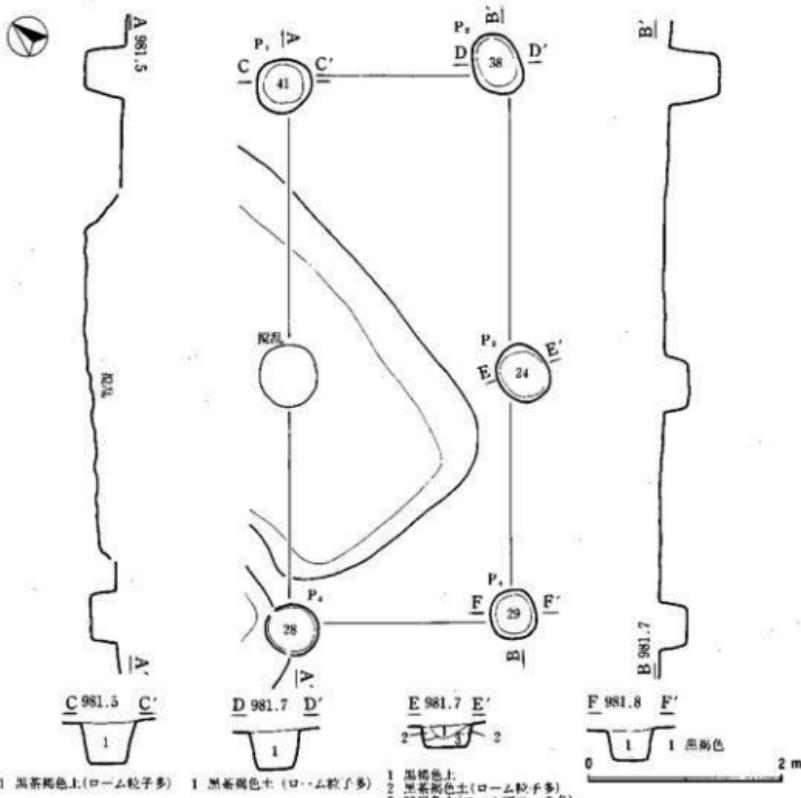
本址は出土した遺物より、V期に帰属する遺構とみておきたい。

第6号方形柱穴列（第45図）発掘区のほぼ中央部、台地平坦面の頂部に位置し、28-Tグリッドを中心として検出された。本址の東側は第5号方形柱穴列と重複する。

平面形は長方形を呈し、規模は柱穴の中心間で、長辺となる南辺が3.8m、北辺が3.85m、東・西辺が2.45mを測る。面積は9.5m²を測る。第5号方形柱穴列と同様に、北東から南西方向に長軸をもつ。長軸方向はN-57°-Eを示す。柱穴はP₁～P₆である。柱穴の配列をみると、西辺では直線上にのる整然とした配列を示すが、東辺では中央に位置するP₃が若干外側に出る乱れた配列を示す。遺構確認面からの柱穴の深さは統じて浅い。平均で13cmを測る。

本址から出土した土器で、時期の判るものはP₂から出土した1土器片である（第45図3）。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。刻みの深い曲線的な沈線が施文される。摩耗が激しく繩文が施文されていたかは不明である。称名寺式期に比定される土器と考えられる。

時期の判る土器が1片しかなく、本址の帰属時期を明確にすることはできないが、VI期の可能性がある遺構と考えたい。

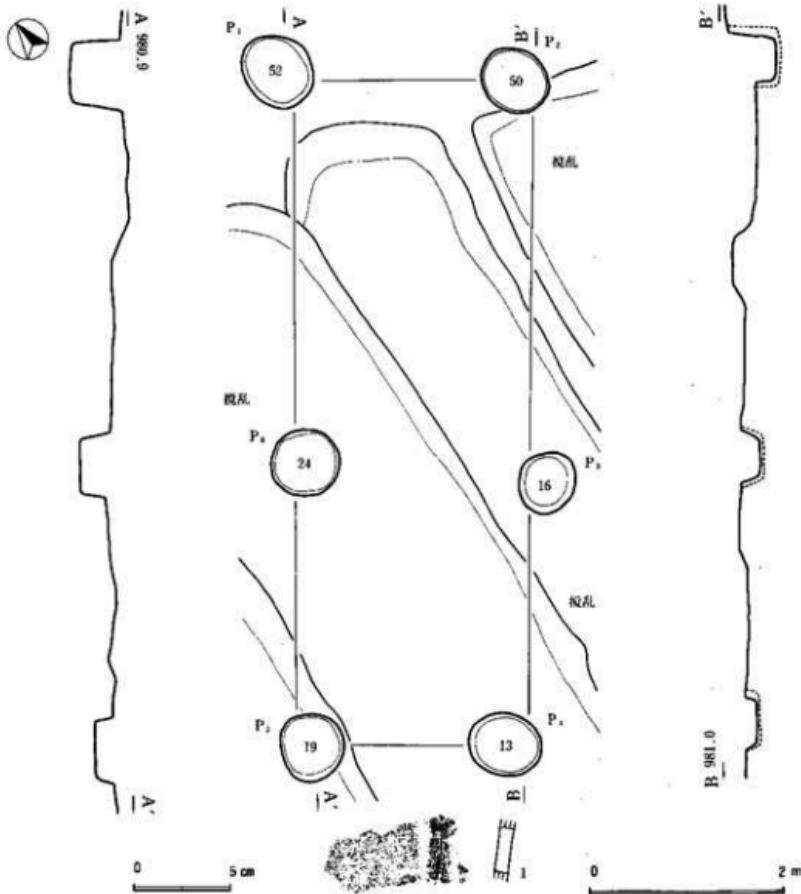


第46図 第7号方形柱穴列 (1/60)

第7号方形柱穴列 (第46図) 発掘区の北側で、21-X・Yグリッドを中心とする位置から検出された。北西には第8号方形柱穴列が位置する。また本址の西側には、後世の搅乱が入る。

平面形は、西辺中央の柱穴を搅乱により失っているが、長方形を呈するものと考えられる。規模は柱穴の中心間で、長辺となる南辺が5.7m、北辺が5.65m、東辺が2.2m、西辺が2.25mを測る。面積は13.0m²を測る。北東から南西方向に長軸をもち、長軸方向はN-51°-Eを示す。柱穴はP₁～P₅が検出されている。搅乱によりP₄とすべき柱穴を失い、P₅も西側半分が壊されている。東辺の柱穴配列は、中央のP₃がやや外側へ出ている。柱穴の間隔は、P₂・P₃とP₃・P₄では後者か80cm短い。このような現象は、第2・3・8号方形柱穴列でもみられている。遺構確認面からの柱穴の深さは、平均で32cmを測る。なお、柱痕の確認された柱穴はなかった。

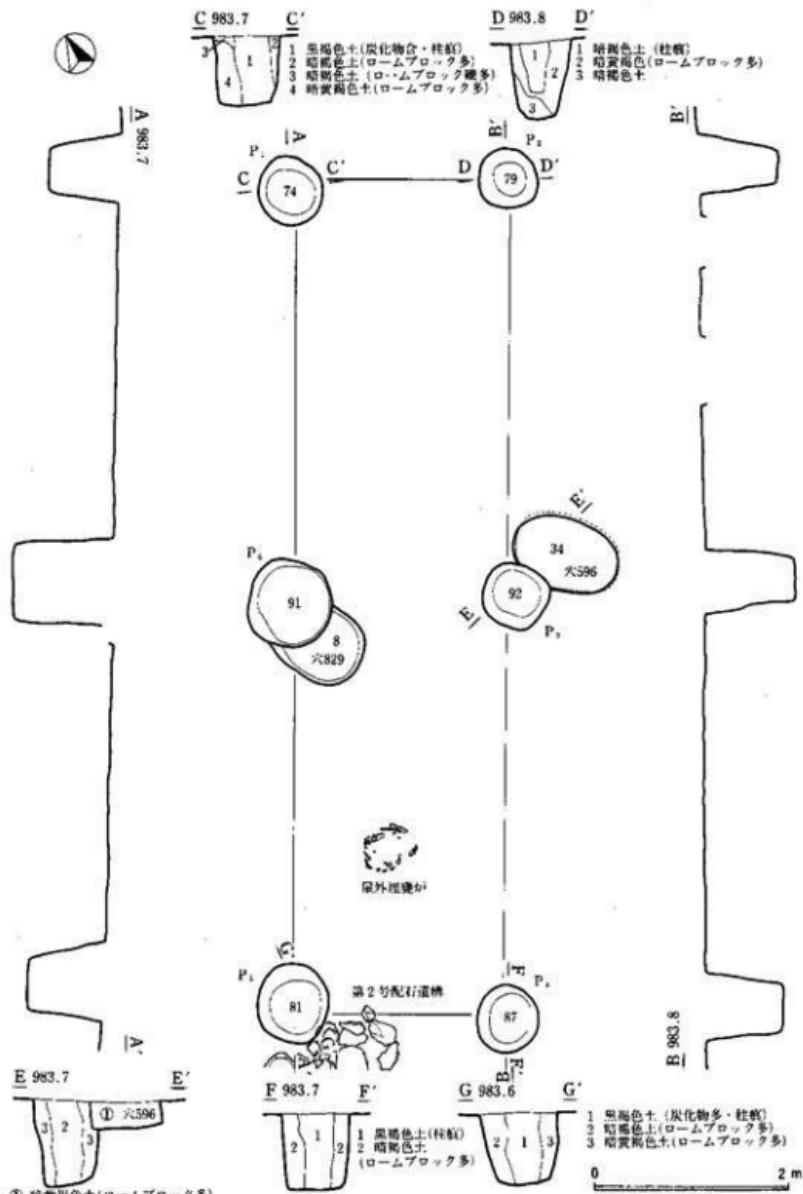
柱穴内から出土した遺物がないため、本址の帰属時期は不明である。



第47図 第8号方形柱穴列(1/60)・出土土器(1/3)

第8号方形柱穴列(第47図)発掘区の北側で、12-あ・いグリッドを中心に検出された。

平面形は長方形を呈し、規模は柱穴の中心間で、東辺6.8m、西辺7.0m、南辺2.0m、北辺2.4mを測る。面積は17.0m²である。長軸方向はN-38°-Eを示す。柱穴はP₁～P₆で、P₃～P₆は搅乱内からの検出である。そのためにP₃～P₆の深さは総じて浅い。柱穴の間隔は、P₂・P₃とP₁・P₂がP₃・P₄とP₅・P₆に比べて、後者が130cm程短い。柱穴配列はP₁とP₃が外側に出ている。出土した土器は、P₅の底面より出土した第47図1の1片である。低隆帯をもち、地文は摩耗のためか見受けられない。曾利IV式期に比定されよう。1片の土器で遺構の時期を決めるのは困難であるが、III期に帰属する遺構と考えておきたい。



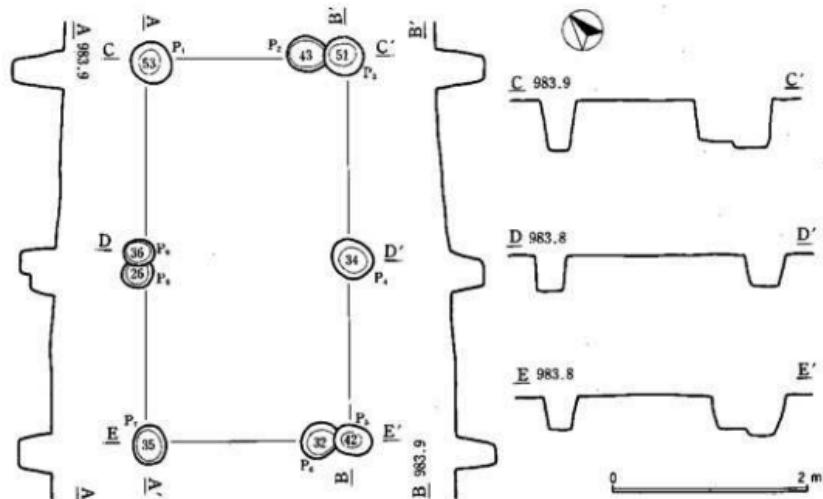
第48図 第9号方形柱穴列 (1/60)

第9号方形柱穴列（第48図）発掘区の南東側で、西に傾斜する地形に構築されている。P₅は穴596、P₆は第2号配石遺構、P₇は穴829と重複する。遺構内から屋外埋甕炉が検出されている。

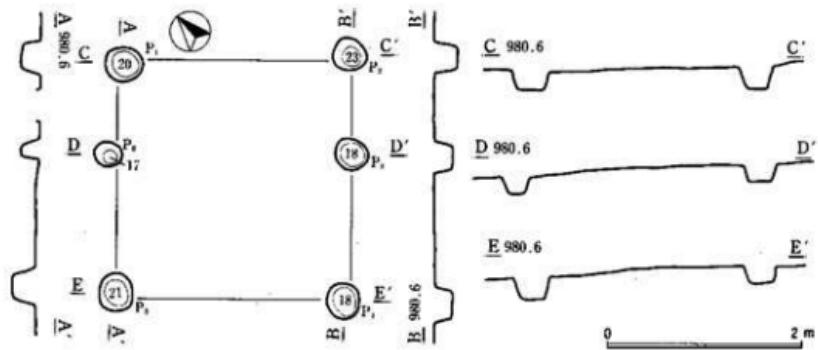
平面形は17基の中でも、長辺と短辺との差が最も大きな長方形を呈する。さらに長辺の長さが最も長い方形柱穴列である。規模は東辺8.55m、西辺が8.35m、南辺が2.2m、北辺が2.25mで、面積は18.9m²を測る。南北方向に長軸をもち、その方向はN-27°-Eを示す。柱穴はP₁～P₇で、規則正しく配される。P₆の掘方は、ほかの柱穴に比べてひと回り大きい。6本の深さの平均は、84cmを測る。柱穴の幾つかは、他遺構と重複している。まずP₁と穴596、P₆と穴829は、遺構断面でP₅とP₆が古いことを確認している。P₅と第2号配石遺構は、P₅を確認した面で第2号配石遺構の掘方が確認されたことよりP₅が古くなろう。また遺構内の南より検出された屋外埋甕炉は、調査の段階では別の遺構としていたが、位置的にみると本址に伴う可能性もある。そうなると本址はIII期の遺構となる。しかし、位置的な関係以外に両者の関連性を積極的に評価する所見は得られていない。そのため、現段階ではVI期の遺構である第2号配石遺構よりも古い時期の遺構であるとしか言いようがない。

第10号方形柱穴列（第49図）発掘区の南側で、50-H・Iグリッドを中心とする。東から西にかけて、第35号住居址、第14・17・9号方形柱穴列、屋外埋甕炉、第2号配石遺構が隣接する。

平面形は長方形を呈し、規模は外側柱穴の中心間で、長辺となる南・北辺が3.95m、東辺が2.0m、西辺が2.1mで、面積は8.4m²を測る。長軸は北東から南西方向で、N-53°-Eを示す。柱穴はP₁～P₆が検出されたが、基本的には6本の構成である。いずれも掘方の良好な柱穴で、確認面からの深さは平均で39cmを測る。出土遺物がないために、本址の時期は不明である。



第49図 第10号方形柱穴列 (1/60)



第50図 第11号方形柱穴列 (1/60)

第11号方形柱穴列(第50図)発掘区の西側で、9-Sグリッドを中心に検出された。

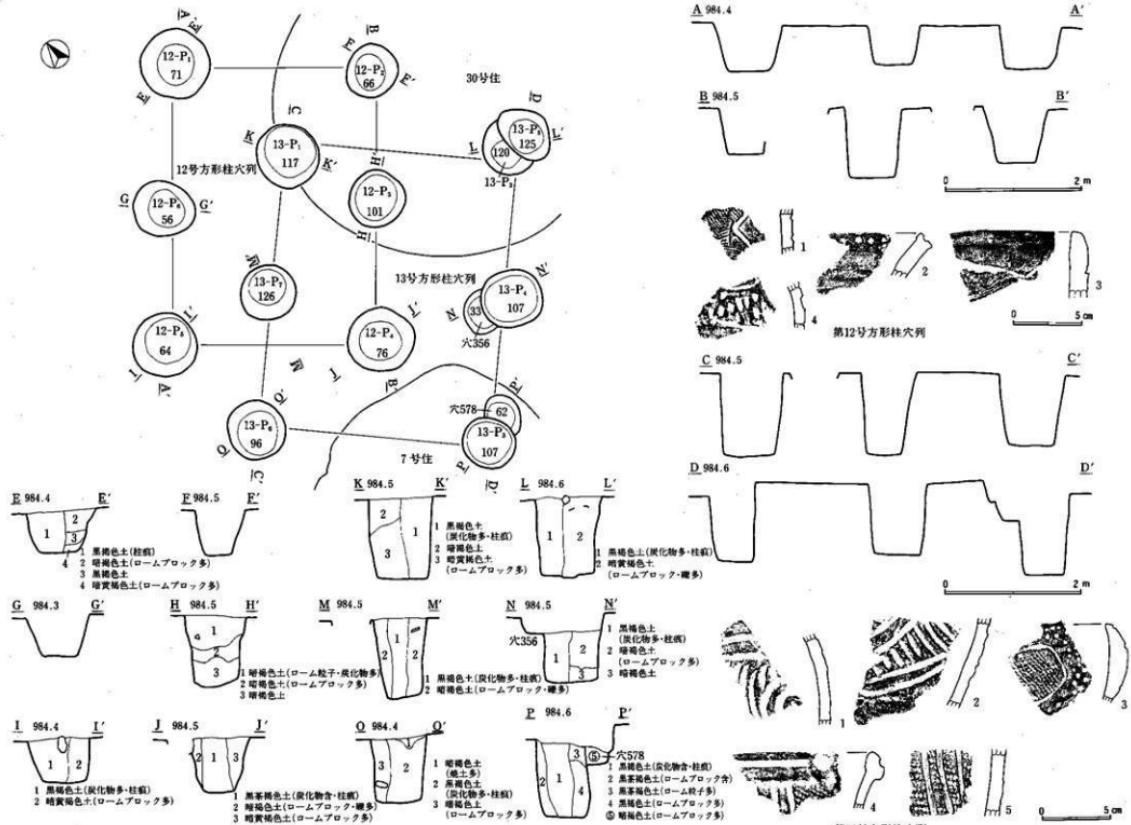
平面形は、長辺と短辺の差がほとんどない方形を呈する。規模は柱穴の中心間で、長辺となる東辺が2.55m、西辺が2.35m、南・北辺が2.3mを測る。面積は6.0m²を測り、検出された方形柱穴列の中で平面規模が最も小さい。長軸方向はN-42°-Eを示す。柱穴はP₁～P₆である。本址は第4号方形柱穴列と平面形が類似し柱穴数も同じである。しかし長辺の柱穴間隔が、P₁・P₄とP₂・P₃がP₆・P₅とP₃・P₄に比べて後者が約50cm長いことを指摘でき、この点が第4号方形柱穴列と異なる。柱穴の深さは平均で19cmを測る。出土遺物はなく本址の時期は不明である。

第12号方形柱穴列(第51図)発掘区の東側で、54-Tグリッドを中心に検出された。台地平坦面の頂部付近への占地である。本址は第30号住居址、第13号方形柱穴列と重複し、前者とは本址が新しく、後者とは本址が古いことを確認している。

平面形は、長辺と短辺との差が1m程の長方形を呈する。規模は柱穴の中心間で、長辺となる南辺が4.0m、北辺が4.05m、東辺が2.9m、西辺が3.1mを測る。面積は13.0m²を測る。長軸方向は、後述する第13号方形柱穴列とほぼ同方向である。北東から南西方向に軸をもち、N-64°-Eを示す。柱穴はP₁～P₆で、規則的に配列している。遺構確認面からの深さは、P₃が最も深く101cmを測り、ほかの柱穴とP₃では25～45cmの差が認められる。6本の平均の深さは72cmである。柱穴の半截では、P₁・P₂・P₄・P₅で柱痕を確認している。またP₃・P₆は人為的に埋められたとみられる覆土の状態であった。

出土遺物は第51図に図示している。1はP₆、2・3はP₃、4はP₅からの出土である。1は繩文を施した後に、屈曲する深い沈線を施文している。2は外反する口縁で、口唇部に円形の刺突がなされる。称名寺式期の最終末から堀之内I式期の古い段階に位置づけられよう。3は棒状工具による沈線が「X」字状に施文される。4は色調が赤みの強い黒褐色を呈し、焼成は良好である。表面は研磨されてツヤがある。沈線区画内には棒状工具による直に近い刺突がなされる。

本址は出土した遺物より、VII期に帰属する遺構と考えられる。



第51図 第12・13号方形柱穴列 (1/60)・出土土器 (1/3)

第13号方形柱穴列（第51図）発掘区の東側で、台地平坦面の頂部付近への占地である。54-Sグリッドを中心に検出された。本址は第7・30号住居址、第13号方形柱穴列と重複する。各遺構との新旧関係は出土した遺物より、いずれに対しても本址が新しい遺構と考えられる。

平面形は、長辺と短辺との差が1m程の長方形を呈する。規模は柱穴の中心間で、長辺となる南辺が4.3m、北辺が4.2mで、短辺となる東辺が3.25m、西辺が3.45mを測る。面積は14.7m²を測る。以上より本址の平面規模は、第12号方形柱穴列とほぼ同じであることを指摘できる。長軸は、第12号方形柱穴列とほぼ同方向の北東から南西方向に軸をもつ。長軸方向はN-69°-Eを示す。柱穴はP₁～P₇である。P₂とP₃は同一地点で建替えがなされたとみられ、深さに5cmの差があるダルマ形を呈している。そのため、基本的には6本柱からなる構成である。柱穴はP₂とP₃がやや東へ張り出すほかは、規則的に配されている。柱穴の断面形は円筒形を呈し、壁が直に近い立ち上がりを示す。確認面からの深さは平均で114cmを測り、17基の中では最も深い掘方をもつ。柱穴の半截により、すべての柱穴で柱痕を確認している。

出土した遺物は、第51図に図示している。1と2はP₄、3はP₂、4はP₇、5はP₆からの出土である。1と2は同一個体の破片で、堀之内I式期に比定される。1は胴部の上半部で、二条の横位沈線の下に円形の沈線と曲線的な沈線が施される。2は胴下半部で、二条の斜位沈線区画内に、直行する斜位の沈線が施される。太くて浅い沈線である。3は波状口縁を呈する土器片で、円形刺突と沈線による区画内に繩文が充填される。4は外反する口縁上部に凸形の穴と一条の太い沈線が施される。その下に垂下沈線が施され、その後に繩文を充填している。

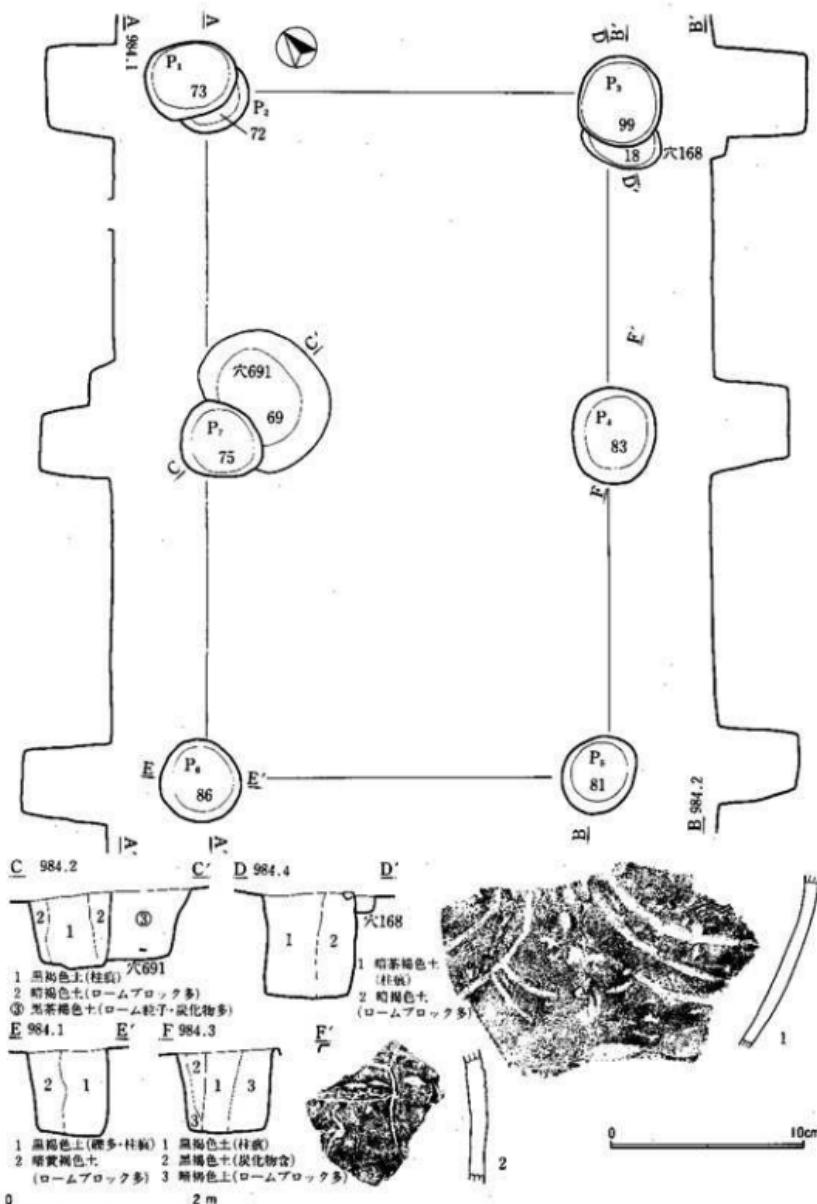
本址は、出土した遺物よりVII期に帰属する遺構とみられる。

第14号方形柱穴列（第52図）発掘区の南東側で、51-M・Nグリッドを中心に検出された。本址の周辺には第7・34・35号住居址、第17号方形柱穴列が構築されている。

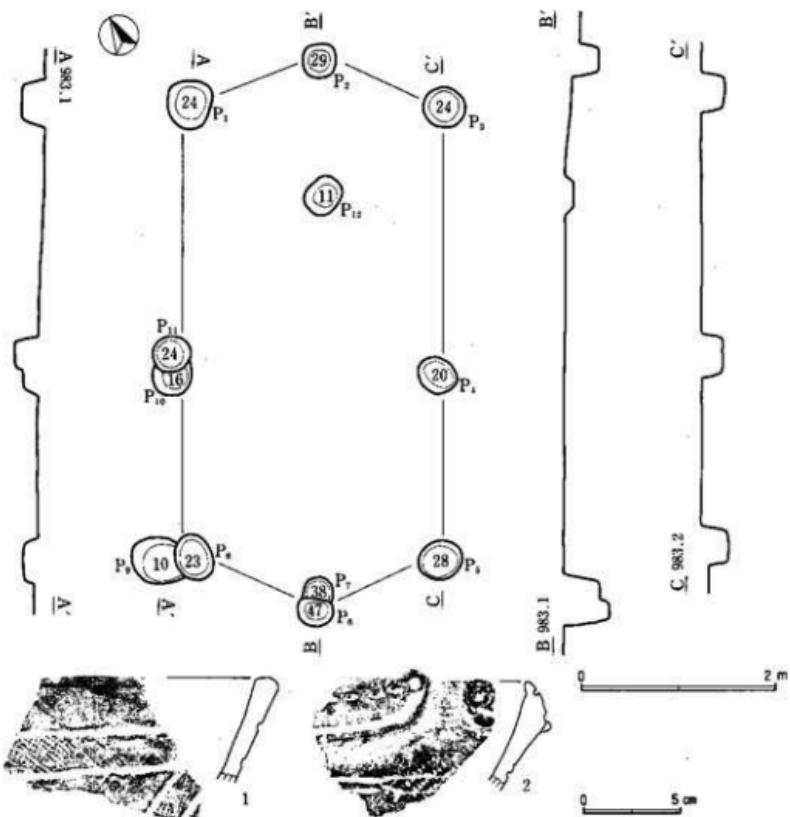
平面形は、長辺である西辺と短辺となる北辺が僅かに長い長方形を呈する。規模は柱穴の中心間で、東辺が6.95m、西辺が7.25m、南辺が4.1m、北辺が4.3mを測る。面積は29.8m²を測り、17基の中で平面規模が最も大きい。北東から南西方向に軸をもち、長軸方向はN-39°-Eを示す。柱穴はP₁～P₇である。P₁とP₂は同一地点での建替えとみられることから、6本柱による構成である。配列は、P₁が若干北へ張り出すほかは規則的である。掘方の断面形は円筒形を呈し、深さの平均は遺構確認面から75cmを測る。柱穴の半截では、P₂～P₄とP₆・P₇で柱痕を確認している。なお、P₂の柱痕下には粘土の堆積が確認された。

出土した遺物は、第52図に図示している。1はP₃、2はP₁からの出土である。1は胴下半でも底部に近い部分である。三条の相対する沈線間をつなぐかのように、二条の沈線が施文される。三条の相対する沈線間には列点文が、上部には僅かな繩文が見られる。称名寺式期の最終末から堀之内I式期でも古い段階の土器とみられる。2は二条の雑な沈線が鉤の手状に施文される。その間と外側には、横位の列点文がみられる。

本址は出土遺物に乏しいが、図示した土器よりVII期の遺構と考えたい。



第52図 第14号方形柱穴列 (1/60)・出土土器 (1/3)

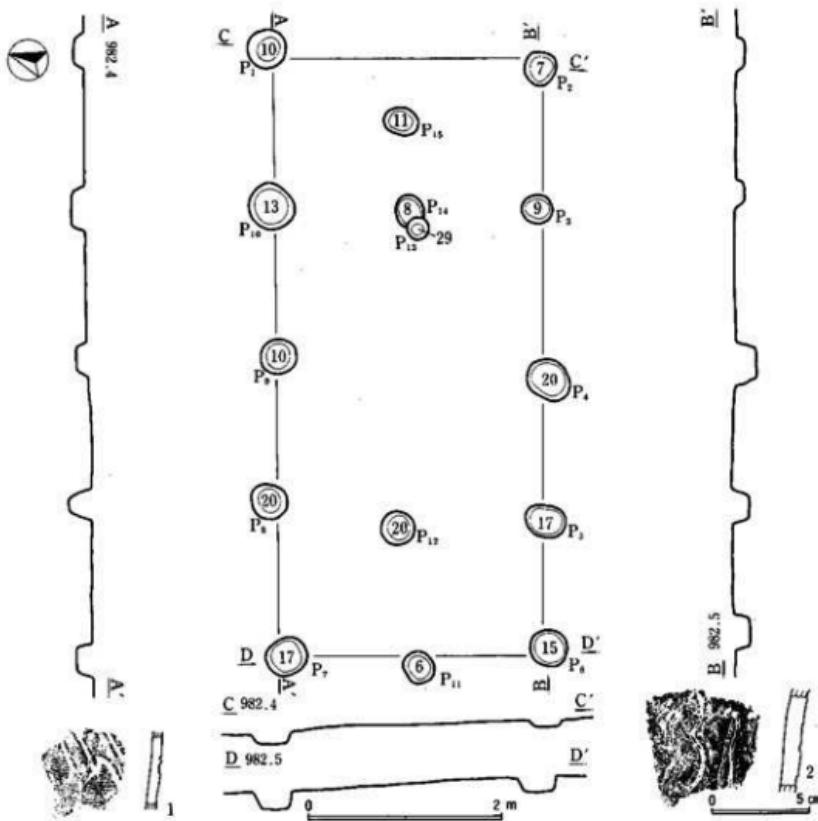


第53図 第15号方形柱穴列 (1/60)・出土土器 (1/3)

第15号方形柱穴列(第53図)発掘区の中央より南側で、39-Kグリッドを中心に検出された。

本址の平面形は、短辺の中間に柱穴が張り出す六角形である。規模は柱穴の中心間で、東辺が4.7m、西辺がP₂とP₈間で4.75m、南辺がP₅とP₉間で2.55m、北辺が2.6mを測る。また棟持柱であろうP₂とP₈間は5.65mを測る。面積は13.3m²である。柱穴はP₁～P₁₅が検出された。その中で3基の柱穴に建替えが想定される。また軸線にのるP₁₂は、本址に伴うものなのか判然としないことから、8本による構成としたい。長軸方向はN-19°-Eを示すが、P₈・P₉とP₁₀・P₁₁の位置より、ある時点では軸がずれていたと考えられる。確認面からの柱穴の深さは、平均で25cmを測る。出土遺物は第53図1・2で、とともにP₆からの出土である。1は称名寺式期に比定される土器の口縁である。2は当地域において類例を知らない土器である。

出土した遺物が少なく時期の決定は難しいが、出土遺物を尊重してVI期の遺構としたい。



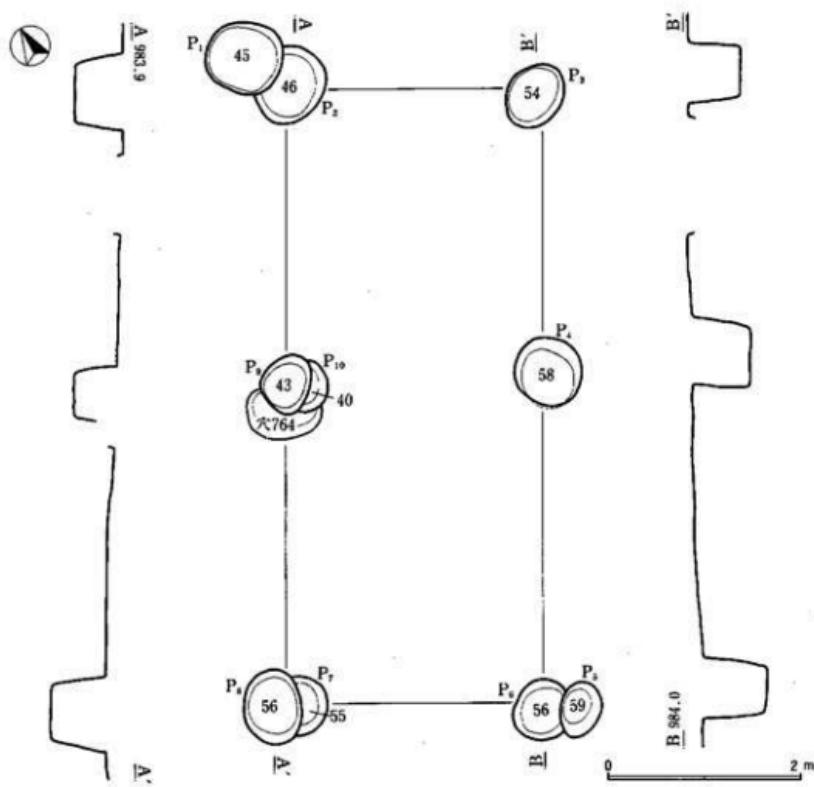
第54図 第16号方形柱穴列 (1/60)・出土土器 (1/3)

第16号方形柱穴列 (第54図) 発掘区の北側で、31・32-Y グリッドを中心に検出された。

平面形は長方形を呈し、規模は柱穴の中心間で長辺となる南辺が6.0m、北辺が6.25m、東辺が2.8m、西辺が2.7mを測る。面積は17.4m²である。東西方向に長軸をもち、その方向はN-73°-Eを示す。柱穴はP₁～P₁₀とP₁₁～P₁₅が検出された。現場ではP₁～P₁₀による構成と考えていたが、図面整理を行うとP₁₁～P₁₅が短辺の中点を結ぶ線上に位置することが明らかとなった。P₁₁と対になる柱穴が浅く確認できなかったこと、図示できなかったがP₁₃から称名寺式期段階の土器が出土したことを考え合わせるならば、本址に伴う可能性もでてくる。

第54図1はP₁、2はP₉から出土した。1は縄文を施した後に、雜な沈線で帶状区画を作り出している。称名寺式期に比定されよう。2は鷹歯状工具により、蛇行条線が施文される。

出土遺物に恵まれず時期決定は厳しいが、VI期の遺構としておきたい。

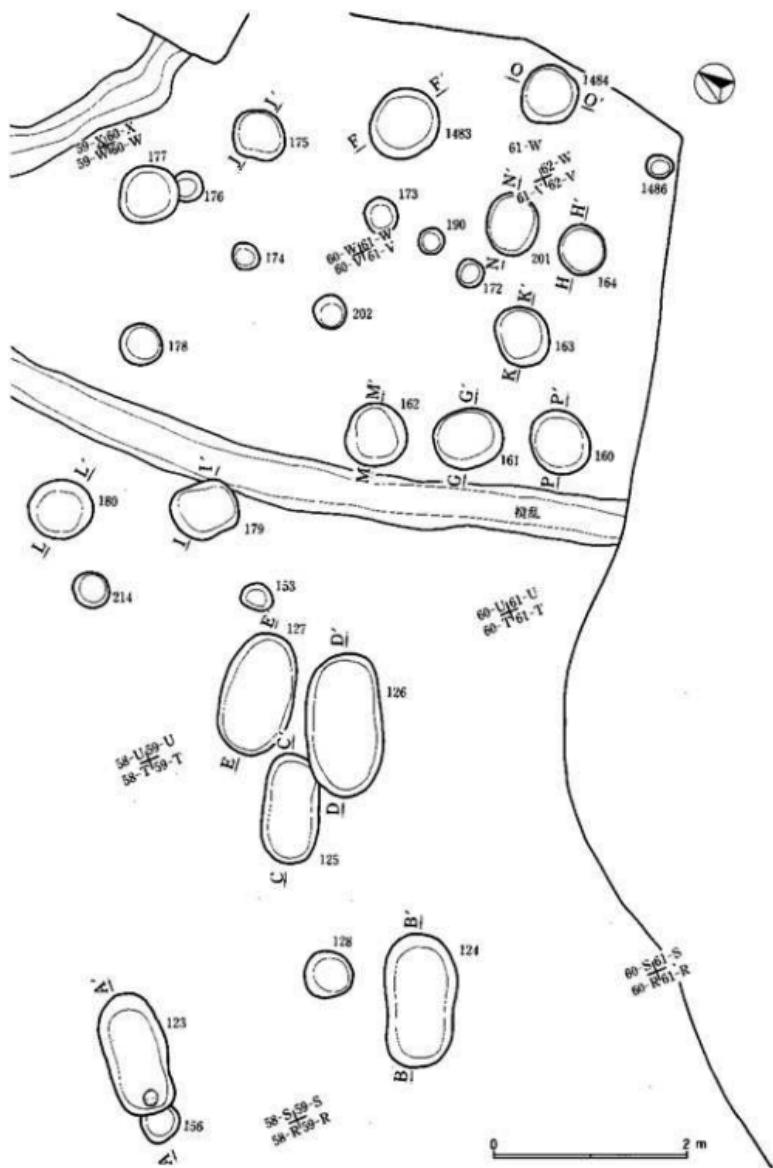


第55図 第17号方形柱穴列 (1/60)

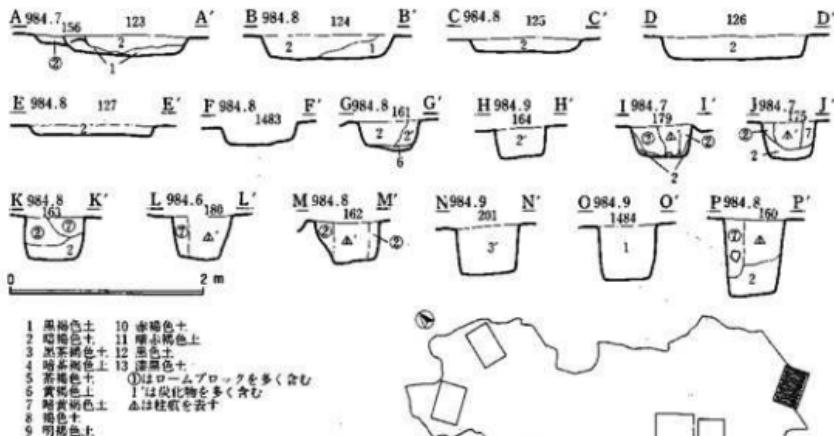
第17号方形柱穴列（第55図）発掘区の南側で、49-K・Lグリッドを中心に検出された。東には第14号方形柱穴列、南には第10号方形柱穴列、西には第9号方形柱穴列が隣接する。

本址は、6本柱により構成される方形柱穴列である。平面形は建替えのなされた柱穴のために歪んだ長方形であるが、基本的には整った長方形を呈する。規模は $P_2 \sim P_4 \cdot P_6 \cdot P_8 \cdot P_9$ の中心間で、長辺となる東・西辺が6.35m、南辺が2.75m、北辺が2.55mを測る。面積は17.3m²である。柱穴は $P_1 \sim P_{10}$ が検出されたが、4本は建替えに伴う柱穴である。長軸方向は N-26°-E を示す。しかし柱穴の在り方より、ある時点では N-20°-E を示していたと考えられる。 P_5 の南壁はオーバーハングしている。ほかの柱穴とは異なる掘方である。確認面からの柱穴の深さは、平均で51cmを測る。柱穴の半截で柱痕の確認できたものは、 P_5 と P_7 の2基である。

柱穴内から出土した遺物はない。 P_9 と P_{10} が穴764と重複しており、 P_9 と P_{10} の古いことを調査で確認している。しかし穴764からも出土遺物がないことから、本址の時期は不明である。



第56図 穴No 1・① (1/60)

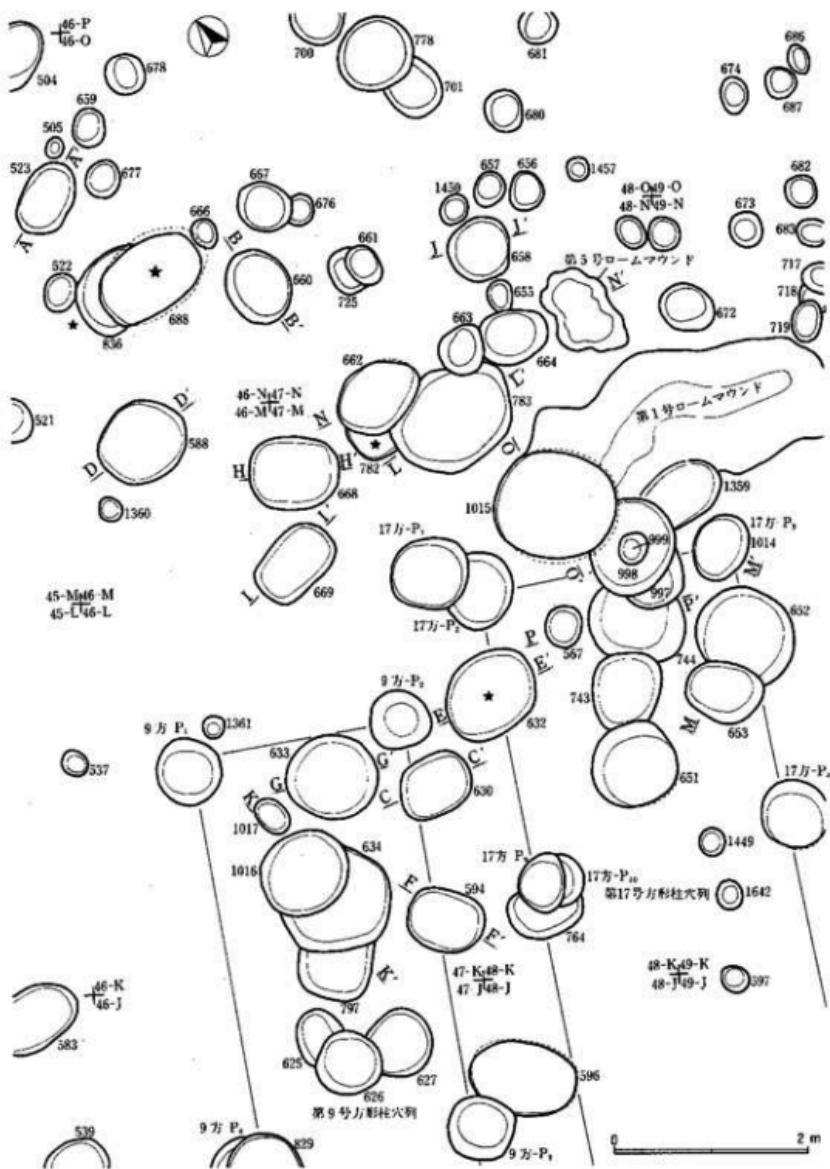


(3) 穴

調査において、穴番号を付した遺構の総数は1524基を数える。しかし、掘り込みの確認できなかった住居址、方形柱穴列を構成する柱穴にも番号を付していることから、これらの柱穴数を差し引いた1160基の穴については組み合さる穴を見い出せなかったことになる。この項では現段階で単独と考えられる穴を取り挙げて、遺構・遺物の検出状態を中心に記述していく。この際、すべての穴の記述は紙枚の関係もあることから不可能なため、遺跡内において穴の集中する7ヶ所(No.1~7)を選び、それに基づいて記述していくことにする。なお記述の中で、墓坑・貯蔵穴の名称を用いている。これらの定義づけについては、IV・1の中で触れている。

No.1は発掘区の東隅で、A群とした墓坑群を中心とする箇所である(第56・57図)。穴123~127の5基が墓坑とされた穴である。また5基の南からは、穴141・159とした2基の墓坑が検出されている。5基は平面形が橢円形を呈し、平均規模は上面長径が130cm、上面短径が69cm、深さは確認面から16cmを測る。ロームへの掘り込みが浅いためか、壁の立ち上がりは不明瞭である。覆土は暗褐色土の单層と、暗褐色土と黒褐色土の2層のものがみられる。遺物は穴123と穴126から出土した。穴123からは、堀之内式期とみられる土器の底部が伏せられた状態で出土した。いわゆる「斐被葬」の見られる墓坑である。穴126では土器が数点出土し、最も新しいものは称名寺式期に比定される。以上より、この2基には後期の帰属時期を与えることができよう。

墓坑群の東からは平面形が円形を呈し、上面径が60~70cm、深さが30~50cmの規模を主体とす



第58回 No.2 • ① (1/60)

る穴が10数基検出された。発掘区の東・南側にも同様の規模を有する穴が存在していた可能性もある。しかし検出された穴どうしが、方形柱穴列のように組み合わさるものではなかった。柱痕の確認された穴は、穴160・162・175・179・180の5基で、柱穴として認識している。遺物の出土したもののは4基で、中期最終末から後期前半に位置づけられる土器が出土している。後期の土器が主体である。墓坑群との時期的な関係を遺物を介して見るならば、同時に存在した可能性もあると言えよう。

No.2は発掘区の東側で、遺跡内において遺構の重複が著しい箇所である（第58・59・60・62図）。B群とした墓坑群の東部分にあたる。No.2で墓坑とした穴は、穴504・523・588・594・596・630・632・633・634・651・660・662・664・668・669・688・743・744・764・782・783・797・836・997・998・1016・1359の27基である。この中で、出土した土器より遺構の帰属時期を把握することができた墓坑は、穴633・634・651・662・743・744の6基である。穴634・744がII期、穴651・662・743がIII期、穴633がVI期である。穴744は、第6号焼土址とした焼土を伴う墓坑で、他の墓坑とはやや異なる様相を示している。焼土は坑底から約20cm上面に、15cm程の厚さで遺存していた（第59図）。焼土下からはII期の土器と磨製石斧、四石が出土している。なお穴744の西脇からは、穴567内に埋設された第4号独立土器が出土している（第59図・74）。

土器・石器以外の遺物を出土した墓坑には、穴632・688・782・836がある。出土した遺物は、硬玉製垂飾と琥珀玉である。硬玉製垂飾は穴668から3点、穴782から1点、穴668の上面に重複する穴836から1点出土している。琥珀玉は穴632から1点出土している。どちらも副葬品として墓坑に入れられた遺物であろう。

硬玉製垂飾が3点出土した穴688と、1点出土した穴836は重複関係にある（第60図）。遺構検出した際には、平面形態から1基の遺構と考えていた。遺構の調査に入り半裁を行うと、最終的に穴836に伴う遺物となった第62図4の硬玉製垂飾が、確認面から約15cm下より出土した。遺物を残しながら下部の調査を進めると、第60図1・2と第62・3の硬玉製垂飾がまとまった状態で出土した。坑底の西にみられる段差と、4と1・2・3とのレベル差が気にかかったが、2基の墓坑が重複しているとは思わなかった。その後土層の断面観察を行うと、坑底の西にある段差に沿って東側へ分層線を引くことが可能であり、さらに途中で立ち上がる状態が確認された（第60図）。この事象より、2基の墓坑が長軸方向をほぼ同じくする状態で重複することを確認した。半裁の段階で4点の硬玉製垂飾が出土したため、残る覆土内からの硬玉製垂飾の出土を期待したが、結局4点の出土に留まった。

穴688の平面形は東西に長軸方向をもつ橢円形を呈し、規模は上面径が115×71cm、確認面からの深さが43cmを測る。穴836の平面形は西から北の残存部による推定となるが、橢円形を呈する墓坑とみられる。上面径は120×80cm程と推測され、深さは確認面から28cmを測る。穴688の壁は、穴836との重複部を除いて袋状を呈している。覆土は2基とも、ローム粒子やロームブロックを多

く含む暗褐色土と暗黄褐色土で人為的に埋められていた。また埋土は良く締まっており、強い粘性を示していた。穴688から出土した硬玉製垂飾の中で、最も高い位置より出土した3は、坑底より約17cmを測る。また3と穴836の4とは、約10cmのレベル差がある。1・2・3の墓坑内における出土位置は、長軸線上の東隅にあたる。その位置からは、被葬者の首に硬玉製垂飾を掛けた状態で埋葬したとは想像し難い。穴836での出土位置は長軸線上の南で、推定プランの南東隅にあたるものと考えられる。

穴782からも硬玉製垂飾が1点出土している(第62図5)。硬玉製垂飾は、遺構確認面より約8cm下から出土した。穴662とした遺構内より出土したため、これに伴う遺物と考えて調査を進めていたが、土層断面の観察により、穴782に伴う遺物であることが明らかとなった。

穴782の平面形は、残存する西側の輪郭と土層断面で引くことのできた分層線より、隅丸長方形を呈するものと推測される。規模は上面径で90×60cm程と推測される。深さは確認面から10cmを測ることより、硬玉製垂飾は坑底より数cm上に遺存していたことになる。覆土は、ロームブロックを多く含む暗褐色土で、強い粘性を帶びている。墓坑内における硬玉製垂飾の出土位置は東の隅にあたり、前述した穴688・836と位置的には大差がないと言える。

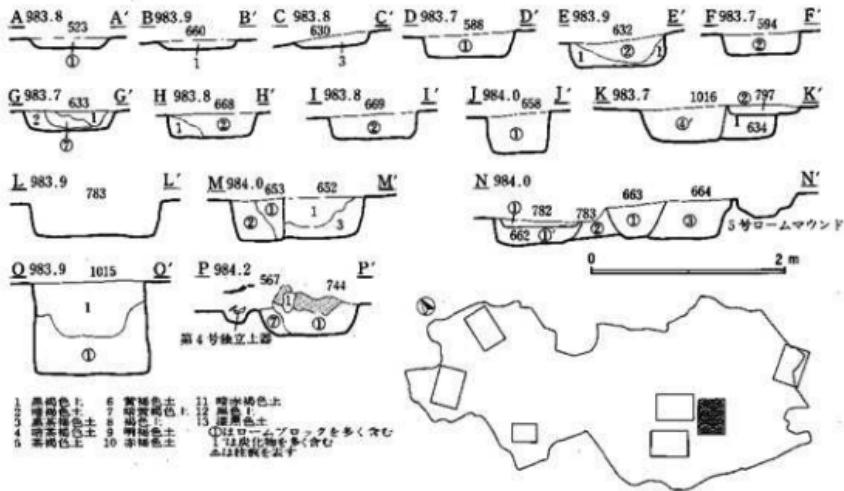
琥珀玉は穴632から出土したが、遺構を完掘した後にその出土を知った。そのために、墓坑に伴う遺物である以外の情報は得られていない。遺物は図示できなかったが、破損しているものとみられる。大きさは12×10mmの不整円形で、幅は7mmを測る。

以上の装飾品としての石製品を出土した穴は、4つの墓坑群の中でもB群という限られた墓坑群からの出土である。また4基の中の2基は重複し、他の2基もこれに隣接するような位置に構築されている。このことは、墓坑群内での構築される位置、遺物をもつ墓坑群の性格、遺物を保有する遺跡の性格などを考える上で注目される点である。

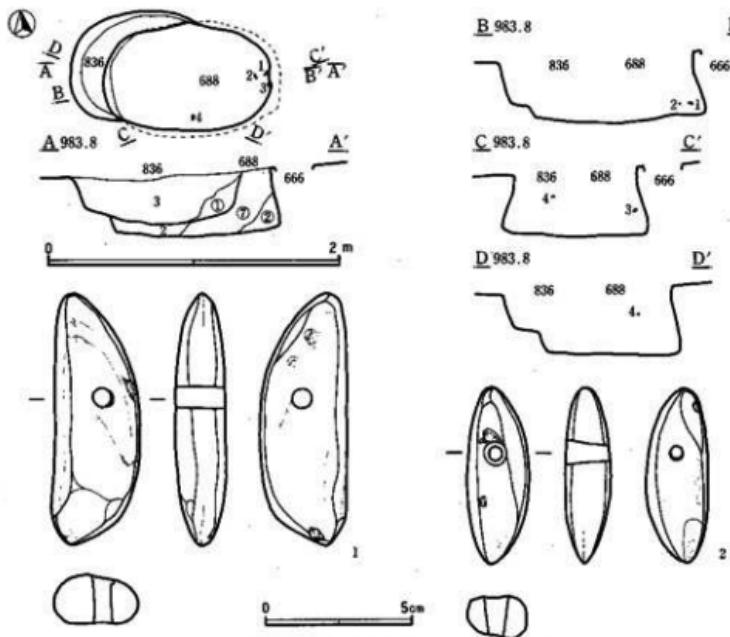
そのほかに特記される遺構として穴1015が挙げられる(第58・59図)。平面形は円形を呈し、上面径が126×111cmを測る。平面規模は周囲より検出された墓坑と大差はないが、深さは92cm測る掘方の大きな穴である。東から南にかけて壁が内傾する。遺構の半蔵では、柱痕は確認されていない。

No.3は発掘区の中央より東へ寄った地点で、B群とした墓坑群の北側部分にあたる(第61・63図)。第63図に示した穴は、いずれも墓坑としたものである。また第63図に図示できなかった穴583・636・639の3基も墓坑とした穴である。総数は19基を数える。

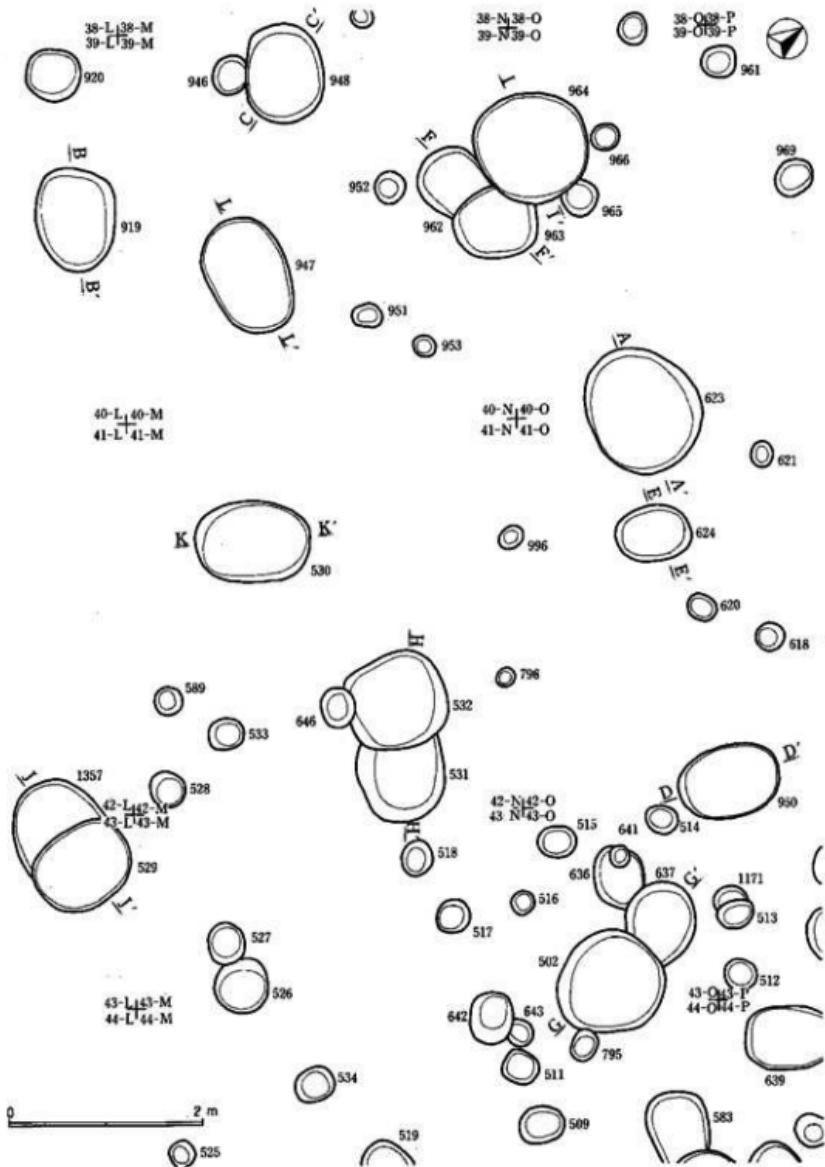
出土遺物から帰属時期の想定できる墓坑は穴964の1基である。しかし土器は後期の粗製土器であり、後期のどの段階に帰属するかは不明である。本遺跡から出土した縄文土器で、最も新しい時期のものは堀之内II式期である。堀之内I式期の土器を概観すると、堀之内II式期に比べて堀之内I式期の土器が主体である。そのため穴964は、VI期からVII期の間に帰属する可能性が高い。穴964は穴963と重複し、土層観察では穴963に穴964が掘り込んで構築されていることを確認した。また穴963は穴962に掘り込んでいる。仮に、穴964を堀之内II式期とすれば、穴962・963は堀之内



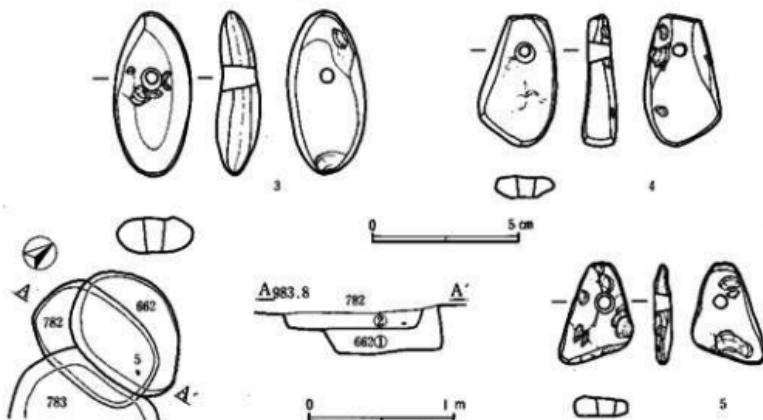
第59図 穴No.2・② (1/60)



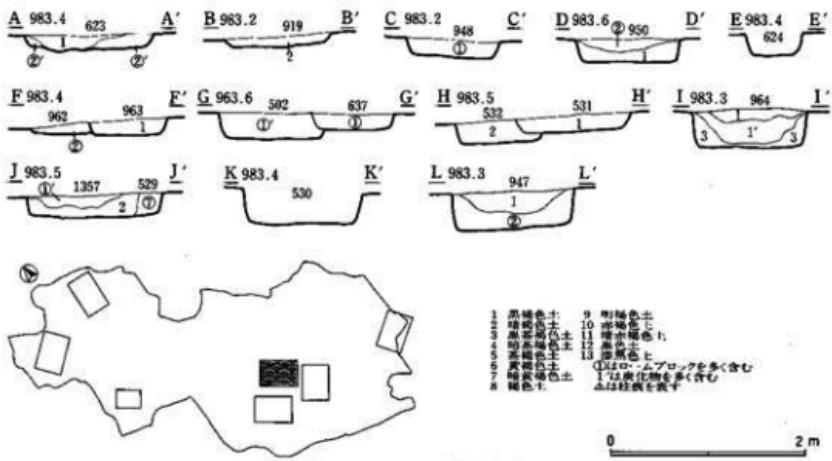
第60図 穴No.2・③ (1/40, 1・2は1/2)



第61図 穴Na 3・① (1/60)



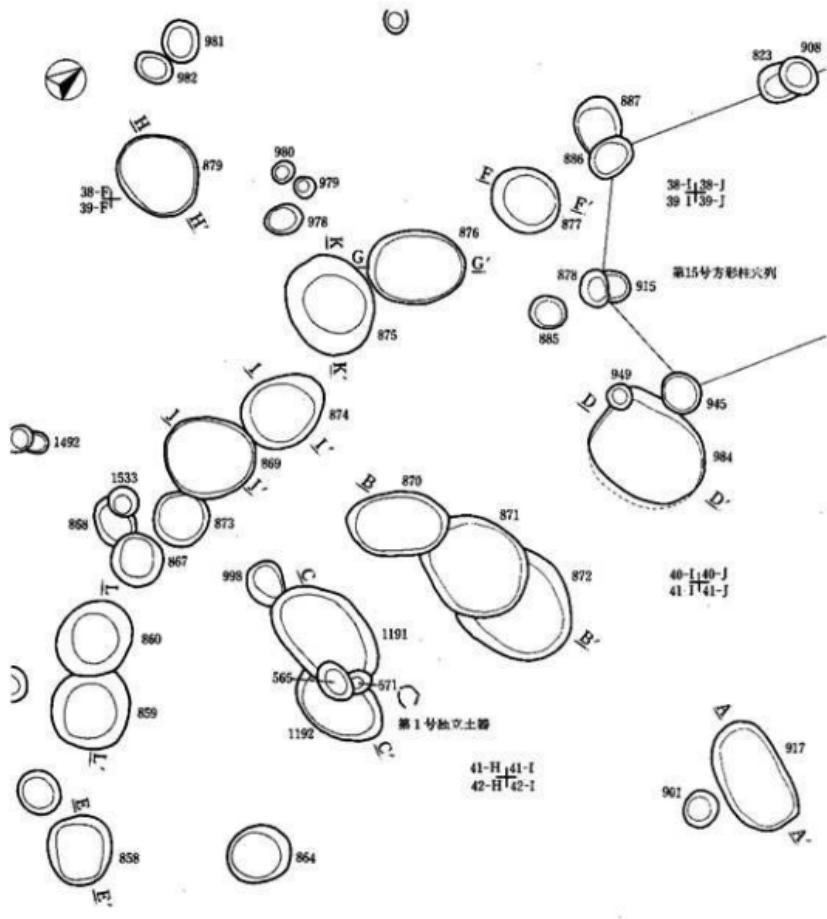
第62図 六No.2・④ (1/40, 3・4・5は1/2)



第63図 穴Na 3・② (1/60)

II式期以前の時期の墓坑となる。

次に19基の墓坑を概観し、若干の所見を述べてみたい。まず墓坑の平面形態では、細長い形態（橢円形・隅丸長方形）と丸い形態（円形・不整円形）が存在する。また平面規模には大小の差がある。規模の小さな墓坑である穴636の上面長径は、65cm程とみられる。これに対し、規模の大きな穴623では、上面長径が133cmを測り、穴636の約2倍である。長軸方向では、軸方向の判り易い細長い形態の墓坑に着目すると、南北方向に長軸をもつものと、東西方向にもつものとの概ね2種類に分類することが可能である。



42-F 42-G
43-F 43-G

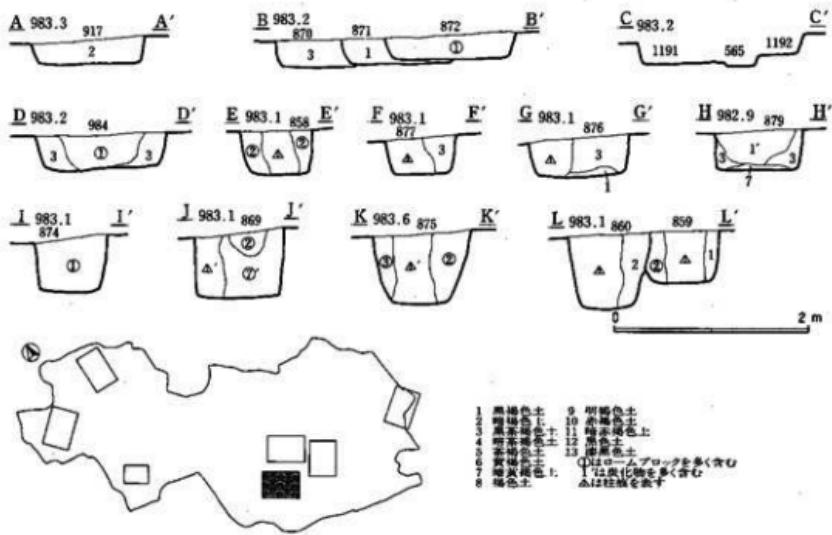
42-I 42-J
43-I 43-J

983

861

0 2 m

第64図 穴No.4・① (1/60)



第65図 穴No.4・②(1/60)

No.4は、B群とした墓坑群の西側部分である(第64・65図)。調査の結果、墓坑とした穴は穴870・871・872・917・984・1191・1192の7基である。平面形態はいずれも楕円形を呈するが、穴917のような細長い平面形態の墓坑と、穴872・984のような円形に近い平面形態の墓坑が見受けられる。確認面からの深さは、最も深い穴984で34cm、最も浅い穴1192で17cmを測る。7基の深さの平均は23cmを測る。これより、墓坑は他の穴に比べて相対的に浅いことを再確認することができる。浅い墓坑は当然のことながらロームへの掘り込みが浅くなる。そのために壁の立ち上がりがはっきりしない墓坑も多い。No.1で述べた5基の墓坑はロームへの掘り込み浅く、壁の立ち上がりが不明瞭であった。7基の中で壁が内傾する墓坑は、穴984の1基である。しかし、壁全体が内傾するわけではなく、南側のみ袋状を呈する。検出された墓坑の現存する壁に着目すると、直に近い立ち上りを示す墓坑は割りに多いが、袋状を呈する墓坑の少ないことが指摘できる。袋状を呈する墓坑には、硬玉製垂飾が3点出土した穴688、その南に位置する穴596が挙げられる(第58図)。

長軸方向は、穴870が北東から南西に長軸をもつほかは、概ね東西に長軸方向を示している。

7基の墓坑内からは、遺物の出土はなかった。そのため、墓坑の時間的な位置づけは不可能である。遺構の帰属時期は判然としないが、3基の墓坑が重複する事象から少なくとも3段階に亘る構築は明らかである。

No.4で柱穴とした穴は、穴858・859・860・869・875・876・877の7基である。いずれも遺構の半裁調査により柱痕が確認され、幾つかは平面でも柱痕を確認している。7基の柱穴は、南北に

弧を描くように配列している。その東側に7基の墓坑が構築されている。

平面形は円形が主体を占めているが、穴876のような横円形を呈する柱穴もある。掘方の断面は、壁が直立するものと、上部に向かって開くように立ち上がるものが見受けられる。穴876と877は、ほかの柱穴に比べると深さは浅い。これは遺構自体の掘り込みの深さによるものであろう。穴869と穴875との間には穴874が掘り込まれている。穴874では、柱痕は確認されていない。のために遺構の性格を明確にすることはできないが、周囲から検出された柱穴に掘方が類似すること、南北に弧を描くように配列する柱穴の線上に位置することから、柱穴となる可能性がある。穴879は、平面と断面の観察において柱痕は確認されず、さらに墓坑とする積極的な所見も得られていない。そのため、別の性格をもつ遺構と考えられる。

柱穴となる可能性がある穴874を含めた8基の規模は、方形柱穴列を構成する柱穴に類似している。しかし、方形または長方形を呈する規則的な配列は示していない。ただ、南北に弧を描くように配列することだけは事実である。

7基の柱穴で土器の出土がみられたものは、穴858・869・875・877の4基である。一括で出土した土器はなく、いずれも破片の出土である。それによると、穴869がII期またはIII期、穴858がIV期、穴875がVII期、穴877がVI期からIX期のいずれかの時期に帰属する遺構とみられる。また柱穴となる可能性がある穴874からは、V期の土器が出土している。以上より、穴874を含めた5基に時間差のあることが指摘できる。

No.4で特記すべきこととして、墓坑である穴870・871・872と穴1191・1192の間から、第1号独立土器が検出されたことが挙げられる。土器はV期に比定されるものである(第75図1)。墓坑の帰属時期が不明なため、第1号独立土器との関係は判然としないが、両者の位置関係が気になる。また、穴984と僅かに重複する第15号方形柱穴列が、南北に弧を描くように配列する柱穴の線上に長軸をもつことが注目される。さらにB墓坑群の中における位置も注目される点で、第15号方形柱穴列の性格を考える上で興味深い。これについては、IVで触ることにする。

No.5は発掘区の北西隅にあたる箇所である(第66・67図)。C群とした墓坑群が構築されており、穴1227・1228・1229・1239・1240・1247・1252・1254・1255・1358の10基が墓坑とされた。

墓坑の平面形は、ここでも円形と横円形の2種類に大別することができる。穴1239は、円形を呈する規模の小さな墓坑である。調査を始めた段階では、他の墓坑に比べて規模が小さいことから墓坑としなかった穴である。しかし、覆土の堆積状態がロームブロックで人为的に埋められ踏み固められたように堅く締まっていたこと、周辺から形態こそ異なるが幾つかの墓坑が検出されていたことから、墓坑としての性格を与えた。穴1227と1255も平面形が横円形である以外は、穴1239のような規模の小さな墓坑である。この2基も穴1239と同様の所見により墓坑としている。

穴1252は、本遺跡より検出された墓坑の中では規模の大きな墓坑である(第66・67図)。平面規模は上面径で186×182cm、確認面からの深さは65cmを測る。掘方の断面形は壁が急傾斜する鉢状

を呈する。土層観察では6層に分層され、その状態はどの層も人為的に埋められたと考えられた。最下層である第6層は、大部分がロームブロックで強い粘性を示し、叩き締めたように堅い層である。坑底より数cm上には、平板石が3枚置かれたような状態で遺存している。この礫上約20cmからは、完形土器や多くの土器片が出土した。礫は第6層、土器の多くは第3層より出土している。担当者は、穴の形態から貯蔵穴とする目的で構築された遺構と考えている。そのことから、穴1252は最終的に墓坑として機能した、転用のなされた遺構と考えられる。

No.6は発掘区の南西隅にあたる箇所である（第68・70図）。図示した穴と類似する規模の穴が、No.6の北から2基、南から1基検出されている。また後世の搅乱により、同様の遺構が壊されてい可能性もある。

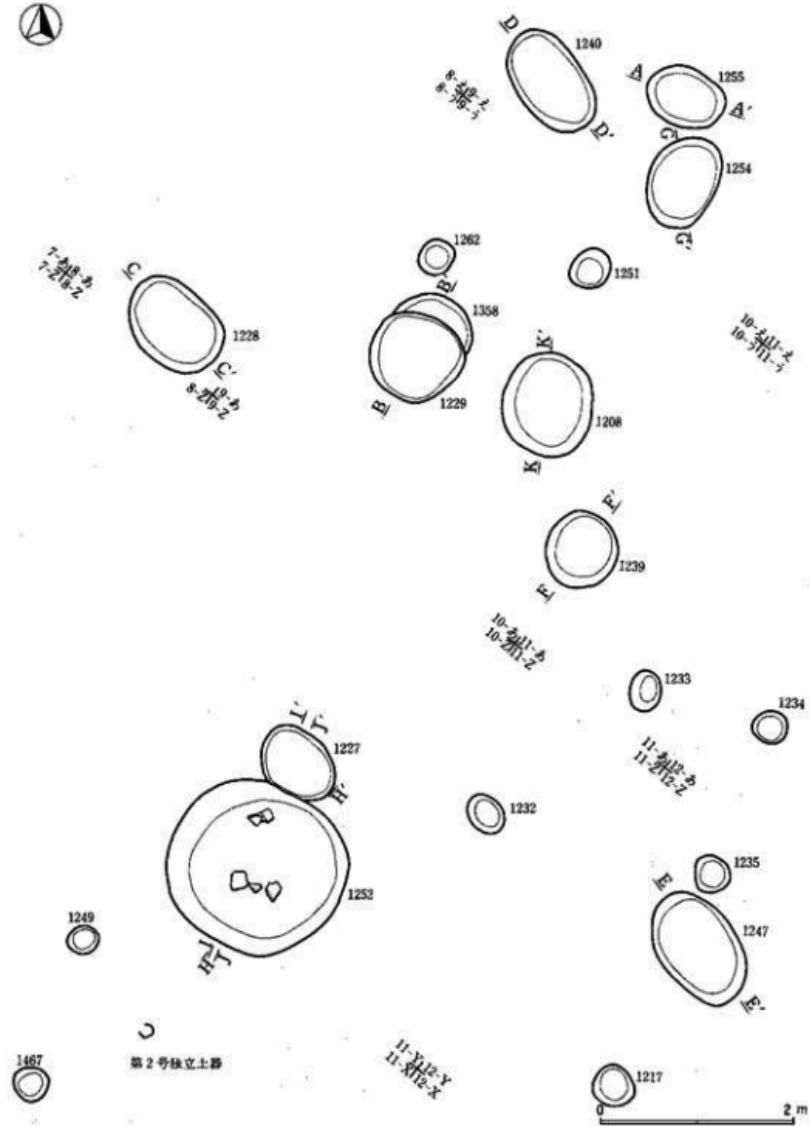
穴1256・1257・1259・1260・1350・1351の6基は、平面形が円形を呈する。上面径で最も規模の大きい穴1259は136×135cmで、規模の小さい穴1350は98×90cmを測る。確認面からの深さは最も深い穴1259で52cm、最も浅い穴1351で27cmを測る。壁は、穴1257が南部分で袋状を呈するほかは、総じて直に近い壁を有する。6基の覆土でロームブロックを多く含む層は、穴1259の②と穴1351の②に見られた。土層観察ではどちらの層も壁の崩れによる、いわゆる三角堆土と考えられた。そのため、6基の中では人為的に埋められたと考えられる穴はなかった。これに対しNo.6の北より検出された穴1253は、覆土内に多量のロームブロックを含み一気に人為的に埋められた様相を示している。覆土の状態は異なるが6基に形態が類似し、遺構間の距離も6m程であることから、1つの群として捉えることも可能である。さらにNo.6の南で検出された穴1261も形態が類似し、約3mの位置にあることからも群の中の1つとして良いだろう。

No.6で遺物の出土した穴は、穴1257の1基である。II期の土器片が数点出土したにすぎず、これによる遺構の時期決定は厳しいが、遺物を尊重しこれをもって遺構の帰属時期と考えたい。また前述した穴1253からは、やはりII期の遺物が出土している。覆土は一気に埋められたと考えられる状態であることから、出土遺物の時期が遺構の廃絶時期となる可能性もある。また遺構の位置に着目すると、遺構に切り合うものがないことから、穴を掘った者が遺構の位置を認識していくとも考えられる。以上より、周辺の類似する穴も含めてII期に帰属する遺構と考えたい。

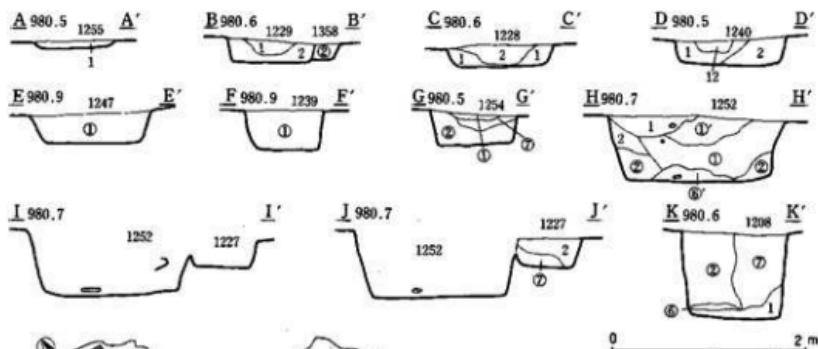
No.7は発掘区の西隅で、D群とした墓坑群の構築されている箇所である（第69・71図）。ここでは、穴1273・1278・1279・1282・1283・1285・1286・1289・1290・1291・1306の11基が墓坑と認められた。11基の墓坑の平面形態は、楕円形と言うよりも円形のイメージが強い。

D群とした墓坑群の特徴として、3基の墓坑が一括りのある遺物を保有している点が挙げられる。遺物に着目すると、礫が主体となる遺物（穴1273）、礫と土器により構成される遺物（穴1290）、土器が主体となる遺物（穴1289）の3種類に分類される。穴1273では、拳大から人頭大的角礫と扁平な礫が、一見すると無造作な位置にあるように見受けられるが、壁際に立て掛けた礫

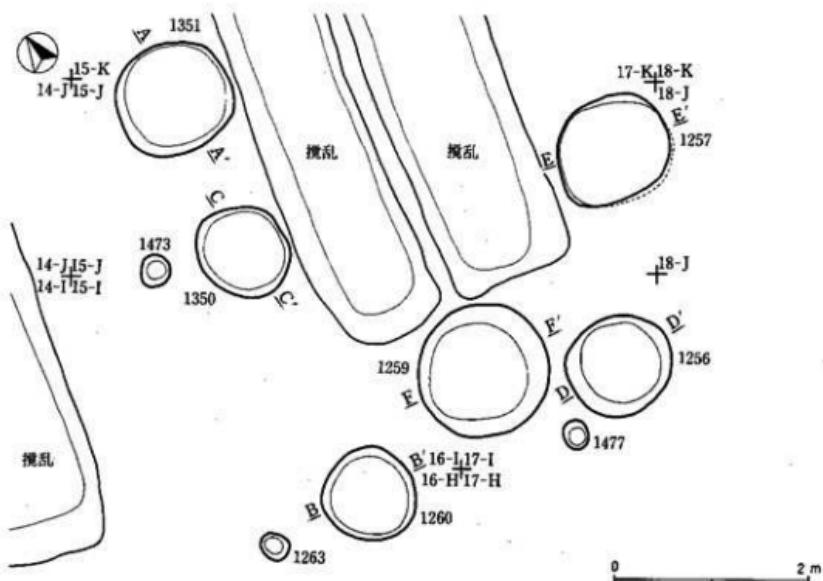
Ⓐ



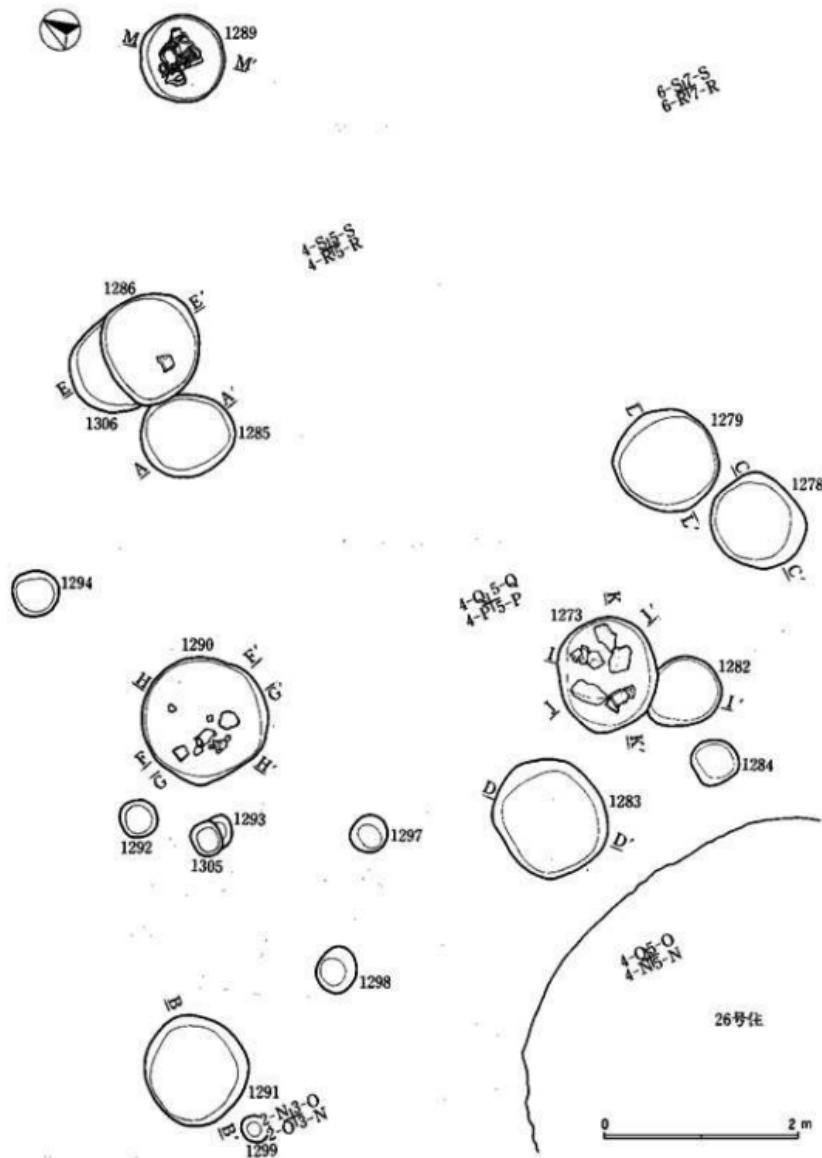
第66図 穴No.5・① (1/60)



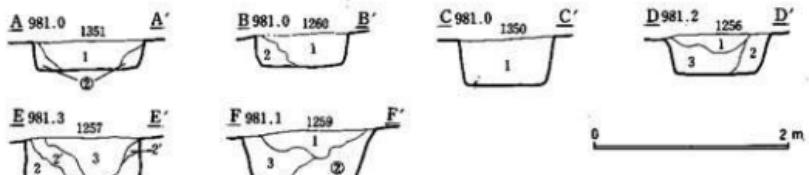
第67図 穴No.5・② (1/60)



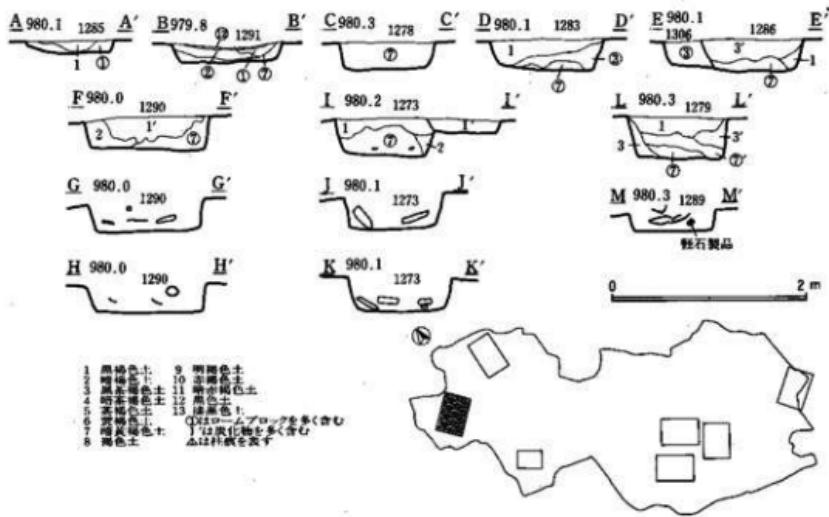
第68図 穴No.6・① (1/60)



第69図 大No 7・① (1/60)



第70図 穴No.6・② (1/60)



第71図 穴No.7・② (1/60)

が中央部にずれ動いたような印象を強く受ける。穴1290では、底部を人為的に打ち欠いた土器と、拳大から人頭大の扁平な蝶が、若干のレベル差をもち遺存していた。穴1289は、確認面より検出された土器が正位の状態にあることから、独立土器として考えていた。しかし、土器の直下より唐草文系の深鉢が横に倒して埋置された状態で出土したこと、壁の立ち上りが明瞭であること、覆土が人為的に埋められた状態であることから墓坑とした造構である。土器は坑底より約5cm上に遺存し、その下からは筒型の軽石製品が出土した。

No.7の墓坑は、出土した土器より8基の帰属時期を把握することができた。穴1273・1278・1283・1286・1291がII期、穴1282・1289・1290がIII期の造構である。また、造構の位置と切り合い関係より、少なくとも3段階に亘り造構が構築されたと考えられる。

(4) 配石遺構

人為的に礫が配されたと考えられる配石遺構は3基検出された。調査では4号まで番号を付している。しかし、第3号配石遺構としたものが穴775に伴うことになり、これを欠番としている。配石遺構はいずれも、発掘区の東側から検出されている。

第1号配石遺構（第72・74図）発掘区の東側で、西に緩やかな傾斜を示す地形部より検出された。グリッドでは、47・48-M・Nを中心とする。本址の南側は、第17号方形柱穴列と重複し、南西側には第9号方形柱穴列、南東側には第14号方形柱穴列が隣接する。また、本址の西側にはB群とした墓坑群が位置し、東側には規模の小さな柱穴状の掘方をもつ多くの穴が位置する。

表土剥ぎ作業の際に配石面の約10cm上面から、土器を主体とする遺物が多量に出土していた。さらに、同じ面で数ヶ所の焼土址が確認されていたことから、周辺の調査を実施した。

調査当初は、耕作の際に出てきた礫を一ヶ所に捨てたものと考えていた。しかし礫と遺物の出土状態から、東西に細長く礫が配された配石遺構であると判断した。配石を構成する礫は、円形や方形を呈するように規則的に配されたものではなさそうである。どちらかと言えば、数ブロックのまとまりとして捉えた方が良いのかもしれない。配されている礫は、第2号配石遺構にみられる平板石はほとんどなく、川原石であろう円礫が主体である。

遺構確認面から配石面に至るまで多量の土器が出土しており、時期をみると以下のようである。まず配石上面からは、称名寺式期の土器に混じて堀之内I式期の土器が出土しているが、前者が主体である。配石面の調査でも、称名寺式期の土器の出土が主体であり、これに曾利V式期の土器が混在している。第74図1~10は、いずれも称名寺式期に比定される土器である。配石面より出土した曾利V式期の土器は図示していないが、配石面より約20cm下から出土した第74図14・15の土器が該期のものである。現場では第3・4号独立土器として扱ったが、配石面から同時期に比定される土器が出土していることからも、本址に伴う可能性がある。

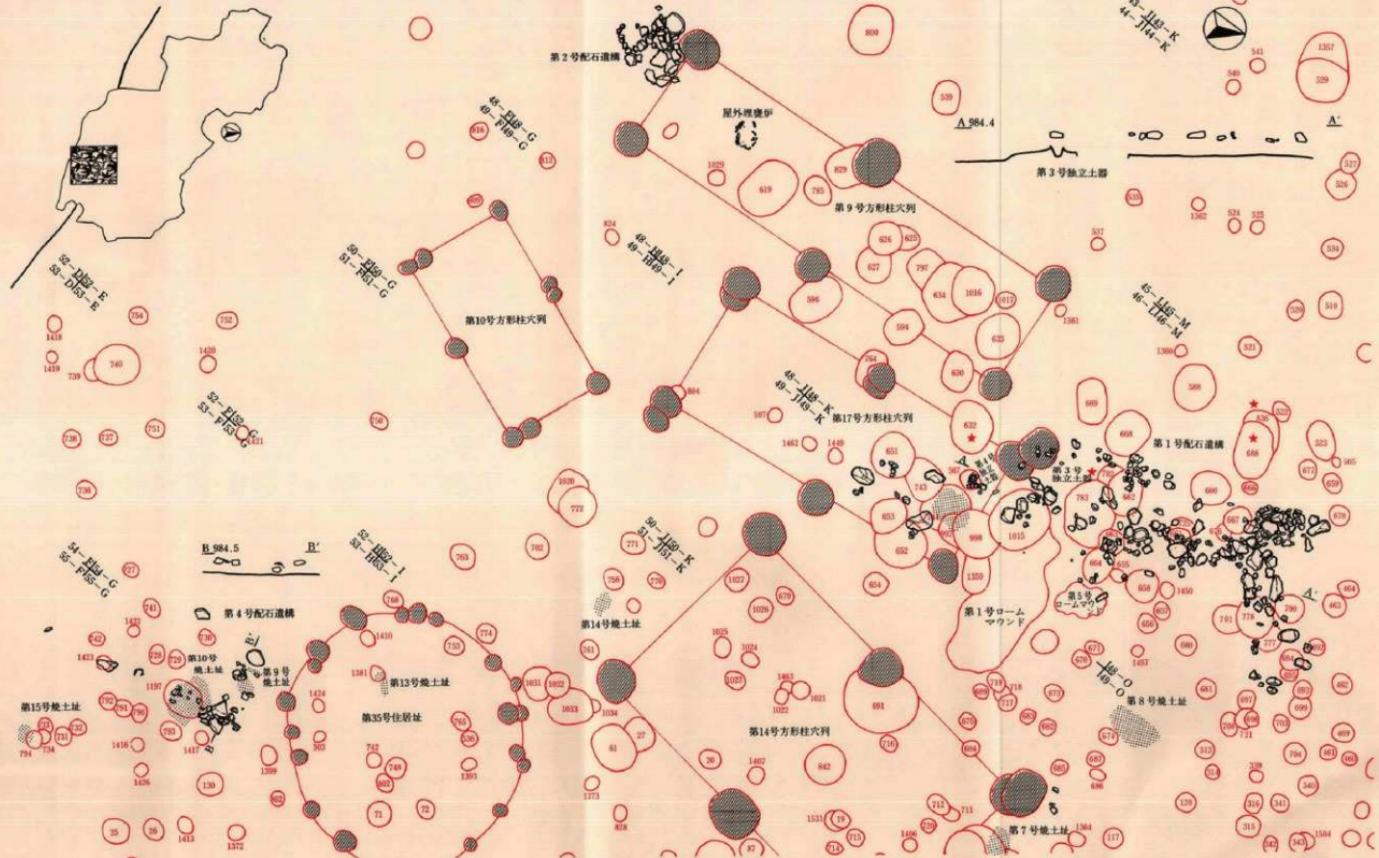
本址の南側は、第17号方形柱穴列と僅かに重複している。第17号方形柱穴列の帰属時期は、柱穴から出土した遺物がないため不明である。しかし、第17号方形柱穴列のP₁・P₂の上面と柱穴列内の上面に、配石に伴う礫が遺存することから本址より古い遺構と考えられる。

本址の帰属時期を明確にできる決定的な資料はないが、配石面から出土した土器と調査によって得られた事象より、本址にはV期からVI期とやや幅をもたせた時期を与えておきたい。

第2号配石遺構（第72・73図）発掘区の南東側、47-G・Hグリッドにおいて検出された。本址の北側は、第9号方形柱穴列を構成するP₃と僅かに重複している。

本址は当初、北東から検出された屋外埋甕炉が炉になる、部分的な敷石住居址と考えられた。しかし、両者から出土した遺物よりみて、別時期の遺構であることが明らかとなった。

礫は、1.4×1.1m程の梢円形を呈するように配されている。配石の状態は、平板石を同レベル



第72図 第1・2・4号配石遺構と周辺の遺構 (1/80)

に敷き、その上に拳大から20cm程度の円・角礫を配している。配石の西端には、人頭大の卵形を呈する礫が、平板石よりも下部に配されている。第1号配石遺構との相違点を挙げるならば、本址は平板石を敷き詰めた状態であること、すべての礫を露出させた段階で掘方とみられる黒い落ちこみが礫を囲むように観察された点である。

第9号方形柱穴列との新旧関係は、第9号方形柱穴列のP_sを確認した面で、本址の掘方がP_sの覆土を切るように観察されたことから、本址が新しい遺構である。

出土した遺物は、第73図に図示している。1・2・3はいずれも、称名寺式期に比定される土器である。このほか、中期終末期の土器が数点混入している。石器は凹石が3点出土している。

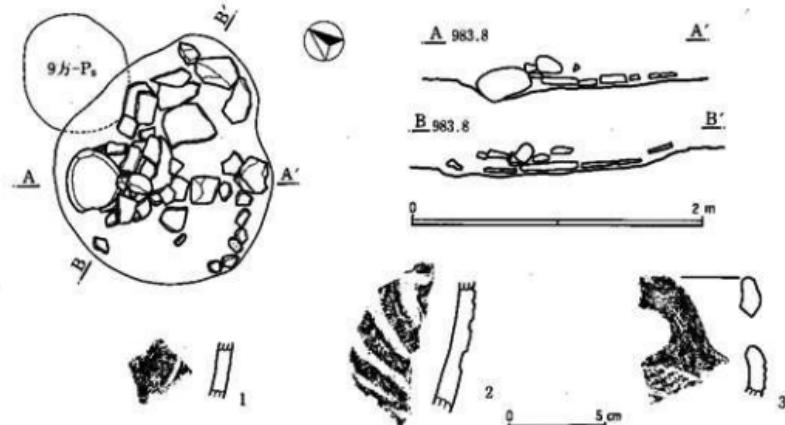
本址は出土した土器の時期より、VI期に帰属する遺構と考えられる。

第4号配石遺構（第72・74図）発掘区の南東隅で、第1号配石遺構の南側より検出された。グリッドでは、54・55-G～Iに位置する。本址南端の上面からは第10号焼土址、また西側の礫下からは第9号焼土址が検出されている。

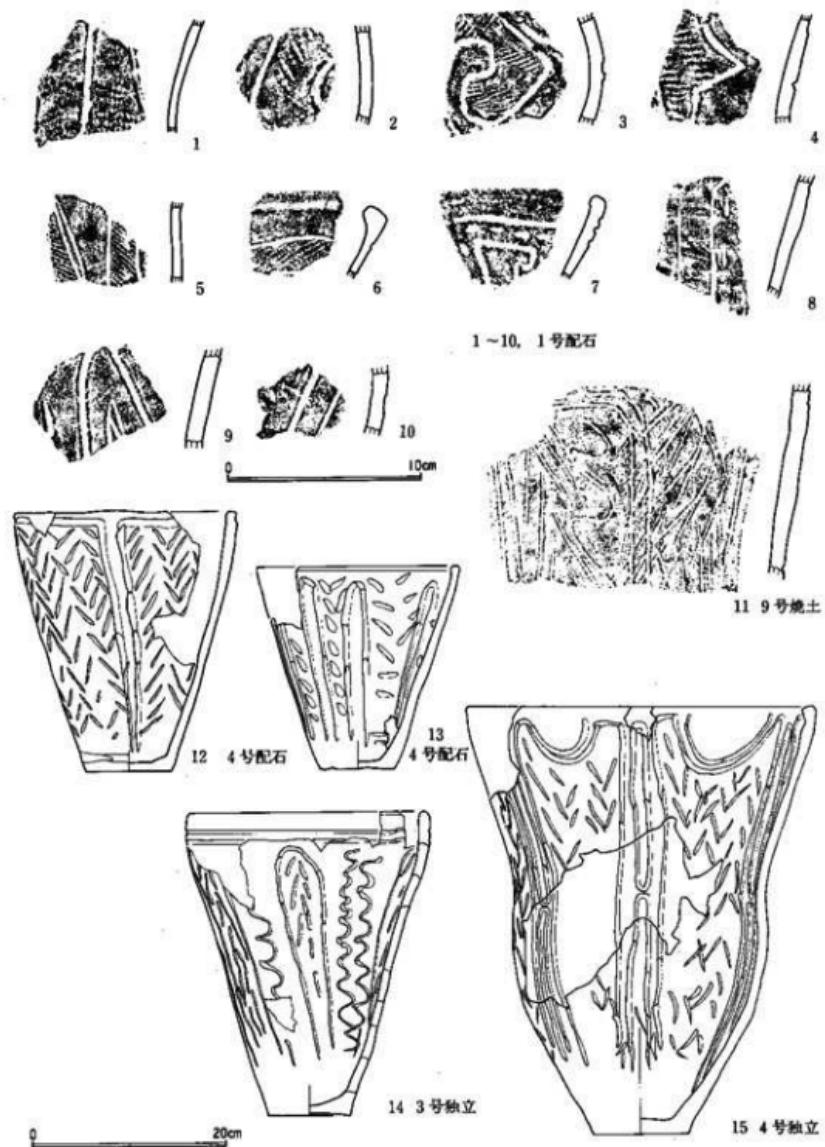
礫は上面レベルがほぼ同じ面をなすように配されている。その礫に被さる状態で、中期最終末期の土器が2個体出土した（第74図12・13）。出土状態から礫と土器は同時期のものとみられる。

第9号焼土址と第10号焼土址との関係は、礫の中に焼けているものがあること、本址と同時期の土器が出土していることから、同時期の遺構となる可能性がある。また第1号配石遺構とは礫面がほぼ同じである点より、同時に存在していた可能性も考えられる。

出土した遺物で、本址の時期を決定するならば中期最終末・V期となる。しかし、遺構上面から出土した土器が中期最終末から後期初頭に亘ること、周辺より検出された遺構の時期を考慮して、本址にはV期からVI期と幅をもたせた時期を与えておきたい。



第73図 第2号配石遺構 (1/40)・出土土器 (1/3)



第74図 第1・4号配石造構、第9号焼土址出土土器、第3・4号独立土器（1~11:1/3、12~15:1/6）

(5) 独立土器

第1号独立土器(第64・75図)発掘区の南東側、41-Hグリッドにおいて検出された。遺構を確認した時点では、住居址に伴う埋甕と考えられた。しかし周辺から、柱穴や床と考えられる堅敏な面が検出されなかったことから、独立土器とした。

土器の周囲の精査では、土器を埋設する掘方を微妙な土色の違いで確認することができた。土器の内部には土が詰まっていたため、半裁して断面の観察を行うことにした。その結果として、いずれの層も覆土が自然に入り込んだ状態である所見を得た。

土器は口縁部と底部を欠損する深鉢で、正位に埋設されている(第75図1)。施文される文様よりみて、中期最終末・曾利V式期に比定される土器である。口縁部の観察では、欠損面に二次加工を施した痕跡が認められる。

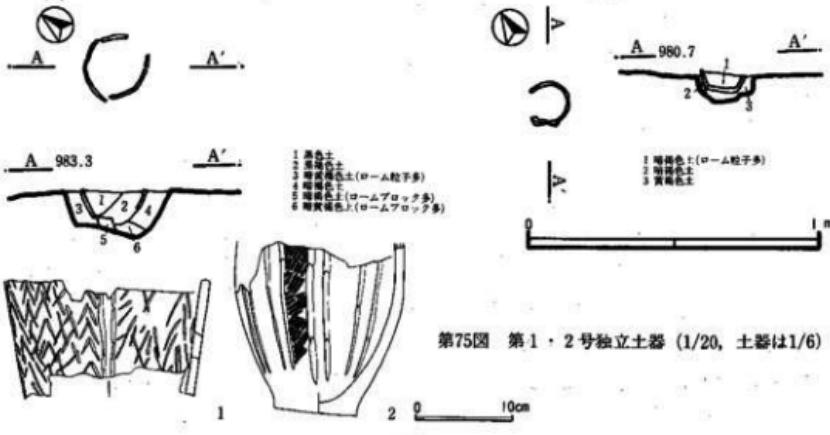
本址は埋設されていた土器よりV期の遺構である。

第2号独立土器(第66・75図)発掘区の西側で、10-Xグリッドより検出された。本址は表土剥ぎ作業中に、土器の上部を確認したことより存在の明らかとなった遺構である。

遺構を確認した面では、径60cm程の黒褐色を呈する不整形の落ちこみが見られたため、穴の内部に土器の入る遺構と思われた。遺構の半裁では、底面が著しく荒れた状態で明確な壁の立ち上がりも確認することができず、穴状の遺構とするには不十分であった。しかし土器よりも僅かに大きな掘方を確認することができた。そのため第2号独立土器とした。土器の内部に堆積している土は、人為的に埋められたと考えられる状態であった。

土器は加曾利E式系の深鉢で、胴部より上を欠損している(第75図2)。欠損面は、部分的に二次加工による調整がなされている。

本址は埋設されていた土器の時期よりIII期の遺構である。



第3号独立土器（第72・74図）本址は、発掘区の東側に位置する第1号配石造構内より検出された。48-Mグリッドである。

本址は、第1号配石造構の調査において存在が明らかとなった。調査時には、土器が配石面より約20cm下から検出されたため、独立土器として番号を付した。しかし、第1号配石造構の帰属時期と土器の時期が同じことから、第1号配石造構に伴う可能性もでてきた。

土器は中期最終末・曾利V式期に比定される深鉢で（第74図14）、正位に埋設されている（第72図）。土器は掘方内に埋設されていたのであろうが、掘方を確認することはできなかった。

本址は埋設されていた土器の時期よりV期の造構である。

第4号独立土器（第59・72・74図）本址は第3号独立土器と同様に、第1号配石造構内より検出された。48-Lグリッドに位置する。

本址も、第3号独立土器とはほぼ同じ出土状況である、第1号配石造構面よりも20cm程低い位置より検出された。しかし、配石面から中期最終末に位置づけられる土器片が多く出土していること、出土した位置が第1号配石造構内であることから、第1号配石造構に伴う可能性がある。

土器の上部は押し漬された状態であるが、胴下半部は穴567に正位で埋設された状態で検出された（第59図）。そのために穴567が掘方となる。

土器は中期最終末の曾利式系の深鉢で、曾利V式期に比定される（第74図15）。

本址は埋設されていた土器よりV期の造構である。

(6) 焼土址

焼土址は14基検出されている。調査では16まで番号を付したが、第3号焼土址は第30号住居址の炉となり、また第6号焼土址は穴744に伴う焼土と判明したため、ともに欠番とした。発掘区内での位置は、いずれも中央部から東側での検出である。

第1号焼土址（第76図）発掘区の東隅、52-Z・あとかけて検出された。

焼土は62×40cmの範囲で梢円形を呈している。焼土は最も厚い部分で12cmを測る。本址に伴う出土遺物がないため帰属時期は不明である。

第2号焼土址（第76図）発掘区の東隅で、第1号焼土址の南西に位置する。グリッドは53-Y・Zである。

本址は表土剥ぎの際に確認された。検出状態から、焼土の上部を削ってしまっている可能性が十分にある。このことから、当時の焼土範囲は確認されたものより広範囲と考えられる。当初は円形を呈していたのかもしれない。本址に伴う遺物はなく、帰属時期は不明である。

第4号焼土址（第76図）発掘区の東隅で、62-N・Oにかけて検出された。

表土剥ぎの際に上面を削平している可能性があり、当初は、焼土がもう少し広範囲に及んでいたと考えられる。焼土は最も厚い部分で4cmを測る。本址に伴う出土遺物がないため、時期は不明である。

第5号焼土址（第76図）発掘区の北側、43-Vグリッドより検出された。

焼土を囲むように礫が遺存していたため、当初は住居址の炉と考えられた。周辺の調査では、柱穴や床と考えられる堅緻な面は確認できなかった。そのために、焼土址として番号を付した。確認された焼土は37×22cmの楕円形を呈し、厚さは約4cmである。その周囲には多くの礫が遺存している。礫の中には据えられたと考えられるものもあり、当初は掘方をもつ石窯炉であったとみられる。礫には著しい焼痕の認められるものがあり、さらに熱を受けて割れたものも見受けられた。

本址からの出土遺物は第76図1・2のはか、図示できなかった中期終末期の一括土器と、円柱状と三角形を呈する軽石製品が各1点出土している。1は曾利系の土器の口縁部で波状を呈する。2は加曾利E系の土器の口縁部で、地文は多条の繩文である。どちらも口唇部が角頭状を呈している。本址は出土遺物からみて、III期でも新しい段階に帰属する遺構と考えられる。

第7号焼土址（第72・76図）本址は、第1号配石遺構の東側より検出された。グリッドは50・51-Oに位置する。

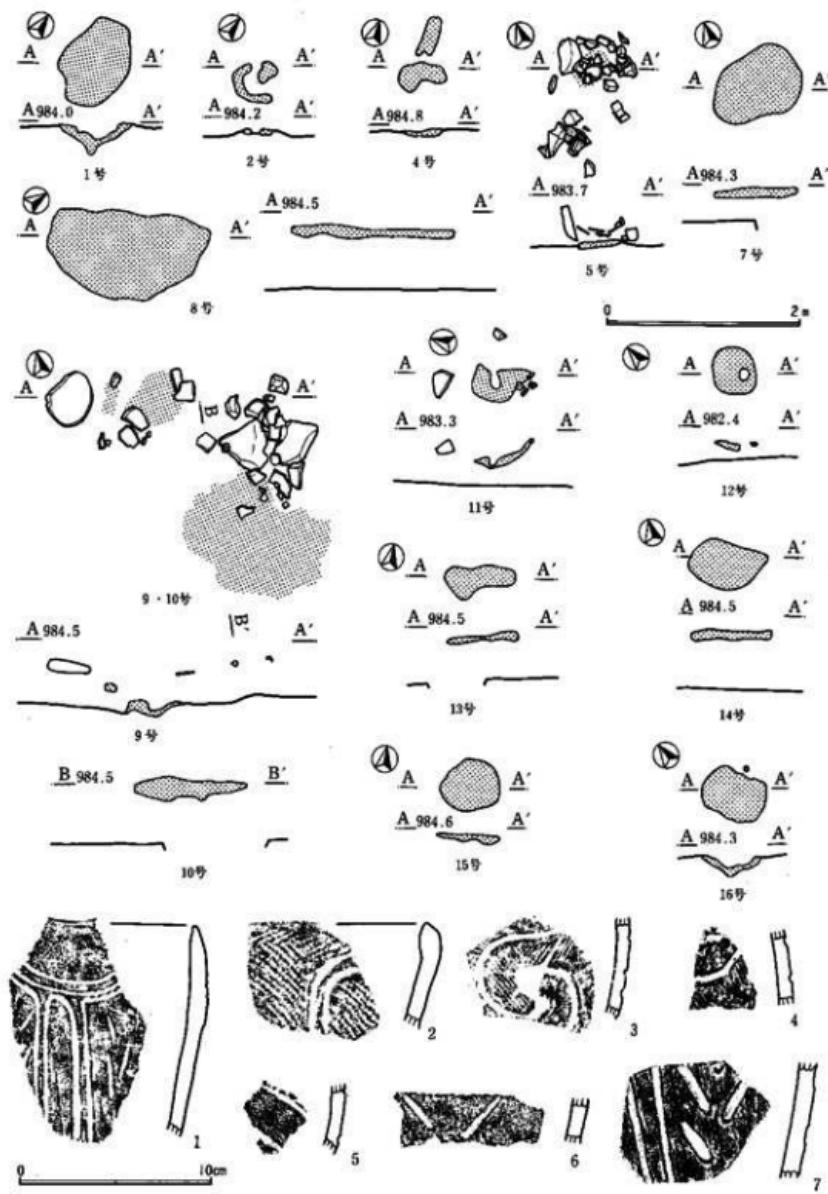
焼土の範囲は65×47cmで、不整形を呈している。厚さは平均で5cmを測る。本址から出土した遺物はないが、第1号配石遺構面とほぼ同じ高さより検出されたこと、第1号配石遺構に隣接することから配石に伴う可能性がある。以上より、本址にはV期からVI期の時期を与えておきたい。

第8号焼土址（第72・76図）第1号配石遺構の東脇より検出された。グリッドは49-Oである。本址の南東には、第7号焼土址が位置する。

焼土範囲は115×60cmで、不整形を呈する。厚さは最も厚いところで約10cmを測る。遺物は焼土内より、第76図3・4・5が得られている。3と4は同一個体の土器片である。3片ともに称名寺式期に位置づけられるものである。そのために本址はVI期の遺構とみられる。また、第1号配石遺構面とほぼ同じ高さより検出されたことから、配石に伴う遺構とも考えられる。

第9号焼土址（第72・76図）本址は発掘区の南東隅、第4号配石遺構内より検出された。54-Hグリッドに位置している。南東脇の上面からは、第10号焼土址が検出されている。

焼土は40×30cmの範囲で楕円形を呈する。その西脇約15cm上からは、25×10cmの焼土が検出された。レベルの低い焼土面は著しく焼けている。その上部、約20cmからは中期最終末期の土器片



第76图 第1·2·4·5·7·8·9·10·11·12·13·14·15·16号烧土址(1/40)出土土器(1/3)

(第74図11) が出土し、また数点出土している。レベルの高い焼土とほぼ同じ高さより出土したことから、本址に伴う遺物と考えられる。しかし、本址の上面より検出された第4号配石遺構が本址に関係する可能性もある。そのために本址には、V~VI期と幅をもたせた時期を与えておきたい。

第10号焼土址 (第72・76図) 本址は第4号配石遺構の南端にかかるように、その上面から検出された。本址の下部からは穴1197が、北西脇からは第9号焼土址が検出されている。グリッドは55-Hに位置する。

焼土は105×80cmの範囲に認められ、最も厚いところで16cmを測る。調査の所見として、焼土は堅く締まっていなかった。焼土内より出土した遺物はない。図示できなかったが、その直下より中期最終末に比定される土器が出土している。また、周辺からは中期最終末から後期初頭に比定される土器片が多く出土している。以上より本址には、V期からVI期と幅をもたせた時期を与えておきたい。

第11号焼土址 (第76図) 発掘区の南側より検出された。グリッドでは42・43-D・Eである。表土剥ぎ作業中に礫が確認されていたことから調査を行い、その結果検出された遺構である。

焼土は35×20cmの範囲に認められ、不整形を呈する。その脇には礫が遺存している。礫の中には焼けた痕跡の認められるものがあることから、本址に伴う礫と考えられる。当初は石窯炉であったのかもしれない。本址からは第76図6のほか、同時期の土器が5点出土している。

本址は、出土した遺物よりV期の遺構と考えられる。

第12号焼土址 (第76図) 発掘区のほぼ中央部で、29-Iグリッドより検出された。

焼土は33×28cmの円形を呈しているが、中央部には黒色土が堆積していた。焼土は最も厚い部分で6cmを測る。本址の時期は、遺物の出土がないため不明である。

第13号焼土址 (第72・76図) 本址は発掘区の南東隅、第35号住居址内より検出された。53-Iグリッドに位置している。

焼土は48×16cmで東西に細長く、厚さは平均で5cmを測る。焼土内からは中期最終末に比定される土器が5点出土しており、その中の1点である第76図7を図示した。本址の時期は土器からみて、V期に帰属する遺構である。なお、本址は第35号住居址内より検出されたが、遺構確認面のレベル差が約40cmある。しかし本址と第35号住居址との時期がV期であること、第35号住居址の柱穴が平均で20cmと浅く床はかなり高い位置にあったと推定されることから、第35号住居址に伴う可能性が十分にある。

第14号焼土址（第72・76図）発掘区の南東隅、51-J グリッドにおいて検出された。本址の南側には第13号焼土址が位置する。

焼土は55×35cmで不整形を呈し、厚さの平均は5cmを測る。本址に伴う遺物はないが、周辺より中期最終末から後期初頭に比定される土器が出土している。そのことより、本址はV期からVI期にかけての遺構とみておきたい。

第15号焼土址（第72・76図）本址は発掘区の南東隅で、第10号焼土址の南側から検出された。56-G グリッドに位置する。

焼土は40×35cmの橢円形を呈し、最も厚いところで6cmを測る。焼土内からの遺物の出土はないが、本址を確認した面の周辺より中期最終末から後期初頭に比定される土器が出土している。以上より、本址はV期からVI期に帰属する遺構と考えられる。

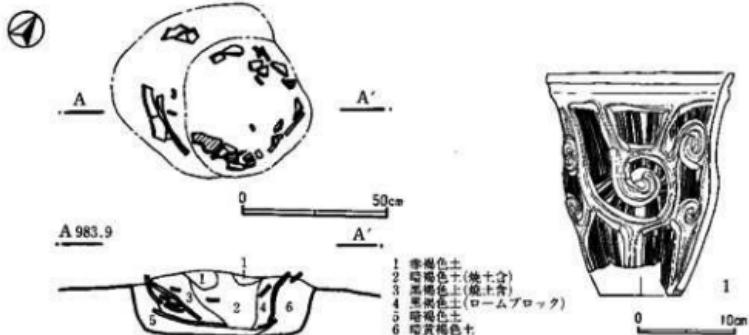
第16号焼土址（第76図）発掘区の東側より検出された。グリッドは56・57-aである。

表土剥ぎの際に本址を確認したため、上部を削っている可能性がある。そのため、当初は円形を呈するよう焼土があったと推測される。本址を半裁すると焼土の内側に暗黄褐色土が堆積していた。この土は人為的に埋められたと考えられた。土内からは縄文土器が1点出土しているため、縄文時代の遺構であることは確実である。しかし土器からは時期の特定が困難なため、本址が縄文時代のどの時期に帰属する遺構なのかは不明である。

(7) 屋外埋甕炉（第48・72・77図）

本址は第2号配石遺構の北東に位置し、第9号方形柱穴列内より検出された。第9号方形柱穴列との関係について当該項で記してある。グリッドでは47-Hに位置する。

確認された当初は、第2号配石遺構とセット関係になり、部分的な敷石をもつ住居址となる可



第77図 屋外埋甕炉（1/20）・出土土器（1/6）

能性を考えていたが、それぞれの遺構から出土した遺物より別時期の遺構であることが明らかとなつた。

埋設されている土器の平面形はダルマ形を呈する。その形状と土器の埋設状態から2個体の土器が埋設され、土器内側の焼土の範囲からは、2つの土器の新旧関係をも把握することができた。それは、東側の土器が西側の土器を切って埋設されている状態であることから、東側の土器が最終的に炉として機能していたと考えられる。遺構の半裁調査では、底面に土器が部分的に敷かれている状態を観察することができた。その後土器を取り上げると、平面では2個体の土器が埋設されていると考えられていたものが、結局3個体の土器からなることが明らかとなつた。土器は著しく熱を受けているようで、もうく壊れやすかった。

図示した第77図1は、曾利III式期でも新しい段階の土器である。そのほかの2個体は、曾利IV式期に比定される土器である。

本址の時期は、埋設されている土器よりII期後半からIII期の遺構である。

(8) 黒曜石集石遺構（第79図）

本址は発掘区の東側、52-Pグリッドより検出された。

遺構検出作業中に粒状の黒曜石が数個検出されたため、周辺の精査を行い黒曜石の集石遺構であることを確認した。集石部の調査では、第79図に図示した8の土器によって、黒曜石を上下に分けている状態を観察することができた。集石の周辺からは、5・6・7の土器が出土した。5と6は同一個体の土器片である。ともに称名寺式期に比定される土器である。出土した黒曜石は計18個で、総量1226gに及ぶ。最も重いものは189g、1個の平均は68gを測る。遺構の時期は共伴した土器より、VI期に帰属するものと考えられる。

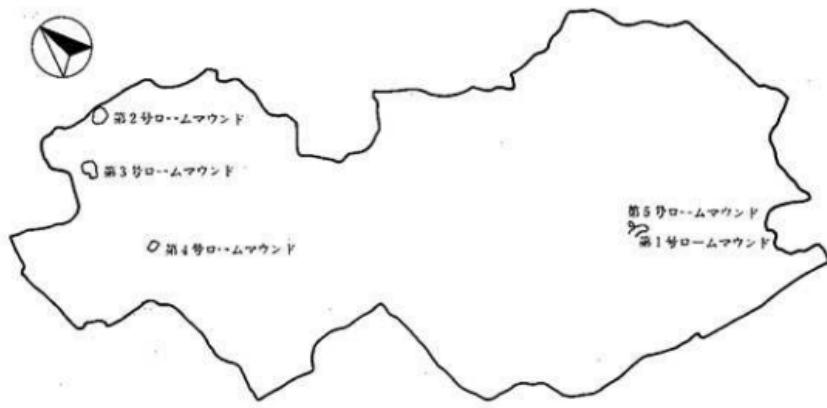
遺物を取り上げ後に集石下部の調査を行い、穴564・574・575の3基を検出した。それぞれの穴から出土した土器と土層断面の観察により、穴の新旧関係が把握された。それによると穴564が最も古くIV期、穴574が最も新しくVII~IX期（第79図1~4）、穴575からは出土遺物がなかったが、穴564と穴574の時期の間に帰属することが明らかとなつた。また図面整理では、黒曜石集石と周辺より出土したVI期の土器（5~8）が、穴575のプラン内に入ることが確認された。以上から、黒曜石の集石は、穴575に伴う遺構であると判断した。

穴575は遺構形態と覆土の状態から、墓坑と認定した遺構である。黒曜石集石は穴575の底面より約30cm浮いた状態で出土しているが、穴575のプラン内に入ることは事実であり、副葬品としての性格をもつ遺物とも考えられる。

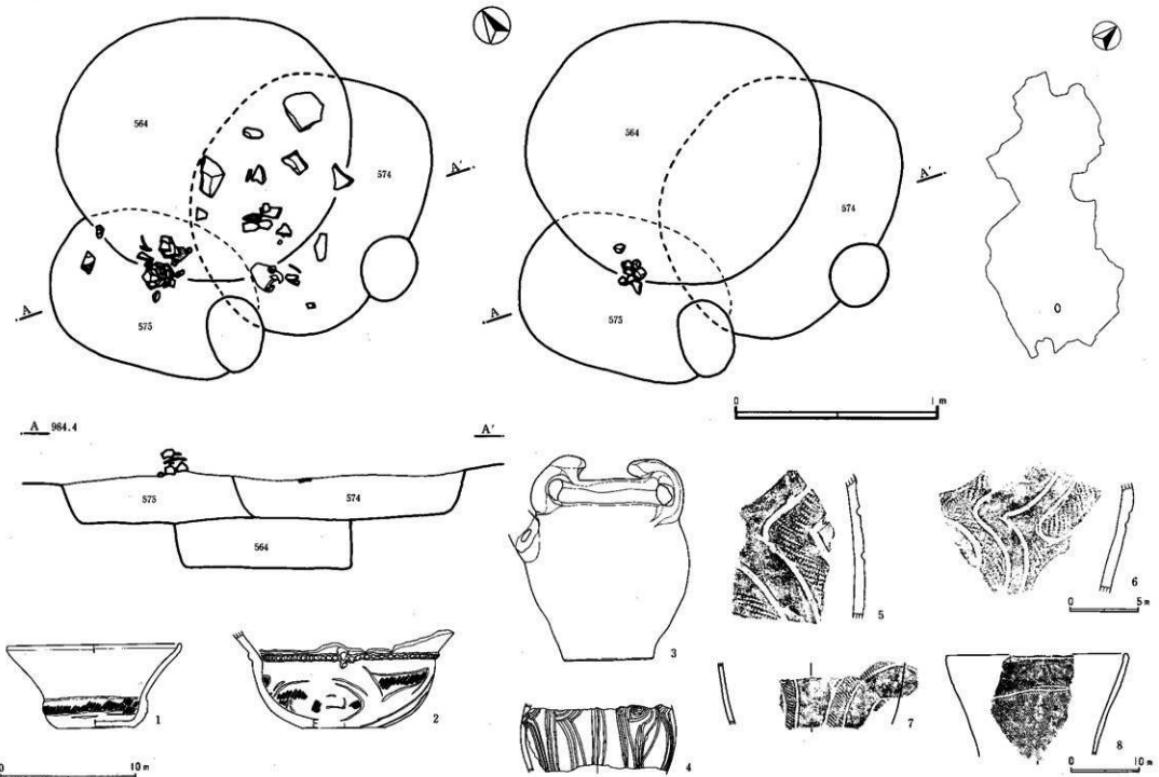
(9) ロームマウンド（第58・72・78図）

調査では、5ヶ所のロームマウンドが確認された。第1・2号ロームマウンドのように規模の大きいものもあれば、第5号ロームマウンドのような小規模のものもある。

遺構と重複関係にあるものは、第1号ロームマウンドである(第58図)。第1号ロームマウンドは穴998・1015・1359と重複し、穴に切られている状態である。3基の穴からは出土遺物がないために帰属時期は不明であるが、穴998の南西に重複する穴744がII期であり、土層観察では穴998が古いと考えられた。そのことから、縄文時代の遺構である穴998より古いことは確実である。しかし、出土遺物がないために明確な時期は不明である。



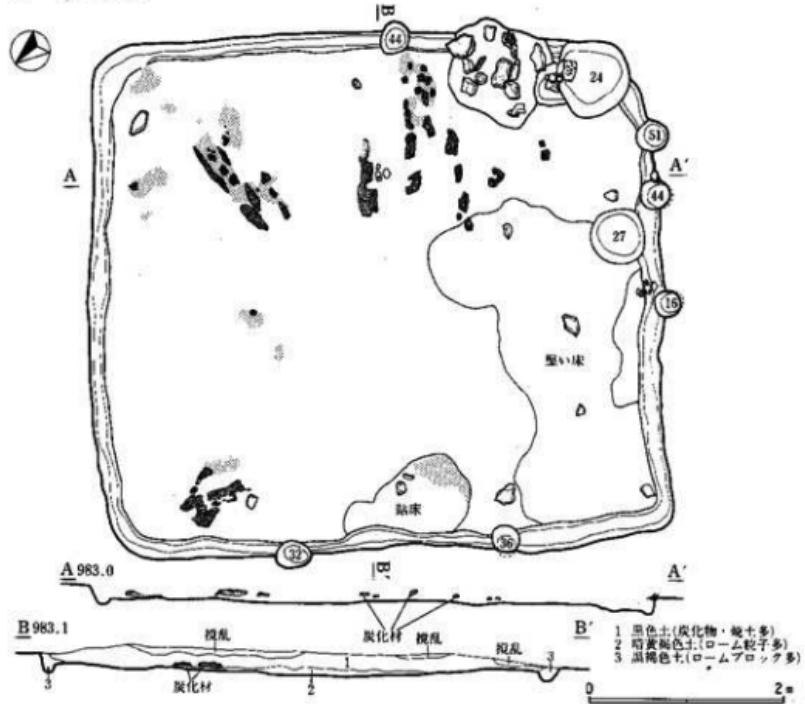
第78図 第1・2・3・4・5号ロームマウンド



第79図 黒曜石集積構造 (1/20)・出土土器 (1・2・3・5・6は1/3, 4・7・8は1/6)

2 平安時代の遺構と遺物

(1) 住居址

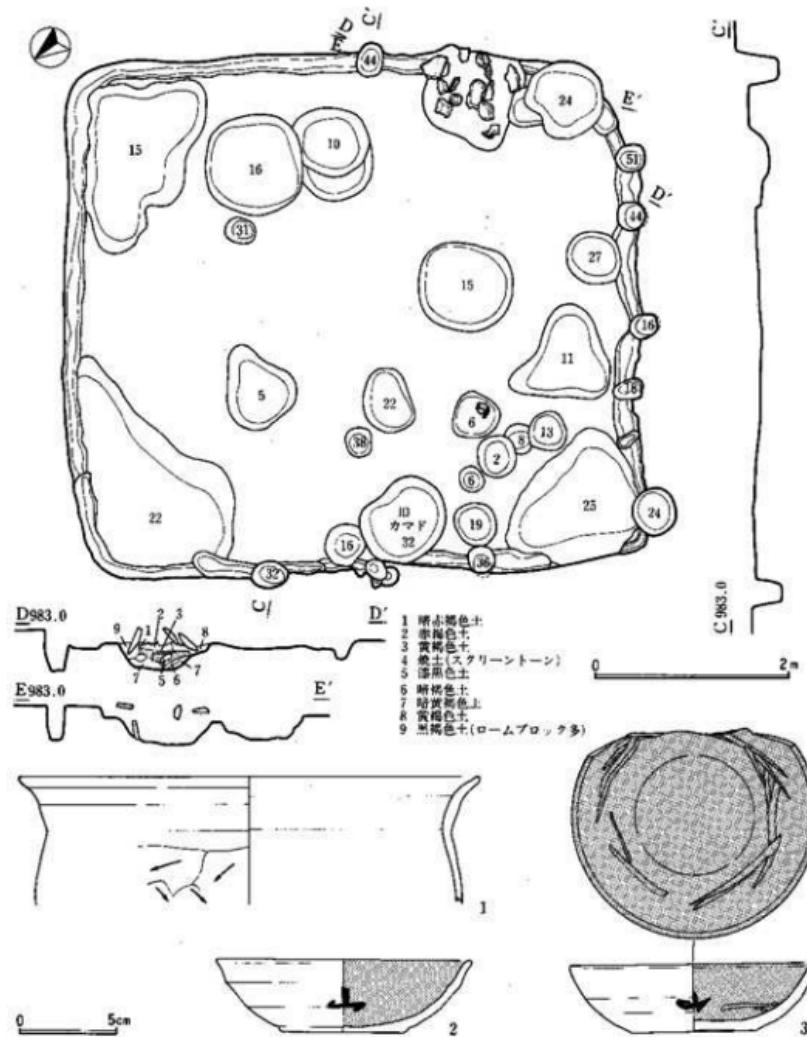


第80図 第11号住居址 (1/60)

第11号住居址（第80・81図）本遺跡で唯一の平安時代の遺構である。遺跡のはば中央34・35-Mグリッドを中心に位置する。

竈を2ヶ所で確認し、1回拡張が行われていることが判明した。新住居址は、長軸5.6m、短軸5.3mで主軸方向はN-53°-Eを示す比較的規模の大きい隅丸方形の平面形を持つ住居址である。旧住居址の規模は不明であるが、主軸方向はS-52°-Wである。壁は軟弱で判然としない。周溝は新住居址のものが全周していることが確認でき、9~18cmの深さである。南側を除く隅に三角形に凹んだ個所が検出され、これらが新住居址の主柱穴に係る遺構であると思われる。他に柱穴と考えられるピット状の穴が9基と床下土坑18基を検出している。

竈については、北西側壁中央で検出された焼土の上部に貼床がなされていたことが確認でき、古い住居址の竈であると考えられる。この竈は新住居址の周溝に切られている。西側には、白く紫がかった光沢のある貼床を施した穴があり旧竈の灰搔き穴と思われる。新住居址の竈は東壁南寄りにあり、竈の構築物であったと考えられる石が出土しているが、原形をとどめていない。



第81図 第11号住居址 (1/60)・出土土器 (1/3)

床直上から床上 5 cm にかけて放射状に炭化木及び焼土が検出され、焼失住居址であることが判明した。炭化物の下には黒色土が堆積している。

出土した遺物は、接合関係や底部により土器器坏 1 個体以上、黒色土器 15 個体、甕 6 個体以上、須恵器大甕破片 1 個体分であり、黒色土器のうちに暗文を持つものが 4 個体、墨書を持つものが 1 個体、両方を持つものが 1 個体ある。以上の中から 3 個体を図示した。



まとめ

1 立石遺跡における穴の性格

(1) 「穴」の名称について

立石遺跡からは、1500基を超す穴状の遺構が検出された。これらは一般的に「小豎穴」や「土坑」と総称される遺構であるが、調査では「穴」という名称を与えた。穴には、人間がある目的意識をもって掘り上げた穴と、様々な自然現象により生じた凹み等の穴がある。調査で用いた「穴」は前者を指している。そのため、本来ならば学史を重んじ「小豎穴」・「土坑」の名称を与えるべきで、「穴」という名称を同列のレベルで使用すべきではないだろう。

「小豎穴」・「土坑」はそれぞれが形態、規模に差異をもつことから、多岐にわたり用いられた「穴」と理解される。そこで、便宜的に「穴」という名称を用いて、調査で得られた資料をもとに遺構の性格を考えることにした。

(2) 穴の性格づけと規模

遺跡のほぼ全面より穴が検出された。特に、遺跡の東側には穴の集中する傾向があり、穴どうしの重複も多く見受けられる。形態・規模はバリエーションに富んでおり、個々の穴がもつ性格の違いを感じとることができる。調査では1538までに通し番号を付したが、欠番となったものが14あるため、実際は1524基に番号を付したことになる。

1524基の穴は、それそれが柱穴、墓坑、貯蔵穴、ゴミ穴などの様々な性格をもっている。調査では穴の性格を明らかにするために、穴の配列はもとより各穴の平面や断面での土層観察、遺物出土状況の観察を行なった。その結果、363基に有機的な結びつきを見い出すことができた。これらは、方形柱穴列と掘り込みの確認できなかった住居址に伴う柱穴である。

1524基から363基を差し引いた1161基は、明確に組み合わさるものがないことから、単独で機能していたと考えられる。幾つかの穴では、覆土の状態や出土する遺物に共通性が認められた。さらに同じ共通性を示す穴が、形態的に類似性をもつことも窺えた。そのことにより、穴の性格を把握できたものもある。しかし、そのような穴は一部にすぎなかった。

今現在は性格不明の穴でも、当初は何らかの目的意識のもとに穴が掘られたはずである。同じ機能をもつ穴の形態は、すべて同じとは考えられない。しかし、ある程度定まった規格をもつ可能性が考えられる。そこで客観的な見地から穴の形態分布を見るために、363基の柱穴を含めた1524基の上面長径と深さをもとにグラフ（付図）を作成した。グラフからは、幾つかの穴のまとまりが把握できた。

ここでは、調査で得られた個々の穴に共通する事象とグラフに示された穴の分布から、検出された穴の性格を考えていくことにする。

1. 柱穴

柱穴としての性格づけは、以下に述べる二点の事象によった。

一点は、平面と断面の観察で柱痕の確認できたものである。柱痕の確認できた柱穴の多くは、方形柱穴列を構成する規模の大きな柱穴である。その中の半分以上は、遺構確認面でも柱痕が確認できた。住居址に伴う規模の小さな柱穴程度の穴で、柱痕の確認できたものは少ない。約300基の穴で断面観察を実施したが、確認面で観察される土が底まで入る、単一層の穴が大部分を占めた。方形柱穴列に伴う柱穴の柱痕は、遺構確認面でその多くを確認している。そのため、規模の小さな柱穴も遺構確認面で柱痕の有無を観察した。

もう一点は柱痕が確認されなくても、方形柱穴列や掘り込みの確認できなかった住居址に伴う柱穴となるものである。単独とみられる規模の小さな柱穴の多くは、掘り込みの確認できなかつた住居址の柱穴と、上面長径が類似することより柱穴と認めている。

柱穴の規模はグラフによると、2種類の大別が可能である。

1つは、上面長径が25~60cm、遺構確認面からの深さが10~70cmの範囲に分布する規模を有する柱穴である。ここには、掘り込みの確認できなかつた住居址と方形柱穴列の柱穴も含まれるが、前者が主体である。また単独と考えられる穴で、柱痕の確認できた柱穴も上記の範囲内に1つのまとまりが看取される。遺構確認面を考慮するならば、10~70cmの深さは当時の深さを示しているとは言えない。これに対して長径は、柱穴の掘方が円筒状、あるいは壁が急傾斜する逆台形状を呈する場合が多く、遺構確認面が上下してもそれ程変わらない数値を示すと考えられる。このことから、その他とした赤の○により示された穴で、長径が25~60cmを測るものには柱穴の名称を与えて良いだろう。

もう1つは、長径が60~100cmで、深さが35~130cmの範囲に含まれる規模の柱穴である。方形柱穴列を構成する柱穴が主体で、単独で出土した柱痕をもつ柱穴も20数基含まれている。

上記で述べた規模の小さな柱穴の中には、方形柱穴列の柱穴も含まれている。そのことから、本遺跡より検出された方形柱穴列の柱穴には、上面長径が60cmを境とする大小2つの規模があることを指摘できる。

この中には、掘り込みの確認できなかつた住居址に伴う柱穴も数基見受けられる。第2号住居址でP₁・P₂₂、第36号住居址でP₁・P₁₈としたものなどである（第31図）。どちらも住居址の出入り口部とみられる両側に位置する柱穴である。

なお、その他とした赤の○の穴が40基余り含まれる。これについては、後述する(2)3. 貯蔵穴の項で触ることにする。

2. 墓坑

墓坑と認めた穴は112基ある。いかなる穴を墓坑と認めるかということで、調査当初は遺構確認面における平面形を分類の最優先基準にしようと考えた。これは、明科町北村遺跡から検出され

た墓坑の平面形が、橢円形・隅丸長方形・卵形によって大半を占めている事象による。遺構確認面における平面形は、遺構の重複と後世の搅乱により、変形している可能性が考えられる。そのため、分類の基準としては項を設けてはいない。しかし、方形が橢円形に変形するような極端な変化は考え難く、分類に際しては平面形が橢円形・隅丸長方形の穴をある程度意識して取り上げている。

他の遺構から転用されたと判断した墓坑以外は、当然のことながら当初より墓坑とする目的で穴を掘っている。たとえ掘られた穴が規模の小さな穴でも、被葬者を埋葬することが可能であれば、その目的を達したことになる。また埋葬という行為は再葬しない限り、一時的な行為として捉えられる。以上より、墓坑の構築に必要以上の労働力を投下したとは考え難く、例えば深さが1mを超すような大規模の穴は必要なかったと考えられる。

担当者は、平面形が橢円形・隅丸長方形を呈し、深さが比較的浅い穴を墓坑形態のイメージとして捉えている。墓坑形態のイメージと、調査によって得られた具体的な事象を加味し、墓坑とみなせる穴の抽出を行なった。具体的な事象は、A-出土遺物、B-覆土の堆積状態、の2点を対象とし、この中を幾つかの項目に分けた。分類はAを優先して行なった。以下、分類項目と該当する墓坑について列挙する。

A I. 完形・半完形の土器が出土した墓坑	123・307
II. 磁の出土した墓坑	735
III. 磁・土器の出土した墓坑	574・1290
IV. 上面に配石された墓坑	591・775
V. 石器・石製品の出土した墓坑	306・575・630・632・688・782・836・964・975 984・997・998
VI. 土器・磁・石器の出土した墓坑	744・1252・1273・1289

Aについては、一括性のある遺物を出土した穴を基本とした。

B I. 覆土にロームブロック・粒子を多く含む墓坑	124・125・126・127・141・159・215・ 322・502・503・504・506・507・523・529・530・531・532・538・539・543・544・564・ 583・588・594・596・619・622・623・624・633・634・635・636・637・639・651・660・ 662・664・668・669・743・764・783・797・800・829・870・871・872・888・905・917・ 919・947・948・950・962・963・1054・1132・1140・1191・1192・1202・1227・1228・ 1229・1239・1240・1247・1254・1255・1278・1279・1282・1283・1285・1291・1306・ 1357・1358・1359
II. 覆土に焼土ブロック・粒子を多く含む墓坑	776・1016・1246・1286

Bについては、人為的に埋められたとみられる穴を基本とした。ロームブロック・粒子の量は担当者の主觀とし、穴の断面で観察した。断面から得られる情報は、穴の一面を表しているにすぎず、たまたまロームブロックから外れた面を観察する場合もある。そこで平面の観察も合わせて検討した。断面の観察では、覆土の分層が可能な墓坑があった。遺構の性格を考えれば、分層

線は時間差を表すものではなく埋土の違いを表すことになる。覆土は強い粘性を帯び、良く締まっているものが大部分であった。

上記の分類項目に該当するものの、形態と規模から貯蔵穴とみられる穴が4基認められた。穴591・775・776・1252である。これらは墓坑への転用と解釈し、最終的な遺構の性格を重視した。墓坑の規模は概ね、上面長径が75~150cm、遺構確認面からの深さが5~45cmの範囲に入る。上面長径が80~100cmの墓坑と、同じ上面長径を測る方形柱穴列に伴う柱穴の深さを比較してみると、40cmを境として分布が明確に分けられる。

墓坑の規模は、掘られた穴の規模が小さくとも被葬者の埋葬が可能であれば、墓坑として機能することは既に述べている。言い換れば、被葬者の体格と埋葬姿勢を考えた上で墓坑が掘られていると言えよう。基本的に墓坑の規模と平面形態は、被葬者の体格と埋葬姿勢により決まるものと考えられる。

なお、その他とした赤の○で示された穴が、墓坑の分布内に20数基含まれている。規模的には墓坑となり得る穴だが、分類項目に該当しないことから性格が判然としていない。しかし分類項目は分類上での便宜的な基準にすぎず、分類枠から外れる穴でも墓坑となる可能性が考えられる。

ここで分類項目のB Iについて考えてみたい。本遺跡より検出されたすべての墓坑は、ローム層に掘り込まれている。被葬者の埋葬に際しての埋土は、墓坑の掘り上げに伴う土を埋め戻すと考えたほうが自然であり、たとえローム層への掘り込みが浅くとも埋土中にロームブロック・粒子が入ることになる。しかし当時の生活面は、遺構を確認した面よりも高いことは確実であり、調査において生活面は黒褐色土中にあったと考えられる。そこで、墓坑周囲の黒褐色土により墓坑が埋められることも考えられる。そのため、その他とした20数基の穴の中には、分類のB Iに該当しなくとも墓坑となり得る可能性のあるものも含まれていよう。

3. 貯蔵穴

貯蔵穴は植物質食料から様々な物品を貯蔵するための穴である。本遺跡にも調査の所見から貯蔵穴とみられる穴が存在する。しかし、内部に貯蔵された物質が遺存していた穴ではなく、いずれも推測の域を出ないものである。覆土の状態は、自然堆積と人為的に埋められた堆積とみられる2種類が認められ、墓坑のような基準項目を設けて性格を考えることは難しい状況にある。そこで手掛かりとなるのは掘方と考えられる。貯蔵穴として機能するためには、ある程度大きな平面規模をもつことが必要と思われる。また、墓坑のような一時的に必要とされる穴と違い、長期の使用に耐え得る、歓のしっかりとした深い掘方の穴が必要となろう。

従来、貯蔵穴とされる穴の形態は、袋状を呈するものが多いと指摘されている。本遺跡から検出された穴の中で袋状の穴はほとんどないが、内傾する壁の崩れと遺構確認面とを考慮すれば、袋状を呈する状態で検出される穴の少なさも納得できる。

以上より、その他とした赤の○で示した穴で、方形柱穴列の柱穴で規模の大きな柱穴（上面長

径60~100cm、深さ35~130cm)に類似する規模の穴と墓坑とした穴を除く良好な掘方の穴の多くを、貯蔵穴と考えて良いのではなかろうか。貯蔵穴とみられる穴には、第14号方形柱穴列のP₃に重複する穴109、第14号方形柱穴列の北側短辺にかかる穴112、第2号住居址内より検出された穴498(第31図)、第14号方形柱穴列のP₁に重複する穴691(第52図)、第17号方形柱穴列の北東に近接し第1号ロームマウンドに重複する穴1015(第58図)、第22号住居址に重複する穴1203・1204・1205(第23図)、第6号住居址に西側に重複する穴1146(第5図)、第24号住居址の南に近接する穴1216、III・3・(3)穴のNo.6で記述した穴1256・1257・1259・1260・1261・1350・1351(第68図)などがある。

(3) 穴の時期と遺跡内における性格

ここでは(2)で述べてきた1.柱穴、2.墓坑について遺構から出土した遺物より帰属時期を特定または想定し、遺跡内における位置からその性格を考えてみたい。1.柱穴では本題からやや外れるが、②として方形柱穴列の形態・規模・性格について若干触れることにする。2.墓坑は性格が把握されているので、遺構の時期と遺跡内での位置を中心に記述する。記述を行うにあたり、便宜的に第13号住居址・第6号方形柱穴列より東を「遺跡の東側」、これより西を「遺跡の西側」と呼称する。

1. 柱 穴

①単独とみられる柱穴

本遺跡で確認した、ほかの穴と組み合わさらない単独とみられる柱穴に、大小2つの規模があることは(2)で指摘している。柱穴内から出土した遺物は少なく、時期の判然としないものがほとんどである。はじめに規模の小さな柱穴、続いて規模の大きな柱穴を述べていく。

規模の小さな柱穴で時期の特定・想定の可能なもののは83基である。時期はIII期からIX期まで見受けられ、最も多い時期はVI期の27基、次いでVII期の12基である。また、後期の中での時期不明の土器が出土した柱穴が21基ある(VI~IX期)。VI期とVII期の柱穴数にVII期とIX期、さらにVI期~IX期の柱穴を加えると、後期の柱穴総数は62基となる。以上より、規模の小さな柱穴の多くは後期に帰属していることが判る。

次に遺跡内における位置を見てみる。遺跡の西側で時期の把握された柱穴は、III期に属するとみられる1基である。そのために帰属時期の把握された残りの82基は、遺跡の東側に位置することになる。これは、東側に掘り込まれる柱穴の数が、西側の柱穴に比べて多いことも関係している。

遺跡の東側では、全域より柱穴が検出されている。しかし、柱穴の集中する箇所と散発する箇所のあることが指摘できる。集中する箇所は、B群とした墓坑群(B墓坑群)の東から南にかかる一帯である。柱穴は帶状を呈するような分布状況を示している。ここで帶状に分布する柱穴を

便宜的に「ピット群」と呼称する。ピット群の南は、第14号方形柱穴列、第34・35号住居址と重複するが、北側の第2・9・36号住居址と第14号方形柱穴列の間に他遺構の構築されない、柱穴の集中する箇所が見受けられる。その在り方からは、柱穴のある空間を意識して他遺構が構築されていると考えることができる。その東側には遺構の希薄な空間が見られる。第1号住居址と第12号方形柱穴列の間である。柱穴の密集する箇所と同様に、意識的に空間を避けて他遺構が構築されているようにも見受けられる。また、南北に細長い形態を示す第1号配石遺構の東側に、ピット群が沿うように位置する点も興味深い。

ピット群の中で、時期の把握できた柱穴の多くは後期に属するものである。ピット群は後期の遺跡において普遍的な存在であることからも、後期に帰属する遺構と考えて良いと思われる。他遺構との時期的な関係をみると、ピット群の周辺より検出された住居址は、第7・9号住居址を除けばすべて後期に帰属する住居址である。また、第1号配石遺構の時期が中期最終末から後期初頭に位置づけられることからも、後期とするには問題ないと思われる。しかし、ピット群の占地する全面より中期最終末から後期初頭を主体とする土器が多量に出土した事象より、ピット群には中期最終末から後期前半の幅をもたせた時期を与えておきたい。

ピット群の中で、方形柱穴列のように規則的に組み合わさるものもあるが、柱穴数の多い点から信憑性に欠けるものである。また規則的な配列をなさなくとも、幾つかの柱穴による構成で簡単な上屋が架けられていたとも考えられる。このような、簡易な構築物の造られる位置が規制されていた結果として、ピット群が形成されたのかもしれない。しかし柵畠遺跡でも指摘されているように、柱穴の規模が小さい点からも大形の上屋を有していたとは考えられない。

立石遺跡のピット群は南側部分で住居址と重複している。この点は八王子市神谷原遺跡にみられるピット群と異なるが、基本的に住居址とB墓坑群の間に形成されていることが指摘でき、集落構成の上では類似していると言える。神谷原遺跡では何らかの人間の精神生活に由来する遺構ではないかと考察されている。立石遺跡のピット群も同様に解釈しておきたい。

統いて、規模の大きな柱穴で方形柱穴列のような明確な組み合せのない、単独とみられる20数基の柱穴について触れてみる。

遺跡内における柱穴の分布は、規模の小さな柱穴と同様に遺跡の東側に集中している。分布を詳細にみると、大きく4つのまとまり（群）が看取される。B墓坑群の西側で南北に弧を描くように柱穴が配列する群（1群・第64図）、前述したピット群の中で、柱穴の集中する箇所とB墓坑群の間に位置する群（2群）、第7・34号住居址と第12・13・14号方形柱穴列が構築される箇所に位置する群（3群）、A墓坑群の東側に位置する群（4群・第56図）である。なお各群の周辺には群を構成する柱穴と類似する、柱痕をもたない穴が存在している。調査では穴の性格を明確にできなかったが、形態と規模、周辺から検出されている遺構との関係より柱穴と考えたい。

4群と他遺構の位置関係で、幾つかの注目される点がある。まず、1群がB墓坑群の円弧に沿っている点である。その在り方から、環状を呈するB墓坑群の一部分を構成する遺構と考えられ

る。なお、1群で柱穴と認められた穴は7基である。2群は1群とB墓坑群を挟んで対峙している。柱穴と認められたものは3基と少ないが、柱穴とみられる穴がB墓坑群の円弧に沿って4基検出されている。いずれもB墓坑群の円弧に沿う位置に掘り込まれている点は興味深い。3群は、1・2群のような配列を示さず、散発的な在り方である。本群の柱穴の特徴は、他群の柱穴に比べて相対的に規模が大きいことである。周辺には、本群の柱穴と規模の類似する穴が7基程みられるが、形態と規模よりみて柱穴と考えられる。柱穴はある程度の間隔をもつように、掘り込まれているようで、4本柱ならば規則的な配置を示すものがある。なお、本群の柱穴よりも規模の大きな穴が隨所に見られることから、柱穴と重複し確認できなかったとも考えられる。そのため、方形柱穴列が存在していた可能性がある。4群の柱穴は5基である。このほかに形態と規模からみて、柱穴とみられる穴が6基ある。A墓坑群に近接する点は、基本的に1・2群と同じである。以上より、1・2・4群は墓坑群に近接する共通性が窺える。3群は1・2・4群とは性格の異なる群と考えられる。

ここで、群の中の柱穴が同時期のものであるのか否かを、1群と4群で見ることにする。

1群は、II期またはIII期が1基、IV期が1基、V基が1期、VI期が1基、VII期からIX期のいずれかの時期が1基である。これより、同時期となる可能性がある2基を除き、異なる時期の柱穴であることが把握される。

4群では、V期またはVI期が1基、VI期が2基、VII期が4基で、1基がVI期となる可能性もあり、大きくVI期とVII期に分けられる。この点は1群との相違点である。

1群を構成する柱穴の位置は、柱穴間隔のさほどない密な柱穴配列を示し、重複するものも見受けられる。この事象に先程の柱穴の時期を考え合わせるならば、個々の柱穴が時間差をもちながら、南北に弧を描くような配列をした結果と言えよう。柱穴の配列状態からは、柱を建てる位置が規制されていたと考えられる。先にも述べたが、1群は環状を呈するB墓坑群の一部分を構成する柱穴と考えられる。ここには、トーテムポール様の柱が建てられていたのかもしれない。

1群と対峙する2群の中で、時期の特定ができる柱穴はII期またはIII期の1基である。1群にも同時期で類似する規模の柱穴がみられた点と、ほかの柱穴がB墓坑群の円弧に沿う事象からみて、1群と同様の性格を有する遺構と考えられる。

4群内での柱穴配置をみると、柱穴に重複のないことが指摘できる。これに柱穴の時期を加味するならば、幾つかの柱穴は同時に機能していた可能性があると言えよう。1群と様相が異なることから性格は判然としない。しかし、墓坑群に隣接する位置に柱が建てられていたことに変わりはない。

以上、調査において単独とみられた柱穴について記述してきた。繰り返しになるが、簡単にまとめてみたい。規模の小さな柱穴は遺跡の東側に集中し、多くは後期に帰属する時期の遺構とみられた。その中でも「ピット群」と呼んだ帶状に分布する柱穴が、基本的に住居址とB墓坑群の間に形成されている。また方形柱穴列に伴う柱穴に、類似する規模を有する単独とみられた柱穴

も、遺跡の東側に分布の主体があり4つの群をなしている。この中で1・2群とした遺構に、穴のもつ性格、集落内における群の位置からピット群と同様の見解を示した。

②方形柱穴列

方形柱穴列は、調査と整理作業により、合わせて17基確認することができた。この数は当地域の一遺跡から検出される数としては多く、方形柱穴列の時期や性格、また遺跡内での方形柱穴列の在り方を考える上で良好な資料となるであろう。

検出された17基の方形柱穴列を石井寛氏の分類に従って類別すると、A 2-3種とされるものか14基と圧倒的に多く、A 2-4種が1基、A 2-5種が1基、A 3-3種が1基となる。

A 2-5種としたものは第16号方形柱穴列で、柱穴の在り方よりB種になる可能性がある。これに関しては当該項に記してある(第54図)。ここでは調査結果を重んじ、A 2-5種として扱いたい。

最も多いA 2-3種では、同種でありながら平面形態と平面規模がバラエティーに富んでいる。平面形態は方形に近い長方形と、長方形の2タイプに大別できる。方形に近い長方形は第4・11号方形柱穴列である。2基は検出された17基の中では小規模である。第12・13号方形柱穴列は長辺と短辺の差が1m程ある。しかし、ほかのものと比較するならば方形に近い方形柱穴列として良いだろう。これに対し長方形を呈するものとしては、長辺が短辺の3倍以上もある第2・8・9号方形柱穴列がある。特に第9号方形柱穴列は、長辺が短辺の4倍に近いものである。平面規模は、最も規模の小さい第11号方形柱穴列が6.0m²、最も規模の大きな第14号方形柱穴列が29.8m²を測り、その差は約5倍である。

A 2-3種でのこのような差は、どのような要因によるものであろうか。平面規模の差について1・2・(2)でも触れているが、柱穴の規模と上屋構造は密接な関係にあるため、構造の大小により柱穴の規模も変わるのであろう。平面形態の差は、構築物全体の構造が異なるとも考えられる。では、第6号方形柱穴列と第14号方形柱穴列のように相似形に近いものの存在を、どのように解釈すれば良いのであろうか。そこで考えられるのは、方形柱穴列のもつ性格の違いである。また、方形柱穴列が互いに重複する事実から、時期差も考えられる。しかし、基本的には方形柱穴列のもつ性格の違いであると担当者は考えている。

ここで、方形柱穴列の遺跡内における位置と時期を概観してみる。時期の決定は柱穴内から出土した遺物によったが、出土遺物に乏しいものが多い。しかし、出土した遺物を尊重して遺構に時期を与えている。

遺跡内における位置は、西側で3基、東側で14基を数え、東側に集中することが指摘できる。長軸方向は、概ね等高線に長軸をもつように構築される。集落構成の上から方形柱穴列の位置をみると、基本的に東側ではB墓坑群を中心として住居址の外側に円弧を呈していると言えよう。時期の把握できた方形柱穴列は17基の中の11基で、III期が1基、IV期が2基、V期が1基、VI期が3基、VII期が3基、VIII期が1基である。これによると立石遺跡では、III期にその出現を見た後、

VIII期まで継続して見ることができる。

時期別の変遷は本節・2に譲るとしている。ここでは、方形柱穴列に幾つかの注目すべき点が見受けられたので、その中の2点を取り上げて記述していく。

方形柱穴列の平面形態と平面規模は、先程A 2 - 3種について若干触れている。立石遺跡の同種の方形柱穴列は14基を数えるが、平面形態では長辺が短辺の3倍以上もある細長い長方形のものが注目される。このような細長いものでは、長辺の中間に位置する柱穴で、2等分した柱穴の間隔に差のみられる場合が多い。このことは各遺構の記述の際に指摘している。また細長いものだけでなく、第11号方形柱穴列のような方形に近いものにもその現象がみられる。平面規模では、本遺跡最大の規模を有する第14号方形柱穴列が注目される。長辺7.25m、短辺4.3mを測り、面積は29.8m²を測る。遺構の時期は出土した土器より、VIII期（称名寺式期～堀之内I式期）に帰属する遺構である。

A 2 - 3種でこのような大形の規模を有するものとして、茅野市下ノ原遺跡の「方形配置土坑」とされる遺構が挙げられる。調査では6基検出され、第2号方形配置土坑とされたものは、長辺9.20mの規模を有する大形のものである。遺構の時期は後期で、堀之内I式期の可能性が考えられている。港北ニュータウン地域において掘立柱建物の類別と時期別の集成を行った石井氏は、当該地域では後期に入ると掘立柱建物の規模が中期に比べて小形化することを指摘している。また、A 2種は中期にこそ多く認められるが、後期ではA 2種が減少して、主体がA 3種へ移行するとし、前述した茅野市下ノ原遺跡のA 2 - 3種に類別される「方形配置土坑」を取り上げて、当該地域の後期に帰属する掘立柱建物構成の基本である、規模の大形化に従って柱穴本数も増加するという基本に従わない例と指摘している。

立石遺跡の第14号方形柱穴列も下ノ原遺跡の遺構に類する規模のものである。また第1・12・13号方形柱穴列も第14号の規模には及ばないが、比較的規模の大きなA 2 - 3種の後期遺構と言える。いまだ、このような形態と規模を有する遺構の検出は数基を数えるにすぎないが、当地域における後期の一様相を示す例となり得る可能性もある。

次に、VI期に帰属するとした第15号方形柱穴列について、遺跡内における位置とその性格を考えてみたい。

平面形態は本遺跡で唯一の、A 3 - 3種に類別される六角形の方形柱穴列である。その形態からはA 2 - 3種とは構築物の構造が異なると考えられるが、本遺跡においては、遺構のもつ性格の違いも表していると考えられる。

集落内における位置は遺跡の東側で、B墓坑群が環状に巡る円弧上に構築されている。長軸方向に着目すると円弧線上にのることが看取される。さらに構築される位置を見ると、B墓坑群（墓域）を構成する1つの遺構とみることができる。そのため長軸を意識的に円弧線上にのせていると考えられる。

他遺構との重複関係をみると、遺構内に柱穴であろう穴が1基検出されている。短辺中央の柱

穴を結んだ線上に位置することから、本址に伴う柱穴としても良いだろう。本址のP₂は墓坑とした穴905、P₅も墓坑とした穴984と僅かに重複している(第64図)。穴984から出土遺物がないため時期は不明であるが、穴905の時期は出土した土器よりII期の遺構とみられる。ここで注目したいのは、第15方形柱穴列内に墓坑が1基も構築されていない点である。B墓坑群の形成され始めた時期は、墓坑内から出土した遺物よりII期であることが確認されている。本址の時期はVI期でありII期とは時間的な隔たりがある。そのためII期からVI期までの間に、本址の占地する場所に墓坑が構築されても何ら不思議はないわけである。しかし遺構内より墓坑の検出がない事実は、何らかの理由により墓坑の構築が認められなかつたことを示唆するのではないか。本址の南から検出された柱穴群の性格は①で述べている。これらの柱穴群は互いに時期差をもち機能していたとみられ、環状を呈するB墓坑群の円弧に沿って規則的な配列を示している。そのことから、柱穴の構築位置は何らかの規制により決められていたのではないかと考察した。柱穴群の形成もB墓坑群の形成とはほぼ同時期(穴869がII期またはIII期)とみられるため、墓坑と同様に本址の占地内に柱穴が掘り込まれていても良いわけである。以上から、本址の占地する空間に墓坑を含めた他の遺構を構築してはならない何らかの理由があったと考えたい。

本址の時期はVI期であるが、該期に廃絶されたことも考えられる。また、3本の柱穴に建替えがみされることから、VI期より前に構築された遺構の可能性もある。本址が機能していた時間は不明と言うしかない。

本址の性格は、B墓坑群に伴う遺構とみられることから、喪葬儀礼に関わる施設としての性格を有する遺構と考えられる。

2. 墓坑

墓坑は、A群とした墓坑群(以下A群)からは7基、B群からは65基、C群からは10基、D群からは11基で、それ以外の箇所から19基の合計112基検出された。墓坑群としての認識は、基本的に「形態の類似する墓坑の集まり」を基準とした。この項では4群の墓坑を中心として、時期、遺跡内における位置などを中心に記述してみたい。

A群は発掘区の東隅に位置する(第56図)。北側に第4号住居址(V期)、西側に第30号住居址(V期)、南西側に第2号方形柱穴列(IV期)が位置する。穴141とした墓坑は第2号方形柱穴列と重複している。時期の明らかとなった墓坑は穴123(VIIまたはIX期)、穴126(VI期)、穴159(VIIからIX期のいずれかの時期)の3基である。穴159は後期のどの段階に期属するのか判然としないが、出土遺物からみると墓坑の時期は、後期の中で2時期に分かれることは確実である。遺物の出土がない穴125・127と穴126との位置関係をみると、穴125と穴126が重複すること、穴127が重複する2基に並ぶ近い位置にあることから、同時に構築されたとは考え難い。位置関係からは、3時期に分けられる可能性もある。長軸方向に着目すると、北東から南西に長軸をもつものと、北西から南東に長軸をもつ2群に分けられる。

A群の位置は、B群の中央から東へ約35m離れている。B群を構成する墓坑で土器の出土を見たものは9基である。それによると、後期とみられる墓坑が3基があり、この中にはA群と同時期とみられる墓坑も含まれている。そのことから、A群と同時に墓域が機能していた可能性もある。そうだとすれば、A群の性格が問題となる。

A群とB群を調査した所見として、幾つかの相違点が挙げられる。A群の平面形態は總じて長軸の長い楕円形を呈するのに対し、B群ではA群ほどつぶれた楕円形の墓坑はほとんど見受けられない。A群掘方は壁の立ち上りが明瞭でないダラダラとした壁を有している。B群では、ダラダラとした壁を有するものもあるが、それ以上に壁の立ち上りが明瞭で、直に近い壁を有するものが多い傾向にある。A群ではいわゆる「甕被葬」のある墓坑がみられるが、B群には存在しない。またB群には硬玉製垂飾をもつ墓坑が3基、琥珀玉をもつ墓坑が1基あるのに対して、A群からは装飾品としての石製品の出土はない。A群とB群が同時に機能していたとするならば、以上の相違点は集団の差が墓坑形態の差として表れたものと捉えておきたい。

B群は遺跡の東側に中心をもち、立石遺跡の中で最も規模の大きな墓坑群を形成している。B群で重要な点は、II期から墓域が形成し始められ、VI期からIX期のいずれかの時期までに亘って機能していたことである。残念なことに65基の中で土器の出土がみられたものは9基にすぎない。そのために、B群の形成の過程を明確にすることは困難である。そこで、時期の知り得た9基周辺の他遺構との関係、III・(3)・穴で述べた事柄からB群の形成を考えてみたい。

時期の把握できた9基は、II期が2基、III期が3基、VI期が1基、VI期からIX期のいずれかの時期が2基である。次に、B群に関連するとみられる住居址、方形柱穴列以外の遺構を見てみる。墓域に伴う遺構とみられる第15号方形柱穴列がVII期、その南に配列する柱穴群では、II期またはIII期が1基、IV期が1基、V期が1基、VI期が1基、VI期からIX期のいずれかの時期が1基、柱穴群を構成する穴869の東で、約3mの位置に埋設された第1号独立土器がV期、これに対峙する柱穴群ではII期またはIII期が1基、この柱穴群の上面に造られた第1号配石遺構がV期～VI期、B群の南に占地する第2号配石遺構がVII期、B群に接するように南北に帯状を呈するピット群がV期～VI期、またピット群と重なるように検出された数ヶ所の焼土址と第4号配石遺構がV期～VI期である。

墓域（ここではB群に伴うとみられる遺構も含めているため墓域とする）は、II期より形成され始めた。この時から既に中央の空間を意識し、なおかつ環状を呈する墓域も意識していたと考えられる。III期になると、より明瞭となる。第15号方形柱穴列の南には規制された位置に柱（穴869）が建てられ（第64図）、これに対峙する位置にも同様の柱（穴778）が建てられた。時期の把握できた墓坑が3基構築されるが、2基（穴651・743）は重複している（第58図）。ここで注目されることは、II期（穴744）の墓坑にIII期の墓坑（穴743）が重複し、さらにIII期の墓坑（穴651）が重複することである。さらにII期の墓坑（穴744）が、時期の把握できていない墓坑（穴997・998）の上面に構築される。そして、この2基の東にはもう1基の墓坑（穴1359）が重複する。す

なわち、6基の墓坑が連なるように重複していることになる。この現象は、墓坑の構築される位置が規制されていた結果と考えられ、1集団の墓域内における空間を示しているように考えられる。なお穴997・998はII期の墓坑（穴744）よりも古い墓坑であることは既に述べた。本遺跡から検出された遺構の中で、最も古い時期はI期であることから、該期より古い遺構である可能性は低いと考えられる。そのため、穴997・998はI～II期にかけて構築された墓坑とみて良いだろう。

6基の墓坑の北にはIII期の墓坑（穴662）が位置し、円弧の一部が既に形成されているように見える。VI期では第15号方形柱穴列の南に柱（穴858）が建てられるほかは、時期が判然としていない（第64図）。V期では第15号方形柱穴列の南に柱（穴874）が建てられ、その東で約3mの位置に第1号独立土器が埋設される。この頃から墓域の東側に第1号配石遺構とした配石と、ピット群が形成され始める。第1号配石遺構内に、第3・4号独立土器が埋設されるのもこの時期である。VI期では、墓域の西側に喪葬儀礼に関わるとみられる施設が構築され、その南に柱（穴875）が建てられる（第64図）。また第2号配石遺構とした配石が墓域の南で、円弧上にのる位置に構築される（第72・73図）。時期の把握できた遺構から、墓域の形成について述べてみたが、かなり恣意的な記述になってしまった。まとめてみると、墓域の形成はII期に始まり、最終的にいつの時期まで機能していたか判然としていないが、少なくともVI期まで機能していたことは第15号方形柱穴列、第1・2号配石遺構の帰属時期より明らかである。墓域の形態は環状を呈し、形成当初から墓域内の空間（広場）を意識していたと考えられる。そのことより、墓域内の空間は形成時から機能を失うまでの長期に亘り、伝統的な空間として人々に受け継がれていたのであろう。

次に墓坑の切り合い関係を見てみる。墓坑の切り合いで最も多いものは、前述した6基である。5基と4基の重複ではなく、3基が5ヶ所で見られる。また2基の重複する墓坑は5ヶ所で見られる。そのため、残る34基は切り合わない墓坑である。切り合いの著しい箇所を強いて挙げるとすれば、柱穴群と対峙する東部分を指摘できよう。また、切り合いの状態を良くみると、長軸方向に対して同方向か直交に重複する場合が多いことを指摘できる。次に、個々の墓坑の長軸方向について地形でみると、等高線に平行するものと直交する2タイプの存在が把握される。切り合いの観察でみられた事象は、地形に沿った2方向の構築と、墓坑の構築される場所の規制によるものと考えられる。

B群の特徴として「環状を呈する墓坑群」のほかに、「特殊な遺物をもつ墓坑群」と言うことができる。既に随所で触れているが、B群の3基の墓坑から計5点の硬玉製垂飾が出土し、また1基の墓坑からは琥珀玉が1点出土している。硬玉製垂飾の出土した墓坑と点数は、穴688から3点、穴688の上面に重複する穴836から1点、穴782から1点である。琥珀玉の出土は穴632である。この中で、遺構の時期が明らかとなつたものはないが、穴782が重複する穴662との関係で、III期以降の時期に帰属する墓坑であることが確認されている。

遺物が出土した4基の墓坑について長軸方向をみると、いずれも地形に直交する長軸方向をもっている。また4基の位置関係に着目すると、約3mの間隔で構築されていることが把握できる。

以上から4基の墓坑は、意識的に規則正しい位置へ構築されたと言える。

4基のB群とその周辺遺構における位置は、本節3・①で1群とした柱穴群と対峙する、最も東側に寄った場所である。4基の東には、第1号配石遺構がB群の円弧に沿って帶状に構築され、墓坑と並列関係にある。その東にはピット群が占地し4基を包み込むかの様相を呈している。

ここでB群に話を戻し、B群の形態について考えてみる。

第15号方形柱穴列の構築以前に、墓坑や柱穴などの遺構が構築されない点は既に記述している。そのような観点から改めてB群を概観すると、南側の一部分に墓坑の構築されていない空間の存在に気づく（以下、南側の空間）。すなわち、第2号配石遺構の西側に位置する墓坑とした穴635と、第15号方形柱穴列の最南端に位置する柱穴とした穴858との間である。この空間は、IV期において第15号方形柱穴列の空間（以下、西側の空間）とは異なっている。しかし、B群の形成時から第15号方形柱穴列の構築時までの西側の空間と、南側の空間は同じ性格をもっていたと考えられる。

1群とした柱穴群を含むB群から第15号方形柱穴列を除いた姿を見ると、柱穴群の両側に対称的な2つの空間が存在し、2ヶ所が開口した形態になる。この間隔を墓坑と柱穴の中間で計測すると、西側の空間で約6.5m、東側の空間で約6.0mとほぼ同じ間隔であることが把握される。両方の空間から硬土製垂鉤の出土した4基の墓坑を見通すと、西側では穴529-1357の2基が構築されている以外に、ほかの墓坑の構築は見られない。また穴529-1357を除いたB群内の空間は、逆V字状を呈し墓坑が配列しているように見受けられる。以上より、西側の空間と墓坑の構築されない南側の空間は、B群（墓域）への出入口部と考えられる。第15号方形柱穴列の構築以前では出入口が2ヶ所存在することから、入口と出口が明確に分けられていたと考えられる。出入口が2ヶ所あり、入口と出口が明確に区分されていたとするならば、必然的に人々は墓域内を一周することになる。これは、人々が「環」を意識する1つの表れのようにも思える。VI期になると西側の出入口に第15号方形柱穴列が構築される。そのため、西側の出入口部は機能を失うことになる。長期に亘り、出入口として機能した空間へ構築物を建てることからは、墓域形態の変化だけでなく機能の変化も窺える。

最後に、B群を中心とした立石遺跡の集落形態を簡潔に述べるとすれば、次のようなだろう。

広場としての空間を墓坑群が取り囲み、これにタイプの異なる方形柱穴列、柱穴群、配石遺構、ピット群が円弧上、または円弧に沿って構築される（以上は墓域として捉えられる）。住居址と方形柱穴列は基本的に、墓域の外側に構築される。その状態は墓域全体を取り囲むものではなく、住居址、方形柱穴列が墓域を挟んで南北に弧状を呈している。すなわち「環状の墓域を中心とした相反する弧状の集落」と言えよう。

C群は発掘区の北西隅に位置する（第66図、付図）。その西、約20mにはD群が位置している。

C群からは10基の墓坑が検出された。この中の1基（穴1252）はII期の墓坑で、貯蔵穴の墓坑への転用と考えられる。C群内での墓坑の在り方は、2ヶ所に切り合がみられ、1ヶ所は1基

としても良い状態の重複である（穴1229・1358）。この現象からは、あたかも故意に重なるように構築された印象を受ける。重複する墓坑の存在からは、少なくとも2回に亘る場の利用が窺える。長軸方向はB群で見られたように、地形に沿って直交または平行する状態である。

約20m離れたD群と比較すると、平面形態ではC群が楕円形を主体とするのに対して、D群では円形を主体とする。墓坑からの出土遺物は、C群では穴1252からII期の土器が一括出土しているほかは、出土遺物に恵まれない。しかしD群では礫や土器の一括出土した墓坑が3基あり、一括とまではいかなくとも礫や土器が故意に入れられたとみられるものが5基ある。以上、2つの相違点を挙げることができる。

最後に、C群の中央に位置する穴1208に注目してみたい（第67図）。穴1208の上面規模は110×94cm、深さが88cmを測る。覆土は4層に分層され、いずれの層も人為的に埋められているとみられたが、②と⑦は確認面から底面付近まで、垂下する分層線により分けられた。その状態からみて柱痕とも考えられたが、両者ともロームブロックが多いため積極的に柱痕とは言えなかった。穴1208をグラフに当てはめると、上面長径がやや大きいものの方形柱穴列に伴う柱穴と類似すると言っても良いだろう。調査の所見とグラフよりみて、柱穴と見做したい。以上より穴1208には、C群の存在を示す柱が建てられていた可能性がある。

D群は発掘区の西隅に位置する（第69図、付図）。D群からは11基の墓坑が検出された。帰属時期の明らかなとなった墓坑は8基で、II期が5基、III期が3基である。

11基の墓坑の位置に着目すると、南北方向に並列する2つのまとまりが看取される。北側の列の墓坑（以下、D1群）が6基、西側の列の墓坑（以下、D2群）が5基で2分が可能である。では、前述したC群ではどうであろうか。C群の項では、墓坑群の中央に柱の建てられていた可能性を示したが、墓坑の分布をみると柱穴を取り囲む様子は窺えない。そこで、柱穴の南北による墓坑の二分を考えられる（以下、北群-C1群・南群-C2群）。周辺の住居址に着目すると、墓坑の時期と同一のII期（第20・26・27・28号住居址）とIII期（第19・22・24・25号住居址）の住居址が、それぞれ4軒構築されている。C群の中で墓坑の時期の明らかなものは穴1252の1基でありD群と同時期である保証はないが、C群はD群と規模的に類似し墓坑群を構成する数もほぼ同じであることから、II期またはIII期の墓坑と見做したい。

C群はC1群とC2群とに分けられ、D群はD1群とD2群に分けられた。これにII期とIII期の住居址を組み合わせると、II期とIII期において二軒で一群の墓坑群をもつことになる。さらに一軒が一群の中の小さな群をもつことになる。III期を例にすると、第19・22号住居址がC群、第24・25号住居址がD群をもち、さらに第19号住居址がC群のC1群、第22号住居址がC群のC2群をもち、第24号住居址がD群のD1群、第25号住居址がD群のD2群をもつことになる。水野正好氏の論に従うならば、遺跡の西におけるII期とIII期の住居址は二棟一単位の二小群となる。これに墓坑群を加えると、二棟一単位の二小群が一棟ごとに1つの墓坑群をもつと言える。

2 立石遺跡の集落変遷

ここで述べる集落変遷は、現在我々が目にすることのできる住居址、方形柱穴列に対して、遺構の帰属時期と遺跡内における位置をもとに記述している。

立石遺跡は、第17号住居址と第13号住居址との間で東西2群に分けることが可能である。記述の中では便宜的に、第13号住居址から東を「遺跡の東側」、第17号住居址から西を「遺跡の西側」と呼称している。

(1) I期(曾利II式期並行)

縄文時代でも古手の住居址となる可能性をもつ第32号住居址除き、立石遺跡において時期の明確となった最も古い住居址は、I期の住居址である。第17・23・29号住居址の3軒で、いずれも発掘図の西側からの検出である(付図)。

3軒はそれぞれ平面形が異なる。第17号住居址は円形、第23号住居址は主軸の短い楕円形、第29号住居址は方形を呈する。立石遺跡のこの段階には、住居址の出入口が張り出す隅丸五角形の住居址は見られない。本遺跡ではII期に隅丸五角形の住居址が登場する。炉の形態で注目されるのは、第23・29号住居址で見られる土器埋設の石窓炉である。土器埋設の石窓炉が炉の主体を占めるのは曾利I式期であることから、曾利II式期との関係が興味深い。また埋甕を有しない点も注目される。

I期の住居址で特筆されることは、第23号住居址の出土遺物と遺物の出土状態である。出土遺物では、図示した東海系の土器と伊那谷地方の土器の出土である。東海系の土器は胎土、施文される文様などから当該地域からの直搬品とみられる。遺物の出土状態では出入口部西の主柱穴の脇に、花崗岩と安山岩の扁平な礫を据え、その上に胴下半分を打ち欠いた曾利式系の土器が伏せられた状態で出土したことである。いわゆる「伏甕」と呼ばれる特殊な施設で、本例のような礫の上に土器を伏せた類例は余り知らない。また、炉上面の覆土中に火を炊いた痕跡が認められた。焼土内からは多くの土器が出土し、また著しく焼けていることから、火を炊く中へ土器を廃棄したと考えられた。本址の有する特殊施設、遺物の出土状況などから祭祀的な様相が窺われる。

なお、II期に入ると遺跡の東側に住居址が構築され始める。第17号住居址の位置は次の時期での、東側への移動を予感させる。

(2) II期(曾利III式期並行)

II期の住居址は、第8・9・10・16・20・26・27・28号住居址の8軒である(付図)。時期区分された中において住居址の検出数は最も多い。しかし、出土した土器をみると細分できる可能性がある。土器を概観した程度だが、第8号住居址は埋甕こそ曾利III式期に比定されるが、床よりやや上から出土した土器は曾利IV式期に比定されるものである。そのためII期でもIII期に近い住

居址である。

まず住居址で特記される点を挙げておこう。

第8号住居址では、炉の南に床の焼けた部分を2ヶ所検出している。どちらも円形を呈し、浅い掘り込みがなされる。注目されるのは上面に貼床している点である。さらに焼土面は叩き締めたとも思わせるような堅い面である。このような焼土面は、IV期の第6号住居址からも検出されている。

第10号住居址では炉の北邊の床に、扁平な碟を上面が平らになるように据えている「石壇」と呼べる施設が注目される。

第20号住居址は、平面形が六角形を呈すると見られる住居址で、主軸方向を69°西へずらして建替えがなされている。そのために、新旧2つの炉が検出された。

統いてII期全体の遺構を概観してみる。住居址は時期の細分が可能であると述べたが、ここでは新旧関係なくみることにする。

II期は集落形態の転換期である。遺跡の東側に4軒、西側に4軒で、第13号住居址と第17号住居址を境にして東西2群に分かれる。VI・1・(3)・2でも触れているが、II期は遺跡の東側において、B墓坑群(墓域)が形成され始める時期であるとともに、立石遺跡での集落の基本となる形が形成された時期でもある。今、別々に記述したが、墓域の形成と集落の基本となる形の形成は、両者が一体となってこそ形として表れるものと考えられる。そのため、墓域の形成と集落の形成は同時と考えられる。具体的に言えば、4軒が北側に開口するように弧をなす位置に構築されることである。墓坑は開口する北側には構築されず、南側に構築される。この点は集落形態の形成要因を考える上で興味深い点である。西側では一見バラバラな位置に構築されているように見える。しかし墓坑を介して見直すと、墓坑を抑える位置に構築されていると考えられる。他の遺構では、第22号住居址に重複する3基から第17号住居址の南に位置する8基の貯蔵穴とみられる遺構が該期に帰属すると考えられる。なお言い忘れたが、I期に帰属すると考えられる貯蔵穴であろう遺構が、住居址より離れた第17号方形柱穴列の位置する箇所に構築されている。

(3) III期(曾利IV式期並行)

第12・13・19・22・24・25号住居址の6軒が検出されている(付図)。第12・13号住居址は、遺跡の中央へ寄った位置にある。そのため、II期で述べた集落の形が早くも崩れて、西側の4軒と中央部で集落を形成しているようにも見える。しかし、墓坑を介して住居址の位置を見れば、第12・13号住居址はB墓坑群を意識し、II期からの集落形を踏襲している。西側の第19・22・24・25号住居址は、II期の住居址よりも東へ動くものの、C・D墓坑群を意識した位置に構築されている。

III期の住居址で特筆されることとして第12号住居址が挙げられるが、当該項で記述しているので、類例として駒ヶ根市高見原遺跡の第21号住居址を紹介しておきたい。(以下報文による)「曾利II式期に属するこの竪穴住居址は火災で焼失した状態がそのまま遺存されていた。上屋の架構

材や屋根材の炭化物が床面の全面を覆い、その上面を粘土質の焼土が厚く覆い、時には35cm以上の厚さが認められた。不思議なことに炭化物や焼土は竪穴の外側には出ず、内部の全面を覆っていた。にもかかわらず床面中心の大形組石炉は破かれた形跡が認められた。住居址の南西壁近くに特殊な遺物の配置が認められた。南西壁下床面にミニチュア土器、骨盤形に磨溝された石器、南壁下に蓋石付埋甕、その東壁よりに青粘土にくるまれた肢骨状骨片数点が周溝に沿って配列されていた。発掘時に認められた以上の事象はまことに異例であり、何かの異状事態に伴う意識的な家屋焼却儀礼を思わせるものである。なお、第12号住居址では記述していないが、焼土内に埋設された土器の南脇に、黒曜石が置かれた状態で遺存していた。

立石遺跡では、3本主柱穴の住居址が2軒検出された。その住居址は、ともにIII期に属する第13・19号住居址である。茅野市内では、昨年度発掘調査を行った稗田頭A遺跡で類例が知られているので、まずこちらから紹介してみたい。時期の明確な3本柱の住居址は6棟で、曾利III式期が1棟、曾利IV式期が4棟、曾利IV～V式期が1棟である。当遺跡で検出された同時期の遺構と比べると、規模の小さい傾向が窺える。

立石遺跡の3本柱の住居址を同時期の3軒と比べると、規模の小さいことは一目瞭然である。時期的には稗田頭A遺跡と若干の差がある。しかし稗田頭A遺跡での主体は曾利IV式期であることから、この時期における一姿相を示す例となり得る可能性もある。今後の類例を待ちたい。

3本柱の住居址と類似する規模の第25号住居址は、柱穴の検出されなかった住居址である。規模が小さく柱穴の無いほかは、石門戸、埋甕を備えており、他の住居址と変わりはない。

6軒は位置関係よりみると、二棟一単位として捉えられる。興味深いことは住居址の大小が組み合さることだけでなく、規模の小さな住居址が「3本主柱穴」と「主柱穴を持たない」、やや特殊な住居址と組み合わされることである。加えて、第22号住居址の埋甕内より出土した打製石斧も注目される。

立石遺跡では、III期に方形柱穴列の出現を見る。17基検出された中の1基で、遺跡の東側に位置している。長軸が等高線に沿うように構築されている。

(4) IV期（曾利IV～V式期並行）

IV期の住居址は、第6・7・14・15・18・21号住居址の6軒が検出されている。また方形柱穴列は第2・3号方形柱穴列の2基が検出されている。遺跡内における遺構の位置は、東側に住居址が4軒、方形柱穴列が2基、西側に住居址が2軒となる（付図）。

遺跡の東側ではIV期に至るまで、住居址が墓坑群の北側に限り構築されていたが、この時期よりB墓坑群の東側に住居址が構築される。IV期は、立石遺跡の集落の基本となる形がやや崩れた時期である。しかし、中央のB墓坑群（墓域）を意識していることに変わりはなく、B墓坑群を中心に環状を呈する集落の形を示している。IV期で注目されることは、B墓坑群からやや離れた位置に住居址と方形柱穴列が構築される点である。この現象は、集落の中央部をより重要視して

いたことの表れとは考えられないだろうか。IV期では、B墓坑群がある程度の環をなすように形成されていたと考えたい。

第6号住居址は、第8号住居址に見られた床の一部に焼土面をもつ住居址である。僅かな窓みに貼床された状態で検出され、焼土面は堅硬であるなど、第8号住居址と類似する点が多い。また本址からは、焼土面の南西に石皿が伏せられ、その北西脇からは埋設された小形の土器が出土している。それらの状況から祭祀的なる様相の窓える住居址である。

第18・21号住居址は遺跡の西側でも、東側へより近い位置に構築されている。IV期を最後に、遺跡の西側では住居址の構築が見られなくなる。

(5) V期（曾利V式期並行）

V期の住居址は、第1b・4・30・35号住居址の4軒が検出されている。方形柱穴列は第5号方形柱穴列の1基である。いずれも、遺跡の東側から検出されている（付図）。

IV期でやや崩れた集落の形はV期で基本となる形に戻り、さらにB墓坑群（墓域）の東側には、東西に連なる3軒の住居址が構築される。その集落形態は、本節(3)・2で述べた「環状の墓域を中心とした相反する弧状の集落」と言える。

V期になると、B墓坑群内には第1号独立土器が埋設され、これと対峙する墓坑群の東には第1号配石造構、ピット群が形成され始める。このような墓坑群に伴う遺構の多くは、この時期に出現を見る。V期は、立石遺跡における集落形態の確立期と言えよう。

V期で特筆されるのは、住居址形態に変化が見られることである。IV期までの住居址は、地面を掘り窓めた3～7本の主柱穴をもつ竪穴住居址であるが、V期に入ると13～20本程の規模の小さな柱穴が、円形または長円形を呈するように配列する、掘り込みの不明な住居址が出現する。その姿は、敷石住居（柄鏡形）の敷石を取り除いた、柱穴だけの状態に類似している。このタイプの住居址で敷石のなされたものは1軒もなく、明確な張り出し（柄部）を捉えられたものもない。床は遺構確認面よりも高い位置にあるために、掘り込みの有無を確認することはできなかった。

このようなタイプの住居址は、神奈川県横浜市山田大塚遺跡など、港北ニュータウン地域内の遺跡で見ることができる。茅野市内でも発掘調査の増加に伴って、幾つかの類例が知られている。これを列挙すると、稗田頭A遺跡で1軒（中期最終末？）、新井下遺跡で2軒（時期不明）、中ッ原A遺跡で1軒（堀之内I式期）、中ッ原遺跡で1軒（称名寺式期）となる。この中で、中ッ原A遺跡と中ッ原遺跡の住居址では、浅い掘方で確認されている。また中ッ原遺跡の住居址は、埋甕炉を有するものである。

立石遺跡から検出された後期の住居址には、敷石された住居址はない。先程取り上げた中ッ原A遺跡では、昭和25年宮坂英式氏の調査において、堀之内式期の敷石住居址とみられる遺構が確認されている。中ッ原遺跡では、部分的な敷石のなされた住居址が2軒検出されている。1軒は堀之内II式期であるが、1軒は後期のどの時期に位置づけられるか判然としない住居址である。

茅野市内より検出された後期の住居址には、敷石のない柱穴の巡る住居址、敷石住居址（部分敷石）の2タイプが存在することを述べてきたが、稗田頭A遺跡と鴨田遺跡からは、さらにタイプの異なる住居址が検出されている。住居址の形態は、方形柱穴列の柱穴に類似する、規模の大きな柱穴が炉を中心として円形に配されるものである。稗田頭A遺跡では1軒（堀之内I式期）、鴨田遺跡では2軒（堀之内I式期）検出されている。また中ッ原遺跡では、炉をもたない同様の遺構が1基（堀之内I式期）検出されている。

以上、茅野市内から検出された後期に属する住居址を概観してきたが、1つの遺跡で見られる住居址のタイプに注目される点があるので述べておきたい。それは、立石遺跡のような敷石のない柱穴の巡る住居址をもつ遺跡、稗田頭A遺跡のように敷石のない柱穴の巡る住居址と、規模の大きな柱穴が炉を中心として円形に配される住居址の2タイプをもつ遺跡、上記の2タイプのほかに敷石住居址（部分敷石）もみられる、3タイプをもつ遺跡が存在することである。このことは、遺構に関しては、1遺跡内における遺構の時期差であるのか、それとも遺構の性格差を表すのか、遺跡単位では、遺跡の性格差を表すものなのか、現時点では判然としていない。類例を持ち、今後の研究課題としたい。

(6) VI期（称名寺式期並行）

VI期の住居址は、第1a・2・34・36号住居址の4軒が検出されている。方形柱穴列は第6・15・16号方形柱穴列の3基が検出されている（付図）。

VI期はV期と同様に、立石遺跡の集落が最も高揚する時期である。住居址はB墓坑群の北東に3軒、東に1軒構築される。北側の3軒では2軒が重複し、1軒はこれに近接している。第1a号住居址と第2号住居址との同時存在は、両者の位置関係からみると不可能である。出土した遺物によると1a・36→2となり、第1a号住居址と第36号住居址とは同時に存在していた可能性もある。方形柱穴列の平面形態はバラエティーに富んでいる。第15号方形柱穴列の性格については、本章1・(3)・1・②で述べているとおりである。VI期の第6号方形柱穴列とV期の第5号方形柱穴列は継続する時期での重複である。この現象からは、方形柱穴列の構築される位置が規制されていたとも考えられる。この時期に、A墓坑群が遺跡の東側隅に構築され始める。

(7) VII期（称名寺～堀之内I式期並行）

VII期の住居址は第31号住居址の1軒、方形柱穴列は第1・12・14号方形柱穴列の3基が検出されている（付図）。

VII期も基本的には、V期で確立した集落形態を踏襲している。しかし、墓域に対する意識が薄ってきたのか、第14号方形柱穴列が墓域と近接した位置に構築される。

VII期では、住居址が1軒であるのに対し方形柱穴列が3基となる。時期の不明な住居址が該期のものでないとすれば、住居址に対する方形柱穴列の数は多いと言える。方形柱穴列の性格を考え

る上で興味深い点である。また方形柱穴列の平面形態に着目すると、VII期の3基と中期の方形柱穴列とは異なる様相を示している。時期の差であるのか、性格の差であるのか、この点も注目される。

(8) VIII期（堀之内I式期並行）

VIII期では第13号方形柱穴列が1基検出されている（付図）。VIII期の遺構は、遺跡の東側でも東よりに集中している。またB墓坑群内とピット群には、該期の柱穴が見受けられる。そのため、VIII期では墓域（B墓坑群）として機能していたと考えることもできる。

該期に帰属する住居址は確認されていないが、A墓坑群にはVIII期またはIX期に帰属する墓坑が構築されている。また規模の小さな柱穴や、方形柱穴列の柱穴と類似する規模の柱穴が多く見られる。VIII期において、第13号方形柱穴列がどのような性格をもつ遺構なのか興味深い。また、平面形が類似するVII期の方形柱穴列と、同一地点で重複する現象は注目される。

(9) IX期（堀之内II式期並行）

立石遺跡の縄文時代における最終段階である。墓坑、貯藏穴とみられる遺構が遺跡の東側に構築されている（付図）。IX期の住居址と方形柱穴列は確認されていないが、生活の痕跡が認められる以上、台地上または台地の周辺に人間が生活していたはずである。

中央高地は日本列島の中でも、縄文文化がよく発達した地域である。その中でも八ヶ岳西南麓は中期を中心として異常に繁栄した地域である。

茅野市内において、各時期別の縄文時代遺跡数をみると、330余りを数えるが中期遺跡の占める割合が43%であるのに対し、後期の遺跡は18%となっている（茅野市史上巻）。この数値が示すように中期の遺跡が約半分を占めているが、その中でも中期の後半に属する遺跡の多いことが指摘できる。

上記の数字が示すように、後期の遺跡数は中期の遺跡数からみると激減すると言ってもよい。これは、乱獲による自然回復がなされないうちに、気候の冷涼化が進んだことから、今までの生活が維持できなくなったため、人々が台地を去った結果と言われている。また、後期の遺跡が少ないことから、人口も少ないと言わわれている。

しかし今回の発掘調査では、中期後半でも中期最終末から後期初頭に至る住居址と多くの遺構が確認された。そして、この時期の集落の様相は、衰退するどころか逆に高揚する状態であった。さらに本章・2 立石遺跡の集落の変遷では、中期終末から後期初頭に至る集落の変遷をスムーズに捉えることができた。

立石遺跡の集落の在り方は、当地域において特異な例かもしれない。しかし内容の知られていない遺跡は多く、今後の調査により立石遺跡のような性格をもつ遺跡が発見されることも十分に考えられる。

引用・参考文献

- 平林 彰ほか『北村遺跡』長野県教育委員会、1993
高岡 幸雄ほか『櫛畠遺跡』茅野市教育委員会、1990
新義 康夫ほか『神谷原II』八王子資料刊行会、1982
石井 寛「縄文集落と柱立柱建物跡」「調査研究集録」6、1989
宮坂 虎次ほか「下ノ原遺跡—第2次・3次調査概報—」茅野市教育委員会、1980
水野 正好「縄文時代集落復元への基礎的実操作」「古代文化」第21巻第3・4号、1969
林 茂樹ほか「第V章 總括—所見と考察—」「高見原遺跡」駒ヶ根市教育委員会、1987
功刀 司『稗田頭A遺跡』茅野市教育委員会、1993
石井 寛『山田大塚遺跡』横浜市埋蔵文化財センター、1990
功刀 司『鶴田遺跡』茅野市教育委員会、1992
守矢 昌文『中ッ原A遺跡』茅野市教育委員会、1993
宮坂 英次『長野県御訪郡中原遺跡』『日本考古学年報3』、1955
百瀬 一郎「新井下遺跡」茅野市教育委員会、1994
小池 岳史『中ッ原遺跡』茅野市教育委員会、1993
勅使河原 彰「第4節 縄文時代の茅野」「茅野市史 上巻」茅野市、1986

表 凡 例

立石遺跡穴一覧表で用いた略称・記号は、以下に示すとおりである。

曾利—曾	後期に比定される土器—後期
加曾利E—加E	後期粗製土器—後粗
中期最終末—中末	縄文の施文される土器—縄文
中期最終末—中最末	無文の土器—無文
称名寺—称	文様は施文されるか時期の不明な土器—不明
堀之内I—堀I	黒曜石石核—黒核
堀之内II—堀II	黒曜石剥片—黒片
後期初頭—後初	黒曜石製両極石器—黒両

時期の欄で、「I・II」はI期またはII期のどちらかに帰属することを表す。「I～II」はI期からII期に亘ることを表す。

覆土の「黒」は黒色土を表す。

自然・人為は、調査で得られた所見と穴の性格により記入している。

備考の<・>は遺構の新旧関係を表す。1<2とした場合、2が1より新しいことを表す。

穴1の欄に「穴2」と記入される場合、穴1が穴2と重複するか新旧関係の不明なことを表す。

1住・Pは、第1号住居址に伴う柱穴を表す。

立石御所御用具一覧

立石遺跡穴一覧表

穴番号	位 置	測 量	上部幅(cm)	底面幅(cm)	底面深(cm)	深さ 形状	長軸方向	出土遺物	特 徴	土	備 考		
			柱	穴	柱	穴	柱	穴	柱	穴	柱	穴	
1	63-I	31	29	17	16	30	柱	穴			2層	①黒褐②青褐	
2	63-J	41	36	28	24	24					"	"	
3	56-G	(35)	25	(27)	18	24					"	穴3 <穴15	
4	62-63-I-J	63	47	46	33	50	断行・1 黑片・1		1層	①黒褐		自然	
5	62-63-I	52	46	37	32	48	地・1 黑片・1		"	" ローム粒子・多い		自然	
6	63-I	52	45	43	39	33	不明・1		"	" ローム粒子・プロック多い		人物	
7	62 I	47	36	34	23	33	中層灰・1 細・2 細文・10 黑片・1	VII	2層	①黒褐 駆輪		自然	
8	61 I	42	37	36	26	25			1層	①黒褐 ローム粒子・炭化物多い			
9	61-H	38	34	29	23	17			"	"			
10	61 I	47	45	38	32	14			"	"			
11	60-H-I	55	37	46	22	24	柱	穴	1層	①黒褐(柱物)②青褐(埋土)			
12	60-H	36	29	25	22	10	柱	穴					
13	60-II	42	35	31	23	20	柱	穴					
14	59-J	38	31	27	26	18	細文・3		2層	①黒褐②青褐 黒ローム粒子・プロック多い		人物	
15	58-G	66	63	45	43	54	柱	穴	1層	①黒褐②青褐③黒褐			
16	58 G	50	41	38	30	24			3層	①黒褐2粒 黒			
17	58-G	35	31	22	21	31			1層	①黒褐3粒 黑			
18	57-G	47	33	34	22	26	柱	1	VI	①黒褐化物多い		穴1510	
19	51-N	39	33	30	21	33	漢鏡・1		VII-VIII	2層	①黒褐2粒 ともにローム粒子多い		人物 天1531
20	52-L	45	38	39	25	28	中灰・2		"	①黒褐2粒 ローム粒子が多い		"	
21	S2-S3-M	76	70	42	41	73	侏羅紀灰・1 柱文・2 細文・2	VII-VIII	3層	①黒褐2粒②青褐③青灰			
22	S7-S8-H	46	43	35	33	24	柱	穴	VII	2層	①黒褐(柱物)②黒褐(壁上)		
23	S8-M	100	87	74	64	83	柱	穴	VII	1層	①黒褐(柱物)②青褐(柱物)		
24	57 I	53	52	38	34	19	加EIII 粘・1 不明・1	VII	1層	①黒褐 口・ム粒子多い		14万・P	
25	56-II-I	55	47	44	40	21	柱	穴		2層	①黒褐(柱物)②青褐(壁上)		
26	56-I	44	38	32	28	26	柱	穴	"	①黒褐(柱物)②青褐(壁上)			
27	52-K-L	67	(64)	42	33	49	柱	穴	"	"	"	天27 > N61	
28	58 I	48	44	34	20	20			1層	①黒褐 ローム粒子・炭化物多い			
29	57-I	59	50	45	39	24	柱	穴	3層	①黒褐(柱物)②青褐(柱物)			
30	56-I	61	53	48	38	24	柱	穴	2層	①黒褐(柱物)②青褐(壁上)			
31	57-J	48	47	36	33	31	抹磨・1		1層	①黒褐 ローム粒子・プロック多い		人物	
32	58 J	42	34	31	24	32	細文・2 開口・1		"	"		穴1511	
33	55-M	34	30	24	23	19	柱	穴	VII	"	①黒	34dB・P	
34	55-P	36	32	26	23	24							

35	54-L-M	34	33	25	24	36	柱 穴	VII	1種 ①鳴糞地ローム地了多い	人ぬ	
36	56-N	45	42	39	34	37	柱 穴	VI	2種 ①黒糞地前地	自然	34生-P
37	56-N	38	35	26	25	34	柱 穴	VI	1種 ①黒糞地	人ぬ	34生-P
38	58-K	61	58	41	37	15		"	①鳴糞 ローム地子・プロック多い	人ぬ	
39	57-K	43	41	32	31	14		"	①鳴糞	人ぬ	
40	57-J	31	27	23	16	13		"	①鳴糞地	人ぬ	
41	57-J-K	33	32	22	18	19		2種 ①鳴糞地			
42	56-J	53	46	37	30	36		1種 ①黒糞			
43	56-J	56	48	38	32	41	柱 穴	VII	3種 ①黒糞(柱糞)②黒糞地前地(②柱糞上)		
44	56-J	50	46	39	32	15		VI	1種 ①黒糞地前地	人ぬ	1569
45	53-M	30	29	23	21	21		II+III	"	人ぬ	穴65×穴21
46	56-K	54	(39)	30	20	22		VI	①鳴糞地化物多い	人ぬ	穴46×穴47
47	56-57-K	106	83	77	71	23		"	①鳴糞 ローム地子・プロック多い	人ぬ	穴47×穴46
48	57-K-L	40	36	30	16	23		"	①黒糞 ローム地子・プロック多い	人ぬ	穴40
49	56-J-K	39	37	32	28	20		"	①黒糞 ローム地了多い	人ぬ	
50	55-J	51	43	32	31	30	柱 穴	VII	2種 ①黒糞(柱糞)②黒糞地(埋土)		
51	57-K	32	(21)	16	(11)	40		1種 ①黒糞			穴134
52	57-K-L	45	41	35	29	15		"	①黒糞		
53	53+54-K	31	26	20	14	16	柱 穴	V	" ①黒糞		35生-P
54	53-M	37	29	22	19	17		"	①黒糞		
55	53+54-L-M	45	39	28	23	39		VII+IX	2種 ①黒糞 ローム地子・プロック多い②黒糞地	人ぬ	穴1566
56	54-M	32	(26)	22	(19)	11		"	①黒糞 ローム地子・プロック多い	人ぬ	
57	58-L-M	40	37	32	28	24		"	①黒糞 ローム地化物多々	人ぬ	
58	57-I-	36	33	24	22	15		"	①黒糞 ローム地子多々	人ぬ	
59	59-M	40	32	25	24	25	柱 穴	VI	" ①黒糞		34生-P
60	59-M	44	42	37	32	21		"	①黒糞		
61	52-K-L	97	77	73	64	55		VII	3種 ①黒糞 ローム地子・プロック多い②黒糞地	"	穴61×穴27
62	56-L	34	32	21	21	54		1種 ①黒糞 ローム地化物多々			
63	56-L	29	26	17	17	17		"	①黒糞 ローム地子多々		
64	56-L	47	36	31	24	32		2種 ①黒糞 ローム地子・腐化物多い②黒糞	自然		
65	56-L	37	32	24	23	37		1種 ①黒糞 ローム地子・プロック多い	人ぬ		
66	53-M	43	39	28	22	51		"	①黒糞 ローム地子・腐化物多々	人ぬ	
67	55-K-L	39	37	29	29	17		"	①黒糞 ローム地子・プロック多い	人ぬ	
68	54-M-N	(43)	40	(38)	26	47	柱 穴	VII	2種 ①黒糞 地子多々	人ぬ	穴68×穴133
69	56-K	42	36	24	23	49		1種 ①黒糞 ローム地了多い	"		
70	65-K	51	45	37	32	19	柱 穴	V	" ①黒糞 地子多々		35生-P
71	54-J	50	46	39	35	20		2種 ①黒糞 腐化物多い②黒糞 ローム地	"		
72	54-J-K	41	33	17	17	37		"	①黒糞 腐化物多い②黒糞 ローム地	"	
73	54-K	38	32	23	19	23	柱 穴	V	" ①黒糞(柱糞)②黒糞(埋土)		35生-P

74	54-N	34 (28)	21 (21)	21	田舎・1 棚子・1	田舎・1 棚子・1	VII	1層	①田舎 ローム粒子多い、									大101		
75	54-M	(33) 31 (15)	13 23	柱 火	田舎・1 棚子・1	田舎・1 棚子・1	VII	2層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 < 大106	P	
76	54-M	72 (72)	49 (48)	柱 大	田舎・1 棚子・2	田舎・1 棚子・2	VII	1層	①田舎 ローム粒子・アロック・炭化物 多い	人為								火75 > 大75	P	
77	55-M	33 31	21 20	柱 大	田舎・1 棚子・2	田舎・1 棚子・2	VII	1層	①田舎 ローム粒子多い、									34E-P		
78	55-M	27 22	20 18	柱	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	2層	①田舎 ローム粒子・炭化物多い、									火1568		
79	55-M	36 30	24 22	柱	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	2層	①田舎 ローム粒子多い、									火1568		
80	54+55-M	32 31	19 17	柱	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	2層	①田舎 炭化物多い ②田舎 ロームアロック 多い	自然								火107 > 大106	P	
81	54+55-M	44 36	34 24	柱	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	1層	①田舎 炭化物多い、									火107 > 大106		
82	55-M	32 29	21 19	柱	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII/K	1層	①田舎 炭化物多い、									火107 > 大106		
83	54-M	31 29	18 17	柱	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	2層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
84	55-M	91 72	58 48	柱 大	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	2層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106	P	
85	56+56-M	36 35	27 25	柱 大	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	1層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)	人為								火107 > 大106		
86	59-K	40 39	24 26	柱	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	2層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)	人為								火107 > 大106		
87	52-M	46 42	35 33	柱	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII/K	1層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
88	53+54-M	(61) 49 (40)	29 29	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	2層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
89	56-O	33 31	27 25	柱	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	3層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
90	55-O	82 80	57 54	柱 大	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	1層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
91	54+55-O	42 37	27 26	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	2層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
92	58-O	37 35	26 22	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	3層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
93	53-O	36 34	22 21	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	1層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
94	54-O	50 45	30 30	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	2層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
95	54-O	72 66	62 57	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	3層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
96	54-O	(40) 35	27 20	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	1層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
97	53+54-O	39 37	25 22	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	2層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
98	54-O	49 32	22 20	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	3層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
99	54-O	45 (44)	31 (30)	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	1層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
100	53-N	(52) 48	(30) 30	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	2層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
101	54-N	36 36	26 25	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	3層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
102	53-N-O	33 32	25 25	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	1層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
103	57-K-L	(52) 51 (41)	32 23	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	2層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
104	53-N	34 31	24 18	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	1層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
105	53-N	37 34	25 20	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	2層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
106	53+54-N	(49) 36	(29) 45	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	3層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
107	52+N-O	90 87	81 77	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	1層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		
108	53-N	77 75	54 53	柱 穴	田舎・1 柱子・2	田舎・1 柱子・2	VII	2層	①田舎 (柱利) ②田舎 (柱上)									火107 > 大106		

109	52-53-N-O	128	(114)	107	(93)	68	前脚穴 レイヤー-1 前片-1	前IV-1 前V-1 無文-2 無文-3 タ ヒイケ-1 前片-1	II+III	4脚	①無刺②無刺③無刺④無刺	VI	1脚	①無刺	自然
110	53-M	34	32	28	23	15				2脚	①無刺				
111	53-N	40	34	33	27	23		後脚-1		3脚	①無刺	②無刺	③無刺	人為	穴112<穴79、穴112<穴78
112	59-51-O	135	(133)	110	(95)	42	前脚穴 周文-1 前片-3								
113	56-Q	63	50	44	36	17	柱穴 後脚-1			2脚	①無刺(柱)	②無刺(柱)			
114	50-P	(43)	36	30	24	21				1脚	①無刺	②無刺多々			
115	50-Q	35	29	21	17	20									
116	50-P	39	29	25	18	15									
117	56-P	42	39	32	23	30									
118	50-O-P	45	44	28	22	22									
119	49-P-Q	24	20	12	8	13									
120	49-P	41	36	32	26	16									
121	48-Q	34	31	22	18	21									
122	50-P-Q	39	35	29	26	28		軸3(上脚片)1 軸文-2 不 明-1							
123	58-S	126	60	105	45	22	蟲	蟲 N 37° E (特別強筋)1 (頭之内筋)	VI	1脚	①無刺	②無刺	人為	穴123>穴166	
124	59-S	137	73	113	54	21	蟲	蟲 N 50° E			"	"	"	"	"
125	59-T	112	56	98	43	11	蟲	N 60° E							
126	59-60-T-U	146	79	134	65	21	蟲	蟲 N 54° E N 60° E	VI	1脚	①無刺	②-ムアロツク多々	"	"	"
127	59-T-U	127	75	117	63	9	蟲	蟲 N 68° E							
128	59-S	51	49	37	34	16	蟲文-1								
129	57-J	36	29	22	18	21									
130	55-I	55	47	37	22	26									
131	54-N	30	28	18	16	27		後脚-1 蠕文-1							
132	54-N	39	30	22	18	26									
133	54-M	48	42	28	27	51	柱穴 後脚-1			2脚	①無刺	②無刺 ローブ プロツ ヒナガタ	"	"	
134	57-K	46	31	24	19	34				VI	"	①無刺	②多々		穴133<穴68、穴133>穴68 346+P
135	54-N	43	37	27	26	47	柱穴 中脚-1	後脚-1 柱穴-1							
136	57-N	67	62	57	81	64				IV	2脚	①無刺(柱)	②無刺(柱)	人為	穴161
137	57-N	58	45	39	34	14				IV	2脚	①無刺(柱)	②無刺(柱)	人為	2.5-P
138	56-N	84	80	67	67	79	柱穴 後脚-1			IV	2脚	①無刺(柱)	②無刺(柱)	2.5-P	2.5-P
139	56-P	77	75	40	35	80	柱穴 後脚-1			IV	"	①無刺(柱)	②無刺(柱)	2.5-P	2.5-P
140	57-58-P	70	54	46	43	72	柱穴 後脚-1			IV	"	"	"		
141	57-P-Q	138	60	124	45	11	蟲	蟲 N 65°-W			1脚	①無刺	②無刺 多々	人為	
142	56-Q	82	66	52	44	柱穴 後脚-1				IV	2脚	①無刺(柱)	②無刺(柱)	2.5-P	2.5-P
143	57-Q-R	78	70	61	49	67	柱穴 後脚-1			IV	3脚	①無刺(柱)	②無刺(柱)	人為	2.5-P

144	145	51-P	(53)	36 (41)	22	38	柱穴	柱・3 棟1・1 径直・2 無文・4 不規・1	VII	3層 ①黒褐(柱筋)②暗黄褐(柱・3筋上) 人馬	穴355、火146
146	147	51 P	66	58	45	47	76	柱穴	1層 ①黒褐	穴146<穴355、火145	
147	56-O	30	26	20	18	11			2層 ①暗黄褐(柱筋)ローブ・アプロック多い 人馬		
148	59-60-N-O	90	75	64	58	26			" ①暗黄褐(柱筋)ローブ・アプロック多い 人馬		
149	59-P	26	25	14	14	27			" ①暗黄褐(柱筋)ローブ・アプロック多い 人馬		
150	57-N	32	31	22	18	16			1層 ①暗黄褐(柱筋) 人馬	穴136	
151	57-N	(36)	36	(23)	20	12			1層 ①暗黄褐 人馬		
152	57-O	28	28	24	23	24	圓片・1		" "		
153	58-U	35	27	21	17	10			" ①黒		
154	58-O	39	32	25	20	41			" ①暗黄褐 人馬		
155	59-Q	43	33	24	24	20			" ①黒褐		
156	58-S	41	(38)	30	(28)	8	無文・1		" ①暗褐ローブ・アプロック多い 人馬	穴156<穴123 火134	
157	53-54-O-P	49	44	42	32	21	凹石・1		" ①暗褐 人馬		
158	59-60-Q	50	45	40	32	19	無文・1	VII	2層 ①黒褐(柱筋) 人馬		
159	61-O	112	74	95	62	31	毫・柱	N-E7-W 柱・1 毫文・1 径直・2 無文・1 毫文・1 黑片・1	VII-IX	" ①黒褐(柱筋)ローブ・アプロック多い 人馬	
160	61 U	67	61	52	50	80	柱穴	柱・1 毫文・1 黑片・1	VII	3層 ①黒褐(柱筋)②暗黄褐(柱・3筋上) 人馬	
161	60-61-U	71	61	59	46	35		柱・1 径直・2 毫文・2	VII	" ②暗黄褐(柱筋) 人馬	
162	60-U-V	64	63	51	40	45	柱穴	柱・1 毫文・1 黑片・1	VII	2層 ①黒褐(柱筋)②暗黄褐(柱上) 人馬	
163	61 V	62	54	48	42	43		柱・2 毫文・2	VII	3層 ①暗黄褐 人馬	
164	61-62-V	52	48	45	42	30	無文・1	柱・1 毫文・1 加E系・1 毫・1 層・1	VII	1層 ①暗褐ローブ・アプロック多い 人馬	穴165<穴166
165	53-N	27	27	17	16	18			VII	" ①暗褐 人馬	火166>穴165、火162
166	53-M	27	26	17	15	23			" ①暗褐ローブ・アプロック多い 人馬		
167	57-N	(84)	(63)	(68)	(49)	18					火168<穴167
168	52-O	35	31	22	19	32	中毫米・1	V	2層 ①暗褐ローブ・アプロック多い②暗黄 人馬		
169	52-N	(28)	18	(16)	(16)	15					火169
170	52-M	34	26	23	17	13					
171	61-V	28	25	22	18	18					
172	61-W	39	35	24	22	19	柱頭・1		1層 ①暗褐		
173	60-W	28	28	20	17	12			VII-IX		
174	60-W	54	52	44	40	39	柱穴	柱頭・1	" 口・マ・粒子・多い 人馬		
175	60-W	(34)	32	(25)	20	13			4層 ①黒褐(柱筋)②暗黄褐(柱・3筋上) 人馬		
176	59-60-W	58	46	45	26		毫・1・1層・1		1層 ①暗褐ローブ・粒子・多い 人馬	火176<火177	
177	59-V-W	43	35	33	21		無文・2		2層 ①暗褐ローブ・粒子・多い②暗黄 人馬	火177>火176	

179	59 U-V	70	55	40	35	柱 穴	2	中末・2 間文・1 無文・6 黒片・ 黒・2	V-VI	3 番 ①黒地(柱板)②黒地(板)
180	58-59 V	67	61	45	43	柱 穴		黒・1 無文・1 無文・1 不詳・1	VII	2 番 ①黒地(柱板)②黒地(板)
181	59-W-X	66	53	56	40	柱 穴		黒・1 無文・1 無文・1 不詳・1	VI	1 番 ①黒茶地ローム粒子・アロツク多い 人海 大106
182	53-M-N	37	(33)	28	(25)	15				
183	52-N-O	(33)	28	17	16	26				
184	52-53-O	32	27	17	12	29	搬之内口縫・1	黒	*	①黒地 黑化物多い、 ②黒地 ローム粒子多い、 ③黒地 口ローム粒子多い、 ④黒地 口ローム粒子多い、アロツク多 い
185	53-O	34	27	19	12	23	柱 穴		2 番 ①黒地(柱板)②黒地 ローム・アロツク多 い	
186	52-O	36	34	26	24	17			1 番 ①黒地 ローム粒子多い、 ②黒地 口ローム粒子多い、 ③黒地 口ローム粒子多い、アロツク多 い	
187	52 O	(24)	20	(17)	12	15			*	①黒地 口ローム粒子多い、 ②黒地 口ローム粒子多い、アロツク多 い
188	52 O	35	34	25	23	25			*	①黒地 口ローム粒子多い、 ②黒地 口ローム粒子多い、アロツク多 い
189	52-O	65	(45)	55	(45)	91			3 番 ①黒地(柱板)②黒地 ローム粒子多い、 ③黒地	
190	61 V	28	27	21	17	23	炒 V-2 無文・7	V	1 番 ①黒地(柱板)②黒地 ローム粒子多い、 ③黒地	
191	54-56-T	146	126	125	106	17	有・無・6	V	*	
192	53-S	62	57	45	38	32	柱 穴	中末米・1 無文・2 柱文・3 斜石(凹)△	V-VI	3 番 ①黒地(柱板)②黒地 黑茶地(柱・柱間)
193	56-S	44	41	33	29	21		中末米・1 無文・1	V	1 番 ①黒地
194	55-56-U	46	36	37	28	26	柱 穴	曾 V-1 無文・1	V	2 番 ①黒地(柱板)ローム粒子・アロツク多い 30H-P
195	53-54-S	83	77	66	56	127	柱 穴	8 無 1-4 無文・2 柱文・3 柱文・ 8 柱 1 無 1-4 無文・15 斜石・1	VII	*
196	53-R	86	83	64	55	96	柱 穴	柱 1-1 無 1-4 無文・15 斜石・1	VIII	①黒地(柱板)②黒地(柱上)
197	52-53-S	94	92	66	63	64	柱 穴	加HEII-1 無 1 無 1-1 三・1 輪輪・1 黑 2 黑 2 黑 2 黑 2 黑 2 黑 円板・無文・8 不詳・5	VII	*
198	53-T	86	85	55	50	56	柱 穴	中末米・1 無文・17 斜石・ 1 柱 1-1 無 1-1 無文・2 斜石・4	VII	1 番 ①黒茶地ローム粒子多い、 ②黒地 黑化物多い、 ③黒地(柱板)②黒地(柱)
199	53-54-U	103	101	57	56	71	柱 穴	後斯 2 柱文・4	VII-X	4 番 ①黒地(柱板)②黒地(柱)
200	56-O-P	(42)	30	(32)	20	12			*	①黒茶地 黑化物多い、 ②黒地 口ローム粒子多い、 ③黒地
201	61-V	63	55	56	45	46			1 番 ①黒茶地ローム粒子多い、 ②黒地	
202	60-V	36	33	25	24	19			*	①黒茶地 黑化物多い、 ②黒地
203	62-O	36	32	30	25	28			*	①黒地
204	61-O	29	25	19	13	33			*	①黒茶地
205	S8-V-W	34	32	23	22	14	柱 穴		V	①黒地 ローム粒子多い、 ②黒地
206	S8 V	40	38	24	23	51	柱 穴		V	①黒茶地 ローム粒子が多い、 ②黒地
207	S8-V	40	32	24	16	48	柱 穴		V	①黒地 ローム粒子多い、 ②黒地
208	S8-V	45	37	30	29	20	柱 穴		V	①黒茶地
209	S8-V	38	35	27	25	48	柱 穴		V	①黒地 ローム粒子多い、 ②黒地
210	S8-W	40	37	29	28	31	横文・1 周片・1		2 番 ①黒地 ローム粒子多い、 ②黒地	

211	57-W	34	33	22	20	15		V	#	①黒褐色物多い②鶴貴鷹、ロームブロッケ多い	人為	4往-P
212	57-W-X	42	33	28	24	19	柱穴	V	1層	①黒褐色ローム粘子多い	人為	4往-P
213	57-V	56	(51)	40	35	35	穴	V	*	①黒褐色ロームブロッケ多い	n	穴337
214	58-59-U	39	34	27	26	15	柱穴	V	*	①黒褐色ローム粘子多い	人為	4往-P
215	55-T	92	67	74	65	35	柱穴	V	#	①黒褐色ローム粘子・ブロック多い	人為	穴215>穴216
216	55-T-U	66	47	53	40	102	N-61'-E	V	#	①黒褐色物多い	人為	穴216<穴215
217	55-56-S	84	(77)	43	(41)	120	柱穴	V	1層	①黒褐色物多い	人為	穴359
218	56-S	60	55	45	41	39	柱穴	V	1層	①黒褐色物(柱底)②新規跡質地(柱底)	人為	穴319<穴350
219	54-R	99	95	63	58	76	柱穴	V	3層	①黒褐色(柱底)②新規跡質地(柱底)	人為	12J-P
220	53-54-T	54	52	62	27	14	柱穴	V	1層	①黒褐色	自然	4往-P
221	56-57-W	60	60	45	44	43	柱穴	V	2層	①黒褐色ローム粘子・炭化物多い②黒褐色	人為	4往-P
222	57-58-V	39	38	27	26	23	柱穴	V	1層	①黒褐色ローム粘子・ブロック多い	人為	4往-P
223	58-W	29	26	20	18	40	柱穴	V	*	①黒褐色物多い	人為	穴225
224	58-W	42	34	25	24	44	柱穴	V	1層	①黒褐色ローム粘子・ブロック多い	人為	穴224
225	58-W-X	(35)	29	(25)	16	30	柱穴	V	2層	①黒褐色ローム粘子・ブロック多い②黒褐色ローム粘子多い	人為	4往-P
226	58-X	31	25	18	15	21	柱穴	V	*	①黒褐色物多い	人為	4往-P
227	57-58-X	(40)	30	(25)	20	9	柱穴	V	*	①黒褐色物多い	人為	4往-P
228	57-Y-Z	22	20	23	16	14	柱穴	V	1層	①黒褐色物多い	人為	37往-P
229	56-Y-Z	32	24	18	14	24	柱穴	*	①黒褐色	自然	37往-P	
230	56-Y	34	31	29	19	19	柱穴	V	1層	①黒褐色	自然	37往-P
231	57-Z	27	25	16	13	37	柱穴	V	*	①黒褐色ローム粘子・ブロック多い	人為	穴231>穴232
232	57-Z	(35)	35	22	18	24	柱穴	V	*	①黒褐色物多い	人為	穴232<穴233, 穴271
233	55-Z	(65)	48	(46)	37	29	柱穴	V	*	①黒褐色	自然	穴361
234	55-Z	41	(35)	24	24	15	柱穴	V	*	①黒褐色	自然	37往-P
235	55-Z	62	36	27	18	柱穴	V	*	①黒褐色ローム粘子・炭化物多い	人為	37往-P	
236	55-Z-h	38	33	23	22	18	柱穴	V	*	①黒褐色ローム粘子・炭化物多い	人為	37往-P
237	55-56-Z-h	29	33	26	18	25	柱穴	V	*	①黒褐色	自然	37往-P
238	55-Z	32	28	24	16	12	柱穴	V	*	①黒褐色ローム粘子・ブロック多い	人為	37往-P
239	56-Z	38	32	29	23	—	柱穴	V	*	①黒褐色	自然	穴362
240	55-56-Z-h	28	25	21	17	14	柱穴	V	*	①黒褐色	自然	37往-P
241	55-h	38	33	31	25	15	柱穴	V	*	①黒褐色	自然	37往-P
242	55-h	36	27	22	18	11	柱穴	V	*	①黒褐色	自然	37往-P
243	55-h	36	33	25	25	22	柱穴	V	*	①黒褐色	自然	37往-P
244	54-11-	22	34	22	24	16	柱穴	V	*	①黒褐色	自然	37往-P
245	54-11-	33	30	23	20	16	柱穴	V	*	①黒褐色	自然	37往-P
246	53-54-h	41	38	36	26	15	柱穴	V	*	①黒褐色	自然	37往-P
247	54-h	27	26	15	15	—	柱穴	V	*	①黒褐色	自然	37往-P

248	54-Z	22	22	13	13	8				1層 ①明神地ローム蛇子多い 人蛇	37E-P
249	56-Y	30	23	15	15	12	柱穴	無文・1	"	①明神ローム蛇子多い	
250	57-V	35	34	25	24	21	柱穴	V	3層 ①明神(住跡)②御殿(住跡)③御殿(住跡)	4H-P	
251	57-V	55	47	40	37	34	柱穴	V	①明神ローム蛇子多い②明神ロームア ロック多い	4H-P	
252	56-57-V-W	58	51	50	44	38	柱穴	中輪文・1無文・6	V	2層 ①明神ローム蛇子多い②明神ロームア ロック多い	
253	56-Y	(41)	37	(30)	25	21			V	1層 ①明神ローム粘りプロック多い 人蛇	4H-P
254	57-W	47	43	32	31	36	柱穴	無文・1	IX	3層 ①明神②明神③明神ロームプロック	
255	54-S-T	65	60	47	36	40		無文・1 棚面・2 黒体・1	VII	"	六355<穴429
256	54-55-S	85	85	66	60	101	柱穴	體IV~V-3 棚1~4 無文・6	VIII	①明神②明神 ロームプロック多い③無 人蛇	12F-P
257	52-O	40	30	22	15	17				"	穴489
258	56-57-B	33	31	23	20	28	柱穴	無文・1	1層 ①明神(住跡)②御殿(住跡)	37E-P	
259	56-B	33	30	22	22	17	柱穴	"	"	37E-P	
260	56-B	25	24	17	15	10		①明神 土台亡	"		
261	56-X	28	24	18	13	34			"		
262	56-W	45	44	35	34	20	柱穴		2層 ①明神(住跡)②御殿(住跡)		
263	54-S	71	64	39	38	117	柱穴	無文・2 両面・1	VII-X	3層 ①明神(住跡)②御殿(住跡)	
264	54-55-X	53	50	47	40	18			1層 ①明神		
265	55-Y	37	34	26	26	20		後期門版・1 無文・2 石壁・1	VII-X	1層 ①明神ローム蛇子多い	六366
266	54-Y	33	27	22	16	7			"		
267	53-Y	40	35	26	22	18			"		
268	54-Y-Z	39	34	27	22	14			"	①明神ローム蛇子多い	
269	52-O	32	31	16	14	52			"	①明神ローム蛇子多い	
270	53-Y	50	47	43	37	18		無文・1 無文・3	1層 ①明神地ローム蛇子多い		
271	57-Z	(26)	29	17	13	15	柱穴				
272	53-S	44	39	28	24	29		後期1 タンクバ-6..-1	VI-X	1層 ①明神地ローム蛇子多い	
273	51-T	(49)	36	31	21	8	柱穴		1層 ①明神地ローム蛇子多い		
274	53-T	34	31	28	26	12			1層 ①明神地ローム蛇子多い		
275	52-T	45	36	21	21	柱穴		後期・2 錠版・1 無文・2	VI-X	3層 ①明神(住跡)②御殿(住跡)③御殿(住跡)	穴283
276	52-S	50	47	36	34	22		後期版・1 無文・1 黑片・1	VI-X	1層 ①明神ローム蛇子多い	人蛇
277	49-R	52	49	31	24	81	柱穴	無文・2 無文・5	VI-X	2層 ①明神(住跡)②御殿(住跡)	穴277>穴365
278	49-50-Q-R	46	37	36	25	31	柱穴	後期・1	VI-X	3層 ①明神(住跡)②御殿(住跡)③御殿(住跡)	
279	50-Q	44	34	32	25	18		無文・2	2層 ①明神ロームプロック多い②御殿		
280									"		
281	53-T-U	36	30	22	19	29			"	①明神地	自然
282	53-T-U	(40)	36	30	23	22			"	①明神	穴281
283	52-T	30	29	21	18				"	①明神	穴275
284	52-T	29	27	21	20	15			"	①明神	
285	52-T	33	26	25	22	13		無文・1	"	"	
286	52-R	60	58	49	44	22			2層 ①明神ローム蛇子多い		自然

323	45-46-h	40	35	25	20	24		VII		31住・P
324	45-h	47	40	31	22	柱穴				
325	45-h	43	34	25	21	13				
326	45-h	31	26	21	20	13				
327	45-1-1	40	36	27	24	25柱穴		VII		31住・P
328	44-1-1	38	29	25	18	27柱穴		VII		
329	45-h	30	24	18	14	15				
330	43-h	29	29	20	18	26柱穴		VII		
331	43-44-Z	66	(59)	44	(42)	29柱穴	施1・縫1・1後縫1・1無文・1 有井1	VII		火3466
332	44-2-	57	53	35	32	46柱穴	施2・縫1・1無文・1無片・1	VII		火333
333	44-2-	(65)	56	(50)	43	26柱穴	施2・縫1・1無文・1無片・1	VII		火332
334	44-1-1	40	40	28	25	24柱穴	側IV-2後縫1・1無文・1	VII		31住・P
335	44-1-1	36	35	24	23	35柱穴		VII		31住・P
336	44-1-1	45	38	31	26	17				
337	45-1-1-1-1	34	32	19	19	11				
338	44-2	58	43	46	30	24柱穴		VII		31住・P
339	48-P	29	24	20	15	22				
340	48-Q	38	40	31	29	29				
341	48-Q	39	33	32	24	14				
342	49-Q	36	27	26	20	15				
343	48-46-Q	40	34	26	22	25				
344	51-T	35	33	25	23	21	施1	VII		
345	50-T	36	34	29	25	16		V-VI		
346	49-S-T	49	40	27	25	77柱穴				1住・(a)P
347	49-1-1	40	40	32	27	30				
348	45-1-1	48	47	35	33	36柱穴				
349	53-54-S	(36)	30	(23)	17	21				
350	54-R	(40)	38	(22)	22	31	施1・1後縫・3無文・9無片・1	VII-X		
351	56-R	32	(28)	(22)	18	17				火350>火351, 火401
352	50-R	30	30	21	18	16				火352
353	57-W	40	37	28	28	9				火351
354	56-V	39	36	31	27	14				
355	51-P	94	92	61	60	75	施1・4後縫・3無文・9無片・1	VII		火145
356	56-R	64	(55)	45	(40)	33	施1・2			火356>火357
357	55-R	91	82	77	65	107柱穴	施2・縫1・5無文・4不明・2 無片・1			火357<火356
358	44-1-	(38)	37	(26)	21	22柱穴	曾V-5中縫木・5無文・10無片・1			火358
359	55-56-S	84	65	50	47	125柱穴	圓1・1無片・2			火359>火191, 火217
360	55-Y	(36)	34	(26)	24	6				火265
361	55-Z	34	29	22	16	19				火233

362	55-Z	(36)	37 (26)	1	21	13 桟穴												穴255	37(a)P	
363	52-53-Q-R	65	58	43	35	68 桟穴												穴363>穴364		
364	52-53-R	(72)	55 (50)	42	27	19												穴364<穴363		
365	54-X	42	37	35	25	19												A26		
366	49-Y	45	43	35	34	13												自然		
367	48-Q-R	35	33	23	21	11												A26		
368	49-R	(49)	43 (29)	22	27	11 桟穴											穴368<穴377			
369	52-T-U	34	27	26	20	11											A26			
370	52-U	36	36	24	23	20 桟穴											自然			
371	54-T	91	90	75	70	122 桟穴											穴371>穴1387	135-P		
372	52-Q	46	36	23	23	20											1層			
373	52-53-Q	34	32	25	20	15 桟穴											1層			
374	49-Q	33	32	19	17	11											穴374			
375	48-R	33	36	16	16	16											1住-(a)P			
376	48-49-S	39	28	22	18	31 桟穴											1住-(a)P			
377	48-S	39	31	23	20	71 桟穴											穴378			
378	47-S	37	37	27	24	13											1層			
379	47-S	45	45	31	31	35											1層			
380	48-R	43	36	32	24	19 桟穴										2層				
381	48-R	39	36	28	26	9 無文・1										2層				
382	48-R	(50)	29 (27)	12	36											1層				
383	47-48-S-T	36	28	24	16	63 桟穴										V~VI	1層			
384	48-T	44	39	30	29	23 桟穴										V~VI	1層			
385	48-T	40	35	26	24	22 桟穴										V~VI	1層			
386	49-T	35	32	25	24	21 桟穴										V~VI	1層			
387	49-T	36	36	26	24	22 桟穴										V~VI	1層			
388	49-T	39	37	27	26	20 桟穴										V~VI	1層			
389	50-T	(38)	37 (30)	29	5											V~VI	1層			
390	48-T	43	35	28	24	18										V~VI	1層			
391	49-50-U-V	53	48	26	22	57 桟穴										V~VI	1層			
392	49-U	37	33	24	23	6 桟穴										V~VI	1層			
393	47-S	48	35	28	19	41 無文・1										V~VI	1層			
394	47-S	44	37	26	26	35 桟穴										V~VI	1層			
395	47-S-T	42	(38)	30 (30)	19	19 桟穴										V~VI	1層			
396	49-50-T	46	41	19	15	70 桟穴										V~VI	1層			
397	50-U	39	29	20	14	50 桟穴										V~VI	1層			
398	49-U	36	33	27	26	11 桟穴										V~VI	1層			
399	49-U	42	32	28	20	10 桟穴										V~VI	1層			
400	50-U	28	15	16	13	16 桟穴										V~VI	1層			
401	54-R	(38)	36 (32)	25	18											V~VI	1層			

402	49-U-V	34	31	26	22	12	柱穴	V-VI	①黒褐ローム粘子多い V-VII	①黒褐ローム粘子多い V-VII	人26
403	49-V	35	30	19	17	27	柱穴	V-VI	①黒褐ローム粘子・プロック多い V-VII	①黒褐ローム粘子・プロック多い V-VII	1住・(a)P
404	50-U	28	24	20	16	12	柱穴	V-VI	①黒褐ローム粘子・プロック多い V-VII	①黒褐ローム粘子・プロック多い V-VII	1住・(a)P
405	49-V	38	37	36	30	56	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	1住・(a)P
406	48-V	40	34	31	26	9	柱穴	V-VI	1層 ①黒褐	1層 ①黒褐	1住・(b)P
407	47-T	56	53	41	36	18	柱穴	V-VI	①黒褐ローム粘子・プロック多い V-VII	①黒褐ローム粘子・プロック多い V-VII	1住・(b)P
408	47-T	39	33	29	25	65	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	1住・(a)P
409	47-T	57	42	41	34	71	柱穴	V-VI	"	"	2住・P
410	47-U	45	41	31	22	66	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	1住・(a)P
411	46-S	30	28	24	21	15	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	2住・P
412	46-47-S	50	47	37	35	43	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	1住・(a)P
413	47-T	40	39	28	25	58	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	1住・(b)P
414	47-U	65	45	31	24	66	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	1住・(a)P
415	47-U-V	52	41	36	26	66	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	1住・(a)P
416	48-V	42	37	29	25	44	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	1住・(a)P
417	48-V	37	35	25	21	45	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	1住・(a)P
418	48-V	44	34	36	29	7	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	1住・(b)P
419	47-N-W	52	46	40	38	18	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	1住・(a)P
420	47-V	48	45	39	33	40	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	1住・(a)P
421	47-V	57	45	39	30	46	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	1住・(a)P
422	52-R	41	36	29	26	45	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	1住・(a)P
423	52-P	37	36	23	21	27	柱穴	IV	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	1住・(a)P
424	52-P	39	39	25	22	27	柱穴	V	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	30住・P
425	54-S	40	38	28	28	19	柱穴	V	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	30住・P
426	54-S	57	42	34	17	柱穴	V	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	30住・P	
427	52-Q-R	32	30	21	19	14	柱穴	V	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	30住・P
428	48-S	(33)	29	(15)	15	66	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	1住・(a)P
429	54-S	(45)	35	(21)	16	23	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	1住・(a)P
430	53-S-T	43	35	34	23	18	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	30住・P
431	53-T	27	25	18	15	11	柱穴	V-VI	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	30住・P
432	54-T	34	32	27	27	13	柱穴	V	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	30住・P
433	54-T-U	37	35	28	23	22	柱穴	V	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	30住・P
434	55-U	36	35	25	24	18	柱穴	V	②黒褐 V-VII	②黒褐 V-VII	30住・P
435	56-T	41	36	30	29	26	柱穴	V	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	30住・P
436	47-Q	44	42	34	30	14	柱穴	V	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	30住・P
437	47-Q	44	39	32	23	27	柱穴	V	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	30住・P
438	47-Q-R	39	33	29	20	14	柱穴	V	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	30住・P
439	47-Q-R	46	43	39	29	27	柱穴	V	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	30住・P
440	47-Q	34	33	24	24	20	柱穴	V	①黒褐 V-VII	①黒褐 V-VII	30住・P

680	45-U	50	44	34	29	23		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
681	44-U	31	29	19	17	17	柱穴	V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
682	45-U	47	39	34	30	27	柱穴	V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
683	44-U	40	38	33	27	16	柱穴	V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
684	44-U	46	42	44	28	29		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
685	47-W	49	45	36	36	23		V-VI	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	1往-(a)P
686	45-V	44	41	35	34	17		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
687	46-U	43	37	32	29	29	無文・1 黒片・1 黑片・1	V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
688	43-U	61	39	41	38	15		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
689	44-T	33	32	24	22	61	柱穴	V-VI	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	1往-(a)P
690	47-U	(63)	43	(31)	22	62	柱穴	V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
691	46-T	(42)	35	(28)	22	26	柱穴	V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
692	39-Z	45	44	36	28	26	柱穴	V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
693	39-Z	46	44	38	25	26	柱穴	V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
694	39-Y	56	55	40	38	6	柱穴	V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
695	38-39-Y	48	42	30	29	27	柱穴・1	V-VI	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
696	45-R	37	(30)	19	(18)	21		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
697	45-S	45	44	25	23	18		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
698	45-T	136	135	126	126	91	断面火 黑片・1 黑片・1	V	5種	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
699	45-46-U-V	115	95	109	92	50	断面火	V	1種	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
500	45-46-S	32	28	18	16	15		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
501	46-Q	(38)	35	(24)	20	13		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
502	43-44-O	111	110	108	90	25	東 烧 N-75-E	V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
503	45-P	111	71	94	64	17	東 烧 N-74-W	V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
504	45-O	84	57	66	43	21	燒 烧 N-75-E	V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
505	45-O	22	18	8	8	13		V	1種	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
506	44-45-P	77	62	67	56	12	東 烧 N-75-E	V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
507	44-45-O-P	114	90	108	77	37	東 烧 N-37-W	V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
508	44-P	36	30	20	18	27		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
509	44-O	48	38	36	28	26		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
510	44-45-N	36	35	24	23	21		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
511	44-N-O	38	34	28	25	19		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
512	43-P	34	32	26	23	14		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
513	43-P	40	26	31	20	15		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
514	43-O	35	28	23	16	26		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
515	43-O	40	34	30	25	10		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
516	43-N-O	26	24	17	17	8		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
517	43-N	36	34	25	23	22		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P
518	43-N	39	33	25	20	41		V	"	①黒場 ローム粒子・炭化物多い 人海	2往-P

629	51-O	39	35	26	24	31	26	24	31	11	51	11	51	N-77-W	Ⅵ-X	Ⅰ層 ①漁場 ローム粒子・プロック多い 人海		
630	47-K-L	77	63	51	44	79	65	51	44	79	51	44	79	65	51	11	51	①漁場粒子・ローム粒子多い n
631	47-L	62	61	34	34	73	44	62	61	34	34	73	44	62	61	34	34	①漁場 (柱状) ②漁場 (柱状) ③漁場 (柱状) 9万-P
632	47-48-L	90	84	87	73	34	51	90	84	87	73	34	51	90	84	87	73	①漁場 ローム粒子・プロック多い 人海
633	47-K-L	95	89	76	74	21	51	95	89	76	74	21	51	95	89	76	74	①漁場 ②漁場 (柱状) ③漁場 人海
634	47-K	(37)	108	(96)	93	27	51	87	W	片-6	11	51	87	W	片-6	11	51	①漁場 ローム粒子多い n
635	45-G	95	73	84	58	32	51	N-87-W	後期-2 無文-2			VII-X	2層	①漁場 ローム粒子・プロック多い n				
636	43-O	(65)	52	(53)	42	3	51	N-56-W				1層	①漁場 ローム粒子・プロック多い n					
637	43-O	(66)	70	(76)	59	15	51	N-47-W	無文-1			n	①漁場 ローム粒子・プロック多い n					
638	45-O	(47)	40	(30)	23	21											人海	
639	44-P	95	65	81	59	31	51	N-37-E				2層	①漁場 ローム粒子・プロック多い 人海					
640	43-44-N	56	44	34	26	50						1層	①漁場 n					
641	43-O	22	21	15	11	20						1層	①漁場 ローム粒子・プロック多い n					
642	43-44-N	56	44	34	26	50						1層	①漁場 ローム粒子・プロック多い n					
643	44-N-O	(34)	28	(28)	26	26						1層	①漁場 ローム粒子・プロック多い n					
644	45-O	(36)	30	(25)	(23)	20						1層	①漁場 ローム粒子・プロック多い n					
645	45-O	(40)	36	(29)	21	26						1層	①漁場 ローム粒子・プロック多い n					
646	42-N	42	35	27	21	36						1層	①漁場 ローム粒子・プロック多い n					
647	50-J	55	47	37	28	59	51	穴				4層	①漁場 ローム粒子・プロック多い n					
648	46-L	69	68	52	45	74	51	穴				2層	①漁場 ローム粒子・プロック多い n					
649	47-48-L-M	77	73	70	62	45	51	穴				1層	①漁場 ローム粒子・プロック多い n					
650	47-48-L-M	83	(68)	64	(54)	46	51	穴				2層	①漁場 ローム粒子・プロック多い n					
651	48-49-K-L	90	84	79	71	40	51	N-77-W	晩V-2 無文-2 亂序-1 1			III	2層	①漁場 ローム粒子・プロック多い n				
652	49-L	104	(93)	(64)	61	49						n	①漁場 ②漁場 n					
653	49-L	77	60	63	46	43						n	①漁場 ローム粒子・プロック多い n					
654	49-L	44	44	33	23							1層	①漁場 ローム粒子・プロック多い n					
655	48-N	(34)	25	26	18	17						1層	①漁場 ローム粒子・プロック多い n					
656	49-N-O	42	36	32	29	25						n	①漁場 n					
657	48-O	38	31	24	24	13						n	①漁場 n					
658	47-48-N	67	63	57	63	42						2層	①漁場 ローム粒子・プロック多い n					
659	46-O	42	34	30	22	31						1層	①漁場 n					
660	46-47-N	79	65	67	52	8	51	N-2'-E				n	①漁場 ローム粒子・プロック多い n					
661	47-N	44	33	29	25	29						n	①漁場 n					
662	47-M-N	85	68	84	58	27	51	N-87-W	晩V-1			III	n	①漁場 n				

663	47-48 N	50	49	34	27	32	VI	P	①黒褐ローム粘子・プロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ④黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△663>火664+793
664	48-N	(73)	57	52	44	37	粘	H	①黒褐ローム粘子・プロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ④黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△664>火663
665	48-N	98	61	74	49	32		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△665
666	46-N	32	24	23	17	11		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△666
667	46-47 N-O	57	50	43	41	35		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△667
668	46-47-M	94	76	79	62	34	粘	N	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△668
669	46-47-L-M	90	58	78	55	27	粘	N	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△669
670	48-49 N	36	34	27	25	11		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△670
671	46-N	38	28	28	20	16		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△671
672	49-N	53	51	49	35	28		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△672
673	49-N	37	34	22	22	45	柱	H	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△673
674	49-0	40	23	24	20	27		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△674
675	50-N	38	32	26	19	18		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△675
676	47-N-O	41	(38)	23	(23)	10		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△676
677	46-O	41	38	39	25	16		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△677
678	46-O	43	40	32	21	21		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△678
679	50-L	37	35	29	28	21		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△679
680	48-O	44	40	34	28	20		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△680
681	46-O	42	40	31	25	18		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△681
682	49-N-O	34	33	23	23	22		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△682
683	49-N	31	27	24	18	11		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△683
684	50-N	37	30	23	20	16		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△684
685	49-50-O	33	32	26	20	18		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△685
686	49-O	34	22	25	11	23		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△686
687	49-O	33	32	25	25	29		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△687
688	46-N	115	71	119	82	43	粘	H	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△688
689	49-N	35	29	25	17	23		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△689
690	50-M	89	75	63	75	柱	VI	X	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△690
691	50-M	147	(122)	99	(78)	69	断面	VII	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△691
692	47-P	36	34	25	21	22		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△692
693	47-P	39	36	26	24	21		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△693
694	47-P	46	41	38	32	18		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△694
695	47 P	34	(31)	23	18	17		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△695
696	48-P	29	26	17	15	23		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△696
697	48-P	(42)	35	(32)	24	28		P	①黒褐ローム粘子・ムブロック多い、 ②黒褐ローム・ムブロック多い、 ③黒褐ローム粘子・ムブロック多くなる。	#	△697

698	59-O	96	79	81	68	73	柱	穴	VII	4	①黒葉樹②黒茶樹③黒椿④黒蘭 等V-1中葉末-1後短-1葉-5 葉1-1土製円板-2褐色-1無文- 10葉片-2	六841	14方-P
699	47-48-P	(50)	43	(44)	32	11			IV	1層	①黒葉樹ローム粒子-プロック多い ②黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n	六693	
700	47-O-P	58	58	59	46	19			IV	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n	六701>六778	
701	47-O	(71)	57	(51)	41	33			IV	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n	六701>六778	
702	51-J	49	45	37	35	31			n	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n		
703	48-P	35	32	25	20	21			n	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n		
704	48-P-Q	43	40	31	30	24			n	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n		
705	51-O	35	31	23	22	16			n	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク-炭化物多 い n	六707	
706	51-P	26	21	13	12	12			n	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク-炭化物多 い n	六706	
707	51-P	(39)	38	(24)	21	19			n	1層	①黒葉樹尾根付多い ②黒葉樹(土)	六721	
708	48-P	47	32	35	28	16	柱	穴		2層	①黒葉樹(生)粒子多い ②黒葉樹(土)		
709	51-O	34	34	26	23	22			1層	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n		
710	52-O	35	36	27	22	13			n	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n		
711	50-51-N	(37)	28	(21)	17	31			n	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n	六711<六712	
712	50-51-N	50	57	37	31	22	42		VI-VK	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n	六712>六711	
713	51-N	36	29	31	19	19			n	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n		
714	52-N	34	26	24	19	17			n	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n		
715	51-N	36	35	24	22	27			n	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n		
716	50-M-N	34	31	27	26	22			n	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n		
717	49-N	39	32	22	18	24			n	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n		
718	49-N	(36)	35	(27)	26	23			n	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n	六717, 六719	
719	49-N	42	31	34	24	23			n	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n	六718	
720	51-N	29	28	24	23	19			n	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n	六696, 六697, 六1108	
721	48-P	45	(38)	32	(26)	22			n	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n		
722	57-G	40	37	27	25	18			n	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n		
723	56-57-G	40	38	30	29	29			IV	2層	①黒葉樹ローム粒子-炭化物多い②黒葉樹 n	六724	
724	56-57-G	70	(65)	58	49	34			IV	2層	①黒葉樹ローム粒子-炭化物多い②黒葉樹 n	六723	
725	47-N	49	(38)	33	(24)	23			IV	1層	①黒葉樹(柱)②黒葉樹(壁上)	六725<六661	
726	48-1	62	54	43	37	55	柱	穴	IV	2層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n	六628	17F-P
727	54-G	33	27	23	17	27			IV	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n		
728	55-G-H	38	32	22	26	18			IV	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n		
729	54-55-H	38	33	25	18	38			IV	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n		
730	54-H	35	31	23	18	33			IV	1層	①黒葉樹ローム粒子-炭化物多い n		
731	56-G	39	35	30	24	18			IV	1層	①黒葉樹ローム粒子-炭化物多い n		
732	56-G	34	32	18	18	38			IV	1層	①黒葉樹ローム粒子-炭化物多い n		
733	56-G	32	(26)	18	(18)	23			IV	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n	六734	
734	56-G	29	(24)	18	(18)	31			IV	1層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n	六734, 六733	
735	56-F	119	101	95	83	32	柱	N-17-E	多孔石-1	2層	①黒葉樹ローム粒子-アーチク多い n		
736	54-F	40	38	29	26	116			2層	①黒葉樹		1層	

737	53 F	46	38	33	27	29		骨 ? - 2 骨文 - 3	VII	#	①黒褐色ローム粒子多い		
738	54-E-F	36	33	26	26	27		骨 V - 1	IV	#	①黒褐色ローム粒子炭化物多い		
739	53-E	(49)	41	(35)	32	41					#	六739>火740	
740	53	95	87	67	58	68		骨 IV - 1 中骨文 - 6 無文 - 7	V	4層	①黒褐色ローム粒子炭化物多い	六740<火739	
741	54-G	37	32	27	23	21				1層	①黒褐色ローム粒子炭化物多い		
742	55-G	35	28	25	21	25				#	①黒褐色ローム粒子炭化物多い		
743	48-L	(82)	70	67	57	29	3	泥 N 39' E 俗 IV - 1 加EIII - 1	III	3層	①黒褐色ローム粒子多い②黒褐色粒上 含E③赤茶褐	六743<火651	
744	48-49-L-M	104	(85)	69	(68)	27	集	泥 N 39'-W 背井 - 1 灰石 - 1	II	#	①黒褐色②黒褐色地+赤土③黒褐色地+ロード	火744>火997	
745	52-E	40	37	27	24	19				1層	①黒褐色ローム粒子炭化物多い		
746	54-I	39	36	27	25	17	柱	火		#	①黒褐色ローム粒子炭化物多い、巣穴含む		
747	54-J	30	29	21	19	26				#	①黒褐色		
748	54-J	45	38	36	28	13		無文 - 1		#	①黒褐色ローム粒子多い		
749	53-54-I	46	46	27	24	27	柱	火		#	①黒褐色ローム粒子炭化物多い		
750	51-H	39	30	27	20	26		骨 V - 1 灰石 - 1	V	#	①黒褐色ローム粒子+プロック多い		
751	53 F	38	35	25	24	23		後期Ⅱ灰 - 1 無文 - 1	VI+IX	#	①黒褐色ローム粒子+プロック多い		
752	52-F	40	36	26	18	57				#	①黒褐色		
753	53-J	39	36	29	28	22		無文 - 1		#	①黒褐色		
754	51-J	42	40	29	23	51	柱	穴		#	①黒褐色ローム粒子+プロック多い	火754>火755	
755	50-51-I	(42)	37	(36)	28	43	柱	火		#	①黒褐色ローム粒子+プロック多い	火755>火754	
756	50-H	46	40	36	27	34	柱	穴		#	①黒褐色ローム粒子炭化物多い		
757	50 G	41	31	21	16	42	柱	穴		#	①黒褐色ローム粒子+プロック多い		
758	50-C	40	36	26	18	57				#	①黒褐色ローム粒子+プロック多い		
759	51-J	43	38	29	25	29		中骨文 - 2 灰 - 2 灰文 - 2 灰文 - 10 灰石 - 2 不明 - 3	V	2層	①黒褐色ローム粒子+プロック多い		
760	52-K	85	72	62	57	61	柱	穴		1層	①黒褐色ローム粒子+プロック多い		
761	52-K	38	35	32	28	32				#	①黒褐色ローム粒子+プロック多い		
762	53-K	28	26	20	18	17	柱	穴		#	①黒褐色		
763	52-I	53	46	42	38	34				#	①黒褐色		
764	48-K	(80)	(57)	(44)	18	嘉	泥 N 7-F-W	無文 - 1		#	①黒褐色ローム粒子+プロック多い	火764>火693-1532	
765	53-J	43	31	32	19	24				#	①黒褐色		
766	53-J-K	43	41	33	30	25	柱	穴		V	#	①黒褐色ローム粒子+プロック多い	
767	52-53-J	32	30	22	18	28	柱	穴		V	#	①黒褐色ローム粒子+プロック多い	
768	53-I	40	33	35	25	24	柱	穴		V	#	①黒褐色ローム粒子炭化物多い	
769	53-I	27	25	18	15	19	柱	穴		V	#	①黒褐色ローム粒子+プロック多い	火698
770	51-K	34	26	24	20	14				#	①黒褐色		
771	51-J	51	43	34	33	25				#	①黒褐色ローム粒子+プロック多い		
772	51-I-J	73	70	62	50	38		骨 I - 1 灰 - 2	II	#	①黒褐色ローム粒子多い	火772<火1020	
773	53-K	30	(29)	22	(18)	17	柱	穴		V	#	①黒褐色地+炭化物(壁上)	火766
774	52-J	40	39	36	31	47	柱	穴		V	2層	①黒褐色ローム粒子多い	火775>火799
775	52-Q	69	65	58	45	31	嘉	N 61'-E 上面に配石有		1層	①黒褐色ローム粒子多い	火775>火799	

776	51・52-Q・R	170	159	154	141	46	臺	坎	N 55° E	WIV-2	無文・3 黑片・2	III	7 片	①無開口端輪②輪子ローブロック多 3 片	人馬	火778
777	47-O-P	(64)	55	(52)	33	53						II+III	2 片	①無開口端輪②輪子ローブロック多 #		火778<火780 火777
778	47-O	82	75	71	61	56	柱	穴								火778>火780 火777
779	50・51-O	(50)	47	(36)	35	35										火779>火12
780	57-G	28	19	24	16	16							1 片	①無開口端輪②輪子ローブロック多 2 片	人馬	火781>火12
781	51-O	78	77	68	61	58							1 片	①無開口端輪②輪子ローブロック多 #		火782>火662 火783
782	47-M-N	(80)	(66)	(87)	(55)	10	臺	坎	N 81° E		無文・無輪	I				火783<火663
783	47・48-M-N	134	160	114	85	35	無	坎	N 79°-W				#	①輪子ローブ輪子・プロック多い 3 片	#	火784>火629 9 牛
784	46・47-L-J	91	81	80	75	91	柱	穴			無文・1		1 片	①輪子②輪子(圓)開いざれもローブ #	#	火784<火629 9 牛
785	47-I	65	51	50	41	13							1 片	①無開口端輪多 #		
786	52・53-I	28	27	22	17	20	柱	穴					V	①輪子ローブ輪子・變化物多 #	35E-P	
787	(3)-I	38	35	25	25	21	柱	穴					V	①無開	35E-P	
788																
789	55-T	78	76	53	43	66	柱	穴			無文・3 黑片・2 無文・8 不規・1	VII		①無開(柱頭)②輪子輪(圓)	火789<火591	12F-P
790	55-H	47	(34)	29	24	19							1 片	①無開ローブ輪子多 #		火790>火791
791	55-H	(55)	35	25	25	18							#	①無開ローブ輪子多 #		火791<火790
792	56-G-H	34	34	34	24	24	13						#	①無開		
793	55-H	43	39	33	27	23							#			
794	56-G	35	33	21	20	39										
795	44-O	32	26	21	18	33							1 片	①無開ローブ輪子多 #		火734
796	42-N	20	19	14	12	13										火592
797	47-J-K	(106)	75	(90)	61	5	臺	坎	N 44° E				1 片	①無開ローブ輪子・プロック多 #		
798	45・46-E	(45)	31	(28)	18	20										
799	52-Q	48	44	34	28	38							1 片	①無開ローブ輪子・プロック・變化物多 #		火799<火775
800	45・46-H-I	106	85	92	76	19	臺	坎	N 82°-W				3 片	①無開(柱頭)(①②)ローブ・プロック多 V	#	
801	54-L	29	26	21	18	13	柱	穴						①無開		35E-P
802	54-J	37	31	22	18	14	柱	穴					2 片	①無開(柱頭)②輪子		
803	54-I	26	20	23	16	20							1 片	①無開		
804	49-J	30	(27)	22	(19)	13										
805	49-H	35	(25)	(24)	23	26	柱	穴					1 片	①無開ローブ・プロック多 #		火805<火806 10F-P
806	49-H	32	26	26	21	36	柱	穴					#	①無開ローブ・輪子・プロック多 #		火806>火805 10F-P
807	50-I	47	42	25	21	53	柱	穴					#	①無開ローブ・輪子・プロック多 #		火10F-P
808	51-K	28	28	20	20	15							#	①無開ローブ・輪子多 #		
809	49-G	30	23	22	17	20							#	①無開ローブ・輪子多 #		

888	32-I-J	130	90	100	84	9	臺灣	N-S'-E	三脚橋、1 條文-1 黑片-1	VI	#	#	#	#	#	#	#	15万P		
889	39-J	43	39	33	23	20	柱	穴			#	#	#							
890	37-I	26	25	17	17	9					#	#								
891	33-D-E	36	34	24	23	7					#	#								
892	38-H	26	24	17	16	13					#	#								
893	37-II	31	25	22	16	8					#	#								
894	36-F-G	49	43	36	32	35					#	#								
895	38-B	37	31	24	20	9					#	#								
896	34-E	37	33	25	16	10					#	#								
897	35-G	46	41	29	27	9					#	#								
898	36-G	27	26	16	13	31					#	#								
899	37-H	23	22	17	16	15					#	#								
900	36-I	26	26	16	14	11												大S12		
901	42-J	38	36	25	25	16														
902	41-42-J	26	25	18	15	19														
903	39-L	44	40	31	29	24	柱	穴		VI	#	#						15万P		
904	38-L	35	35	24	22	29	柱	穴		VI	#	#						六S94>六S95		
905	38-L	62	77	68	64	19	臺灣	N-S'-E	中野後半始鰐鱗文-1 後野細鱗-1 條文-2	H	#	#						15万P		
906	38-K	51	45	35	30	24	柱	穴		VI	#	#						六S95<六S94		
907	38-K	40	35	24	21	11					#	#						15万P		
908	38-J	41	36	27	25	24	柱	穴		VI	#	#						大S23		
909	36-37-J	57	45	45	33	26					#	#						15万P		
910																				
911	36-37-I	36	32	23	19	33														
912	36-I	(36)	20	(21)	13	8					#	#						大S90		
913	36-I	32	21	23	15	11					#	#								
914	36-H	34	30	26	23	9					#	#								
915	39-I	(35)	33	(28)	24	38	柱	穴		VI								15万P		
916	41-J	34	28	24	20	19														
917	41-42-J	116	69	106	56	23	臺灣	N-S'-W												
918	36-G	26	25	17	12	12														
919	39-40-L	108	82	91	65	9	臺灣	N-S'	黑片-1											
920	39-L	55	52	44	42	16														
921	36-K	33	28	20	15	5														
922	36-K	45	38	30	23	5														
923	36-L	49	26	27	17	10														
924	37-K	38	38	27	25	23														
925	37-K	30	25	19	18	10														
926	35-J	35	25	21	16	21	柱	穴									2脚			

1060	34-Q	32	30	19	18	18		
1061	30-R-S	88	80	74	70	46	柱 灰	V
1062	30-S	87	81	78	75	47	柱 穴	V
1063	30-T	86	78	68	69	48	柱 灰	V
1064	30-U	60	52	46	38	42	柱 灰	V
1065	29-U	60	50	42	41	42	柱 穴	V
1066	29-T-U	65	63	52	49	38	柱 灰	V
1067	28-S-T	73	68	63	60	44	柱 空	V
1068	28-29-R-S	76	75	67	65	51	柱 灰	V
1069	28-R	50	46	39	36	16	柱 空	V
1070	29-S	33	27	22	18	18	柱 灰	V
1071	29-T	45	43	35	34	9	柱 空	V
1072	28-T-U	40	38	31	27	9	柱 空	V
1073	27-28-S-T	36	35	25	23	12	柱 空	V
1074	27-S	38	31	27	19	15	柱 空	V
1075	29-S-T	48	43	32	27	29	柱 空	V
1076	30-31-W	51	47	30	29	47	柱 灰	V
1077	30-W	54	53	39	38	33	柱 空	V
1078	30-T	38	36	26	23	20	柱 空	V
1079	31-Y	40	36	26	26	10	柱 空	V
1080	31-Z	47	45	36	36	13	柱 空	V
1081	32-Z-h	40	40	25	26	10	柱 空	V
1082	32-Z	35	28	25	20	11	柱 空	V
1083	32-Y	36	31	29	24	8	柱 空	V
1084	29-30-Z	40	31	32	19	20	柱 空	V
1085	30-31-Y	60	56	50	(42)	21	柱 空	V
1086	30-Y-Z	66	57	60	48	51	柱 空	V
1087	30-Z-h	35	30	16	14	46	柱 空	V
1088	30-31-h	31	28	16	15	20	柱 空	V
1089	31-Z	46	42	29	26	23	柱 空	V
1090	31-R	34	30	26	23	18	柱 空	V
1091	32-33-S	33	37	29	25	18	柱 空	V
1092	31-P-Q	43	26	30	20	6	柱 空	V
1093	33-L	46	45	38	31	24	柱 空	V
1094	34-R	30	24	17	13	16	柱 空	V
1095	30-h	26	24	16	14	26	柱 空	V
1096	32-Y	22	22	14	11	29	柱 空	V

1229	9-△-11	90	90	82	80	22	毫	N-31-E		3層	①無機②有機③ロームブロック多い、④ 砂	"	
1230	15-16-N	47	43	32	42					1層	①無機層化帶多い、	"	
1231	11-Z	45	35	32	24	10				"	①無機層	"	
1232	11-△	41	32	27	16	21				"	①無機層ローム層が多い	"	
1233	12-△	36	32	27	25	18				"	①無機層ローム層が多い	"	
1234	12-Z	39	36	26	25	13				"	①無機層ローム層子・ブロック多い	"	
1235	16-V-W	39	34	28	23	25				1層	①無ローム粒子多い、	"	
1236	15-△-△	34	30	19	19	12				"	①無機層	"	
1237	8-S	40	36	30	26	20	柱	穴		"	①無機層	1万-P	
1238	12-△-△	62	73	64	57	40	通	隙		"	①無機層ローム層子・ブロック多い、	"	
1239	9-2	116	68	103	57	26	毫	N-45-W		3層	①無機層ローム層子・ブロック多い、③有機 物	"	
1441	54-Q	37	35	23	19	25					穴1245	"	
1442	54-R	34	30	24	21	52				1層	①無機	"	
1443	53-P	67	65	35	29	65	柱	穴	第IV-1 柱~隙 1-4 無文・4 4m ₂	2層	①無機(柱)②有機(隙上)	"	
1444	53-Q	36	35	25	24	17							
1445	53-R	62	45	52	36	37					穴1246	"	
1446	53-Q-R	129	(11)	113	(94)	17	毫	N-67-W	第II-15	IX	1層	①無機 穴子+砂	"
1447	12-13-Z	(16)	89	100	66	30	通	隙	N-35-W		"	①無機 ローム粒子・ブロック多い	"
1448	15-△	37	30	22	21	17							
1449	10-X	32	29	24	20	28							
1450	9-X	40	36	32	25	22							
1451	9-10-△	41	39	27	26	29							
1452	10-11-X-Y	186	182	144	142	65	毫	N-76-E	第III-6 無文・10 無文・4 1.4m ₁ -1.6m ₂ -1.8m ₃ -1.1	II	6層	①無機②有機③有機④無機	A-24
1453	11-12-K-L	155	144	136	125	67				II	①無機②有機③有機④無機	"	
1454	9-10-△	98	70	77	62	36	毫	N-23-E		3層	①無機②有機③有機④無機	"	
1455	9-10-△	82	61	65	45	7	毫	N-75-W		1層	①無機 ローム粒子・ブロック多い	"	
1456	17-18-I	110	100	84	80	40	隙	隙		3層	①無機②有機③有機	"	
1457	17-18-J	118	104	117	104	45	断隙	隙	第III-2	II	"	①無機②有機③有機	"
1458	20-G-H	87	85	80	75	14				1層	①無機 ローム粒子	"	
1459	16-17-I	136	135	100	98	52	断隙	隙		3層	①無機②有機③有機④無機	"	
1460	16-H-T	98	92	80	78	32	断隙	隙		2層	①無機 ローム粒子多い	"	
1461	17-18-T	116	111	100	96	44	断隙	隙		2層	①無機 ローム粒子多い	"	
1462	9-△	35	35	25	23	16				1層	①無機 ローム粒子多い	"	
1463	16-H	32	27	21	15	15				"	①無機 ローム粒子多い	"	
1464	27-J	27	25	19	16	16							

1376	46-R	31	27	21	17	18		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1377	56-U	33	27	24	20	11	柱穴	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1378	57-T	34	25	22	17	10	柱穴	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1379	56-57-S	40	35	30	25	13	柱穴	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1380	55-R	42	35	30	25	17	柱穴	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1381	53-I	36	27	29	20	17														
1382	53-I	55	40	44	30	15	柱穴	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1383	56-S	30	25	23	19	13	柱穴	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1384	56-S	43	33	31	25	21	柱穴	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1385	56-J	45	41	33	31	18	柱穴	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1386	55-S	30	24	21	16	24		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1387	54-T	(51)	34	(38)	21	6	柱穴	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1388	55-S	33	26	18	18	23	照片1	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1389	55-T	36	30	29	25	16	7(裏) ? 1	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1390	55-Q	23	19	16	14	18		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1391	56-Q	32	26	19	17	12		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1392	53-K	30	29	24	22	11	柱穴	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1393	53-J-K	29	26	21	19	21		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1394	54-R	35	29	25	21	18		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1395	54-S	31	29	26	22	11	柱穴	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1396	54-I	32	30	24	22	13	柱穴	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1397	54-K	27	26	19	19	22	柱穴	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1398	54-M	27	22	15	14	15	柱穴	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1399	55-I	37	31	25	18			V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1400	55-Q	35	30	28	20	17		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1401	54-N	34	30	25	19	16	無文・1	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1402	52-53-O	32	28	21	16	15	無文・1	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1403	52-53-P	33	30	22	19	26	無文・1	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1404	57-N	27	24	16	16	31	無文・1	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1405	53-M	27	20	20	12	9		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1406	51-N	30	28	19	19	11		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1407	51-52-M	35	32	27	25	23		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1408	57-O-P	33	36	13	15	15		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1409	55-M	30	23	20	15	20		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1410	53-I	34	27	23	17	18		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1411	56-57-O	30	20	15	11	21		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1412	54-L	35	25	23	17	20	十番玉部・1	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1413	56-L	36	31	27	24	17		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1414	58-H	31	29	25	20	19		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	
1415	56-J	23	19	14	12	19		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	

1416	55-H	26	25	17	17	14		■ 漢文・3
1417	55-H	29	27	22	20	11		■ ①照相
1418	53-E	35	32	20	17	34		■ ①照相 ローム粒子多い
1419	53-E	26	22	18	16	12		■ ①照相 質化物多い
1420	53-F	32	31	18	16	22		■ ①照相
1421	52-G	27	25	17	15	19		■ ■
1422	55-C	27	26	20	19	19		■ ■
1423	55-G	31	29	22	21	18		■ ■
1424	54-I	29	24	19	17	23		■ ■
1425	56-J	28	27	20	19	7		■ ■
1426	56-H	29	27	20	17	15		■ ①照相
1427	58-M	37	21	18	12	15		■ ①照相
1428	54-P	(42)	30	(27)	29	7		■ ①照相
1429	58-L	28	23	19	15	19		■ ①照相
1430	55-J	37	33	26	14	柱 六	V	■ ①照相
1431	55-K-S	31	30	22	21	13	V	■ ①照相
1432	57-Z	29	27	19	18	14	V	■ ①照相
1433	56-B	30	30	20	17	12	V	■ ①照相
1434	56-57-Z	22	22	15	14	22 柱 六	V	■ ①照相
1435	52-W	37	35	23	18	23	V	■ ①照相
1436	51-V	36	32	21	20	23	V	■ ①照相
1437	51-T	32	30	20	18	25	V	■ ①照相
1438	50-V	33	28	29	22	12	V	■ ①照相
1439	52-U-V	25	23	16	14	11		■ ①照相
1440	53-V	(36)	34	(26)	24	3		■ ①照相 質化物多い
1441	53-U	30	30	18	16	16		■ 1層 ①照相
1442	51-Q	23	19	12	11	12		■ ①照相
1443	52-Q	39	34	24	19	33		■ ①照相
1444	47-Z	42	35	31	26	23		■ ①照相
1445	52-R	31	26	21	19	11		■ ①照相
1446	47-Z	45	35	30	26	28		■ ①照相
1447	65-46-W	46	35	31	27	10		■ ①照相
1448	47-48-Z	32	31	17	14	19		■ ①照相 質化物多い
1449	49-K	29	27	21	19	21		■ ①照相
1450	47-48-N-O	32	29	21	20	13		■ ①照相
1451	45-V	42	35	31	26	13		■ ①照相
1452	46-U	29	29	22	21	14		■ ①照相
1453	43-44-V-W	40	39	26	20	19		■ ①照相
1455	43-44-W	33	33	20	20	23		■ ①照相

1496	43-44-2	45	37	30	28	35	柱穴		W	穴331	31E-P
1497	45-11	35	26	21	14	22					
1498	55-Y	(36)	(34)	18	(16)	15	柱穴				37E-P
1499	56-A	30	30	19	19	17					
1500	56-B	25	(21)	15	12	12					
1501	58-V	42	(32)	27	(22)	50	柱穴	V			
1502	42-K-S	43	39	31	29	27	柱穴	VI			
1503	43-44-S	28	24	18	14	15					
1504	48-Q	39	(32)	26	(23)					穴343	
1505	55-T	33	(28)	22	(14)					穴590	
1506	54-M	(33)	25	15	13					穴585穴56	
1507	54-M	(33)	25	16	12	23	柱穴	VI			
1508	55-M	(36)	33	(24)	24					穴119	
1509	56-J	53	47	37	34	13				穴44	
1510	57-G	(46)	41	34	(31)	26				穴18	
1511	58-J	(44)	39	(27)	27					穴32	
1512	13-V	40	39	32	25	23				穴1512 9往	
1513	14-15-W	42	41	32	28	21					
1514	16-X	30	26	16	15	27					
1515	12-B	41	32	25	20	14					
1516	13-12-11	40	35	30	25	16					
1517	11-12	32	28	18	15	23					
1518	56-57-Z	(30)	29	(21)	18	23				穴231	
1519											
1520	45-R	56	38	42	30	柱穴	VI				
1521	44-45-Q-R	54	44	45	37	47	柱穴	VI			
1522	44-45-Q-R	53	47	44	39	31					
1523	44-Q	48	(40)	38	(32)	71	柱穴	VI			
1524	44-Q	47	40	38	22	44	柱穴	VI			
1525	43-Q	(41)	39	(29)	33					穴1525 > 9往	
1526	43-Q	56	46	39	25	46	柱穴	VI			
1527	42-Q	37	32	21	18	34	柱穴	VI			
1528	42-K	89	66	66	50	64	柱穴	VI			
1529	42-R	75	63	64	55	51	柱穴	VI			
1530	50-T	32	31	17	17	20					
1531	51-N	(45)	(41)	(31)	(29)	20					
1532	48-K	55	(46)	39	(23)	40	柱穴				
1533	40-F-G	34	28	20	17					穴593 穴1532 < 穴764 17往-P	
1534	61-W	75	70	60	54	28				穴668 ①無蒸口△號子-7ロック多い A面	

付 編



付 編

立石遺跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

立石遺跡（茅野市豊平所在）は、南大塩面で代表される第II段丘面上に立地する。この台地は、河川の開析により東西性の細長い谷が刻まれ、いわゆる「田切り地形」を形成している（茅野市、1986）。

本遺跡では、縄文時代中期・後期の住居址が検出されている。このうち、第12号住居址および第26号住居址では床面に焼土や炭化物が認められ、焼失住居と考えられている。また、第12号住居址では床面が黒く変色している場所（床直黒変部）が認められ、敷物の存在が予想された。

今回の分析調査では、住居址の年代、建築部材の樹種確認、敷物の検討を行う。住居の年代については、住居址から検出された建築部材と考えられる炭化材を対象として放射性炭素(¹⁴C)年代測定2点を実施する。また、建築部材について炭化材同定8点を併せて行い、樹種を明らかにし、当該期の木材選択について検討する。敷物の検討では、床直黒変部の土壤3点を対象として植物珪酸体分析を実施し、敷物として利用されたことが予想される植物に関する情報を得る。

1. 住居址の年代確認

(1) 試 料

試料は、第12号住居址および第26号住居址のそれぞれから出土した構築部材とされる炭化材各1点である。なお、これらの炭化材は、後述する炭化材同定により、クリに同定されている。

(2) 方 法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室の協力を得た。

(3) 結 果

測定結果を表1に示す。

表1 放射性炭素年代測定結果

遺構名・試料番号	試料の質	測定結果(1950年からの年数)	Code No.
第12号住居址・炭②	炭化材(クリ)	4,700±100y.B.P. 2,750 B.C.	Gak-17654
第26号住居址・炭-3	炭化材(クリ)	5,280±90y.B.P. 3,330 B.C.	Gak-17655

*放射性炭素の半減期は、LIBBYの半減期5570年を使用した。

(4) 考察

第12号住居址では $4,700 \pm 100$ y.B.P.、第26号住居址では $5,280 \pm 90$ y.B.P.という測定値が得られた。これらは、関東地方や中部地方では縄文時代中期に相当する年代（キーリ・武藤、1984）であり、考古学的知見と矛盾しない。

2. 建築部材の樹種確認

(1) 試料

試料は、縄文時代中期の2軒の住居址から検出された建築部材と考えられる炭化材9点（第12号住居址 炭①、炭②、炭④、炭⑤、第26号住居址 炭-1～5）である。

(2) 方法

試料を乾燥させたのち、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作製し、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。

(3) 結果

試料は、全てクリに同定された（表2）。クリの主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、学名・和名は「原色日本植物図鑑 木本編〈II〉」（北村・村田、1979）にしたがい、一般的な性質については「木の事典 第4巻」（平井、1980）も参考にした。

表2 炭化材同定結果

住居址名	試料番号	推定用途	樹種名
第12号住居址	炭①	住居構築材	クリ
第12号住居址	炭②	住居構築材	クリ
第12号住居址	炭④	住居構築材	クリ
第12号住居址	炭⑤	住居構築材	クリ
第26号住居址	炭-1	住居構築材	クリ
第26号住居址	炭-2	住居構築材	クリ
第26号住居址	炭-3	住居構築材	クリ
第26号住居址	炭-4	住居構築材	クリ
第26号住居址	炭-5	住居構築材	クリ

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科

環孔材で孔圈部は1～4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。年輪界は明瞭。

クリは、北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。

材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材などの用途が知られている。

(4) 考 察

縄文時代中期の住居址から検出された建築部材と考えられる炭化材は、全てクリに同定された。本地域では、これまでに同様の調査例が知られていないため、当該期の木材選択については不明な点が多い。しかし、近接する関東地方では、縄文時代の住居址から検出された炭化材にクリが多くみられる(千野, 1983)。また、北陸地方においても、縄文時代の巨木柱列に使用されている木材は、これまでのところ全てクリに同定されている(古池, 1986; 藤, 1986)。今回の結果は、本地域においてもクリが建築部材に多く使用されていた可能性を示唆する。

今回の試料については、出土状況から建築部材の部位を推定することが困難であり、クリがどのような部位に使用されていたかは明らかではない。埼玉県和光市丸山台遺跡や神奈川県慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡の結果を見ると、クリは垂木等の強度が必要と考えられる部位にも多数使用されている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1991, 1993)。このことから、本遺跡においてもクリが強度を必要とする部位に使用されていたことが推定される。

本地域における住居の建築部材に関する資料は蓄積段階であり、今後各時代・時期の住居址から検出される建築部材について樹種同定を行う必要がある。

3. 敷物についての検討

(1) 試 料

分析試料は、床直黒変部より採取された15点(No.1~15)から、No.2・7・10の3点を選択した。試料は、いずれも黒褐色のシルト混じり砂である。試料を肉眼観察する限り、敷物として利用された植物に由来する植物繊維などは認められない。

(2) 方 法

湿重5gの試料について、過酸化水素水(H_2O_2)・塩酸(HCl)処理、超音波処理(70W, 250kHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由來した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由來した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。今回は、特にイネ科葉部短細胞列や葉身機動細胞列などの組織片に注目して分析を行った。これは、敷物として植物、特にイネ科植物が利用された場合には、葉部や稈部(茎)に由来する組織片が床直黒変部に残留していたと思われるためである。イネ科植物は、葉部や稈部の組織に珪酸(ガラス)分が沈着しやすい。珪酸分は熱や風化に強いため、植物体が分解・消失した後も珪化した組織片は

残りやすいと考えられる。

(3) 結 果

分析結果を表3、図1に示す。No.2・10より、栽培植物のイネ族イネ属（以下、イネ属と称する）の短細胞列がわずかに認められる。

また、各試料からは単体の植物珪酸体としてイネ属、キビ族（エノコログサ属など）、タケア科（クマザサ属・ネザサ属など）、ウシクサ族（ススキ属）、イチゴツナギ亜科などの短細胞珪酸体あるいは機動細胞珪酸体が認められる。植物珪酸体の保存状態は、短細胞珪酸体は良好であるが、機動細胞珪酸体は不良である。

(4) 考 察

床直黒変部からは、No.2・10よりイネ属の短細胞列がわずかに認められただけであった。本遺跡周辺では、この時期のイネ属の産出は報告されておらず、稲作の有無や稲の流通も明らかにされていない。そのため、現時点ではこのイネ属がこの時期のものか、また穀物として利用されたものか否かの判断がつかない。今後、住居址の包含層と後代の土層との層位的な関係や試料採取時の混入などを考慮する必要があろう。また、残りの試料についても分析調査することが望まれる。さらに、同時期住居址試料などがあれば、それについても分析調査を試みたい。

なお、単体の植物珪酸体として認められたタケア科やキビ族などは、集落の周辺や原野に生育する種類である。そのため、検出された植物珪酸体が周囲の土壤とともに住居内に流入した可能性や遺構の埋積時に混入した可能性もあり、断定することは難しい。ただし、古くからタケア科やキビ族、ススキ属などのイネ科植物は生活資材として利用されていることから、今回検出された植物珪酸体もこれらの植物が穀物や構築材などに利用されたことを反映するのかもしれない。

また、イネ科以外の植物が穀物に利用された場合には、組織片のような痕跡は残らない。そのため、イネ科以外の植物が利用された可能性も否定できない。

〈引用文献〉

- 藤 則雄 (1980) 植物遺体、「石川県能都町 真脇遺跡－農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に
係る発掘調査報告書－（本編）」, p.407-410, 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団。
- 平井信二 (1980) 木の事典 第4巻, かなえ書房。
- 北村四郎・村田 源 (1979) 厚色日本植物図鑑 木本編 (II), 545p., 保育社。
- キーリC.T.・武藤康弘 (1984) 繩文時代の年代, 加藤晋平・小林達雄・藤本 強編「縄文化の研究1
縄文人とその環境」, p.246-275, 雄山閣。
- 古池 博 (1986) 木柱根その他の木材ならびに大型堅果類の植物学的検討, 金沢市文化財紀要60「金沢
市新保本町チカモリ遺跡－第4次発掘調査兼土器編－」, p.203-226, 金沢市教育委員会・金沢市埋蔵
文化財調査委員会・金沢市新保本町第一土地区画整理組合。
- 近藤鉢三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用, 第四紀研究, 25, p.31-64.

表3 植物珪酸体分析結果

種類(Taxa)	試料番号	2	7	10
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	2	—	2	
キビ族エノコログサ属	1	—	—	
キビ族(その他)	5	1	4	
タケ亞科クマザサ属	2	—	—	
タケ亞科(その他)	407	127	205	
ウシクサ族ススキ属	66	25	24	
イチゴツナギ亞科	5	5	3	
不明キビ型	51	16	23	
不明ヒゲシバ型	17	13	9	
不明ダンチク型	24	9	12	
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	—	—	1	
キビ族	14	1	1	
タケ亞科ネザサ節	1	—	—	
タケ亞科(その他)	32	5	12	
ウシクサ族	30	4	7	
不明	26	2	3	
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	580	196	282	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	103	12	24	
検出個数	683	208	306	
組織片				
イネ属短細胞列	2	—	2	

千野裕道(1983) 繩文時代のクリと集落周辺植生－南関東地方を例として－、東京都埋蔵文化財センター研究論集、II、p.26-42。

バリノ・サーヴェイ株式会社(1991) 積穴住居址の自然科学分析、和光市埋蔵文化財調査報告書第5集「埼玉県和光市 丸山台遺跡I 丸山遺跡・丸山台遺跡・義名山遺跡・中九遺跡・浅川遺跡－丸山台地区画整理事業に伴う発掘調査報告書－【本文編】」、p.121-126、和光市遺跡調査会・和光市教育委員会。

バリノ・サーヴェイ株式会社(1993) 自然科学分析からみた人々の生活(1)、「慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」、p.347-370、慶応義塾。

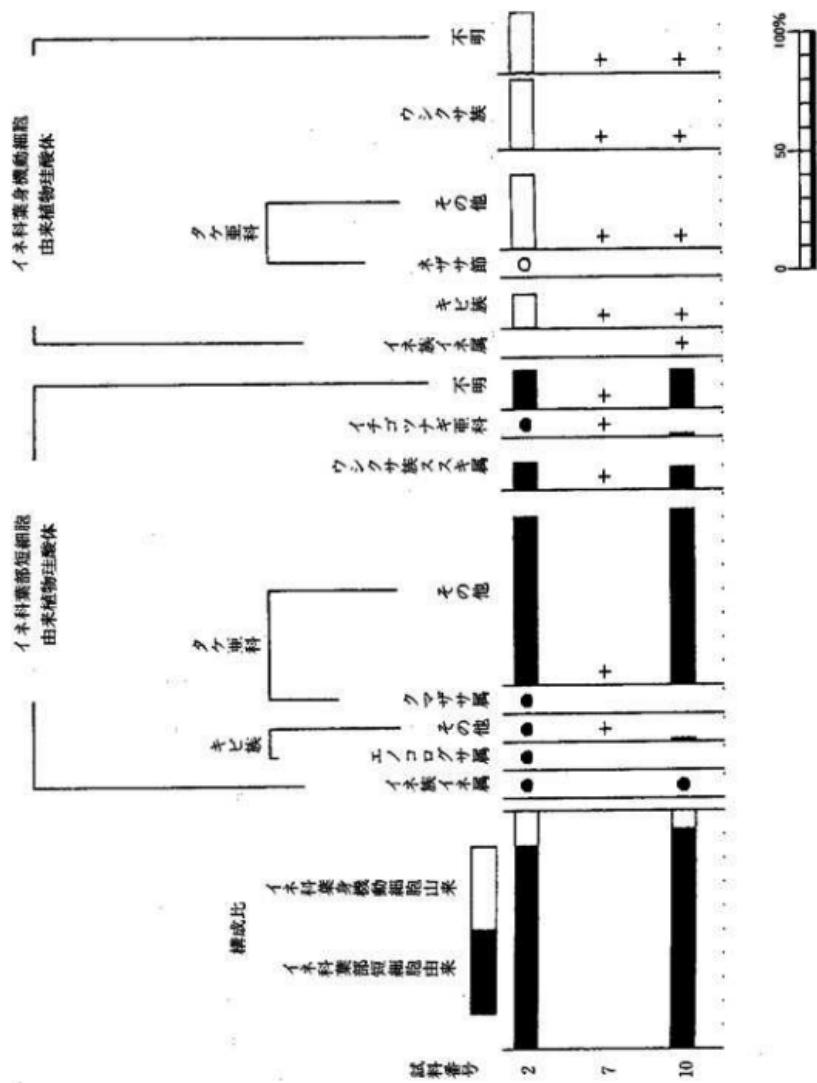
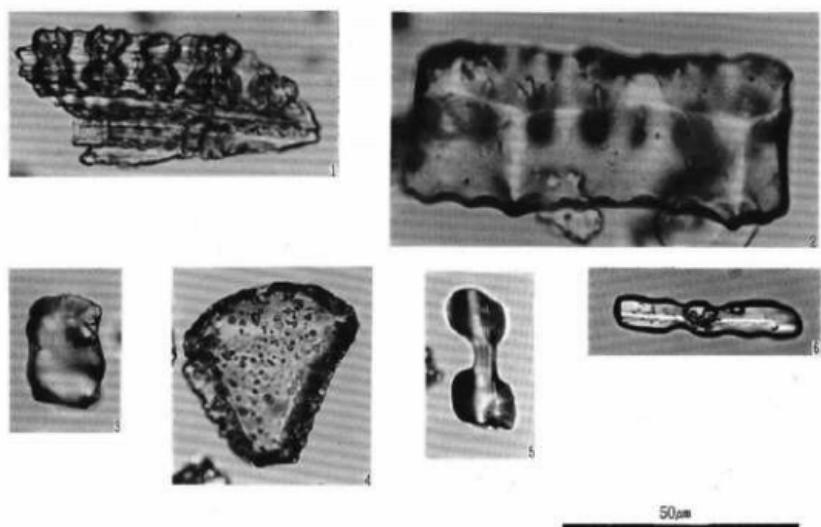


図1 植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体とイネ科葉身機動細胞珪酸体の総数をそれぞれ基數として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+はイネ科葉部短細胞珪酸体の総数が200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数が100個未満の試料で出現した種類を示す。

図2 植物珪酸体



1. イネ属短細胞珪酸体列 (第12号住居址: 2)
2. キビ族機動細胞珪酸体 (第12号住居址: 2)
3. タケ亞科短細胞珪酸体 (第12号住居址: 10)
4. タケ亞科機動細胞珪酸体 (第12号住居址: 2)
5. ススキ属短細胞珪酸体 (第12号住居址: 2)
6. イチゴツナギ亞科短細胞珪酸体 (第12号住居址: 7)

図 版



立石遺跡全景



立石遺跡より中ッ原A遺跡を望む

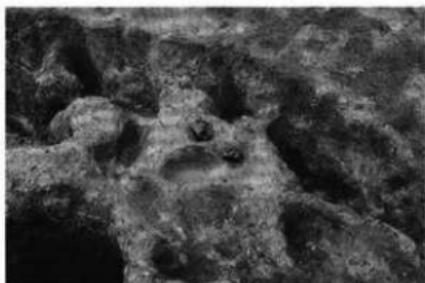
图版 2



第6号住居址



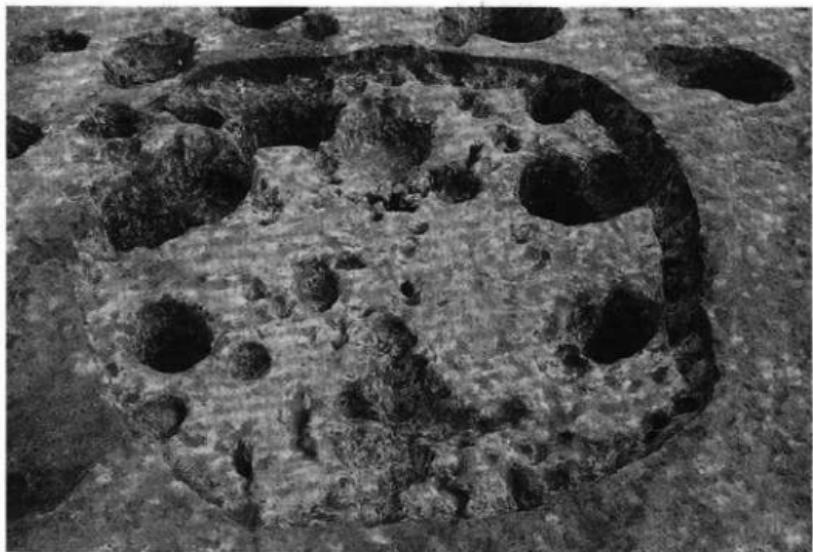
第6号住居址 石皿と埋設土器



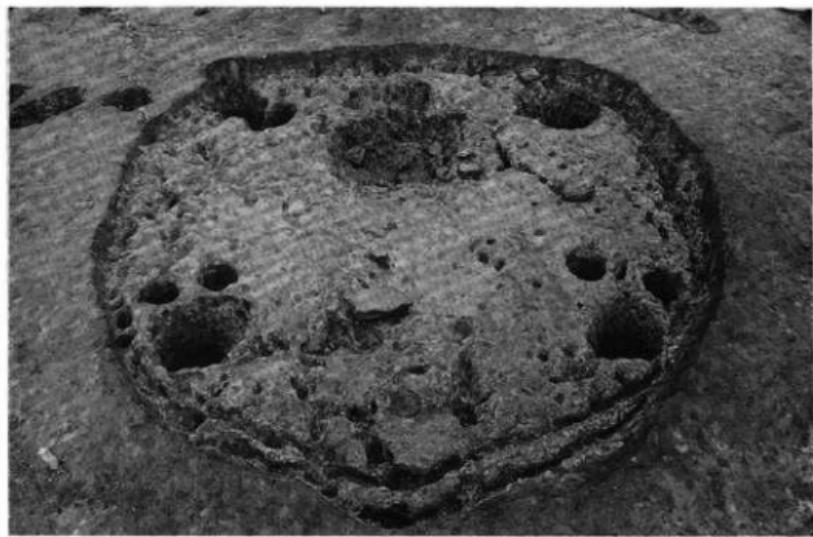
第6号住居址黑曜石出土状態



第6号住居址主軸

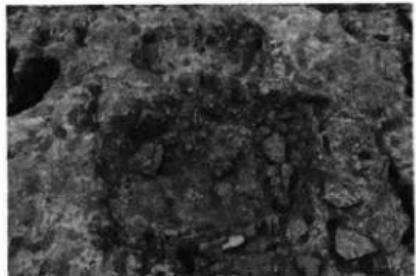


第7号住居址



第8号住居址

図版 4



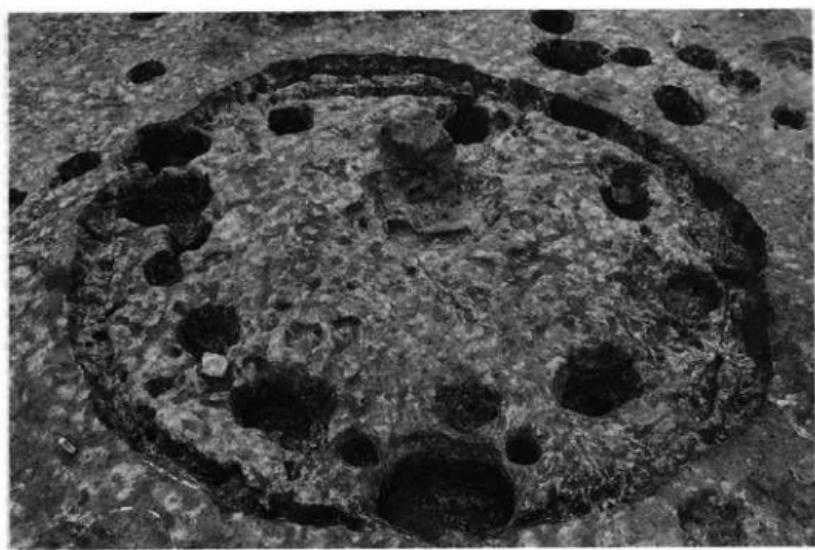
第8号住居址炉址



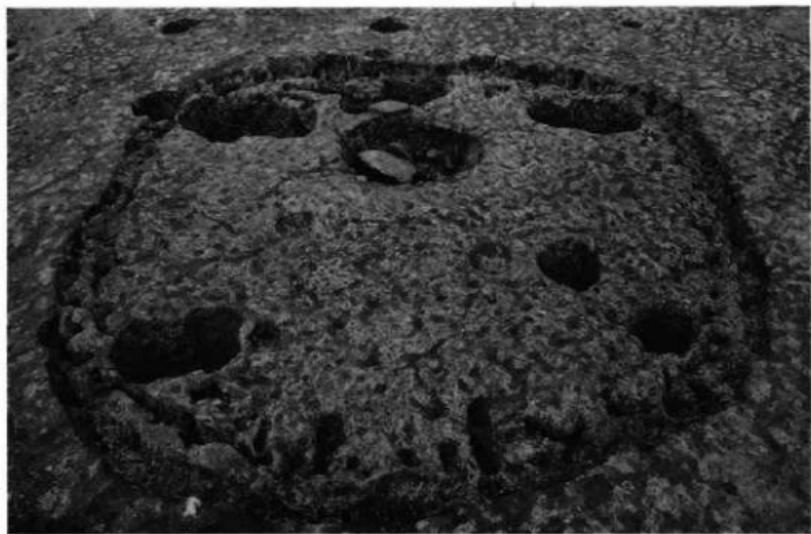
第8号住居址埋甕



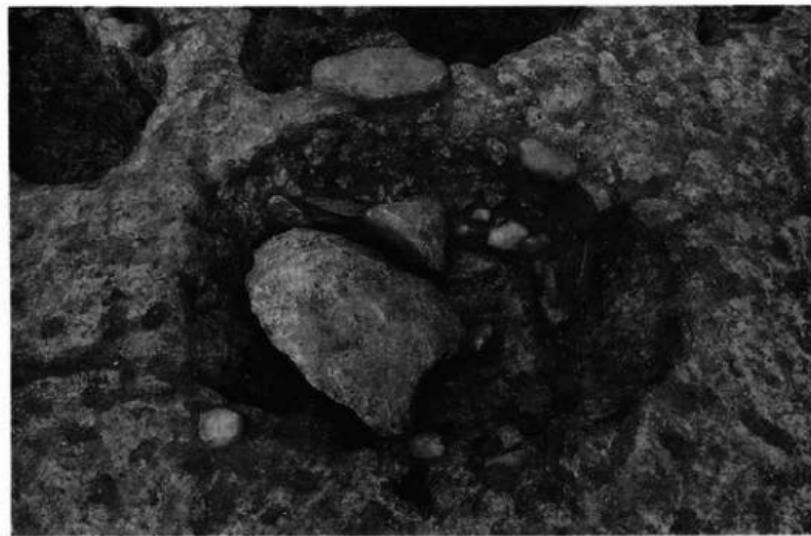
第8号住居址主軸



第9号住居址と第36号住居址炉址



第10号住居址



第10号住居址炉址と石壇

図版 6



第12号住居址と第5・33号住居址



第12号住居址周溝①



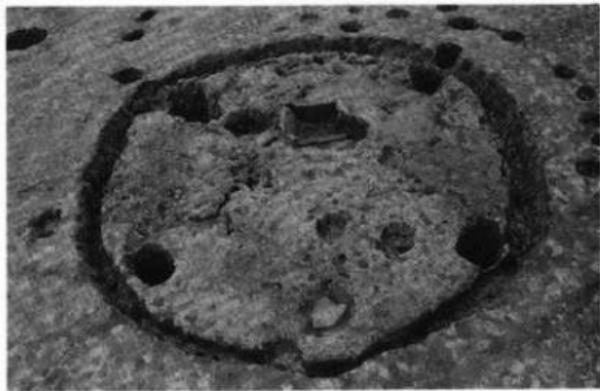
第12号住居址周溝②



第12号住居址①



第12号住居址②



第12号住居址③

図版 8



第12号住居址・奥壁に埋設された土器①



第12号住居址 奥壁に埋設された土器③



第12号住居址炉址①



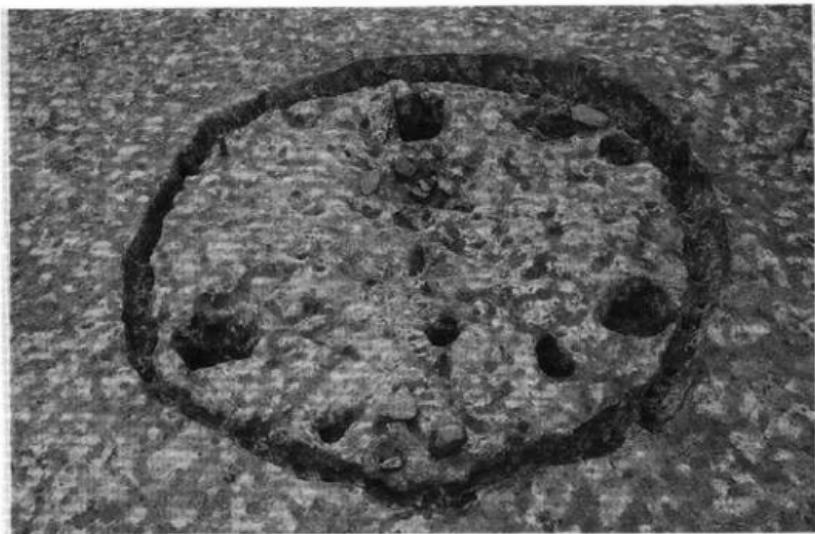
第12号住居址埋甕



第12号住居址炉址②



第12号住居址 P₂ と第5号住居址 P



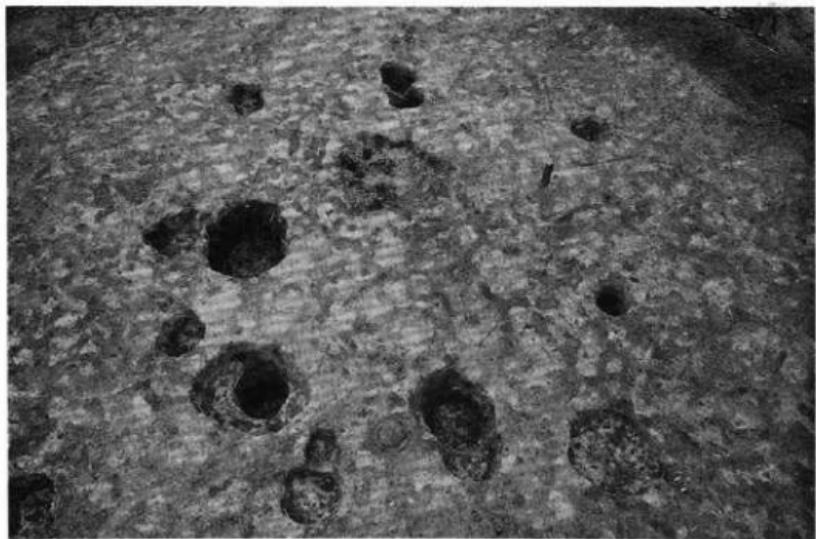
第13号住居址



第13号住居址埋甕と出土遺物



第13号住居址埋甕



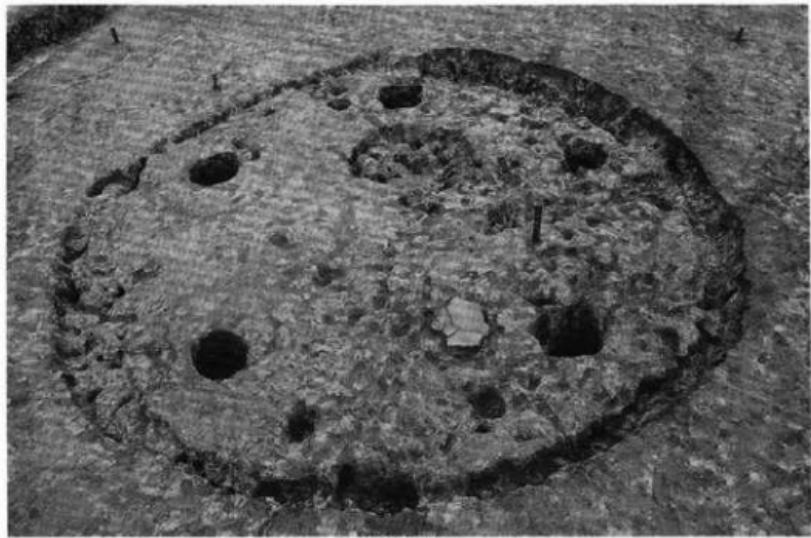
第14号住居址



第15号住居址



第16号住居址埋甕



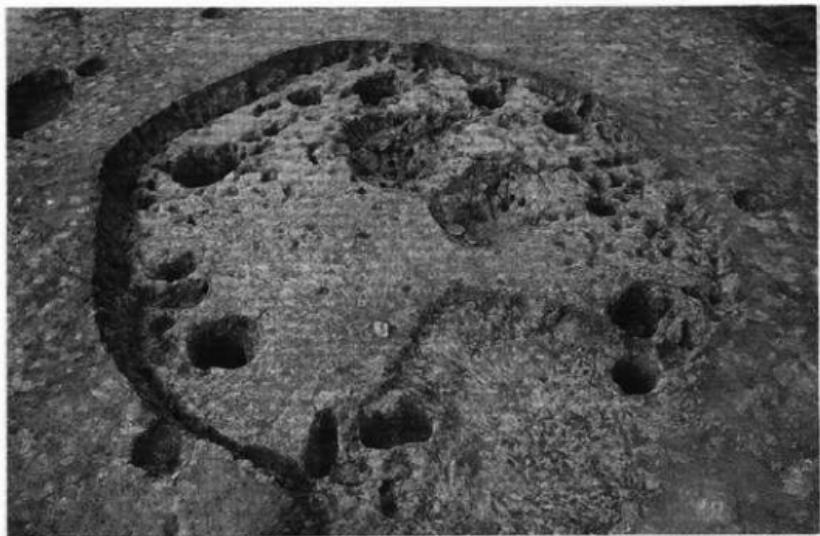
第17号住居址



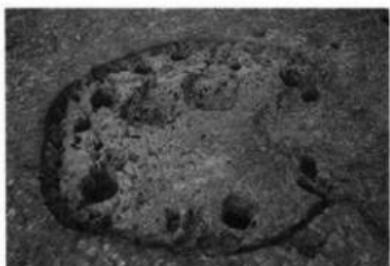
第18号住居址



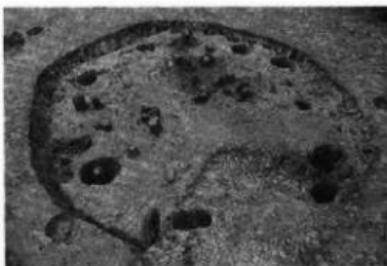
第19号住居址



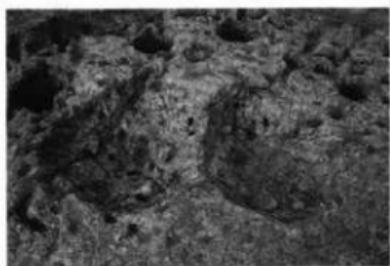
第20号住居址①



第20号住居址②



第20号住居址遺物出土状態①



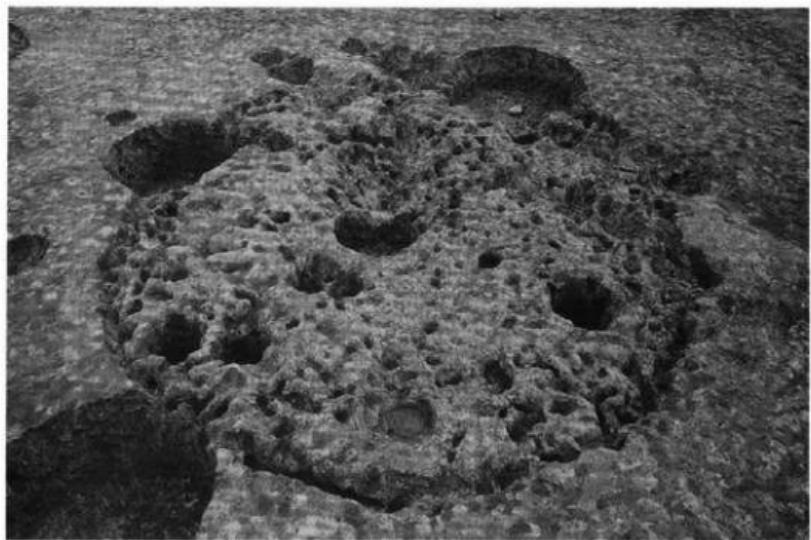
第20号住居址新旧炉址



第20号住居址遺物出土状態②



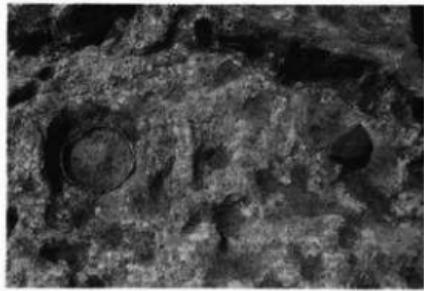
第21号住居址



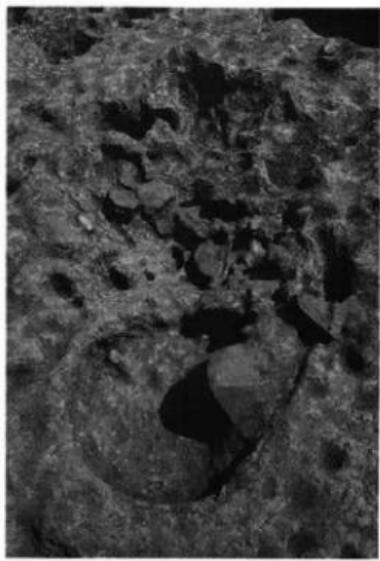
第22号住居址



第22号住居址埋甕①



第22号住居址埋甕②



第22号住居址炉址



第23号住居址



第23号住居址遗物出土状态①



第23号住居址砾址



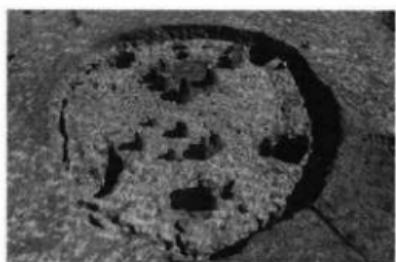
第23号住居址遗物出土状态②



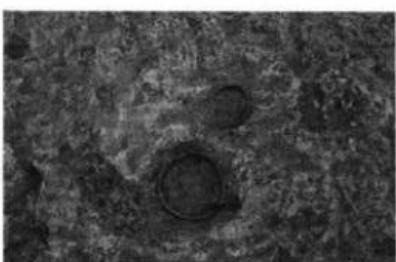
第23号住居址灰甕



第24号住居址



第24号住居址遺物出土状態①



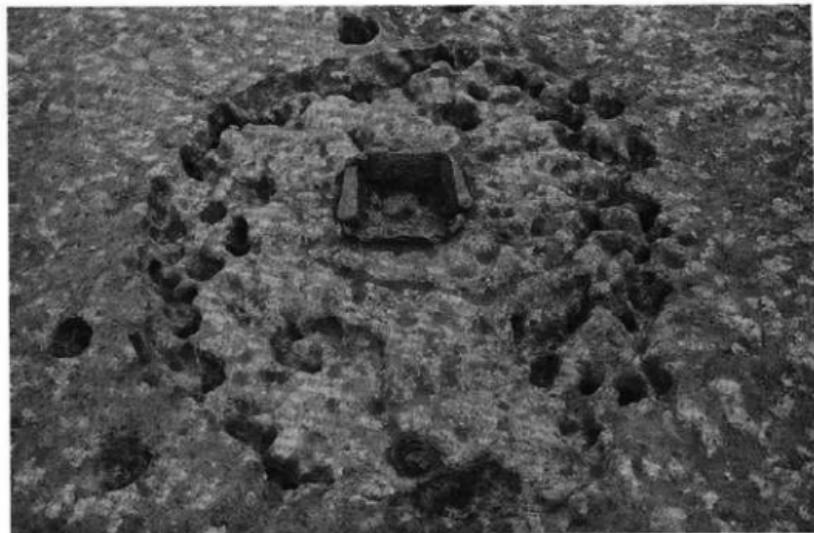
第24号住居址埋甕①



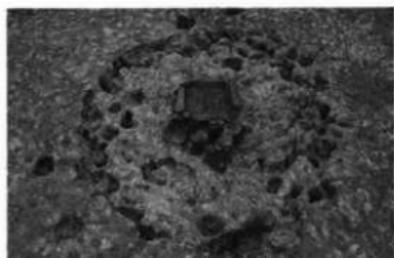
第24号住居址遺物出土状態②



第24号住居址埋甕②



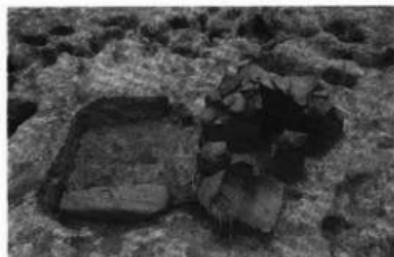
第25号住居址



第25号住居址遺物出土状態①



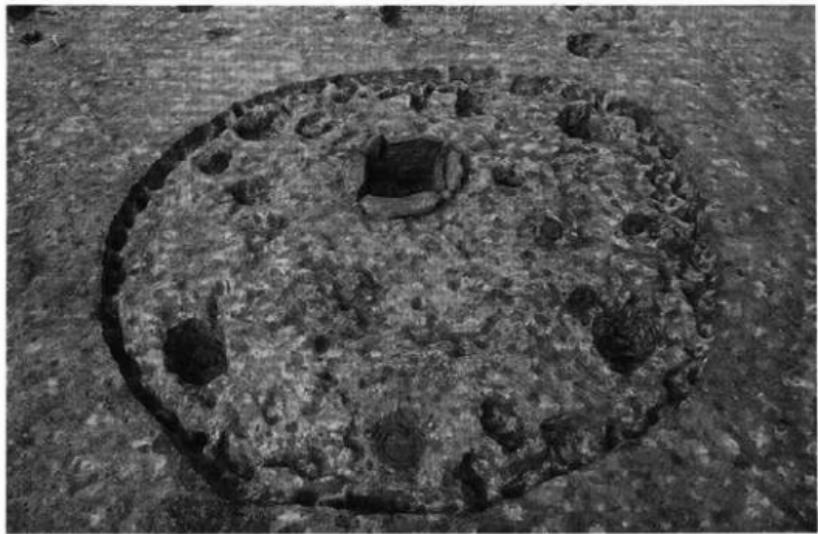
第25号住居址



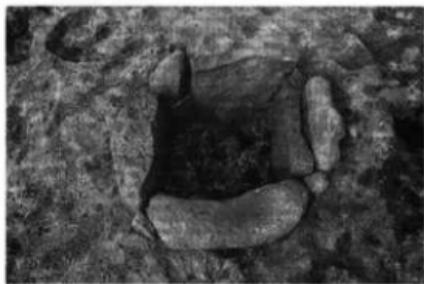
第25号住居址遺物出土状態②



第25号住居址埋甕



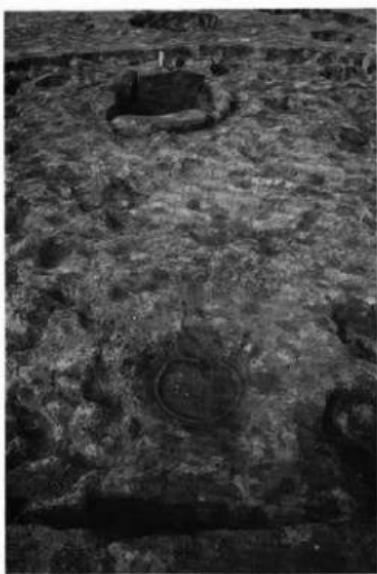
第26号住居址



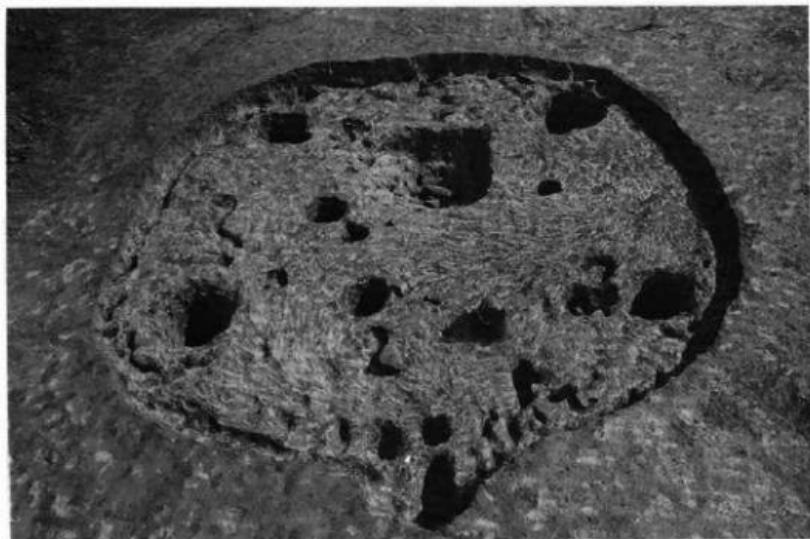
第26号住居址炉址



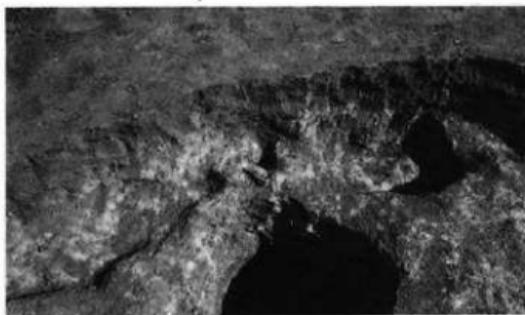
第26号住居址埋甕



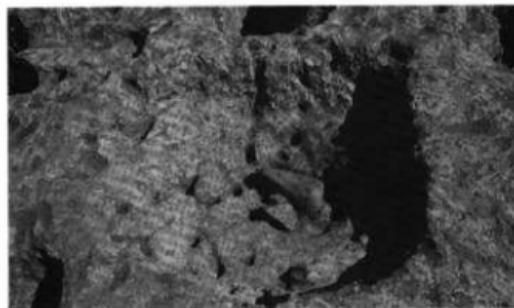
第26号住居址主軸



第27号住居址



第27号住居址黑曜石出土状态



第27号住居址炉址